宮城県文化財調査報告書第84集

多賀城市高崎

水　入　遺　跡発掘調査報告書

昭和57年3月

宮　城　県　教　育　委　員　会

日本電信電話公社東北電気通信局

多賀城市高崎

水　入　遺　跡発掘調査報告書

序

東は太平洋，西は奥羽山脈に囲まれ、豊かな自然に恵まれた宮城県は、昔から多くの人々の生活舞台となってきました。昭和56年大きな話題となった座散乱木遺跡など旧石器時代から岩切城跡などが構築された中世まで、周知の遺跡が約5300箇所も発見されており、その数は、文化財に対する県民の理解の深かまりとともにさらに年々増加の一途をたどっております。

水入遺跡は特別史跡多賀城の南面に所在し、その中心部を占める政府跡の南方約１㎞の位置に当たります。

日本電信電話公社が多賀城市水入地区に塩釜第二電話交換局の建設を計画されたのは、昭和52年でありました。その場所は水入遺跡の範囲内にありますので、交換局建設と埋蔵文化財の保護について協議を重ね、昭和54年10月22日から12月3日まで建設予定地を対象に約2000㎡の発掘調査を実施しました。

その結果、現在の水田面下約20～30㎝で掘立柱建物跡群や井戸跡などの遺構とともに、奈良・平安時代の須恵器や土師器等が発見されました。ことに須恵器の大量出土は注目されました。これらの成果は、古代の陸奥国府多賀城外に形成された街並部分を解明するうえで、貴重な資料となるものと考えられます。

本報告書が学問上は勿論のこと、社会教育の資料として広く活用されることを願うとともにこの調査に協力をいただいた東北電気通信局長、多賀城市教育委員会教育長並びに指導・助言を賜わった関係者各位に対し厚く感謝の意を表するものであります。

昭和57年3月

宮城県教育委員会　教育長　北村　潮

例　　言

１．本書は第二塩釜電話交換局の建設に伴う水入遺跡の発掘調査報告書である。

２．遺跡名：水入遺跡（遺跡番号：18008、遺跡記号：ＦＹ）

３．遺跡所在地：宮城県多賀城市高崎字水入14～16

４．調査主体者：宮城県教育委員会、日本電信電話公社東北電気通信局

５．調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査員：丹羽　茂、森　貢喜、小野寺祥一郎

６．調査協力者：東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所、多賀城市教育委員会

７．調査期間：昭和54年10月22日～昭和54年12月3日

８．調査対象面積：約2052㎡

９．発掘面積：約2000㎡

10. 整理に際して、次の方々及び機関から多くの指導・助言を賜わった。

白鳥良一氏（宮城県多賀城跡調査研究所）、伊藤博幸氏・佐久間賢氏（岩手県水沢市教育委員会）、相原康二氏・斎藤　淳氏（岩手県教育庁文化課）、高橋与ェ門氏・鈴木恵治氏（岩手県埋蔵文化財センター）、八木光則氏（岩手県盛岡市教育委員会）、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所

また、鉄製品等の保存処理は村山斌夫氏（東北歴史資料館）、木製品の保存処理は奈良元興寺研究所に各々御願いした。

11. 土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を利用した。

12. 本書第１図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図を複製したものである。また図版１の空中写真も同院発行のものである。

13. 整理・報告書の作成は、発掘調査時の調査員及び現文化財保護課職員の協議を得て、「Ｉ．調査に至る経過」は平沢英二郎が、その他の整理・執筆・編集は森　貢喜が担当した。

14. 調査、整理に関する諸記録及び出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

序　　文
Ⅰ．調査に至る経過 1
Ⅱ．遺跡の立地と周辺の遺跡 3
Ⅲ．調査の方法と経過 4
Ⅳ．基本層位 4
Ⅴ．発見された遺構と出土土器 9
　１．掘立柱建物跡・ピット群と出土土器 9
　２．井戸跡と出土遺物 19
　３．溝と出土土器 35
　４．土壙と出土土器 41
Ⅵ．堆積土出土の土器 43
Ⅶ．その他の出土遺物 75
Ⅷ．出土土器の検討 92
　１．出土土器の特徴と分類 92
　２．出土土器の年代と問題点 109
Ⅸ．遺構の検討 132
　１．遺構の年代 132
　２．遺構の配置状況 135
Ⅹ．まとめ－遺跡の性格－ 137

Ⅰ．調査に至る経過

特別史跡多賀城跡の政庁を中心とする築地等で区画された部分と附寺跡（高崎廃寺）の周辺には、数多くの周知の遺跡がある。とくに砂押川の形成した自然堤防上には市川橋遺跡・高崎遺跡等の広がりが考えられ、現在水田になっている場所も調査の対象にすべきだと云う声は識者の間にあり、昭和50年頃からその主張は大きくなりつつあった。

昭和51年七北田川左岸下水道工事に伴い遺跡の分布調査を実施したところ史跡周辺の砂押川流域のいたるところの現水田下に遺跡の広がりがあることが判った。

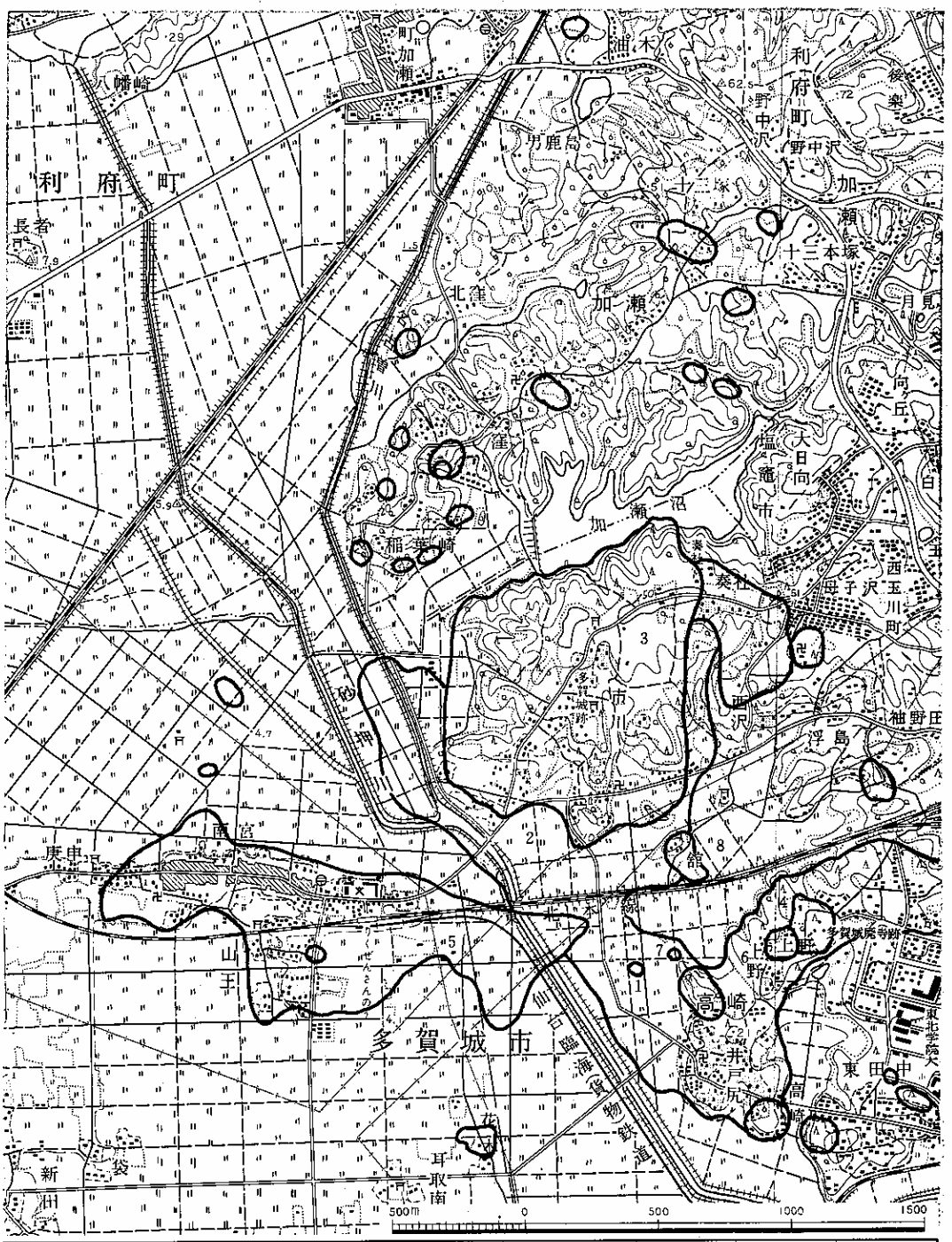
昭和52年10月、東北電気通信局は、多賀城市高崎字水入14～16のすでに取得した約2052㎡の用地に塩釜・多賀城地区の電話需要の増大に伴い、第二塩釜電話交換局を建設することになり遺跡の保存をめぐり宮城県教育委員会と協議に入った。

昭和52年10月25日、両者の理解のために電話交換局建設予定地に係る遺跡の表面観察による分布調査を実施し、当該地が自然堤防上に立地し、周囲に遺跡が密集する状況から試掘調査をする必要のあることが判った。

昭和52年12月22日、試掘調査を実施した。その結果、耕作土下約20㎝で多量の須恵器等の土器類が出土した。また掘立柱建物跡などの遺構が発見され、交換局建設に先だつ事前の発掘調査が必要であることを確認した。

電話交換局建設の公共性を考え発掘調査の早期実現が望まれたが発掘区が水田地帯の中にあり周囲での水稲耕作に対する影響等の諸問題を含めて発掘時期の調整等を行い、基準点測量を行い水入遺跡の国家座標上の設置を確定し実際に発掘調査に着手したのは昭和54年10月22日であった。

しかも、試掘調査の結果と遺跡の重要性に鑑み、当初計画を変更し発掘面積を減ずるなど東北電気通信局と宮城県教育委員会との間で精力的に話し合いが続けられ、さらに遺構確認調査により構造物の建つ部分約1200㎡の記録保存をはかり、残こり約800㎡については遺構面までの層位の記録と確認面での遺構の平面記録にとどめ盛土工法により保存するなどの設計変更があった。



No.	遺跡名	種別	時代	地名表番号	No.	遺跡名	種別	時代	地名表番号
1	**水人遺跡**	集落	平安	18008	2	市川橋遺跡	包含地	縄文～平安	18008
3	多賀城跡	国府跡	奈良・平安	18006	4	高崎廃寺跡	寺院跡	奈良・平安	18005
5	山王遺跡	包含地	古墳 奈良・平安	18013	6	高崎遺跡	寺院・集落・城館	奈良・平安 南北朝	18018
7	高平遺跡	集落	平安	18031	8	館前遺跡	官衙跡・城館	奈良・平安 中世	18022

第1図　周辺の遺跡　　仙台東北・塩釜：$\frac{1}{25000}$

Ⅱ．遺跡の立地と周辺の遺跡

水入遺跡は多賀城市高崎字水入に所在し、市川橋遺跡、あるいは高崎遺跡の範囲の中にある。今回の調査地点は東北本線陸前山王駅の西方約１㎞の所に位置しており、しかも、多賀城跡の南外郭線（南門跡）よりさらに南側へ約500㎜の地点に位置している。

遺跡周辺は広義の仙台平野の北東端にあたる。付近一帯は沖積地になっており、現状はほとんど水田である。しかも、西側には富谷丘陵、北側には松島丘陵の丘陵群が次第に高度を減じながら、この沖積低地にせまり、接する地域である。また、東側には七北田川・砂押川が流れ付近一帯に自然堤防・後背湿地が発達している地域でもある。

遺跡は砂押川流域の自然堤防上に立地している。標高は約3.9㎜である。この砂押川流域では規模・広がり具合等の実態は不明な点が多いが、いくつかの自然堤防・後背湿地、さらに砂押川等の旧河道が入り組んでいるものと考えられる。調査地点は丁度、南側から延びてくる自然堤防が北側に向かって次第に傾斜し後背湿地と接するあたりと考えられる。

周辺には多くの遺跡が所在している。特に、北側丘陵には多賀城跡、東側丘陵には高崎廃寺（多賀城廃寺）がある。また、砂押川流域の自然堤防上には古代集落跡が密集しており、特に、多賀城跡との関連から奈良・平安時代の遺跡が多い。これらの遺跡の中で山王遺跡、市川橋遺跡、高崎遺跡は極めて広範囲にわたっており、多賀城外における遺跡群として多賀城を取り囲む沖積低地、特に西側から南側一帯にかけて立地している。

本遺跡と同じ市川橋・高崎両遺跡の範囲の中に含まれる高平遺跡では平安時代の掘立柱建物跡８棟と竪穴住居跡７軒が重複して発見されている（多賀城跡調査研究所：1963）。掘立柱建物跡は３間×２間で本遺跡検出の掘立柱建物跡とほぼ規模が類似している。また、本遺跡の北東側の小島状の丘陵を利用している館前遺跡では古代の掘立柱建物跡が6棟検出されており、南北４間×東西７間で四面廂をもつ建物跡１棟を中心に他の建物跡が配されている（多賀城市教育委員会：1980）。このような建物跡の構造・規模・配置状況等は多賀城外にあって本遺跡あるいは高平遺跡での掘立柱建物跡とは様相を異にしており、特別な性格が考えられる。

これら多賀城周辺の遺跡は本格的に調査されたのは少なく、遺跡の全貌は知り得ないが、出土遺物の豊富さ、遺構等の種類において他の一般集落とは若干様相が異なり、多賀城の影響が極めて強いものと考えられる。

以上のような多賀城周辺・特に砂押川流域には未だ多くの遺構等の存在が想定され、この付近一帯は多賀城、あるいは古代史上重要な地域でもある。

Ⅲ. 調査の方法と経過

調査区の設定は調査予定地内に原点１（Ｘ：－189,25000、Ｙ：＋14,020,000）と原点２（Ｘ：－189.25000、Ｙ：13,990,000）を設け、この２点を結ぶ基準線とそれに直交する線（座標北を示す）を基本として調査区全域を一辺３m単位のグリッドで区画した。グリッドの名称は東西方向を東側から順にアルファベットで、南北方向は北側からアラビア数字で各々表示した。また、実測図作成のための遣り方基準線はグリッド設定の基準線と同じものを用いた。したがって、グリッド基準線をＮ・Ｓ－０とし、それに直交する線をＥ・Ｗ－０とした。

調査は昭和54年10月22日から開始した。最初に水田の耕作土（表土）を調査区全域にわたって除去した段階で南北方向に10グリッドをひとつの単位にしたトレンチを設けて層の拡がり、遺物の出土状況に注意しながら、遺構の探査を実施した結果、第Ⅲ層下の面で多数のピット、井戸、溝、土壙等が検出され、特に、ピットの配列等から８棟分の掘立柱建物跡が確認された。また、遺構確認面の北側では整地層が検出された。そして、整地層を除去した段階で新らたに東西に走る溝が確認されたが、諸々の事情により、完掘せず、全体の方向・延び・規模等を知るため、２ヶ所に試掘杭を設けて調査した。その結果、堆積土中から、土器・木製品が多数出土した。また、井戸は２基検出したが、その内、１基については確認だけに留めた。

出土遺物は第Ⅱ・Ⅲ層からの出土が多い。土器類が最も多く、平箱にして100箱強の量である。これらの土器は平安時代のものが主体を占めている。

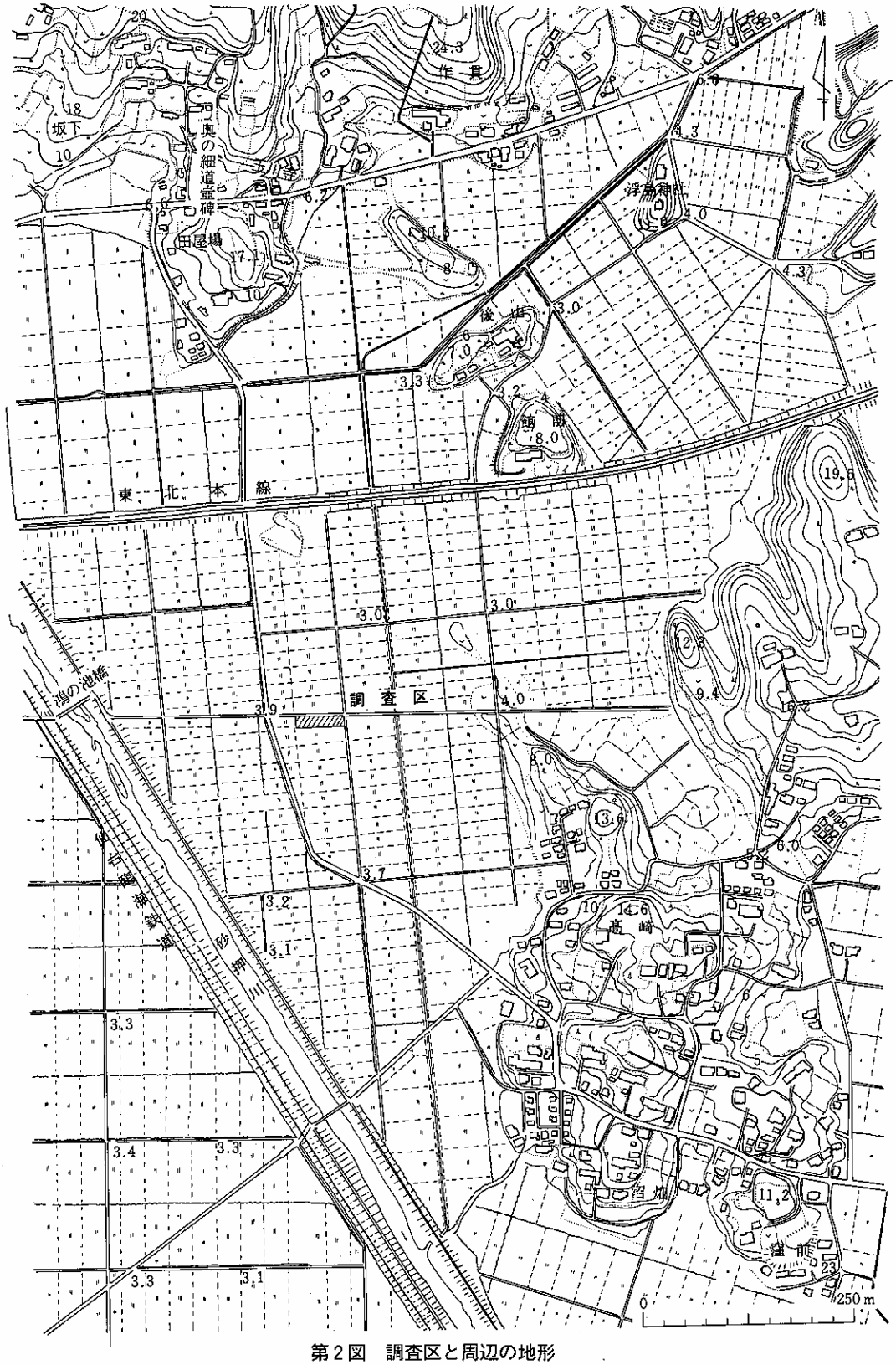
調査の概要がほぼ明らかになった11月24日に現地説明会を開催し、調査成果を一般公表した。最後に各遺構の実測図を作成して調査が終了したのは12月3日である。

Ⅳ. 基　本　層　位

調査時及びその後の検討により、６層の堆積土が確認された。これら層の成因・性格について考えたい。まず最初に土色・土性・分布状況・遺物について述べる。

第Ⅰ層：表土であり、現在、水田に利用されている耕作土である。層としては攪乱のため不安定で、遺物は出土するが、まとまりはない。

第Ⅱ層：黒褐色（10ＹＲ2/2）砂質シルト。調査区全域に存在するわけでなく、調査区北西・東側地域といった限られた分布状況を示している。層の厚さは約20cmでほぼ水平に堆積している。



第２図　調査区と周辺の地形

土師器・須恵器等がまとまって出土している。

第Ⅲ層：暗褐色（10ＹＲ3/3）砂質シルト。調査区ほぼ全域に分布しており、安定した層である。層の厚さは、西側で部分的に約15㎝と若干薄い所があるが、平均すると約20～40㎝あり、水平に堆積している。土師器、須恵器等がまとまって多量に出土しており、第Ⅱ層とともに遺物包含層と考えられ、層中出土の土器は、今回の調査出土土器の主体を占める。

第Ⅳ層：にぶい黄褐色（10ＹＲ5/4）粘土質細砂。第Ⅲ層の下に形成されている層で調査区全域に存在し、掘立柱建物跡等の遺構の最終確認面であり、自然堤防の微高地部分である。

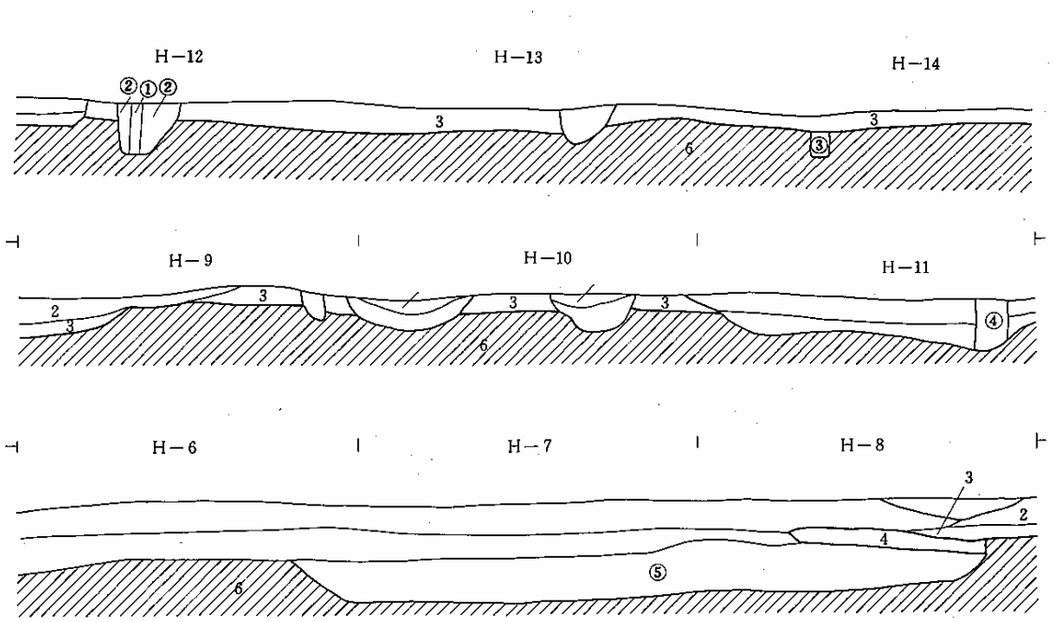
調査区の北側・北西側に向って次第に傾斜している。傾斜部分には第Ｖ層が堆積しており、その上には第Ⅳ層と土色・土性とも同じであるが、第Ｖ層の土を含むしまりのある層が第Ⅳ層の延長として平坦面を形成している。したがって、第Ⅳ層は北側では整地部分も含んでいる。整地層の厚さは約20㎝である。土師器・須恵器等が整地層から少量出土している。

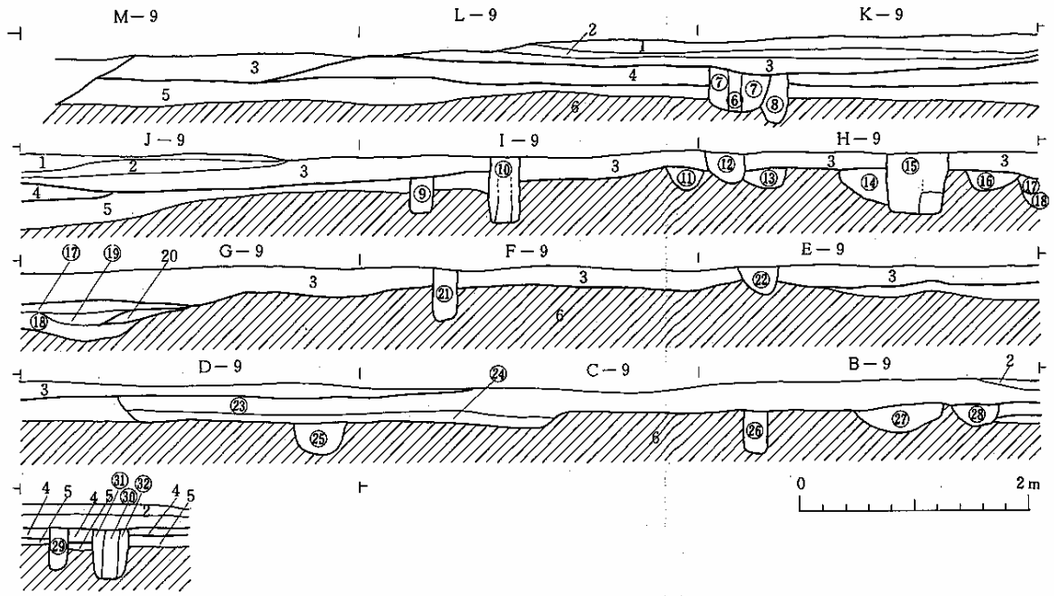
第Ｖ層：褐灰色（10ＹＲ1/4）粘土質シルト。水分を多く含み、しまりがない低湿地の層である。調査区北側に分布している。層の厚さは10～20㎝前後である。遺物は少ないが出土している。

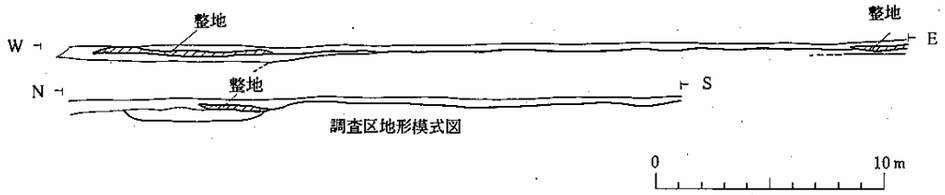
第Ⅵ層：緑灰色（10ＧＹ5/1）中砂。今回の調査時における最下層のもので、調査区内の分布は不明である。遺構・遺物は検出されていない。

以上が各層の概略である。その中で第Ⅱ層、第Ⅲ層は攪乱、層の逆転等の痕跡はなく、出土土器は後で述べるようにほぼ同時代のものが比較的まとまって出土しており、しかもほとんどの土器は破損状態が一個体分にまとまるようになり、破片が大きく、完形品に近いものもあり、あまり磨滅していないことから、２次堆積の可能性はなく、単一の遺物包含層と理解できる。第Ⅳ層は、先に述べたように自然堤防であり、今回の調査における最終確認面である。北側部分では整地層でもある。北側部分の整地の状況を再度検討するため、調査区北側を東西に走る溝（全掘しておらず、溝の全体の延びは不明な点が多いが、幅・深さは明らかなものである。詳細は後で述べる。）と第Ｖ層との関係について検討することにする。

調査区の南側、中央部では第Ⅳ層はほぼ平坦であるが、北側にいくにしたがって傾斜していき、縁辺部に低湿地の層である第Ｖ層が堆積している。この第Ｖ層上面では遺構は検出されておらず、遺構構築の条件が極めて悪い面であると考えられる。したがって、遺構構築の平坦地を拡張するために第Ⅳ層の自然堤防が切れる所に整地している。この場所には北側では丁度、東西に走る溝があり、溝の堆積土の上面に一部整地層が認められる。つまり溝が埋没した段階でさらに平坦地を拡張したことが考えられる。しかも、各層から出土した土器の分析から極めて短期間に行なわれた可能性がある。







調査区地形模式図

基本層位観察表

No	層位	土色	土性	備考
1	表土（Ⅰ層）			
2	第Ⅲ層	黒褐色（10YR3/2）	砂質シルト	木炭、有機物を含む
3	第Ⅲ層	暗褐色（10YR3/3）	〃	
4	第Ⅳ層（整地層）	にぶい黄褐色（10YR5/4）	粘土質砂	第Ⅴ層の土を少し含む
5	第Ⅴ層	褐灰色（10YR4/1）	粘土質シルト	湿地の層である
6	第Ⅵ層	緑灰色（10GY5/1）	中砂	遺構確認面

ピット・溝・その他断面図観察表

No	土色	土性	備考	No	土色	土性	備考
①	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質砂	第5掘立柱建物跡に組	⑰	褐色（10YR5/4）	シルト	
②	基本層位第Ⅲ層の土に第Ⅳ層の土が斑状に入る			⑱	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	
③	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質シルト		⑲	灰黄褐色（10YR5/2）	粘土質砂	
④	褐色（10YR5/4）	〃	木炭含む	⑳	にぶい黄褐色（10YR5/4）	シルト	
⑤	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質砂	東西溝堆積土	㉑	基本層位第Ⅲ層、Ⅵ層の土が斑状に含む		
⑥	黄灰色（2.5Y5/1）	粘土質シルト	柱痕跡	㉒	〃		
⑦	灰黄褐色（10YR5/2）	砂質シルト	掘り方	㉓	黒褐色（10YR3/2）	粘土質シルト	溝
⑧	暗黄色（2.5Y5/2）	粘土質シルト		㉔	褐灰（10YR5/1）	〃	第1堆積土
⑨	灰褐色（10YR5/2）	粘土質砂		㉕	褐灰（10YR5/1）	粘土質砂	基本層位第Ⅵの土入る
⑩	灰黄褐色（10YR5/2）	〃		㉖	褐灰（10YR5/1）	粘土質シルト	
⑪	基本層位第Ⅲ層に近似するが第Ⅵ層の土が斑状に入る			㉗	にぶい黄褐色（10YR5/3）	〃	
⑫	基本層位第Ⅲ層の土にⅡ層、Ⅵ層の上が混入			㉘	㉗の土に第Ⅵ層の土入る		
⑬	基本層位第Ⅲ層の土にⅥ層の土がブロック状に入る			㉙	灰褐色（10YR5/2）	粘土質シルト	
⑭	〃			㉚	〃（〃）	粘土質砂	
⑮	基本層位第Ⅲ層の土にⅡ層、Ⅳ層の土が斑状に混入			㉛	㉙と同じ		
⑯	基本層位第Ⅲ層の土にⅥ層の土が斑状に混入			㉜	㉛と同じ		

第3図　基本層位

以上、まとめると次のようになる。

① 本遺跡は前に述べたように砂押川が形成した自然堤防上に立地し、この自然堤防上で遺構が検出された（調査区内の断面観察用のアゼをみると、第Ⅲ層から掘り込まれているピットもある）。この自然堤防の分布については、調査区が狭いため詳細は知り得ないが、北側部分（東西溝があるあたり）、西側部分で切れ、低湿地の第Ⅴ層に移行するが、その縁辺部には整地が行なわれ、平坦地を拡張している。

② 第Ⅱ・第Ⅲ層出土の土器は、ほぼ同年代のもので、出土状況にまとまりがあり、単一の遺物包含層であると考えられる。特に、第Ⅲ層は調査区全域に分布しており、安定した層である。また、東西溝、整地層との先後関係は、溝が埋没し、整地した後に堆積したものでこれらより新しい遺物包含層である。

③ 出土土器から、表土を除く各層は主に平安時代の層で、しかも短期間に形成されたものと考えられる。

Ⅴ．発見された遺構と出土土器

１．掘立柱建物跡・ピット群と出土土器

調査区ほぼ全域に多数のピットが検出された。これらピットの中には掘り方と柱痕跡の識別ができるものと柱痕跡が確認できないものとがあり、前者の方が多い。第Ⅳ層・整地層・一部遺物包含層第Ⅲ層上面から掘り込まれているのがある。ピットが比較的密集する地区には、調査区の北東側・中央部南側・やや中央寄りの北西側の４地区がある。また、調査区北側、東西に走る溝のあたりではピットの検出はなく、さらに西側にいくにしたがってピットの存在は希薄になる。

以上のようなピットの規模・柱痕跡の有無・ピット間の間隔・配置等を検討した結果、８棟分の掘立柱建物跡を確認した。これら掘立柱建物跡は、ピットが集中する４地区で確認され、桁行３間、梁間２間の建物跡で棟方向が南北のものが５棟、東西のものが３棟あり、これらはほぼ同方向になっている。掘り方は方形を呈し、規模が大きいものと、円形を呈し、規模の小さいものとがある。特に、後者の柱穴を有する建物跡の検出は注目される。

①掘立柱建物跡

第１掘立柱建物跡（第５図）

調査区北東Ｃ～Ｅ－８．９グリッド周辺の整地層上面で確認された。桁行３間、梁間２間の東西棟建物である。棟方向は北列でＮ－４°－Ｓでやや北に寄っている。桁行柱間は北列西から1.85m＋1.8m＋1.8mとほぼ等間隔で、梁間柱間は東列北から1.7m＋2.3mと不揃いである。各掘り方は方形で、１m×90cm～60cm×60cmの規模のもので、柱痕跡は径約20cm～40cmの円形を呈する。掘り方確認面から柱痕跡の底面までの深さは20cm～40cm前後である。

出土遺物は各掘り方・柱痕跡から、土師器坏・甕・須恵器坏・甕の破片が出土しているのみである。ピット141掘り方出土の土師器坏底部には「福」の墨書がみられる。（第10図３）。

第２掘立柱建物跡（第６図）

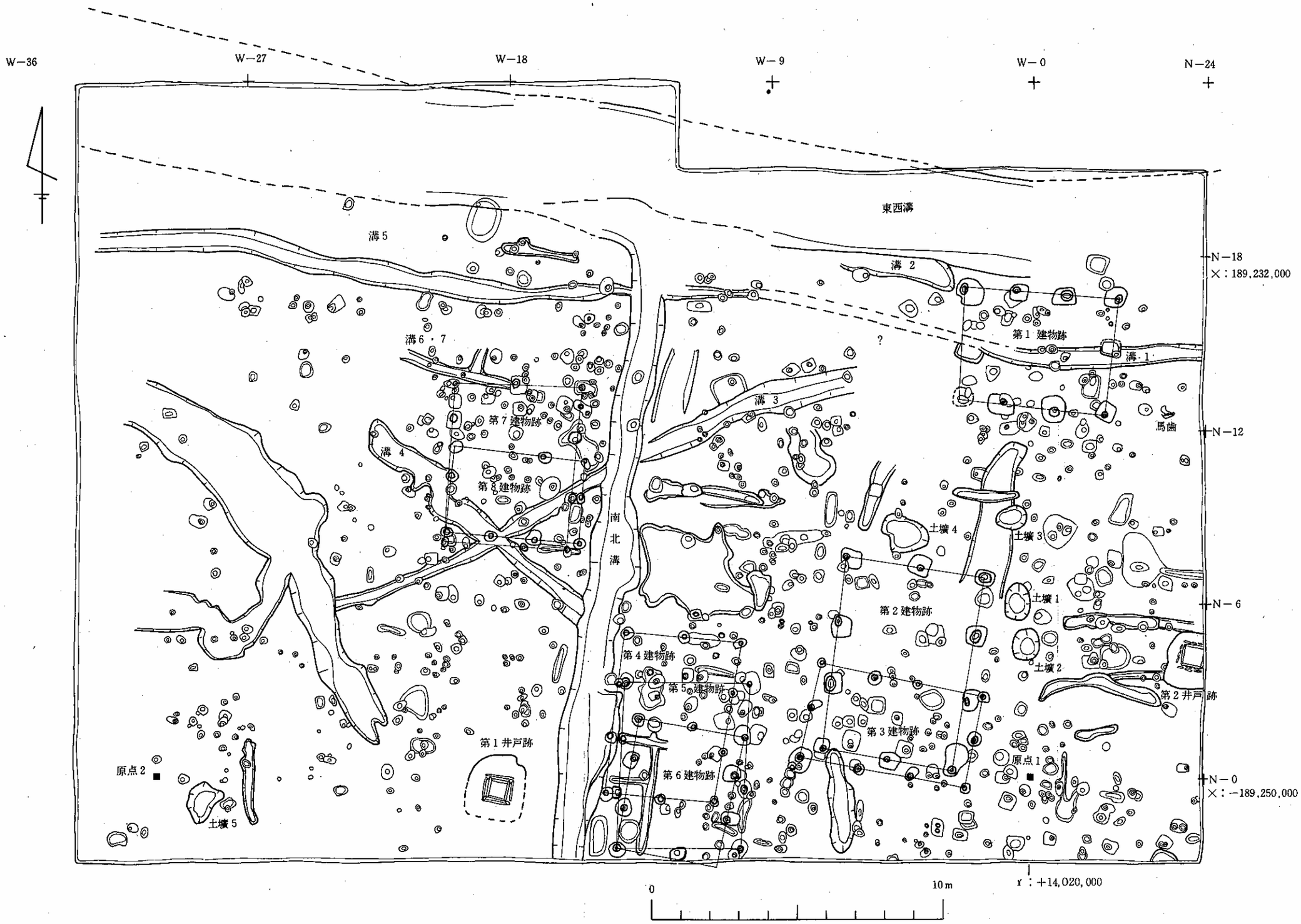
調査区南東Ｅ～Ｇ－11～14グリッド周辺の第Ⅳ層上面で確認された。第３掘立柱建物跡に切られている。桁行３間（6.7m）、梁間２間（2.3m）の南北棟建物である。棟方向は西列でＷ－７°－Ｅでやや東に寄っている。桁行柱間は西列南から2.25m＋2.2m＋2.3mとほぼ等間隔である。梁間柱間は北列西から2.6m＋2.2mと不揃いである。各掘り方は方形を呈し、60cm×60cm前後の規模である。柱痕跡は径20cm前後の円形を呈する。掘り方確認面から柱痕跡の底面までの深さは約15cm～40cmである。

出土遺物は掘り方・柱痕跡から須恵器坏・甕の破片が出土しているのみである。

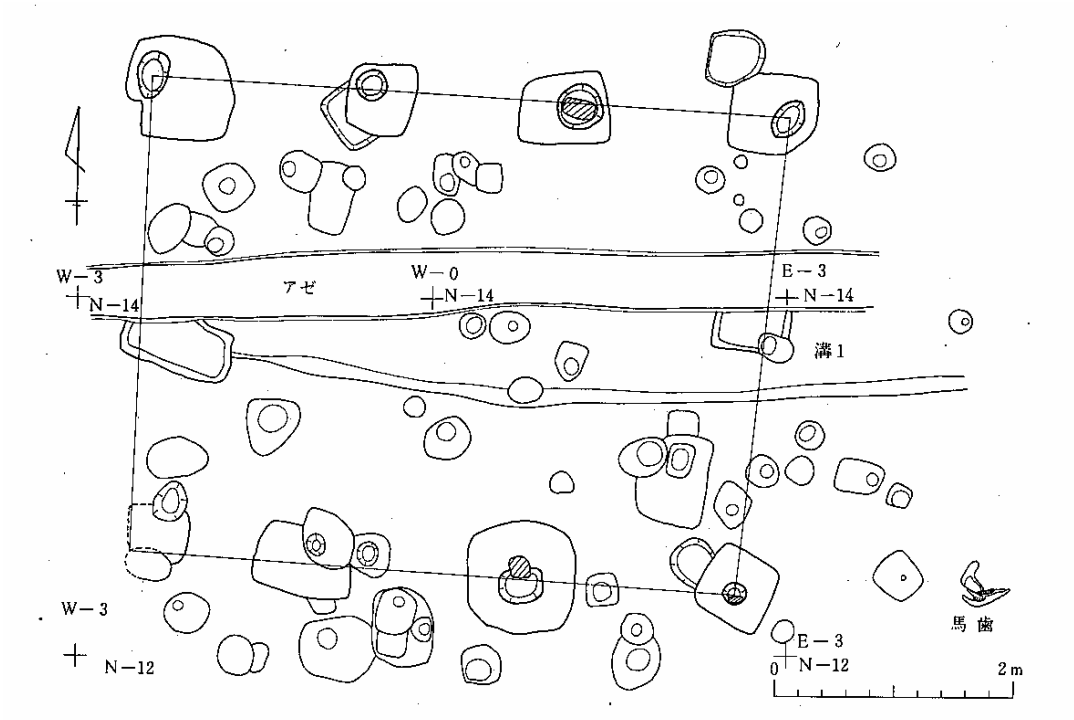
第３掘立柱建物跡（第６図）

調査区南東Ｅ～Ｇ－13・14グリッド周辺の第Ⅳ層上面で確認された。第２掘立柱建物跡を切っている。桁行３間（5.8m）、梁間2間（3.3m）の東西棟建物である。棟方向は南列でＮ－５°－Ｓでやや北に寄っている。桁行柱間は南列西から2.1m＋1.8m＋1.9mとやや不揃いである。梁間柱間は西列北から1.5m＋1.8mと不揃いである。各掘り方は円形を呈し、径約20cm～60cmの規模で柱痕跡は径15cm前後のものである。掘り方確認面から柱痕跡底面までの深さは20cm～50cmである。

各掘り方・柱痕跡からの出土遺物はない。


W−36
W−27
W−18
W−9
W−0
N−24
東西溝
溝5
溝2
N−18
×：189,232,000
第1建物跡
溝1
溝6・7
溝3
第7建物跡
馬歯
N−12
溝4
第8建物跡
南北溝
土壙4
土壙3
土壙1
N−6
第2建物跡
第4建物跡
土壙2
第5建物跡
第2井戸跡
第3建物跡
第1井戸跡
原点1
原点2
第6建物跡
N−0
×：−189,250,000
土壙5
Y：+14,020,000
0
10m

第4図　遺構配図



第５図　第１掘立柱建物跡

第４掘立柱建物跡（第７図）

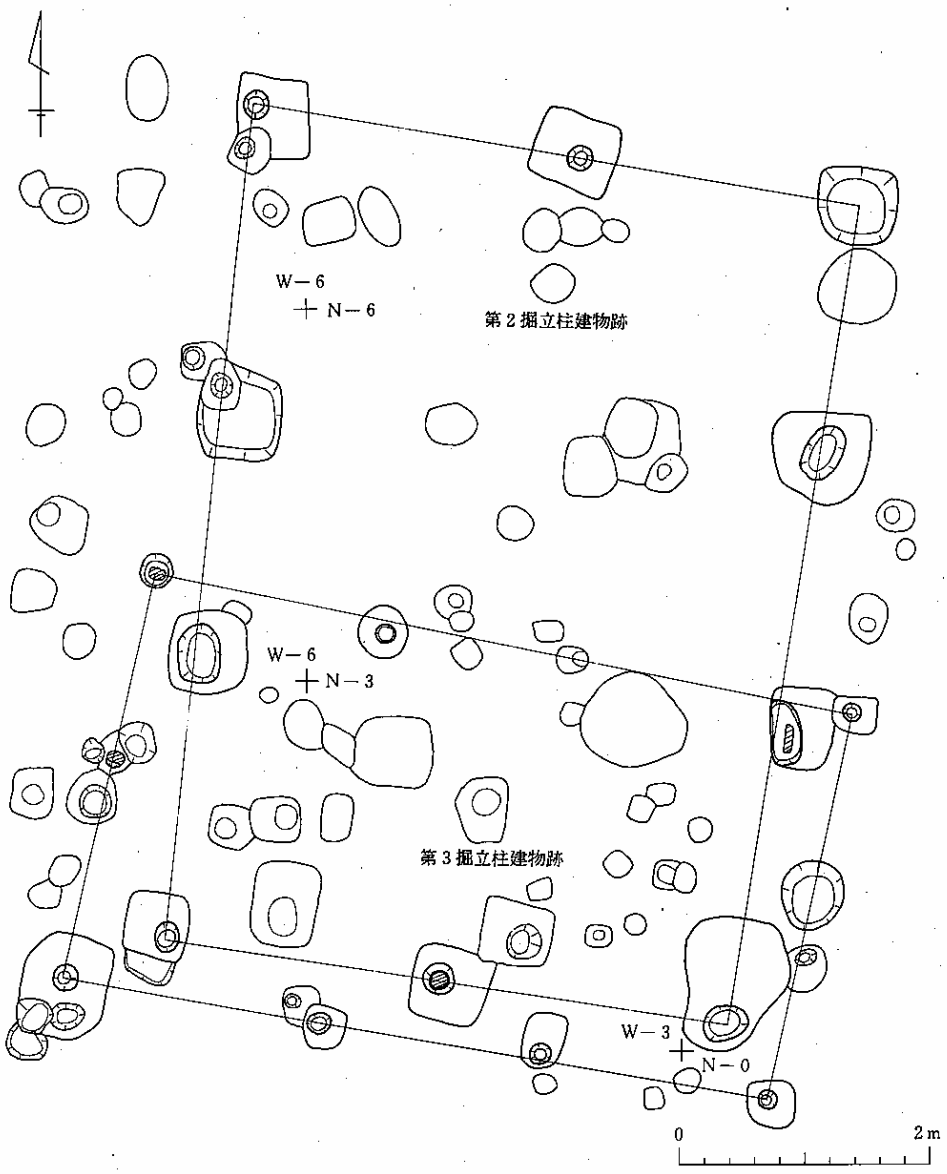
調査区中央部南側H～Ｊ－12～15グリッド周辺の第Ⅳ層上面で確認された。南北溝を一部切っており、さらに第５掘立柱建物跡を切っている。桁行３間（5.5m）、梁間２間（2.0m）の南北棟建物である。棟方向はW－７°－Eでやや東に寄っている。桁行柱間は西列北から1.8m＋1.8m＋1.95mとやや不揃いである。梁間柱間は北列東から2.05m＋2.05mと等間隔であるは、柱痕跡は並ばずややずれるのもある。各掘り方は円形を呈し、径約20cm～40cmの規模で柱痕跡は径10cm前後のものである。中に柱材が残存しているのもある。掘り方確認面から柱痕跡底面までの深さは20cm～40cm前後である。

掘り方から土師器坏・甕・須恵器坏・甕の破片のみが出土しているにすぎない。

第５掘立柱建物跡（第７図）

第４掘立柱建物跡と同じ地区の第Ⅳ層上面で確認された。第４掘立柱建物跡に切られている。桁行３間（5.8m）、梁間２間（4.2m）の南北棟建物である。棟方向はW－３°－Eとやや東に寄っている。桁行柱間は西列北から2.0m＋1.8m＋1.9mと不揃いである。梁間柱間は北列西から

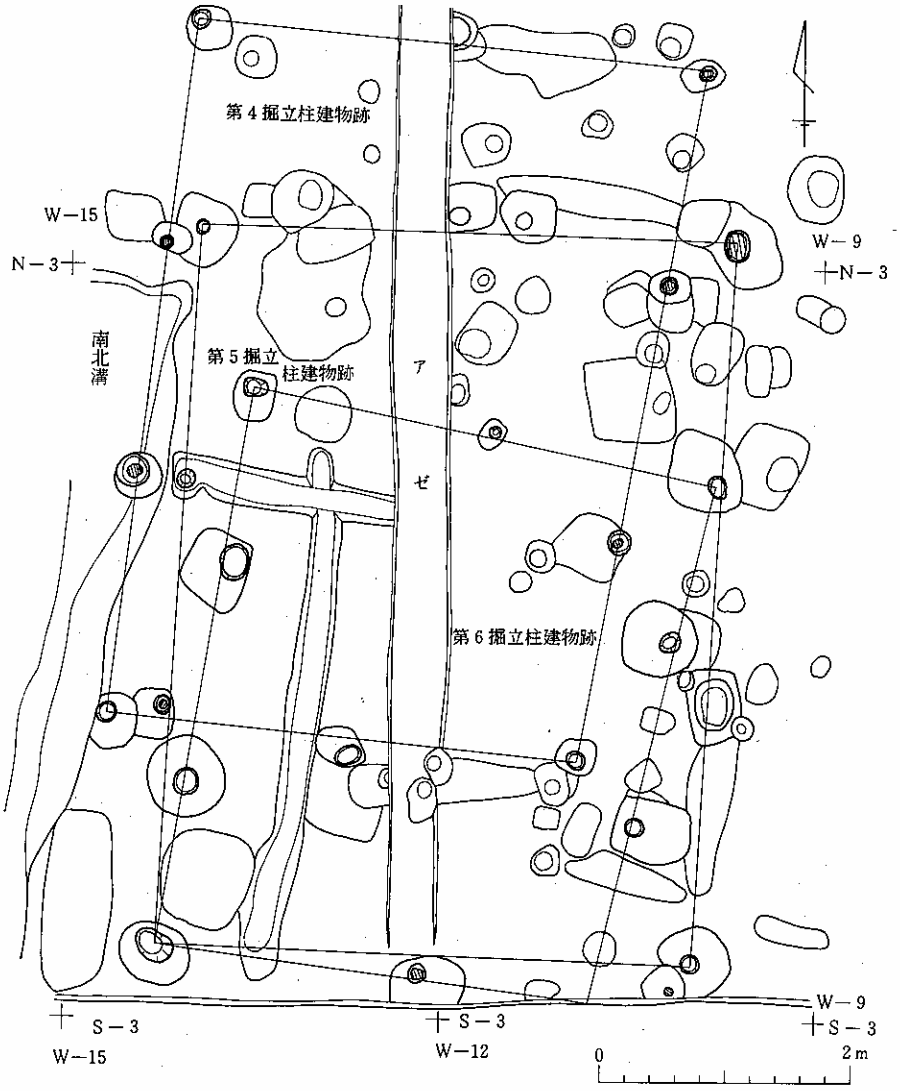
2.55m＋1.7mと不揃いである。各掘り方は円形を呈し、径50cm～60cm前後の規模で柱痕跡は径約10cm～20cmのものである。掘り方確認面から柱痕跡底面までの深さは20～60cm前後である。



第６図　第２・３掘立柱遺物跡

第６掘立柱建物跡（第７図）

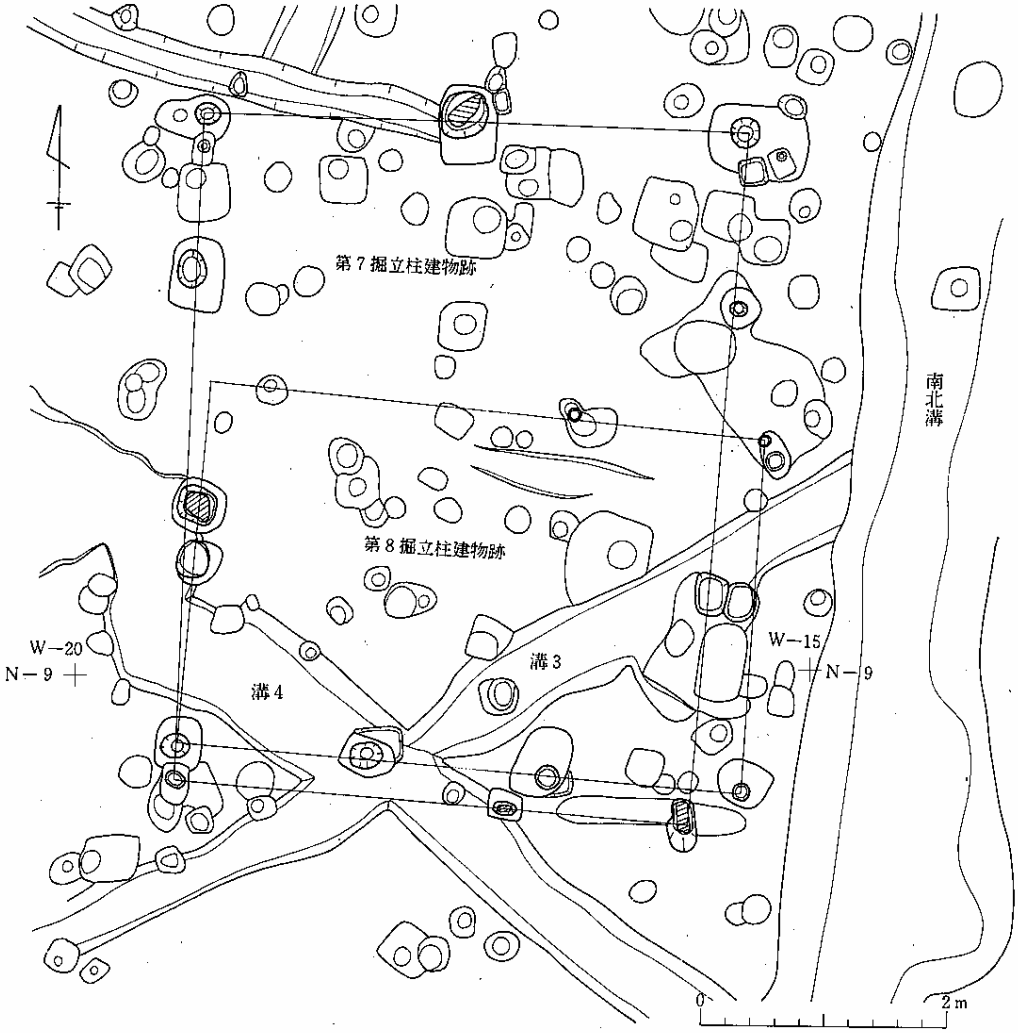
第４・第５掘立柱建物跡と同じ地区の第Ⅳ層上面で確認された。第５掘立柱建物跡と重複しているが、その切り合い関係は不明である。桁行３間（4.5m）、梁間２間（3.7m）の南北棟建物である。棟方向は西列でW－10°－Eで東に寄っている。桁行柱間は西列北から1.4m＋1.8m＋1.3mと不揃いである。梁間柱間は北列西から2.0m＋1.8mとやや不揃いである。各掘り方は円形を呈し、径50cm～60cm前後の規模であるが、中には20cm前後のものもある。柱痕跡は径５cm～20cm前後の円形を呈する。



第７図　第４・５・６掘立柱建物跡

第７掘立柱建物跡（第８図）

調査区北西側Ｊ・Ｋ－９・10グリッド周辺の第Ⅳ層および一部整地層で確認された。第８掘立柱建物跡を切っている。桁行３間（1.9m）、梁間２間（2.2m）の南北棟建物である。棟方向は西列でW－２°－Eでやや東に寄っている。桁行柱間は西列北から1.3m＋1.9m＋2.3mと不揃いである。梁間は北列西から2.1m＋2.3mとやや不揃いである。各掘り方は円形を呈し、径約20cm～70cmと様々の規模である。柱痕跡は径約20cmの円形を呈する。中には柱材が残



第８図　第７・８掘立柱建物跡

存しているものもある。掘り方確認面から柱痕跡底面までの深さは15㎝～45㎝である。

掘り方、柱痕跡からの出土遺物はない。

第８掘立柱建物跡（第８図）

第７掘立柱建物跡と同じ地点の第Ⅳ層上面で確認された。第７掘立柱建物跡に切られている。桁行３間（4.5㎜）、梁間２間（3.0㎜）の東西棟建物である。棟方向は南列でＮ－６°－Ｓでやや北に寄っている。桁行北列、梁間西列は１間分のみ確認された。桁行柱間は南列西から1.5㎜＋1.5㎜＋1.6㎜とやや不揃いである。梁間柱間は東列北から1.3㎜＋1.6㎜と不揃いである。各掘り方は円形を呈し、径約40㎝前後の規模で柱痕跡は径約20㎝前後のものである。掘り方確認面から柱痕跡底面までの深さは15㎝～55㎝である。

各掘り方・柱痕跡からの出土遺物はない。

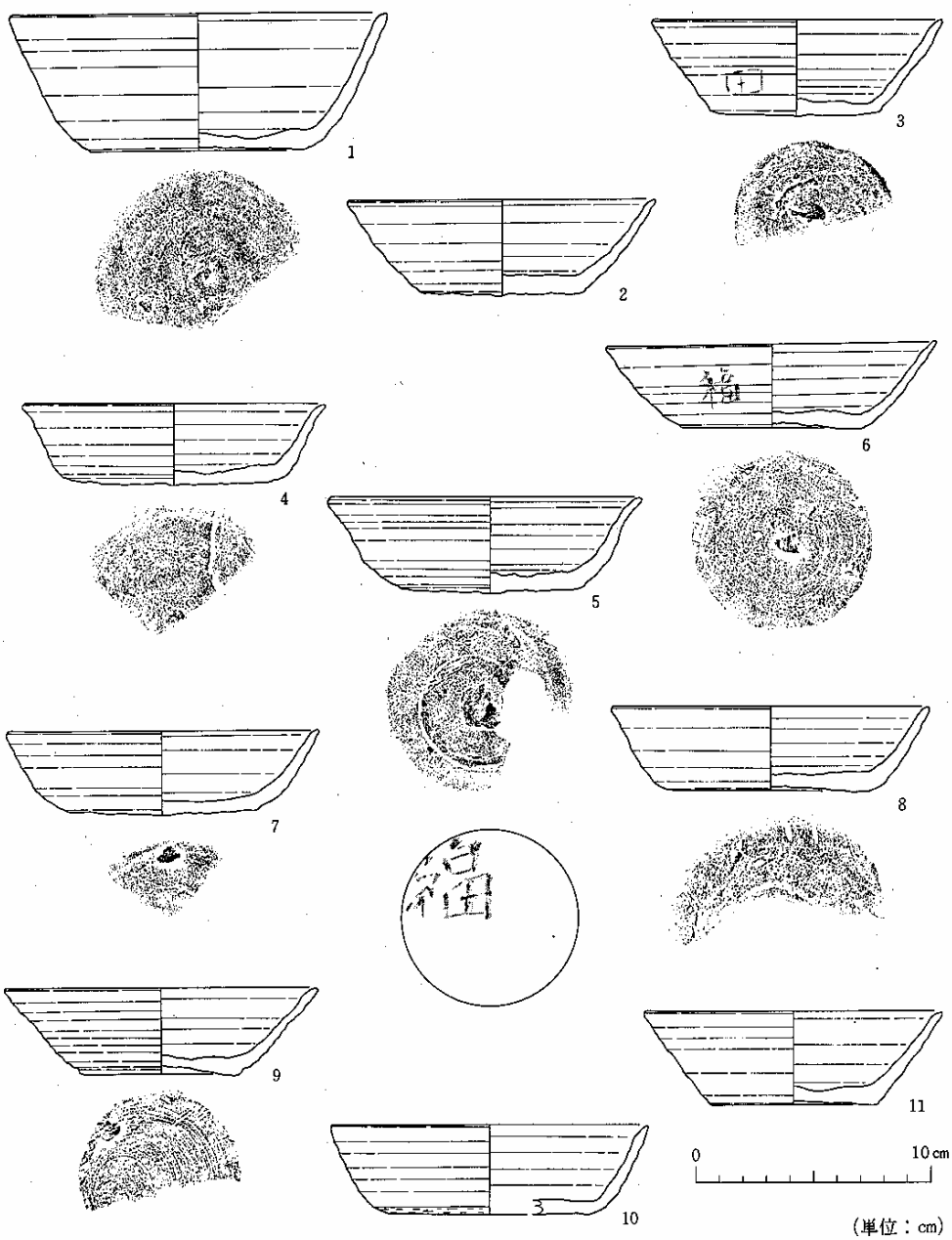
② ピット群

先述したように掘立柱建物跡の周辺及び調査区全域に多数のピットが検出された。掘り方・柱痕跡の区別があり、柱穴の可能性があるものもあるが、配置関係等から建物跡に組み合わない。出土遺物は計217のピットから土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦が出土しているが、ほとんどが破片で図示したものは17点のみである。これらの遺物は取り上げ時、掘り方の柱痕跡を区別しているのは少なくピット内一括して取り上げた場合が多い。

図示した土器（第9図～第10図）は、土師器坏（第10図３）の体部破片で底部外面に「福？」の墨書があるもの１点出土しており、第１掘立柱建物跡に組み合うピットからの出土である。土師器甕（10図１）が１点出土している。ロクロを使用で甕Ｂ類のもので、体部がふくらむものである。

須恵器坏は13点で須恵器坏Ｂ類が３点とＣ類が５点、Ｄ類が２点である。これらの中には墨書されているのがあり、第９図３の体部に「田」、第９図３の底部に「福」、第10図２の底部に「?林」の墨書文字が読み取られる。第10図４にも墨書痕がみられるが読みとれない。

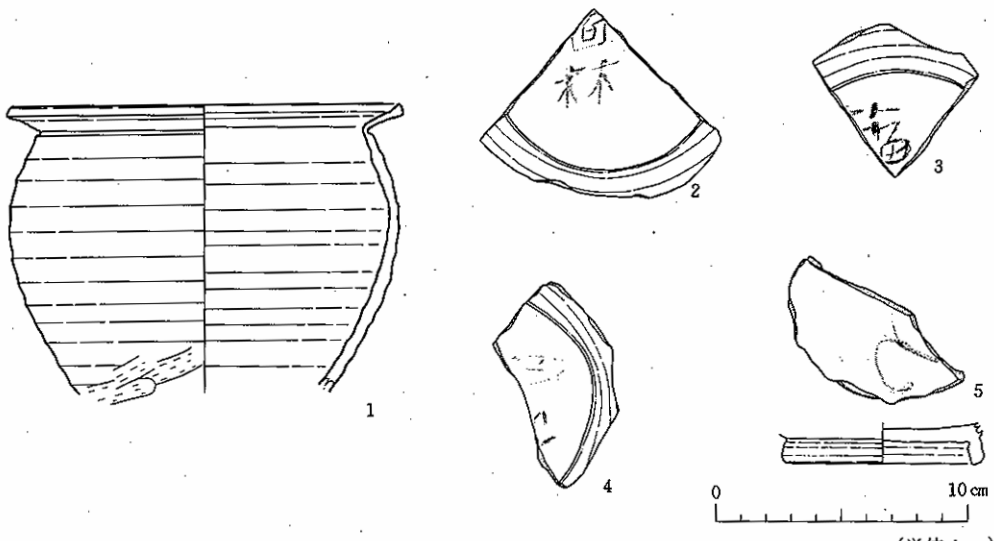
灰釉陶器は１点出土している（第10図５）。高台付の皿形を呈すると思われる。体部と底部の一部のみが残存しているもので、底部には高台が貼り付けられている。焼きは堅緻で胎土は細い。内面のみに薄く白灰緑色の灰釉がかけられている。



(単位：cm)

No	種　類	地区・層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器坏	P.153	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	16.2	5.8	9.2	P－3	
2	〃　〃	P.142	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	B	13.2	4.1	7.2	P－16	
3	〃　〃	P. 58	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	12.4	4.1	7.3	P－5	「由」の墨書
4	〃　〃	P. 54	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.0	3.5	9.2	P－10	
5	〃　〃	P. 86	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.5	4.1	7.8	P－2	「福」の墨書
6	〃　〃	P. 1	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅓	C	14.1	3.6	7.6	P－1	「祝」の墨書
7	〃　〃	P.215	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.4	3.6	8.2	P－8	
8	〃　〃	P.147	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.6	3.6	8.6	P－4	
9	〃　〃	P. 76	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	½	D	13.4	3.7	7.0	P－6	
10	〃　〃	P.210	口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.6			P－7	
11	〃　〃	P.148	口縁～体部ロクロナデ、底部底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	D	12.8	4.0	7.2	P－18	

第９図　ピット内出土土器１



（単位：cm）

No	種　類	地区・層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	土師器甕	P.105	口縁～体部ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	一部	B				P—12	
2	須恵器坏	P.16	底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					P—19	「口林」墨書あり
3	土師器〃	P.141	底部ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色	一部					P—22	「福」の墨書
4	〃　〃	P.216	底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					P—20	墨書痕あり
5	灰釉陶器皿	P.61	ロクロナデ	ロクロナデ	一部					P—15	

第10図　ピット内出土土器２

２．井戸跡と出土遺物

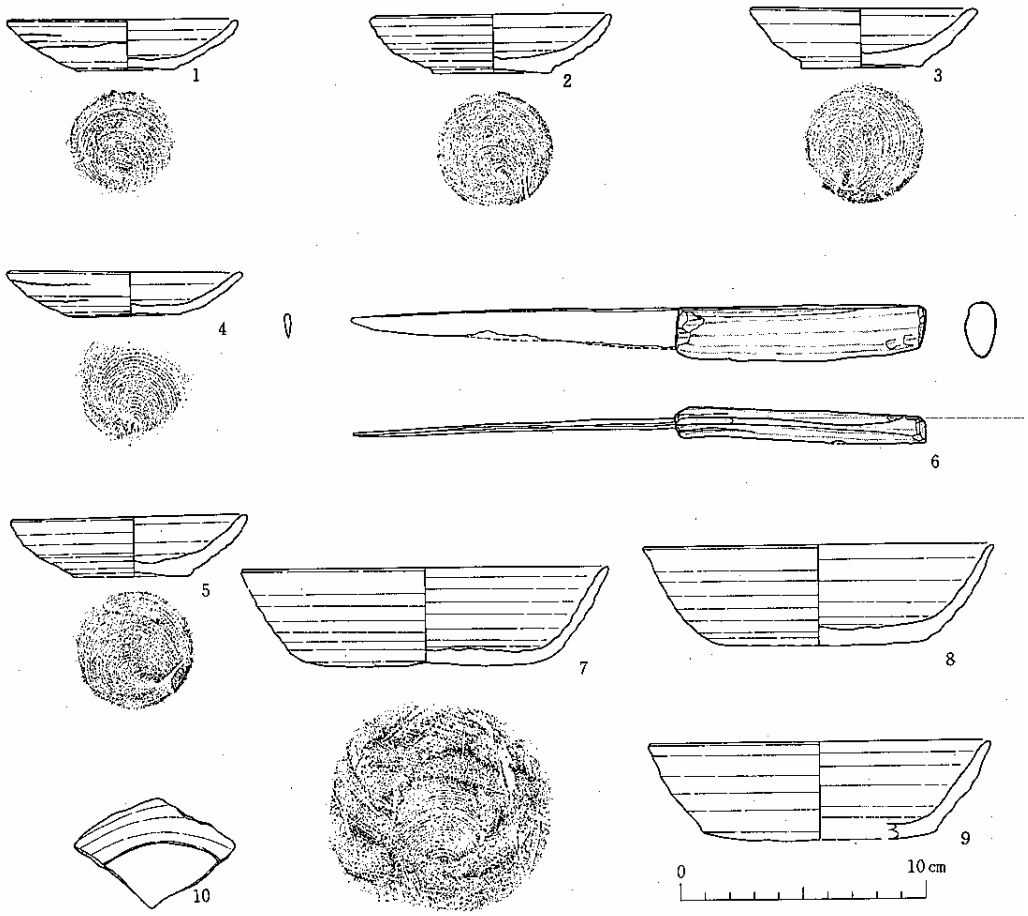
調査区南側中央部で１基（第１井戸跡）、東側で１基（第２井戸跡）計２基の井戸跡が検出された。両者とも井戸掘り方に木製組み物の井戸枠を据えているものである。第２井戸跡は、確認のみに留めている。

第１井戸跡（第12図）

Ｎ－０、Ｗ－８で検出された。遺構確認面は基本層位第Ⅳ層上面である。井戸掘り方・井戸枠によって構成される。井戸の方向は井戸枠から南北軸がＮ－25°－Ｗ、東西軸がＮ－35°－Ｅである。

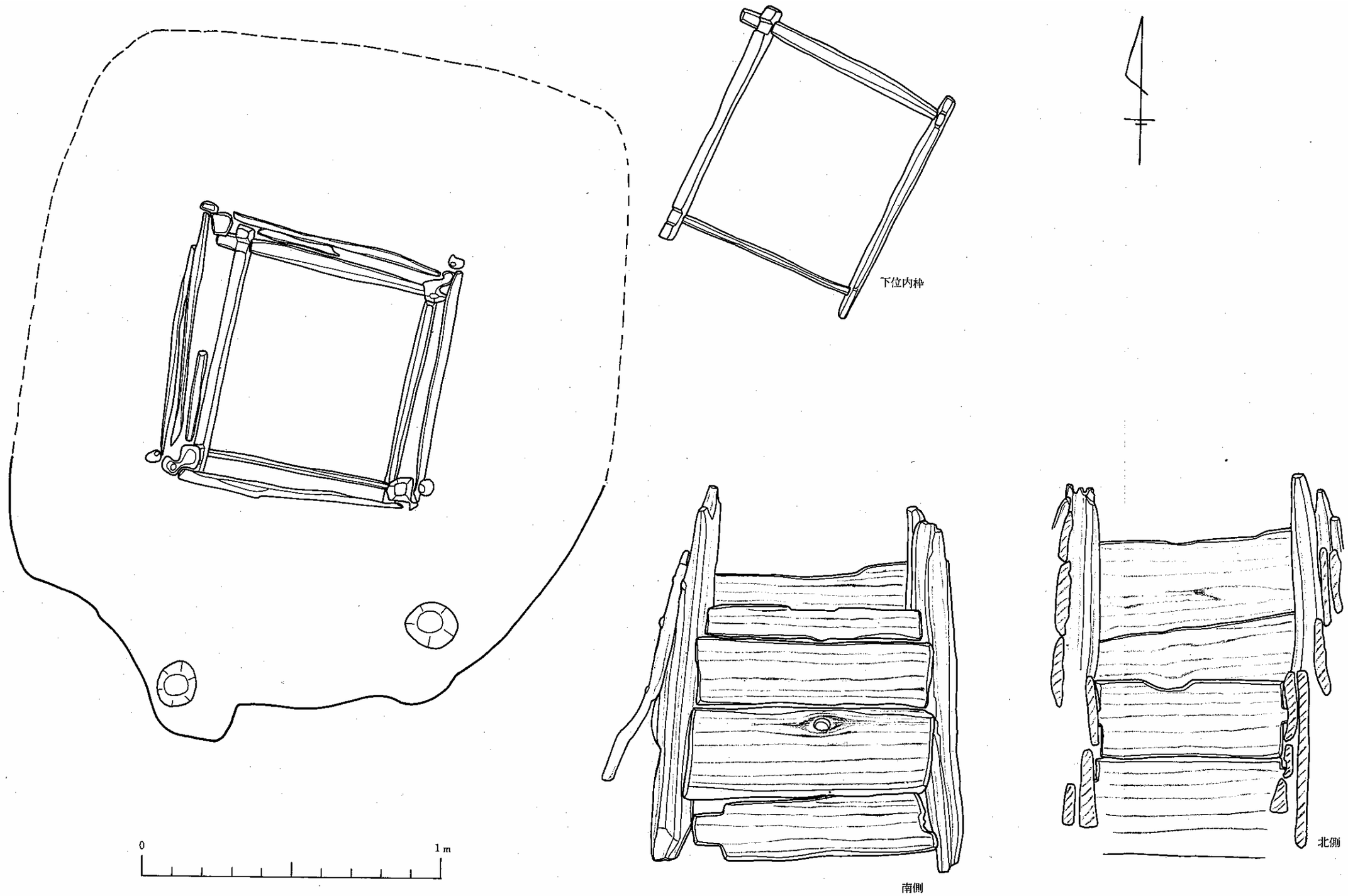
井戸掘り方：湧水のため壁等が崩落し、形状・規模・埋土の詳細は知り得ない。形状・規模については推定であるが、上部の平面形は約2.2×2.0の円形を呈すると思われる。しかし、下部の平面形は不明である。遺構確認面からの深さは約１ｍである。埋土も不明な点が多いが、暗褐色（10ＹＲ4/1）シルト層が１層確認したのみである。この層中には地山粘土（掘り方の壁と同質の土）ブロックが多量に含まれている。

井戸枠の構造：井戸枠は上位（外枠）と下位（内枠）に板材が組まれている。上位の枠は４本の丸太材を四隅に配し、その周囲に長方形の板材（長さ70cm～80cm、幅10cm～30cm、厚さ1.5cm～2.0cm）が据えられている。東側では板材４枚で３段、南側は４枚で４段、西側は３枚で３段、北側は２枚で２段と規則性はない。東・南側の板材の間には補強のための小板片（長さ24cm・幅26cm・厚さ４cm）が配されている。内法は一辺70cmの正方形である。下位の枠は内側に長方形板材（長さ70cm～80cm、幅20cm～25cm、厚さ２cm～３cm）に抉りを入れ、井桁状に組み



No	種　類	地区・層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	赤焼土器皿	井戸枠内	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼		9.4	2.1	4.0	1井－8	積み上げ痕
2	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼		9.8	2.4	4.7	1井－7	
3	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼		9.2	2.4	5.0	1井－9	
4	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼		9.6	1.8	4.2	1井－10	積み上げ痕
5	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼		9.6	2.4	5.0	1井－6	
6.	刀　子	〃	〃								
7	須恵器坏	井戸掘り方	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り、ケズリ	ロクロナデ	½	C	15.0	4.0	9.7	1井－2	
8	〃　〃	〃　〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.3	4.1	8.0	1井－31	
9	〃　〃	〃　〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.9			1井－3	
10	土師器坏	〃　〃	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色	一部						墨書痕あり

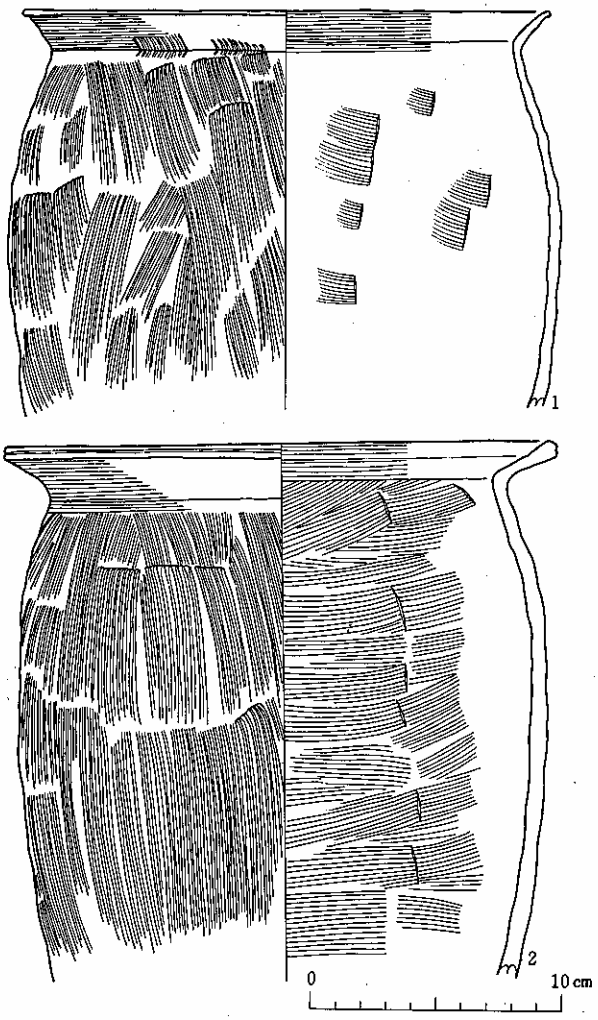
第11図　第１井戸出土遺物１



第12図　第１井戸跡平面図と側面図

上げたもので２段確認された。枠の内法は一辺60cmの正方形を呈する。外枠と比して丁寧に組み上げられており、板材の保存は良好である。

板材の両面は手斧状工具によって削られ、平滑に仕上げられている。板材両端の切断方法は手斧状工具による打割によるものと、鋸挽によるものとがある。打割の場合には数次にわたる加撃によるものである。下位の内枠の板材は全て「抉り」が入れている。「抉り」は上下両方向から加えられ、二対の抉りをもつが、南・北側の下段の板材は上方向だけから「抉り」が入れられ、下面は平坦で上面のみに一対の「抉り」が入れられている。この「抉り」を互にかみ合わせて、交互に積み上げたものである。上位の外枠の板材にはこのような「抉り」が入ったものは南側の最下段にあるが、かみ合わすため

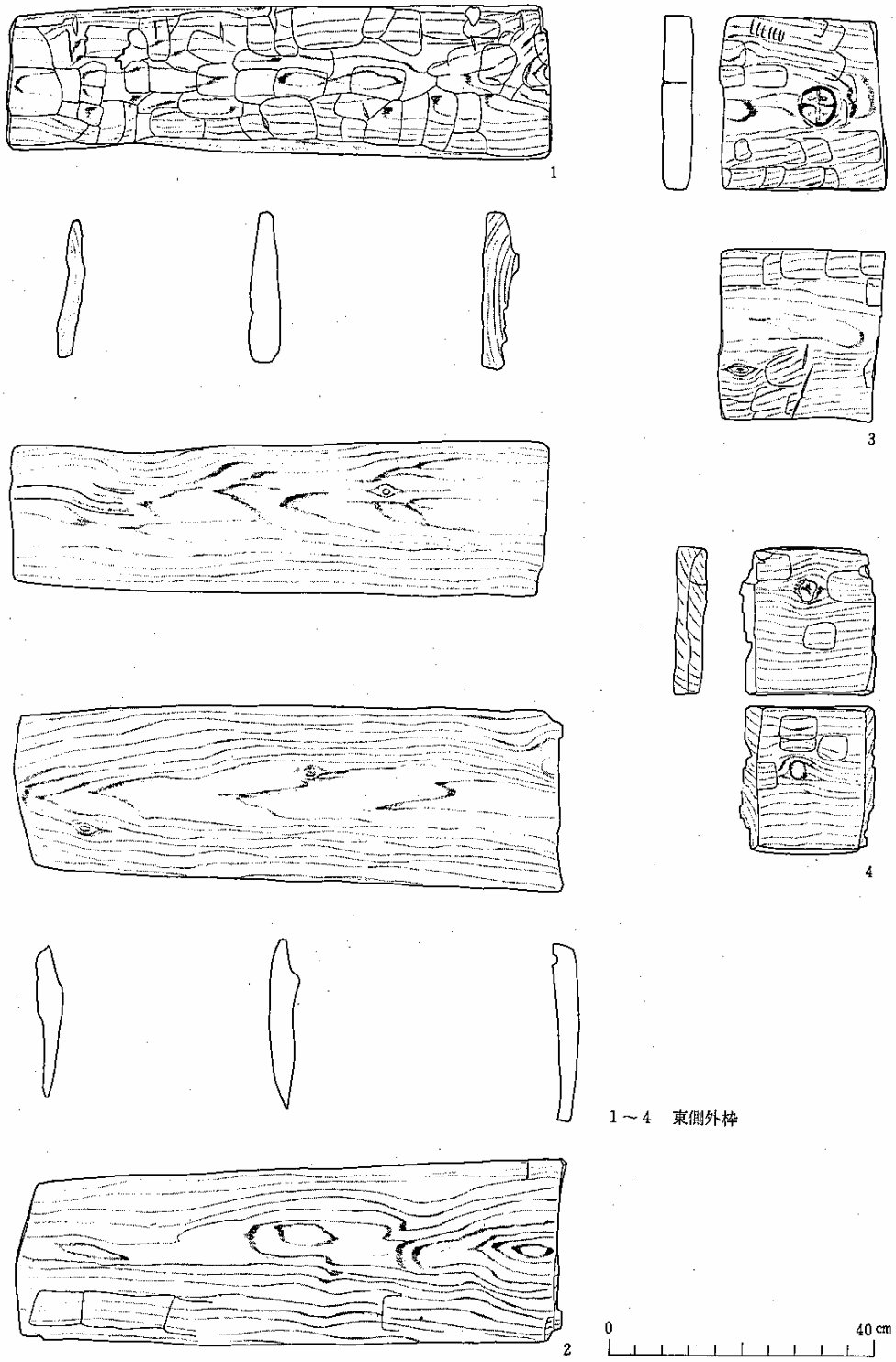


第13図　第１井戸出土土器２

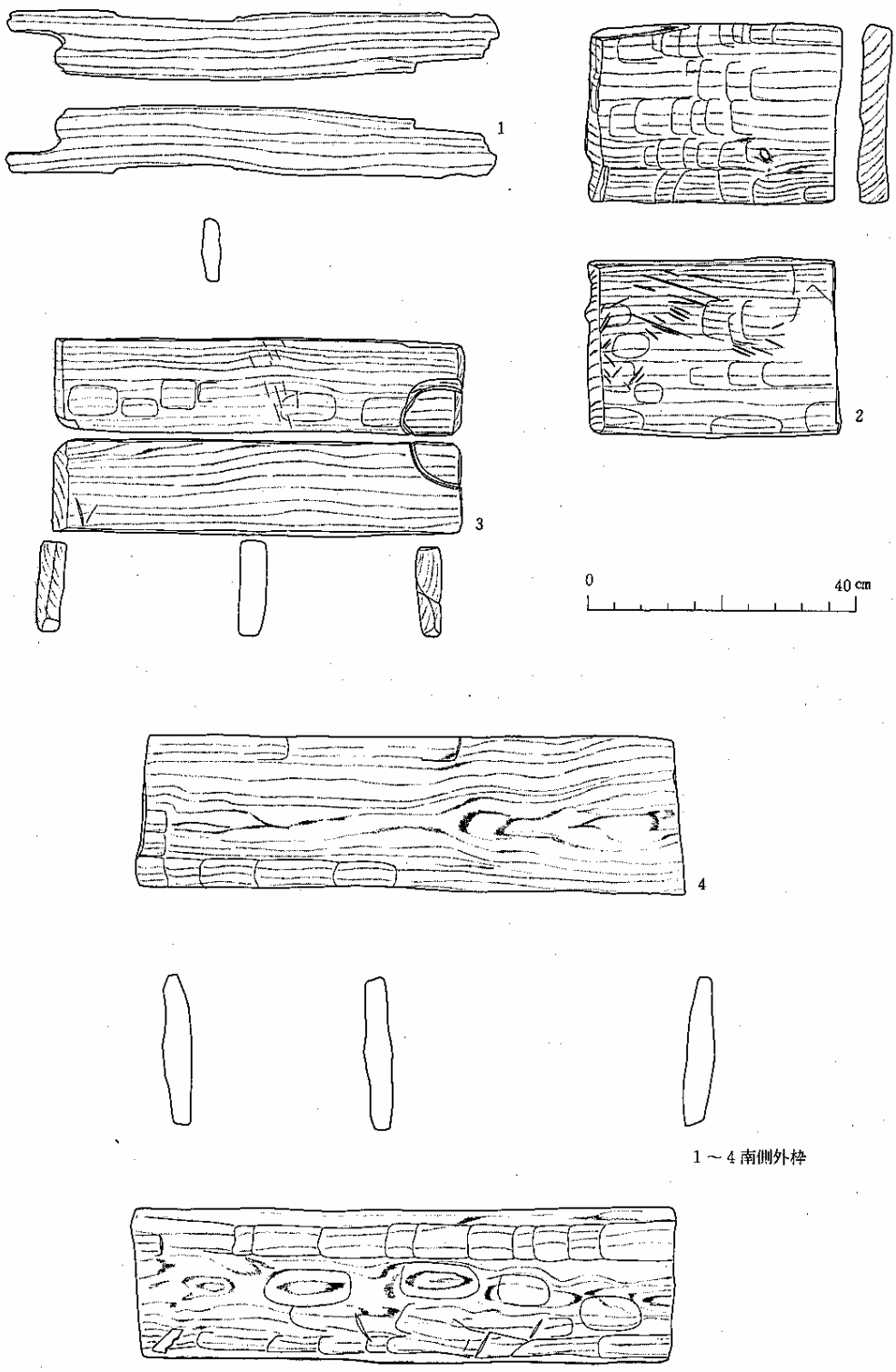
No.	種　類	地区・層	外　面	内　面	残存	分類	登録No.	備考
1	土師器甕	第１井戸掘り方	口縁ヨコナデ 体部刷毛目	口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ	一部		１井―11	
2	〃	〃　〃	口縁ヨコナデ 体部刷毛目	口縁ヨコナデ 体部ヘラナデ	〃		１井―12	

のものでない。その他の板材には「抉り」は入らない。したがって、上位の外枠は特に内からの圧力には弱くなっており、下位の内枠は内外の圧力には強固になるよう構築されていると言える。

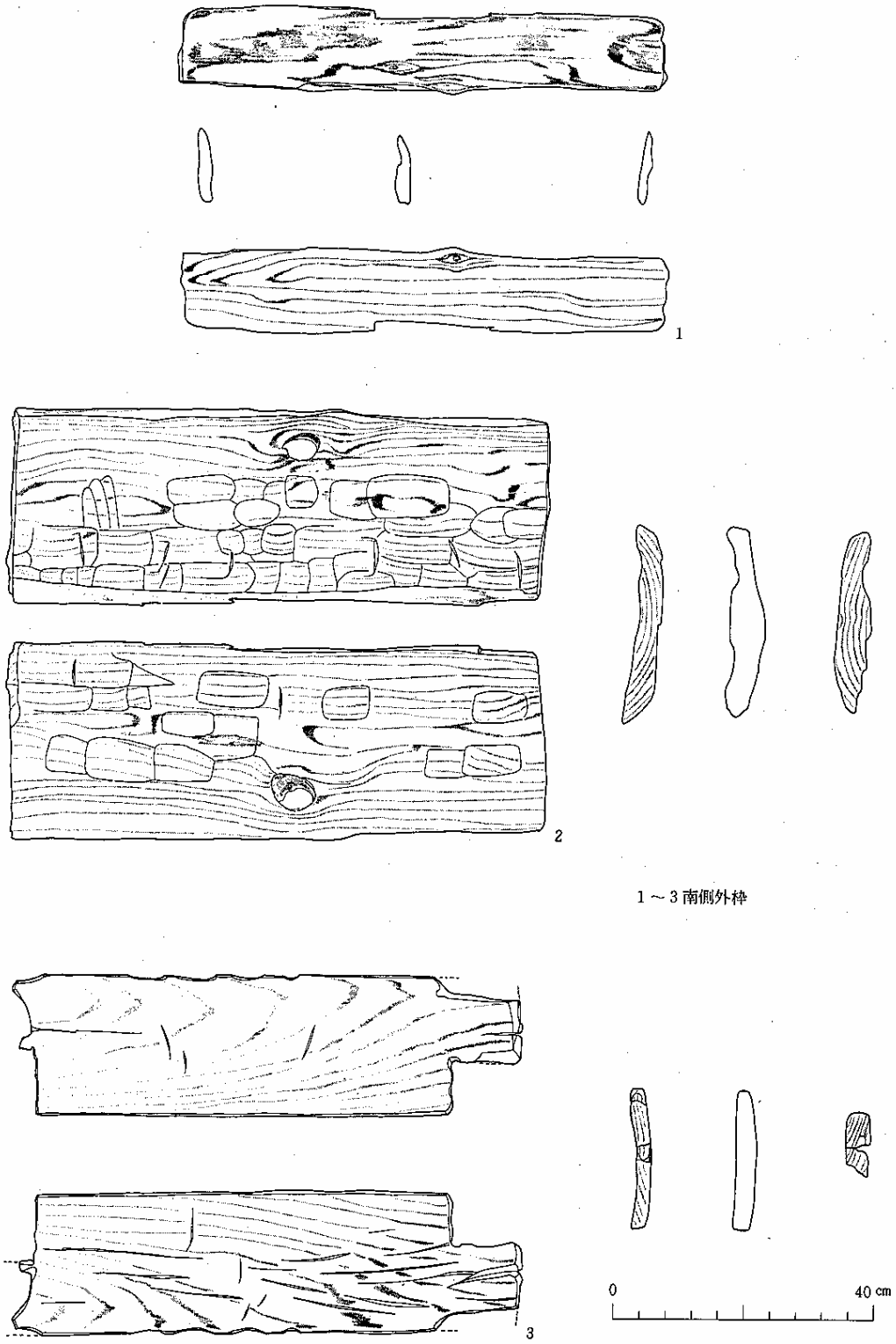
井戸枠内堆積土：井戸枠内には３枚の層のほぼ水平に堆積していた。各層とも黒褐色（10ＹＲ1/2）シルト層であるが、層中の含有物によって３分された。第１層には炭化物がわずかに混入し、第２・３層には植物遺存体が混入しくおり、第２層には多量に含まれていた。下方にいくにしたがって水分が多く含まれ軟弱になっている。



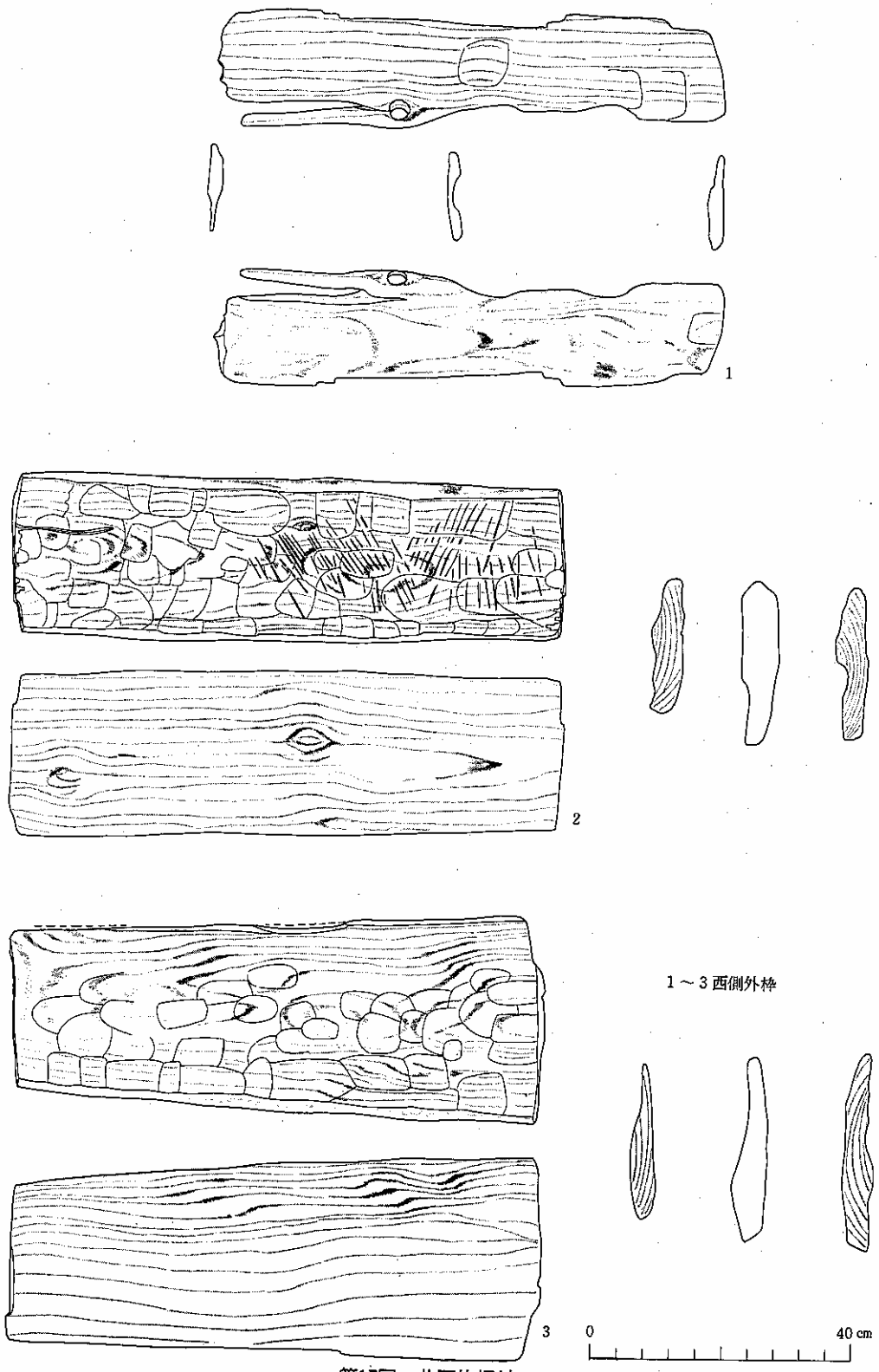
第14図　井戸枠板材１



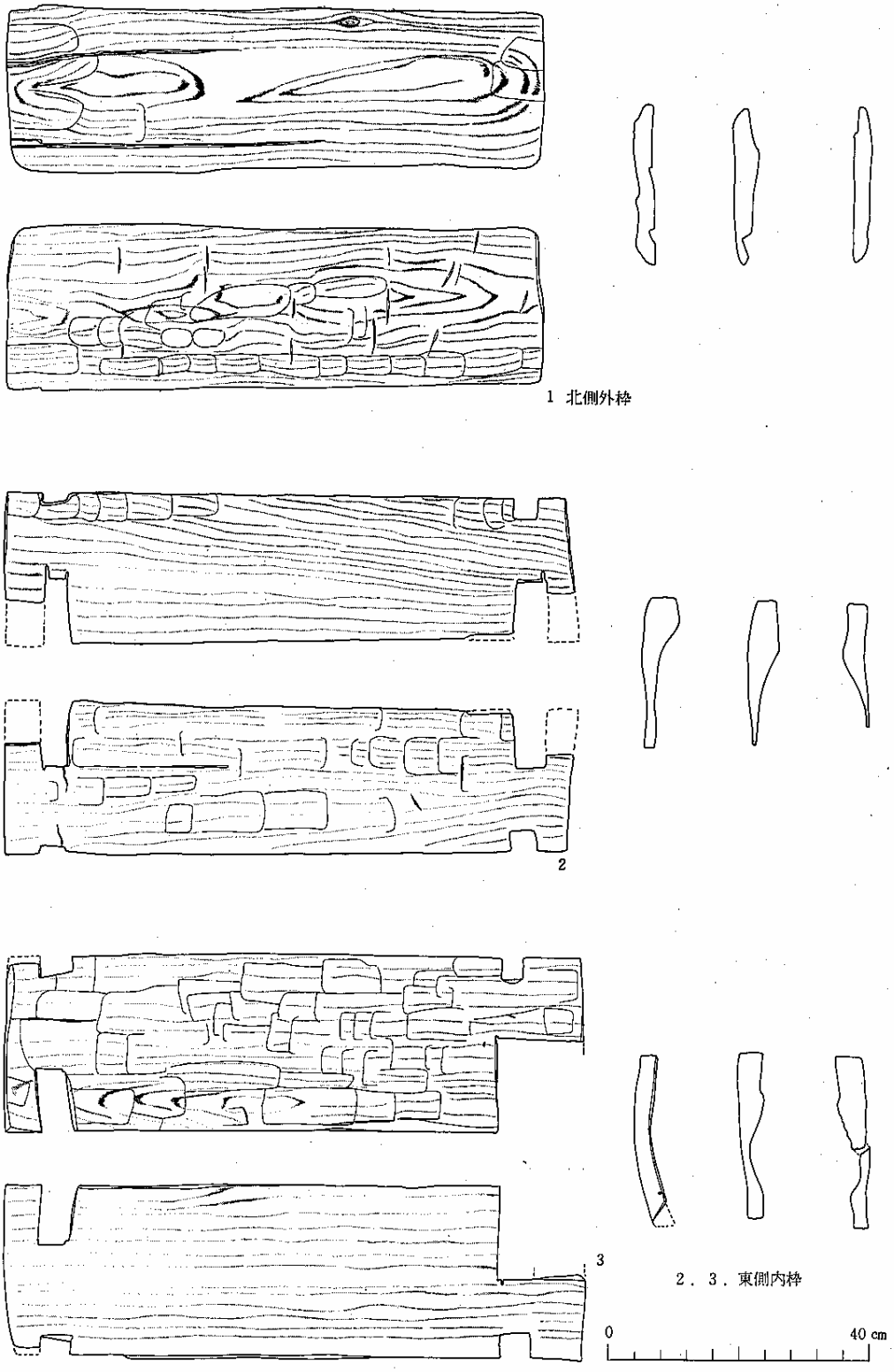
第15図　井戸枠板材 2



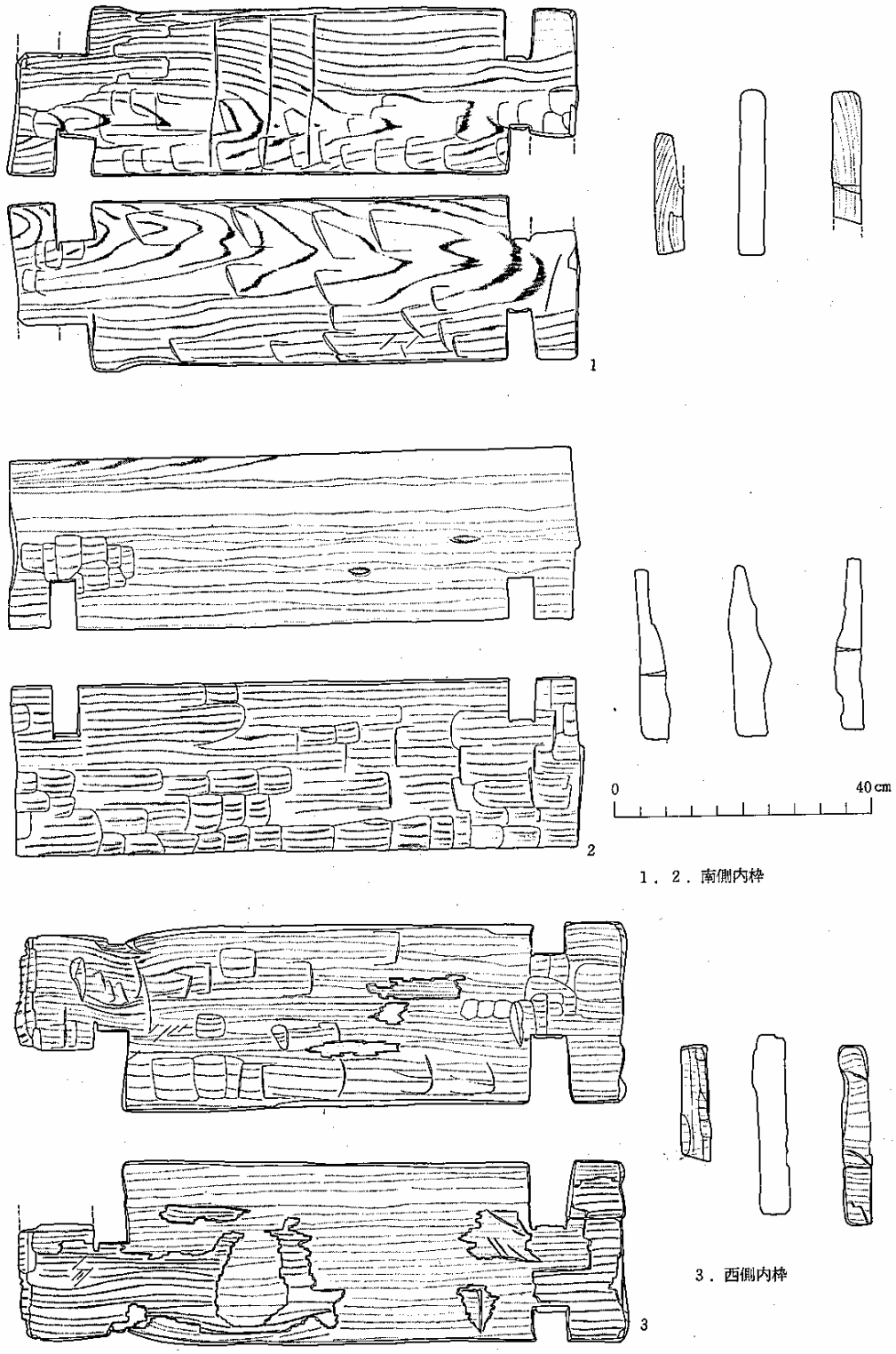
第16図　井戸枠板材3



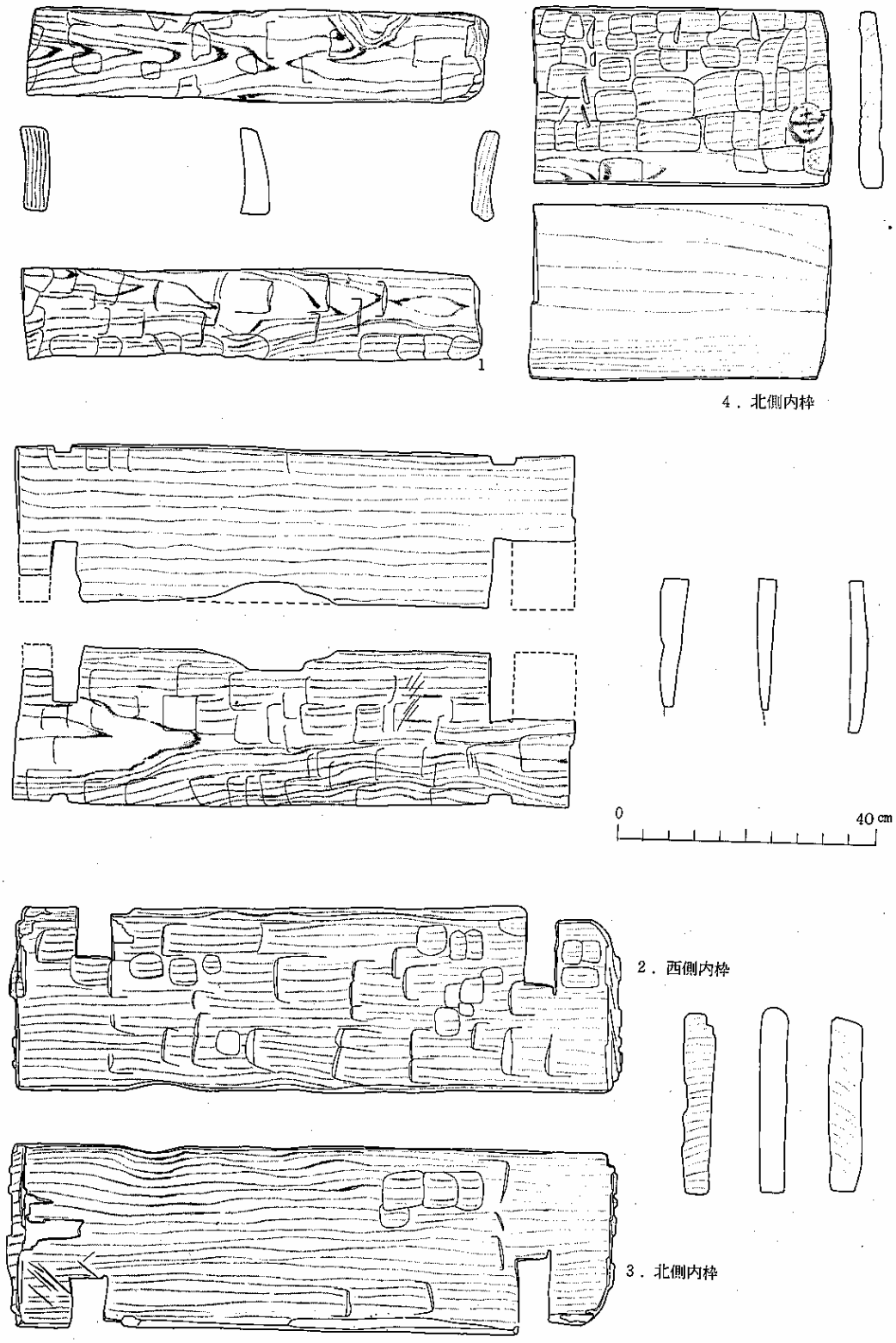
第17図　井戸枠板材 4



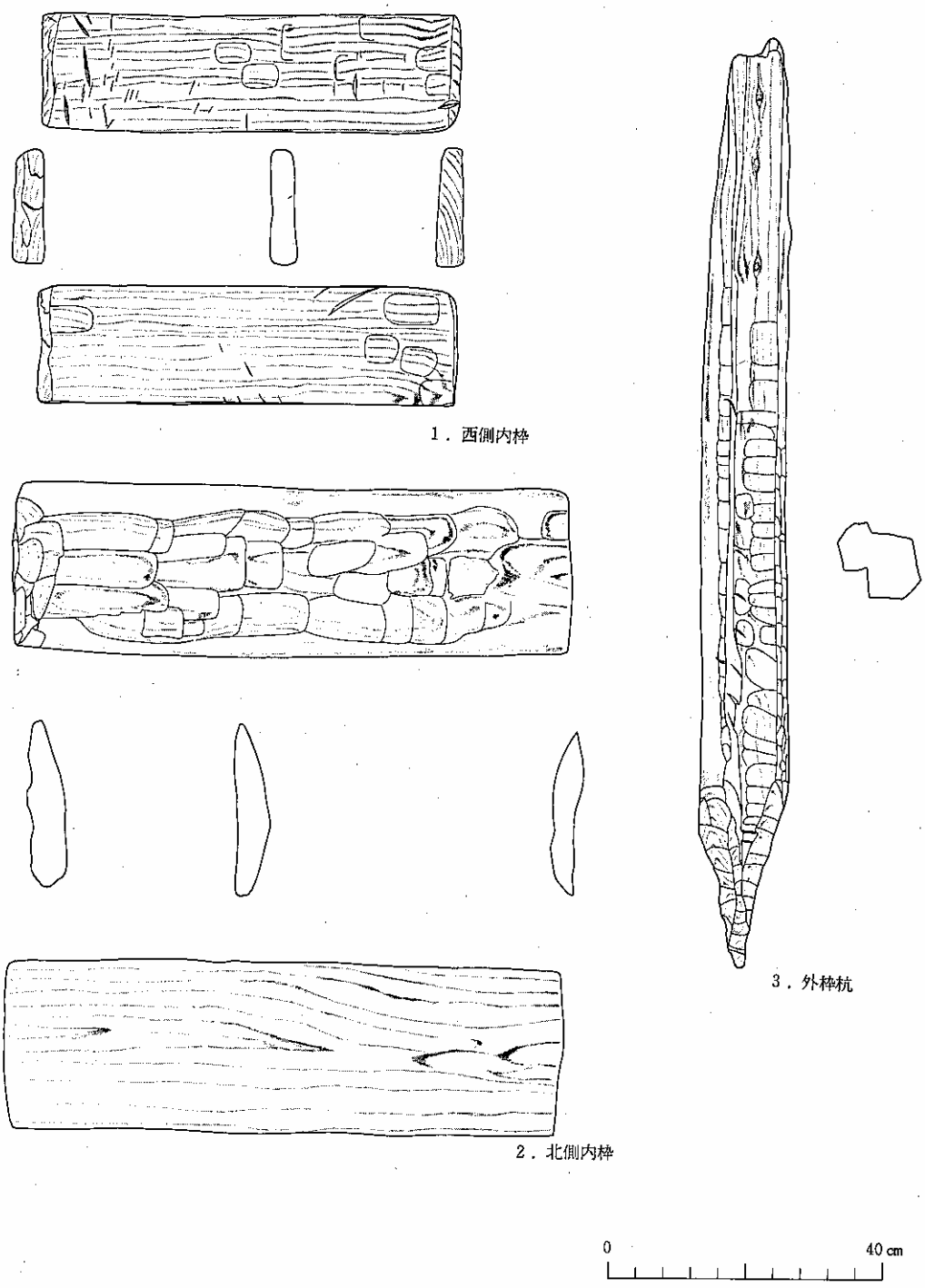
第18図　井戸枠板材５



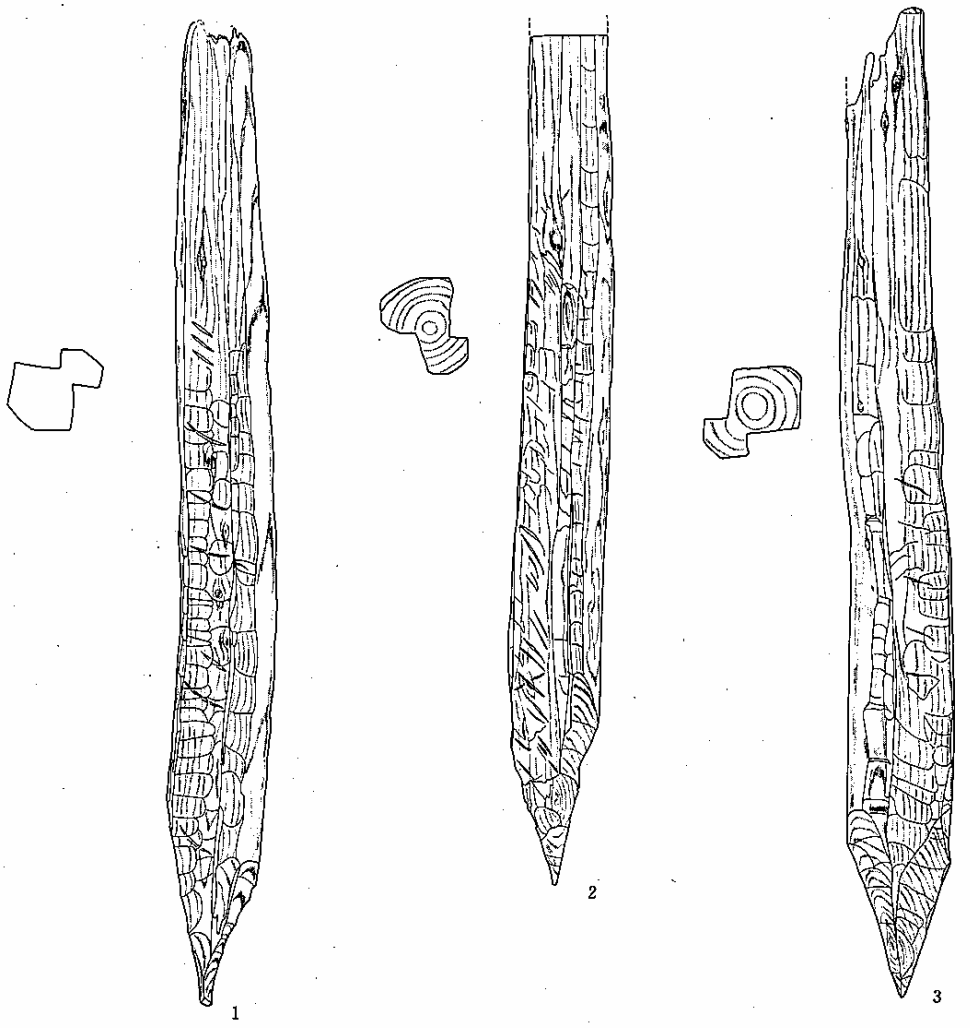
第19図　井戸枠板材6



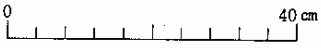
第20図　井戸枠板材７



第21図　井戸枠板材８



1～3．外枠杭



第22図　井戸枠板材９

出土遺跡：井戸掘り方埋土から須恵器坏（その他は第１表に示した）。井戸枠内堆積土第３層から赤焼土器小皿・刀子が出土している。

刀子（第11図６）は刃部と柄がほぼ完形に近い状態で残っていた。全長は23.5cm、刃部の長さは13.5cm柄の長さは10cmである。

第１表　第１井戸跡出土土器破片資料

種類	土師器																					須恵器			赤焼
器形	坏							高台	甕													坏		高台	坏
部位	口		体部			底		底	口		体部										底	体	底	底	口
外面	ロクロ	ロクロ・ミガキ(黒)	ロクロ	ロクロ・ケズリ	ロクロ・ミガキ(黒)	回転糸切り	手持ちケズリ	回転糸切り・ケズリ	ロクロ	横ナデ	ロクロ	ロクロ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	不明	不明	ロクロ	回転糸切り	不明	ロクロ
内面	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ミガキ(黒)	ロクロ	横ナデ	ロクロ	ミガキ(黒)	刷毛目	ロクロ	ナデ	不明	刷毛目	ナデ	不明	不明		ロクロ			ロクロ
井戸枠内											1									1					2
井戸掘り方	26	1	21	1	1	4	5	4	6	1	10	3	1	1	2	5	5	5	3	2	2	4	5	1	4

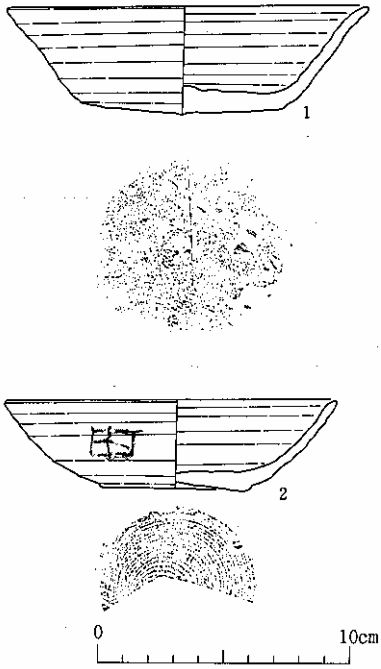
第２井戸跡（第24図）

Ｎ－４、Ｅ－６で検出された。遺構確認面は基本層位第III層中からである。一部調査区にも延びる。全掘りせず確認のみに留めたため詳細は不明な点が多い。井戸掘り方・井戸枠によって構成される。井戸の方向は井戸枠から南北軸がＮ－５°－W東西軸がＮ－７°－Ｅである。

井戸掘り方：掘り方の形状は上部で1.9×1.6の隅丸方形を呈すると思われる。下部については不明である。埋土は黒褐色（10ＹＲ3/1）粘土（第１層）、黒褐色（10ＹＲ3/1）砂（第２層）、黒色（10ＹＲ1.7/1）粘土の３層が認められる。

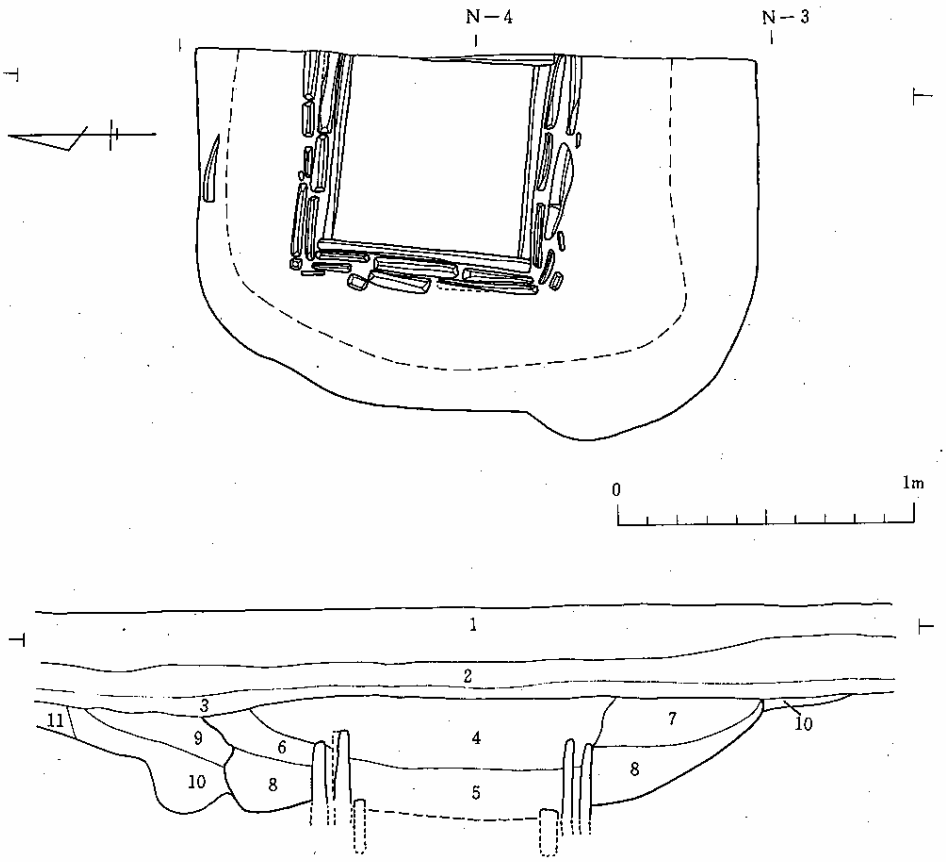
井戸枠の構造：井戸掘り方、枠内は完掘していないので全体的な構造は不明であるが「抉り」が入った板材をかみ合わせ井桁状に積み上げ、その外側には板材を二重に並べ取り囲むようにしている。なお、内側の枠の内法は一辺65cmの正方形を呈する。

井戸枠内堆積土：２枚の層のみ確認した。ほぼ水平に堆積していた。黒色（10ＹＲ2/1）シルト（第１層）、黒色（10ＹＲ1.7/1）粘土（第２層）である。



１．須恵器坏　掘り方、外面ロクロナデ、ヘラ切り
登録No．２井－１
２．須恵器坏枠内、ロクロナデ回転糸切り
登録No．２井－２

第23図　第２井戸出土土器



層No.	層　　位	土　　色	土　性	備　　考
1	基本層位第Ⅱ層	黒褐色（10YR 3/2）	シルト	粘性あり
2	〃　第Ⅲ層	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	
3		褐　色(10YR 4/6)	シルト	鉄分あり
4	井戸枠内堆積土第1層	黒　色(10YR 2/1)	シルト	粘性あり
5	〃　第2層	黒　色(10YR1.7/1)	粘　土	
6	井戸掘り方埋土第1層	黒褐色(10YR 3/1)	砂	
7	〃　第2層	黒褐色(10YR 3/1)	粘　土	粘性あり
8	〃　第3層	黒　色(10YR1.7/1)	粘　土	
9	井戸構築層（地山）	黒褐色(10YR 3/2)	粘　土	
10		黒　色(10YR1.7/1)	粘　土	
11	基本層位第Ⅳ層	黒　色(10YR1.7/1)	粘　土	

第24図　第2井戸跡平面図・断面図

出土遺物：図示したのは須恵器坏が２点のみである。２の体部に「田」の墨書がある。

３．溝と出土土器

調査区のほぼ中央を南北に走る溝（南北溝）、北側を東西に走る溝（東西溝）を中心に７本の溝が検出された。

東西溝：調査の北側、整地層の第Ⅳ層を除去した段階で検出された。南北溝と重複するが新旧関係は不明である。調査区全域については調査しておらず、全体の状況については不明な点が多いが、溝の規模・延び等についてはある程度知ることができる。上端巾約６㎜、下端巾約５㎜、深さは約50㎝と規模の大きいもので、壁はゆるやかに立ち上がる。床面は平坦である。堆積土は１層のみで黄灰色（2.5Y4/1）粘土質砂で湿めり気があり、植物遺存体を多量に含有している層である。このことから、溝機能時には水が溜まっていた可能性がある。また、堆積状況からは自然堆積か、人為的なものかは不明である。溝の延びはやや北寄りに東西に走る。

出土遺物は堆積土から土師器坏・須恵器坏・須恵器高台付坏・灰釉陶器壺・木器・木製品等が多く出土している。

南北溝：調査区のほぼ中央で東西溝に直交するように南北に走っている溝である。溝３・溝４と重複しており、溝３を切っている。第Ⅳ層上面で確認された。上端巾約1.5～2.0、下端巾１㎜前後、深さ約40㎝である。壁の立ち上がりはゆるやかである。床面はほぼ平坦である。堆積土は１層のみである。なお、第４掘立柱建物跡に一部切られている。

出土遺物は堆積土から土師器甕・須恵器坏等が出土している。

溝1：東西溝の南側に沿って東西に走る溝である。南北溝と重複するが、新旧関係は不明である。上端巾は約50～80㎝と狭い。深さは40㎝である。堆積土は１層のみである。東西側は調査区外にも延びる。

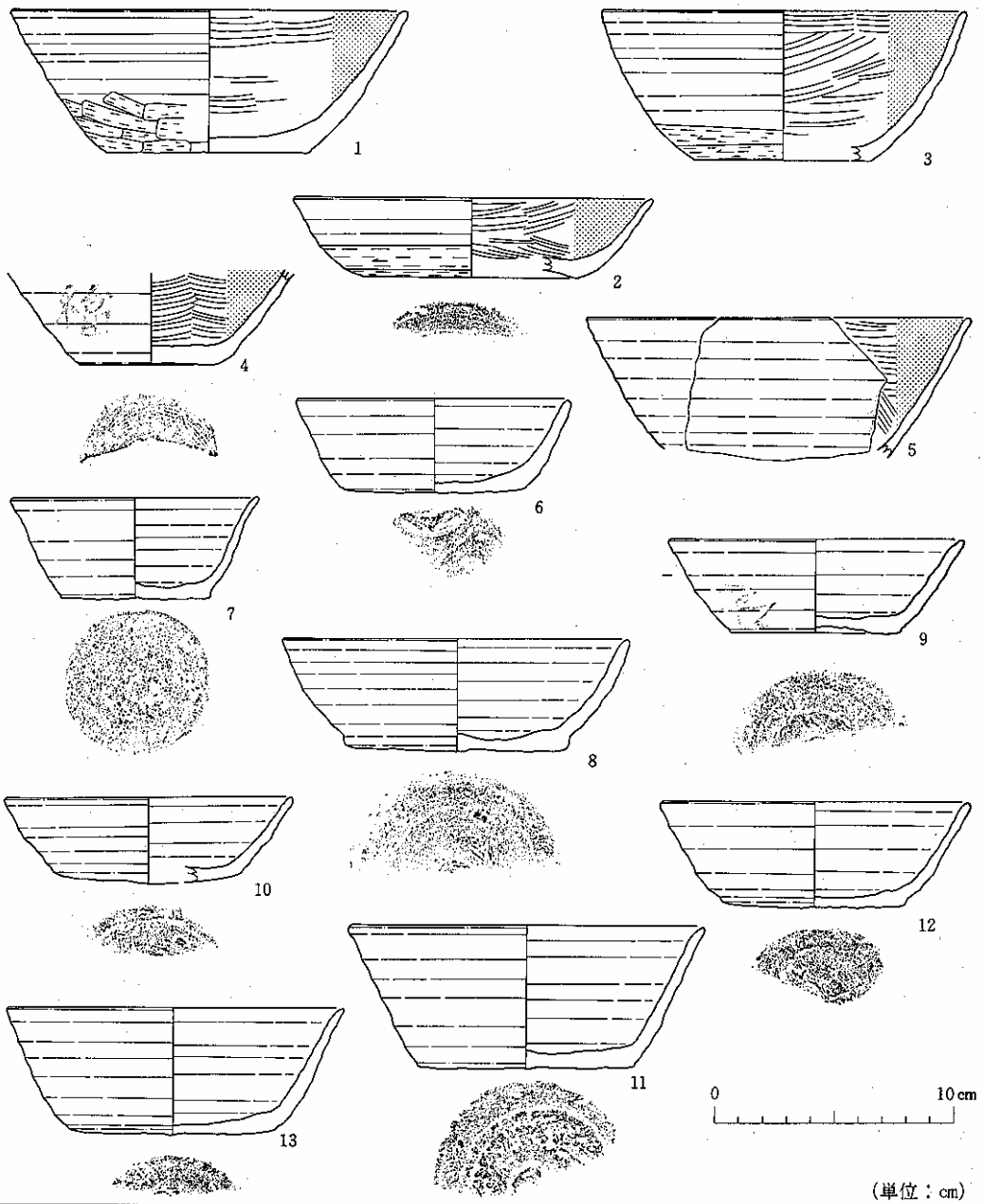
溝2：東西溝の南端に接している溝で全体の規模、延び具合は不明である。

溝3：遺物包含層第Ⅲ層上面で確認された。南北溝と重複しており、南北溝に切られている。調査区ほぼ中央部において北東側から南西側に斜めに走っているが全体の延び具合は不明である。上端巾は約１㎜～50㎝である。

溝4：溝３、南北溝と重複しているが、新旧関係は不明である。溝３に直交するように走るが途中止まる。上端巾は約50㎝前後である。

溝5：溝１の延長と思われるが、全体の延び具合その他も不明である。

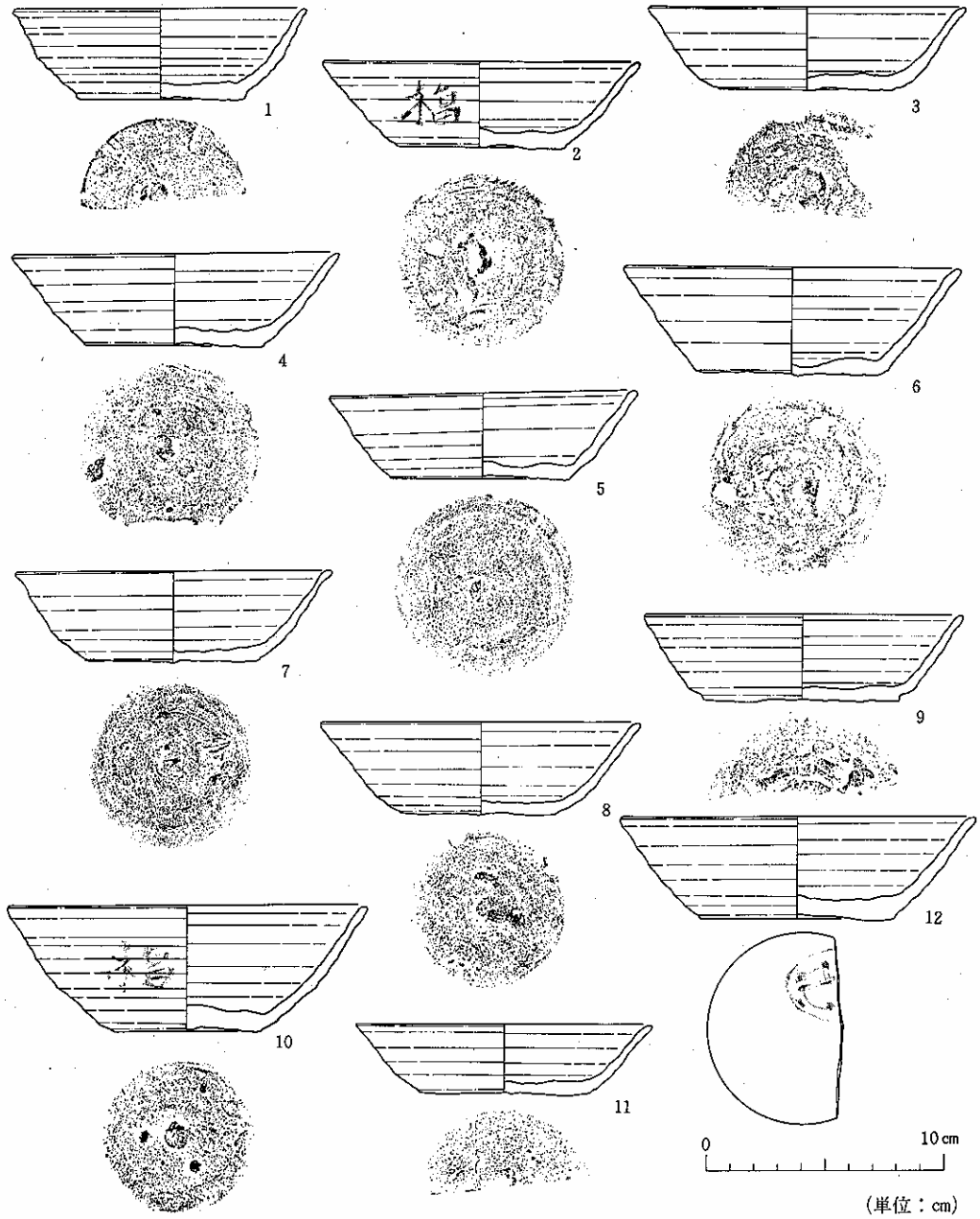
溝6、７：調査区西側で検出されたが詳細は不明である。



（単位：cm）

No	種類	地区・層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器坏	東西溝	口縁～体部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部手持ちケズリ	ヘラミガキ（横）黒色	½	BⅠ	16.6	6.0	8.5	EM−7	
2	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、回転ケズリ、底部回転ケズリ	ヘラミガキ（横・斜）黒色	¼	BⅡ	15.1			EM−1	
3	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、回転ケズリ	ヘラミガキ（横・斜）黒色	¼	BⅠ	15.2			EM−3	
4	〃 〃	〃	ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ（斜）黒色	一部					EM−5	「福」の墨書
5	〃 〃	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色	一部					EM−6	墨書痕あり
6	須恵器坏	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	11.5	4.0	7.6	EM−26	
7	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅓	A	10.4	4.2	6.2	EM−16	
8	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	14.5	4.8	9.0	EM−17	
9	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	12.4	3.9	7.0	EM−27	「石」の墨書
10	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	12.2			EM−24	
11	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	15.0	6.0	9.0	EM−23	
12	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	13.0	4.5	7.6	EM−25	
13	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	14.2	5.3	8.8	EM−22	

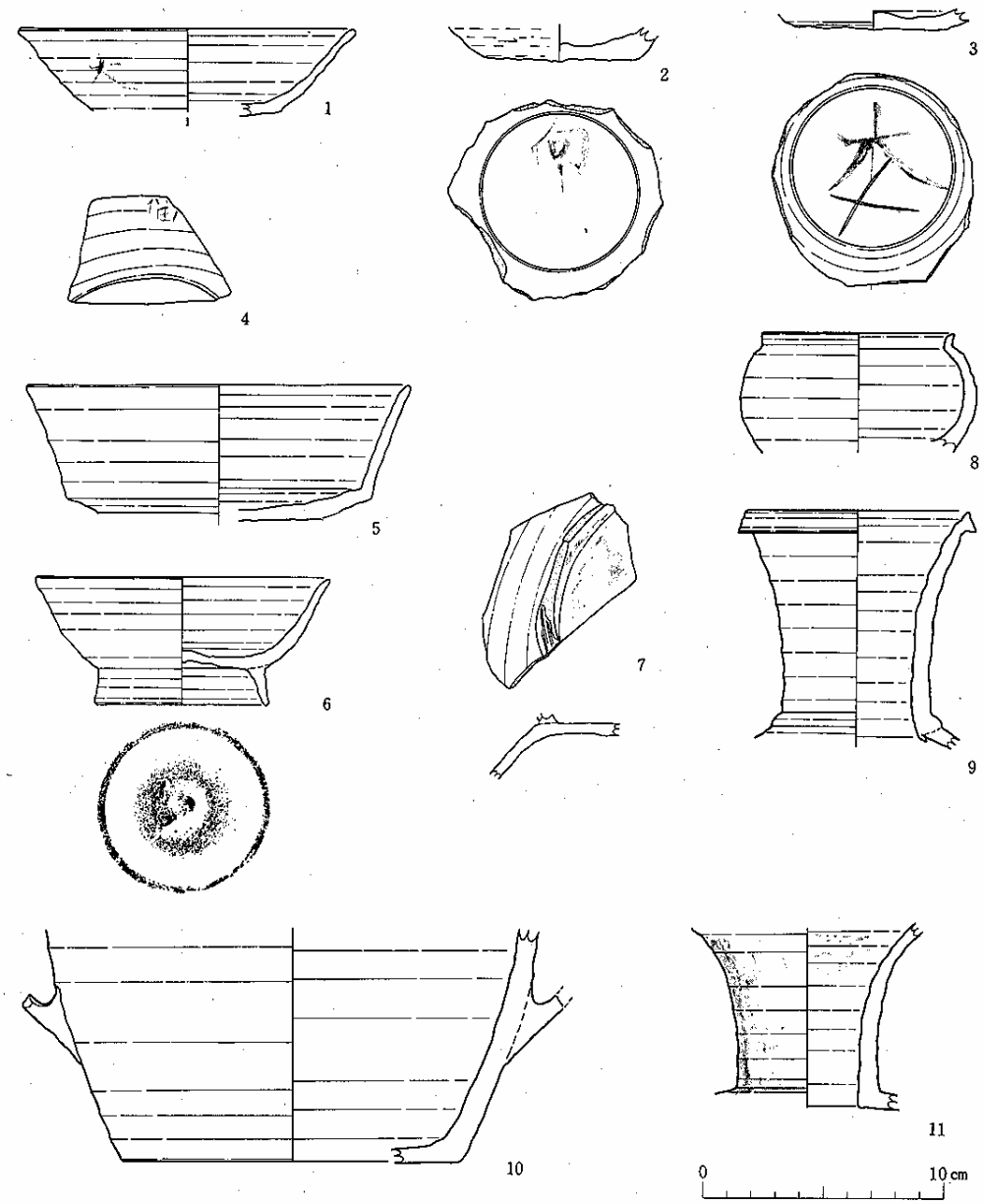
第25図　東西溝出土土器１



(単位：cm)

No	種　類	地区・層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器坏	東西溝	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	12.3	3.8	7.0	EM—20	
2	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.3	3.6	7.0	EM—8	「福」の墨書
3	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.4	3.5	7.4	EM—21	
4	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.8	3.8	7.4	EM—15	
5	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.0	3.6	7.6	EM—11	
6	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	14.2	4.5	8.0	EM—13	
7	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.4	3.8	7.3	EM—9	
8	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.5	3.9	6.6	EM—12	
9	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.4	3.7	8.3	EM—19	
10	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	D	15.2	5.3	6.2	EM—10	「福」の墨書
11	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	12.5	2.9	7.2	EM—18	
12	〃 〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	15.0	4.3	8.2	EM—14	「田」の墨書

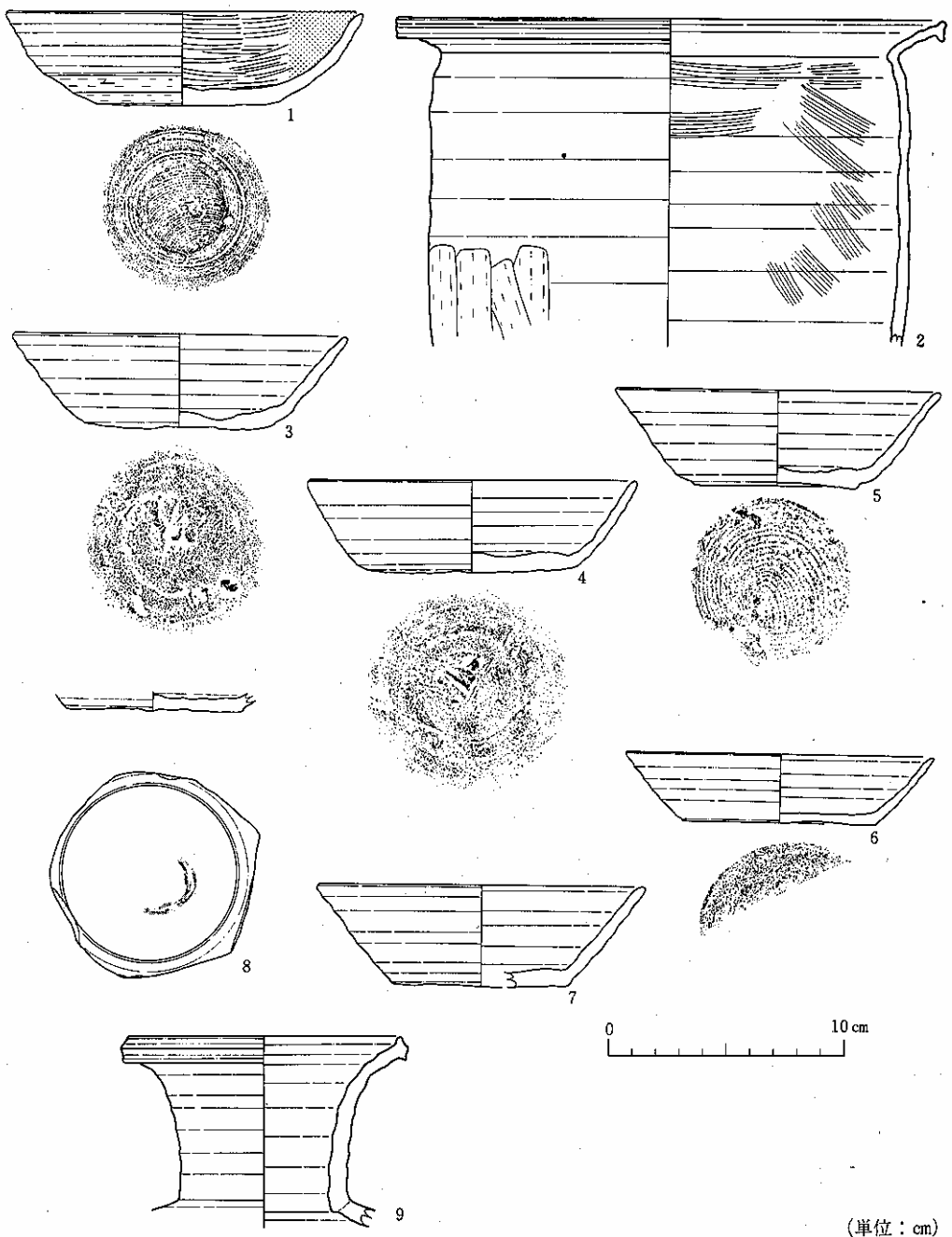
第26図　東西溝出土土器２



（単位：cm）

No	種　類	地区、層	外　面	内　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器　坏	東西溝	口縁～体部ロクロナデ	口縁～体部ロクロナデ	一部					EM-28	「大」の墨書
2	〃　〃	〃	底部、ヘラ切り、回転ケズリ	ロクロナデ	一部					EM-30	「中」の墨書
3	〃　〃	〃	底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					EM-29	「木」の墨書、「メ」のヘラ書き
4	〃　〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部					EM-31	「福」の墨書
5	〃　高台付坏	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ロクロナデ	½	A				EM-42	
6	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	12.2	3.5	6.3	EM-32	
7	〃　〃	〃	ロクロナデ、底部に墨痕	ロクロナデ	一部					EM-34	転用硯
8	〃　壺	〃	口縁～体部ロクロナデ	ロクロナデ	一部					EM-35	
9	〃　〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部					EM-36	把手付
10	灰釉陶器　壺	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部					EM-37	

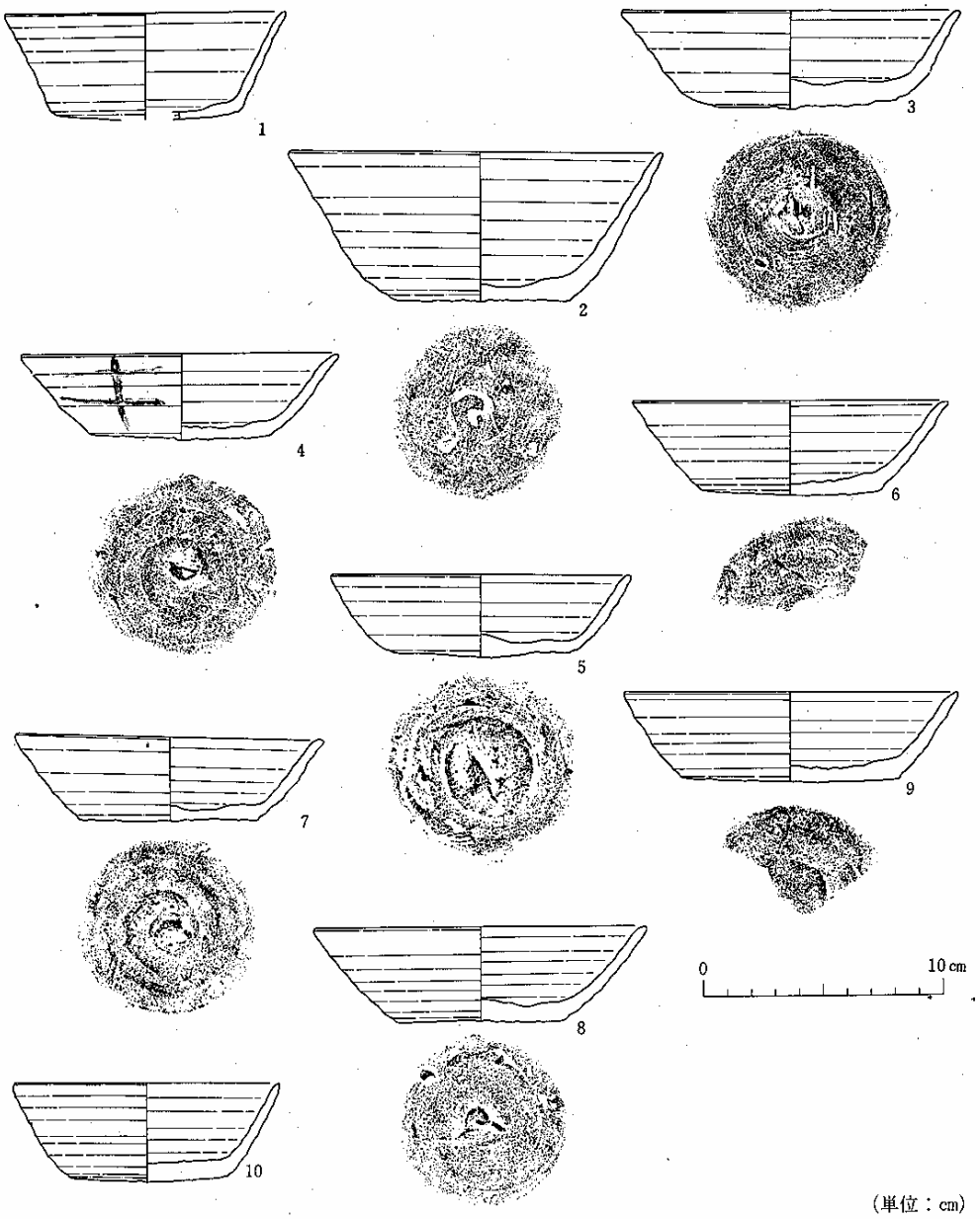
第27図　東西溝出土土器 3



（単位：cm）

No	種　類	地区・層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　　考
1	土師器坏	南北溝	口縁～体部ロクロナデ,回転ケズリ,底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ・黒色(横・斜)	¼	B II	15.1	4.0	7.2	M—1	
2	〃　甕	〃	口縁～体部ロクロナデ、ヘラケズリ	口縁～体部ロクロナデ、ナデ	一部	B				M—23	
3	須恵器坏	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	14.2	3.9	8.0	M—8	
4	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¾	C	14.0	3.9	8.9	M—3	
5	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.8	4.1	6.8	M—10	
6	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.1	2.9	8.2	M—21	
7	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り？	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	14.0			M—17	
8	〃　〃	〃	底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					M—16	底部に「○」の墨書
9	〃　壺	〃	口縁～頸部ロクロナデ	ロクロナデ	一部					M—24	

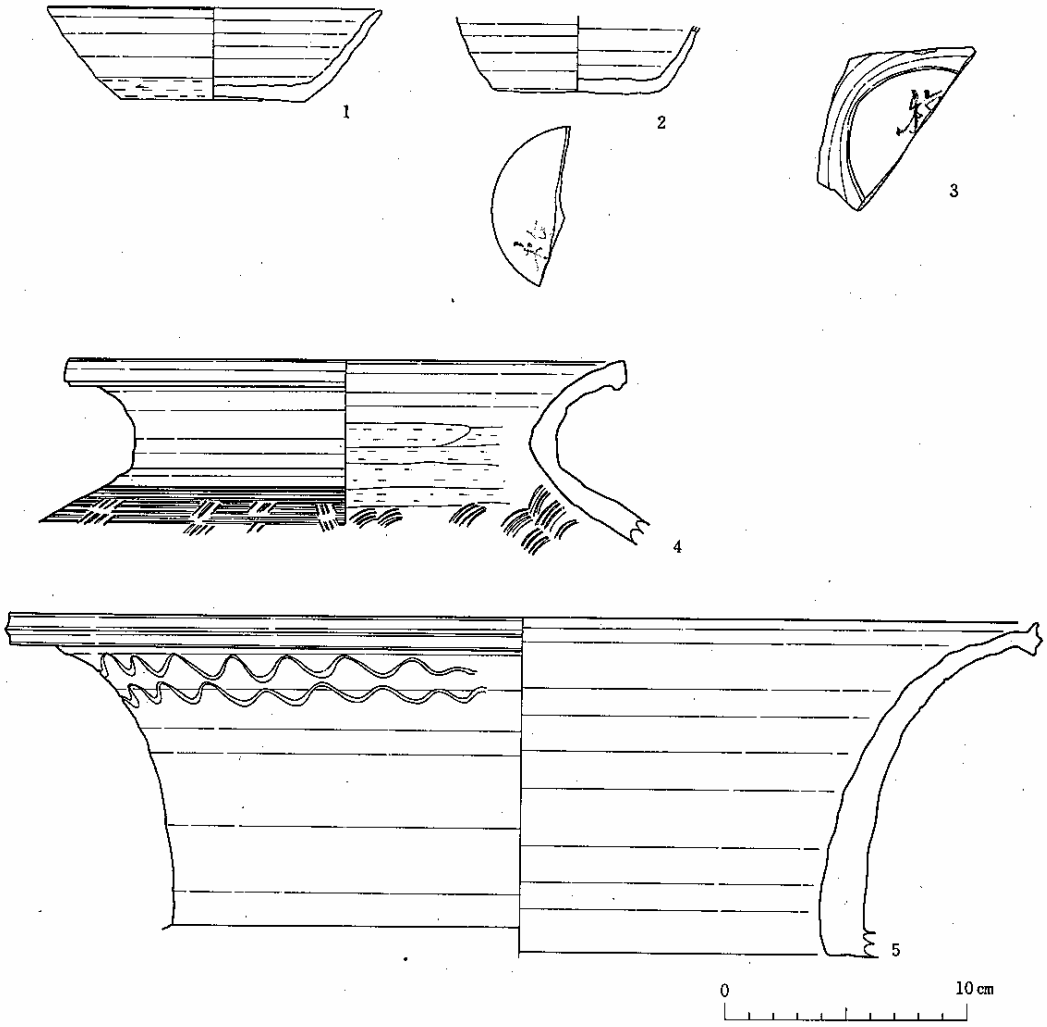
第28図　南北溝出土土器



（単位：cm）

No	種　類	地区　層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器坏	溝4	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	11.8		4	M—30	
2	〃　〃	溝5	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り、手持ちケズリ	口縁～底部ロクロナデ	⅔	B	15.7	6.4	7.6	M—5	
3	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	B	14.2	4.1	8.5	M—6	
4	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¾	C	13.4	3.7	7.6	M—4	「キ」の墨書
5	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	12.6	3.5	7.4	M—9	
6	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.2	3.9	7.6	M—15	
7	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.0	3.5	7.2	M—7	
8	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	14.0	3.9	7.0	M—11	
9	〃　〃	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	14.0	3.7	9.6	M—12	
10	〃　〃	溝6	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	11.1	4.1	6.6	M—18	

第29図　その他の溝出土土器１



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	溝1		口縁～体部ロクロナデ、体部～底部回転ケズリ	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.8	3.8	7.6	M—13	
2	〃 〃	〃		体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					M—20	「福」の墨書
3	〃 〃	〃		底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					M—19	「福」の墨書
4	〃 甕	〃		口縁ロクロナデ、体部回転刷毛目、平行タタキ目	口縁ロクロナデ、ヘラケズり、青海波状文	一部	A				M—27	
5	〃 甕	〃		頸部・波状文（2本単位）	ロクロナデ	一部	A				M—28	

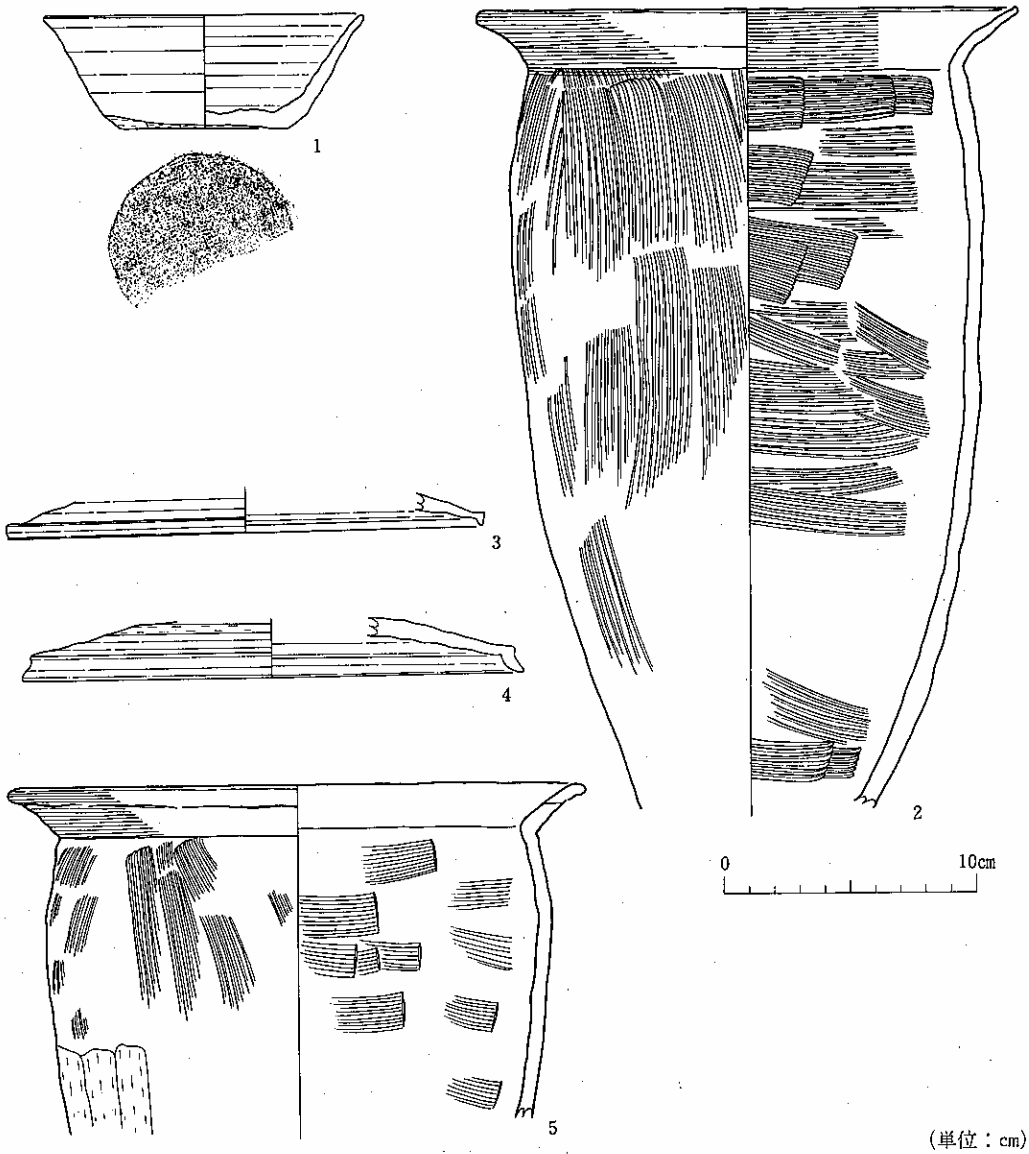
第30図　その他の溝出土土器２

これらの溝の堆積土からは須恵器坏、壺、甕等が出土している。量はあまり多くない。

４．土壙と出土土器

５基の土壙が検出された。いずれも第Ⅳ層上面の確認である。土壙１～３は径1mの円形を

呈し、深さは確認面から約20cm～40cmである。土壌４・５はいずれも不整円形を呈し、規模は約２m、深さは確認面から約30cm～55cmである。堆積土は各土壌とも１層のみである。土壌１から須恵器坏・蓋・土壌５から土師器甕が出土しているのみである。



（単位：cm）

No	種　類	地区	層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器坏	土壌１	１層	口縁～体部ロクロナデ、手持ちケズリ、底部手持ちケズリ	口縁～体部ロクロナデ	½	B	12.7	4.5	6.8	１土－１	
2	土師器甕	土壌５	〃	口縁・ヨコナデ、体部・刷毛目（縦）	口縁ヨコナデ、体部刷毛目(横)	⅔	A				５土－２	
3	須恵器蓋	土壌１	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部	B				１土－２	
4	〃　〃	土壌１	〃	回転ケズリ、ロクロナデ　　ロ	ロクロナデ	一部	C				１土－５	
5	土師器甕	土壌５	〃	口縁ヨコナデ、体部刷毛目、ヘラケズリ	体部ヘラナデ	一部	A				５土－１	

第31図　土壌出土土器

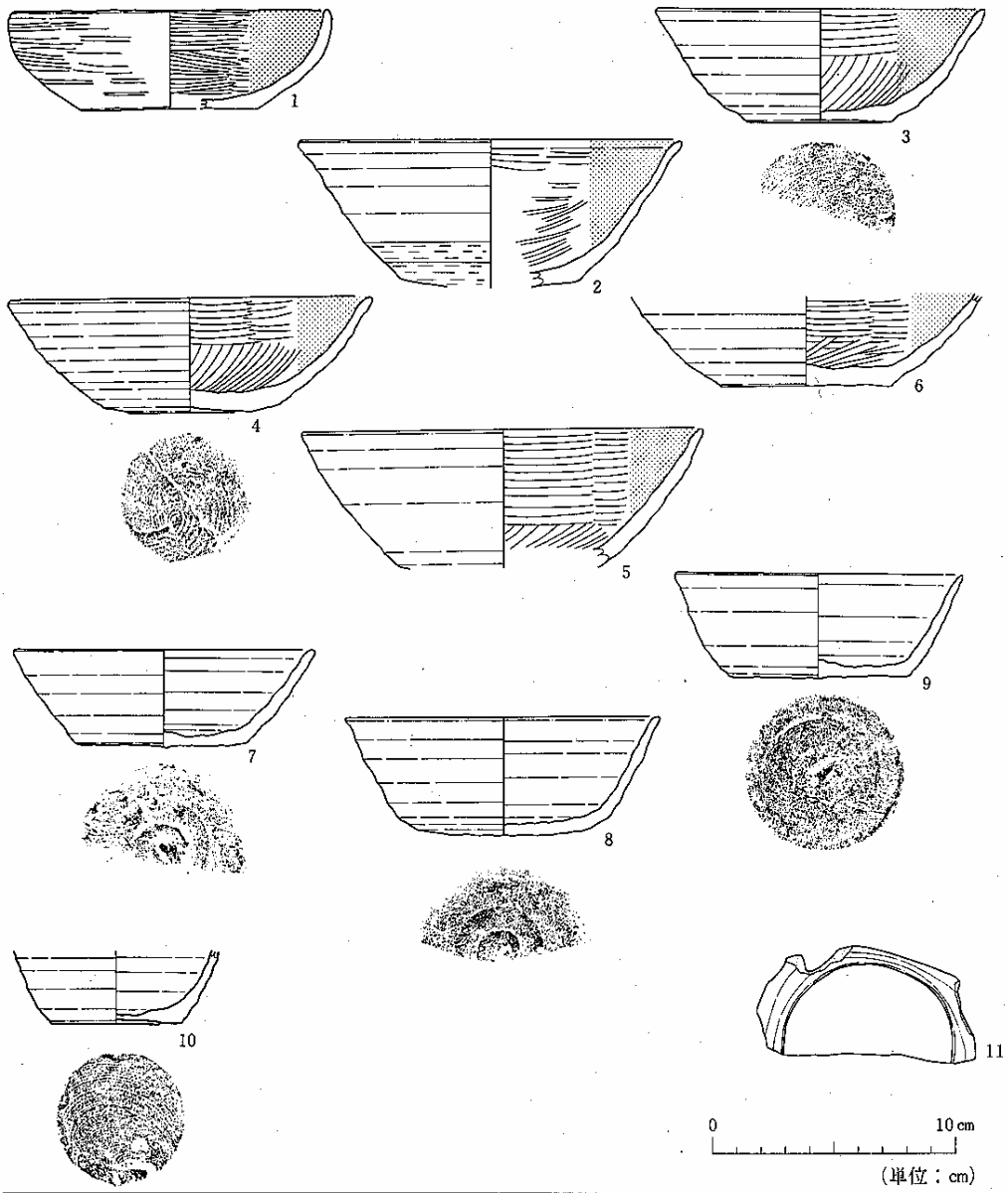
Ⅵ. 堆積土出土の土器

前に述べたように、堆積土は６層確認され、その内、遺物の出土があるのは表土・遺物包含層第Ⅱ層・第Ⅲ層・整地層・湿地の層である第Ⅴ層である。この中で、出土土器の大半は遺物包含層第Ⅱ・第Ⅲ層中からのものである。出土土器の種類・器種・図示した個体数については第2表に示したとおりである。特に第Ⅲ層出土の土器の量は最も多い。土師器・須恵器・赤焼土器・灰釉・緑釉陶器といった種類の中で、須恵器の量は最も多く、出土土器の主体を占める。

器種についてみると、坏の個体数が多く、しかも須恵器坏の個体数が多いことは特記すべきことである。これらの土器の内容について概観すると、土師器坏ではロクロ使用のものが多く中に若干、ロクロ不使用のものも存在する。ロクロ使用のものはいずれも内面はヘラミガキ・黒色処理されているが、形態的、また底部の状況に違いがみられる。須恵器坏は、種々の形態的な差がみられ、また、底部の切り離しではヘラ切りによるものが主流を占めている。土師器ではその他、高台付坏・高坏・盤・蓋・耳皿・甕の器種があるが、個体数は少ない。また、須恵器でも高台付坏・高坏・蓋・壺・甕の器種があり、特に甕の破片が他の器種と較べて多く出土したが、接合できるものは少なく、個体数は不明である。赤焼土器の出土は少なく、形態・底部の状況は、土師器坏・須恵器坏に類似している。灰釉・緑釉陶器はいずれも小破片で全体の形状は知り得ない。以上が、土器の種類、器種の構成である。なお、土器の特徴については第Ⅶ章で再度、さらに述べる。

第２表　堆積土出土土器個体数

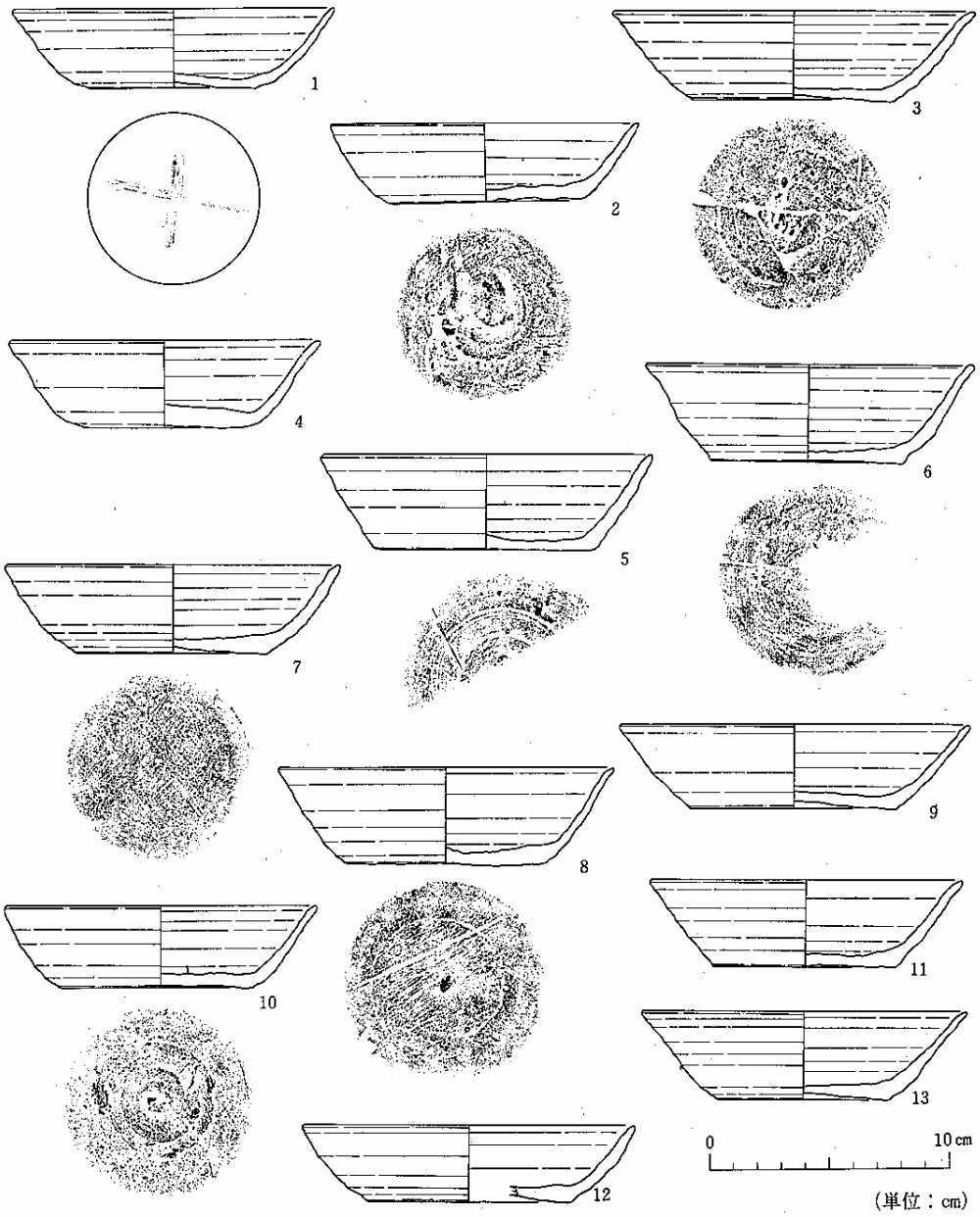
種類／器種／層	土師器							須恵器						赤焼土器	灰釉陶器	緑釉陶器
	坏	高台付	高坏	盤	蓋	耳皿	甕	坏	高台付	高坏	蓋	壺	甕			
表土	7	1					1	11	1		1	2	4	1		1
第Ⅱ層	13	1	1	1		1	1	40	1		4	3	3	2		
第Ⅲ層	31	2		1	2	1	5	114	16	2	26	7	11	1		1
整地層	1							2			1				1	
第Ⅴ層	3								1	2						



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器坏	F—12	1層	口縁・体部ヘラケズリ、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横位）、黒色	½	AⅡ	13.2	4.1	7.4	Ⅰ—1	
2	〃 〃	H—11	〃	口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横、斜位）黒色	¼	BⅠ	15.9	6.2		Ⅰ—3	
3	〃 〃	第1トレンチ	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ（横位）、底部ヘラミガキ（放射）黒色	½	BⅢ	13.6	4.7	6.0	Ⅰ—2	
4	〃 〃	O—10	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部、回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ（横位）、底部ヘラミガキ（放射状）黒色	½	BⅢ	15.0	4.2	5.0	Ⅰ—6	
5	〃 〃	F—12	〃	口縁・体部ロクロナデ	口縁～体部ヘラミガキ（横位）、底部ヘラミガキ（放射状）黒色	½					Ⅰ—7	
6	〃 〃	K—10	1層	体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、（横、斜位）、黒色	¼					Ⅰ—5	
7	須恵器坏	不明	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	A	12.5	4.0	7.2	Ⅹ—4	
8	〃 〃	O—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	A	13.0	4.4	7.0	Ⅰ—25	
9	〃 〃	不明	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	A	12.0	4.3	7.5	Ⅹ—2	
10	？ ？	C—7	1層	体部、ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	一部	A				Ⅰ—35	
11	土師器坏	不明	不明	ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色	一部					Ⅹ—	底部に墨書あり、不明

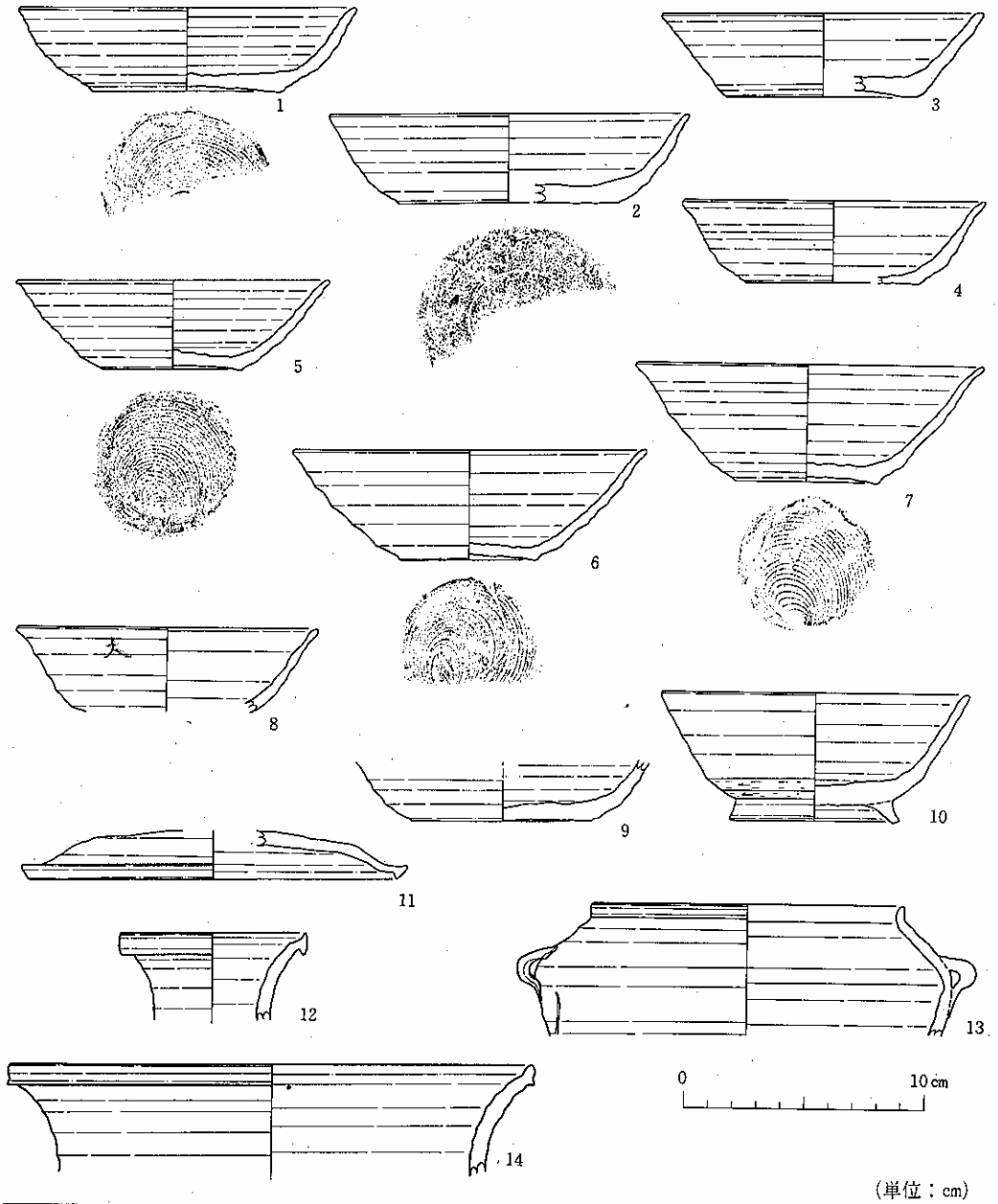
第32図　Ⅰ層（表土）出土土器1



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器 坏	O—7	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	13.3	3.2	7.0	I—20	「×」の墨書
2	〃 〃	不明	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	12.7	3.3	7.8	X—1	
3	〃 〃	O—7	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	15.0	3.7	8.4	I—17	
4	〃 〃	C—8	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¼	C	13.0	3.7	7.8	I—9	
5	〃 〃	D—7	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	4.0	8.8	I—15	
6	〃 〃	N—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.8	4.2	4.2	I—10	
7	〃 〃	O—14	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.7	8.0	I—18	
8	〃 〃	〃	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	14.0	4.0	8.4	I—21	
9	赤焼土器 〃	K—10	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部不明	ロクロナデ、底部中央部に黒色部分あり	½		14.6	3.5	8.6	I—34	
10	須恵器 〃	不明	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.0	3.4	8.0	I—22	
11	〃 〃	O—12	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.0	3.6	7.5	I—27	
12	〃 〃	K—14	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	14.0	3.2	8.4	I—14	
13	〃 〃	O—10	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¼	C	13.6	3.7	7.2	I—24	

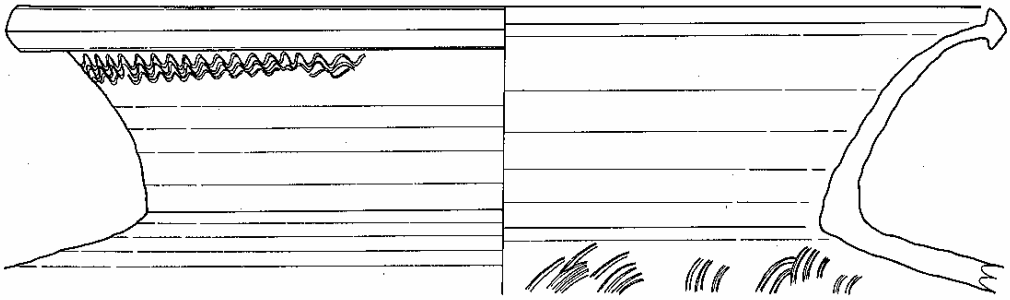
第33図　I層（表土）出土土器2

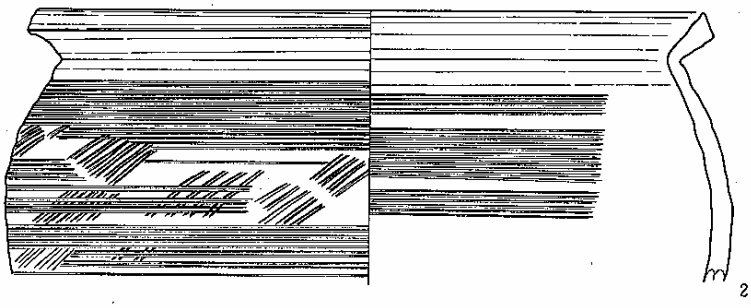


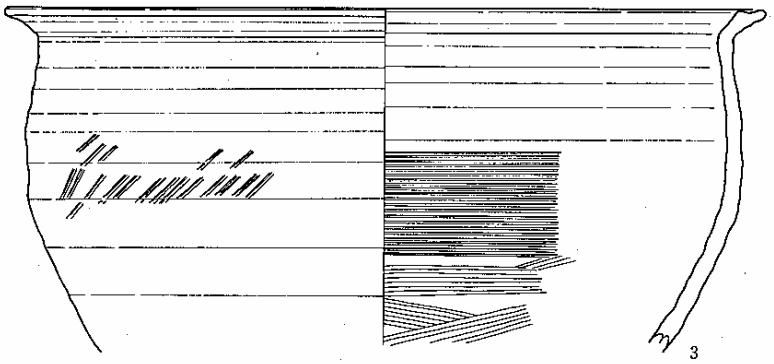
(単位：cm)

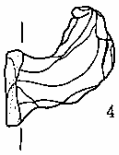
No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	D—6	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.5	8.0	I—13	
2	赤焼土器〃	J—13	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½		15.0	3.7	9.2	I—16	
3	須恵器〃	O—6	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼		13.4	3.5	8.0	I—23	
4	〃 〃	K—12	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼		12.6	3.4	7.2	I—26	
5	〃 〃	E—11	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	⅔	D	13.0	3.7	5.8	I—12	
6	〃 〃	O—10	1層	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	D	14.8	4.6	5.8	I—19	
7	〃 〃	O—7	不明	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	D	14.5	3.9	6.0	I—11	
8	〃 〃	O—10	〃	口縁・体部ロクロナデ	ロクロナデ	一部					I—29	体部に「大」の墨書あり
9	〃 〃	O—12	不明	体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	〃	C				I—28	体部に「〇」の墨書あり
10	〃 高台付坏	不明	不明	口縁・体部ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	⅔					X—3	
11	〃 甕	J—13	1層	口縁・天井部ロクロナデ	ロクロナデ研磨、	一部					I—32	転用硯
12	〃 長頸壺	C—10	〃	口縁・頸部ロクロナデ	ロクロナデ	〃					I—39	
13	〃 短頸壺	G—3	不明	口縁・体部ロクロナデ、体部外面に刻線文	ロクロナデ	〃					I—43	把手付
14	〃 甕	O—13	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃					I—44	

第34図　Ⅰ層（表土）出土土器3





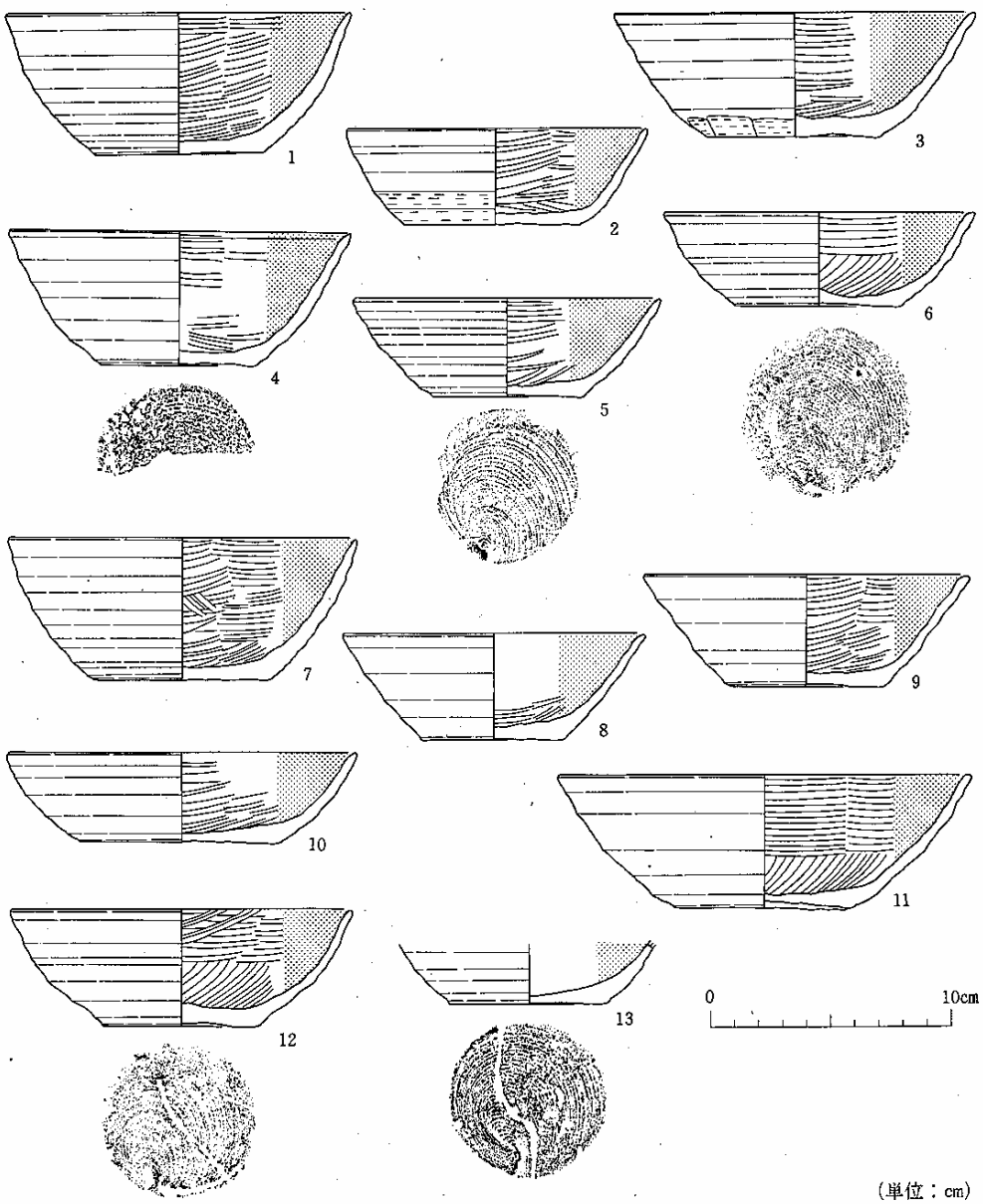




（単位：cm）

No	種　類	地区　層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	
1	須恵器　甕	O—13　不明	口縁～肩部ロクロナデ、頸部波状文（3本単位）	ロクロナデ、体部、青海波状文	一部	A				I—42	
2	〃　〃	O—12　〃	口縁～体部ロクロナデ、体部平行タタキ、回転刷毛目	ロクロナデ、体部回転刷毛目	〃	B				I—41	
3	〃　〃	M—8，1層	口縁・体部ロクロナデ、体部平行タタキ	体部回転刷毛目、ナデ	〃	B				I—37	
4	〃　把手	O—7　不明	指によるおさえ痕、ケズリ		〃						
5	緑釉陶器皿	O—9　〃	体部ロクロナデ	ロクロナデ	〃					I—45	

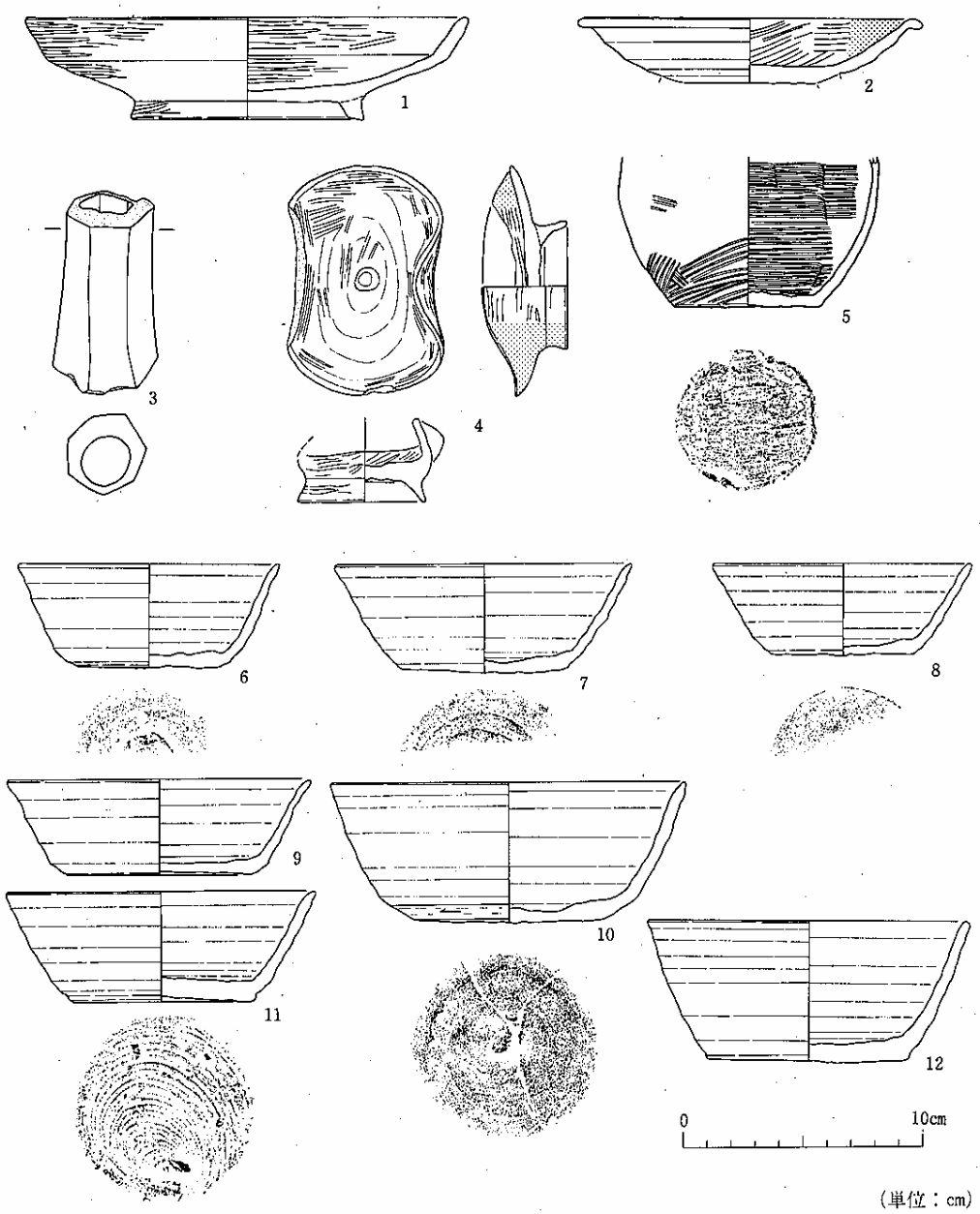
第35図　I層（表土）出土土器4



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器坏	D—14	2層	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	14.4	5.9	7.2	Ⅱ—6	
2	〃 〃	C—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	12.6	4.0	7.2	Ⅱ—4	
3	〃 〃	C—13	〃	口縁・体部ロクロナデ、体部～底部手持ちヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	15.0	5.2	7.2	Ⅱ—11	
4	〃 〃	C—9	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅠ	14.3	5.6	6.5	Ⅱ—85	
5	〃 〃	C—3	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅠ	12.8	4.1	6.4	Ⅱ—3	
6	〃 〃	C—13	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ（横）底部ヘラミガキ（放射）黒色	½	BⅠ	13.0	3.9	7.0	Ⅱ—7	
7	〃 〃	C—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	14.6	5.9	7.4	Ⅱ—2	
8	〃 〃	C—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り？	ヘラミガキ（方向不明）黒色	½	BⅠ	12.6	4.4	6.0	Ⅱ—10	
9	〃 〃	C—9	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅠ	13.6	4.7	6.4	Ⅱ—9	
10	〃 〃	D—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅡ	14.6	3.7	8.4	Ⅱ—8	
11	〃 〃	E—10	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ（横）底部ヘラミガキ（放射）黒色	½	BⅢ	17.2	5.6	7.2	Ⅱ—5	
12	〃 〃	C—10	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ（横・斜）底部ヘラミガキ（放射）黒色	¼	BⅢ	14.4	4.9	6.4	Ⅱ—1	
13	〃 〃	C—10	〃	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ヘラミガキ（方向不明）黒色	一部				6.6	Ⅱ—12	

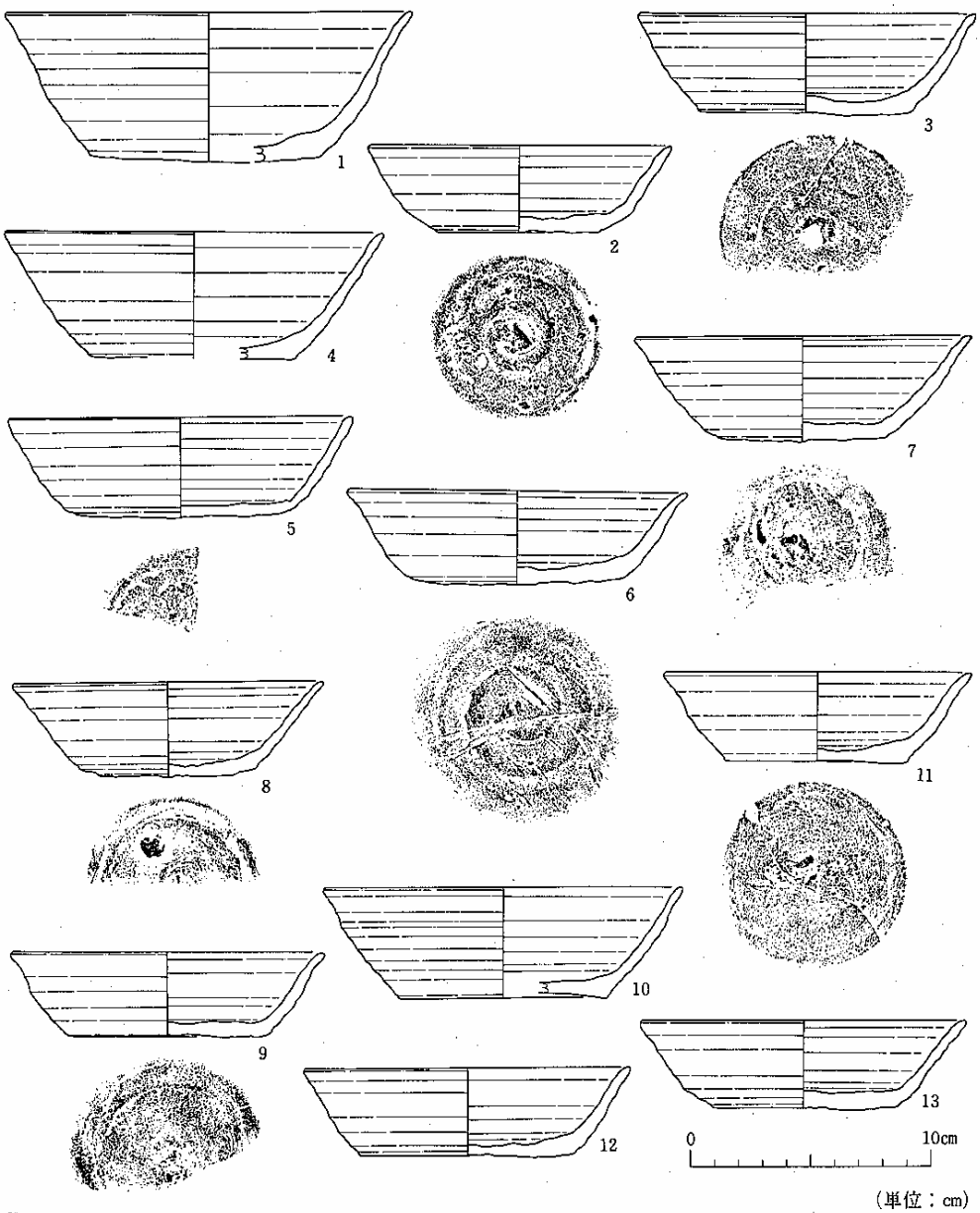
第36図　第Ⅱ層（遺物包含層）出土土器1



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器 鍋	C—9	Ⅱ層	口縁～底部ロクロナデ→ヘラミガキ	口縁～底部ロクロナデ ヘラミガキ	½		18.5			Ⅱ—16	
2	〃 高台付坏	D—14	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部、回転ケズリ	口縁～体部ヘラミガキ(剥)	¾		14.4			Ⅱ—15	
3	〃 高 坏	F—14	〃	ケズリ	ケズリ	一部					Ⅱ—80	
4	〃 耳 皿	F—10	〃	ヘラミガキ・黒色	ヘラミガキ・黒色	¾					Ⅱ—78	
5	〃 甕	C—13	〃	刷毛目 底部擬状圧痕	刷毛目	一部					Ⅱ—68	
6	須恵器 坏	D—10	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	11.0	4.3	6.0	Ⅱ—24	底部「×」のヘラ書き
7	〃 〃	E—10	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	12.5	4.5	7.0	Ⅱ—53	
8	〃 〃	E—10	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	A	10.9	3.8	6.0	Ⅱ—43	
9	〃 〃	D—11	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	12.8	4.0	7.8	Ⅱ—44	
10	〃 〃	D—11	〃	口縁～体部ロクロナデ、回転ケズリ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¾	B	14.0	5.9	8.0	Ⅱ—23	
11	〃 〃	C—11	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	¾	B	13.0	4.6	7.8	Ⅱ—62	
12	〃 〃	E—13	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	13.6	5.7	8.4	Ⅱ—39	

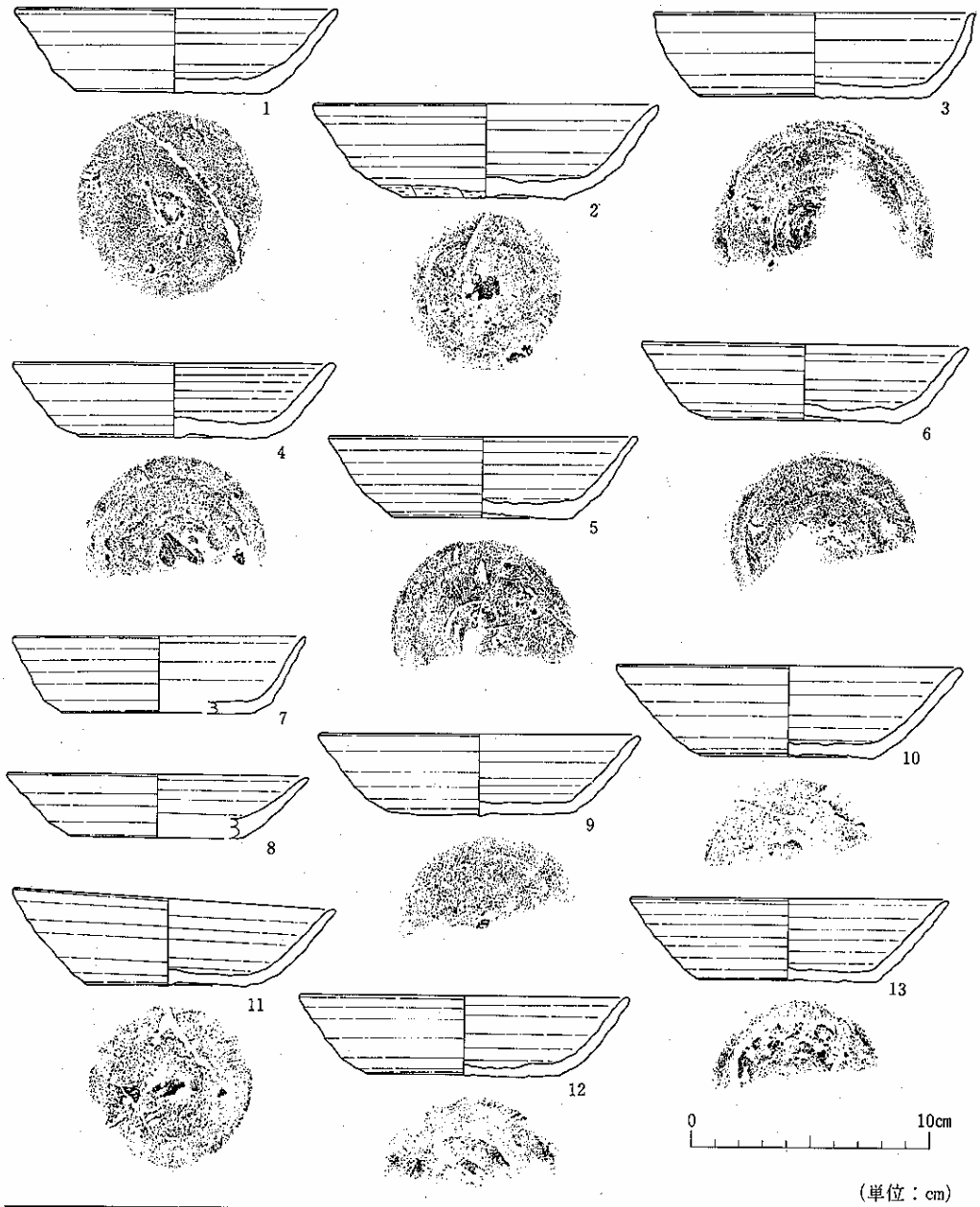
第37図　第Ⅱ層出土土器 2



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	C—11	Ⅱ層	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	17.0	6.2	9.6	Ⅱ—34	
2	〃	〃	E—10 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	12.8	3.6	7.0	Ⅱ—18	
3	〃	〃	C—11 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	B	14.0	4.1	8.9	Ⅱ—20	
4	〃	〃	C—11 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り？	口縁～底部ロクロナデ	¼		15.8			Ⅱ—54	
5	〃	〃	C—13 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	14.4	4.2	8.7	Ⅱ—46	
6	〃	〃	E—10 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	14.2	3.8	9.0	Ⅱ—22	
7	〃	〃	E—12 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	B	14.0	4.4	7.0	Ⅱ—64	
8	〃	〃	C—10 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.0	3.9	7.2	Ⅱ—45	
9	〃	〃	C—12 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.0	3.5	8.0	Ⅱ—27	
10	〃	〃	不—明 〃	口縁～体部、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		15.0	4.6		Ⅱ—50	
11	〃	〃	E—21 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	12.8	3.7	7.6	Ⅱ—21	
12	〃	〃	C—13 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.6	3.6	9.0	Ⅱ—35	
13	〃	〃	C—11 〃	口縁～体部、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.6	3.6	7.7	Ⅱ—17	

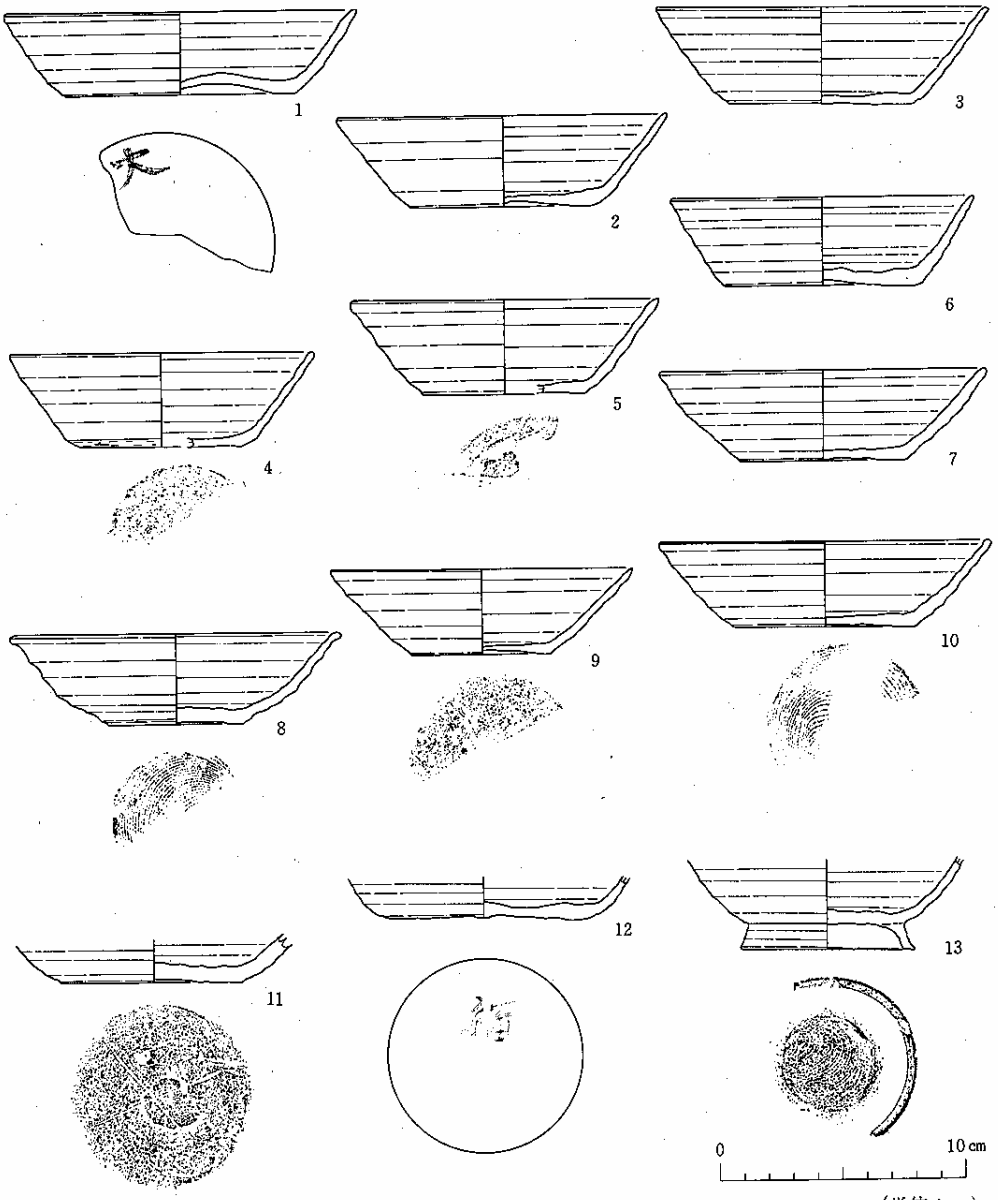
第38図　第Ⅱ層出土土器 3



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器杯	E—13	2層	口縁・体部ロクロナデ、底部、手持ちヘラケズリ、ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.5	3.5	8.4	Ⅱ—19	
2	赤焼土器〃	C—11	〃	口縁・体部ロクロナデ、手持ちヘラケズリ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔		14.5	3.9	6.8	Ⅱ—63	
3	須恵器〃	C—10	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.5	9.8	Ⅱ—30	
4	〃	〃	I—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.1	8.0	Ⅱ—51	
5	〃	〃	E—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.0	3.4	7.6	Ⅱ—31	
6	〃	〃	E—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	3.2	8.3	Ⅱ—26	
7	〃	〃	D—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	12.4	3.2		Ⅱ—40	
8	〃	〃	E—10	〃 口縁・体部ロクロナデ	ロクロナデ	¼	C	12.8			Ⅱ—52	
9	〃	〃	D—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.4	8.0	Ⅱ—36	
10	〃	〃	C—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.6	3.3	7.4	Ⅱ—32	
11	〃	〃	D—14	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.7	3.5	6.8	Ⅱ—61	底部に「×」のヘラ書き
12	〃	〃	E—9	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.3	8.2	Ⅱ—29	
13	〃	〃	D—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.4	3.4	7.7	Ⅱ—33	

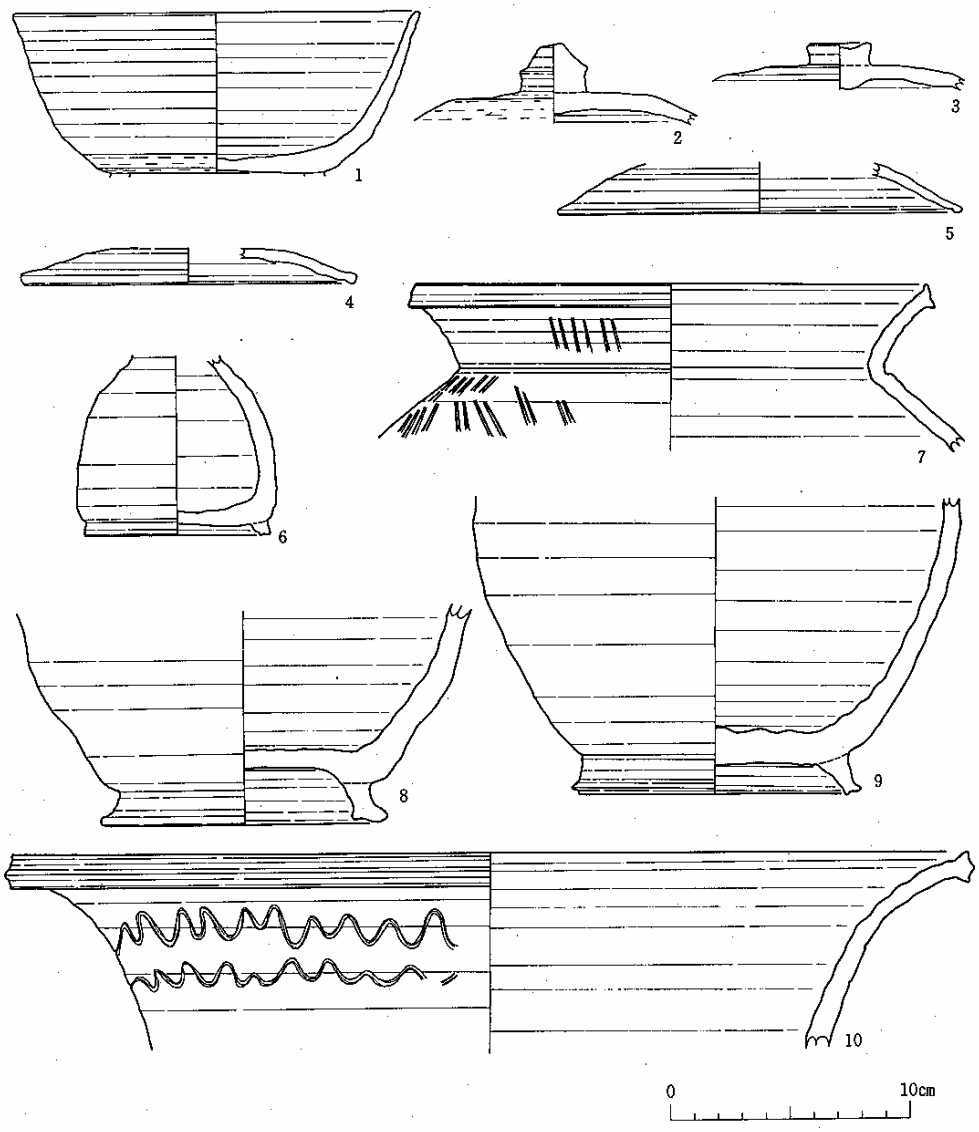
第39図　第Ⅱ層出土土器 4



(単位：cm)

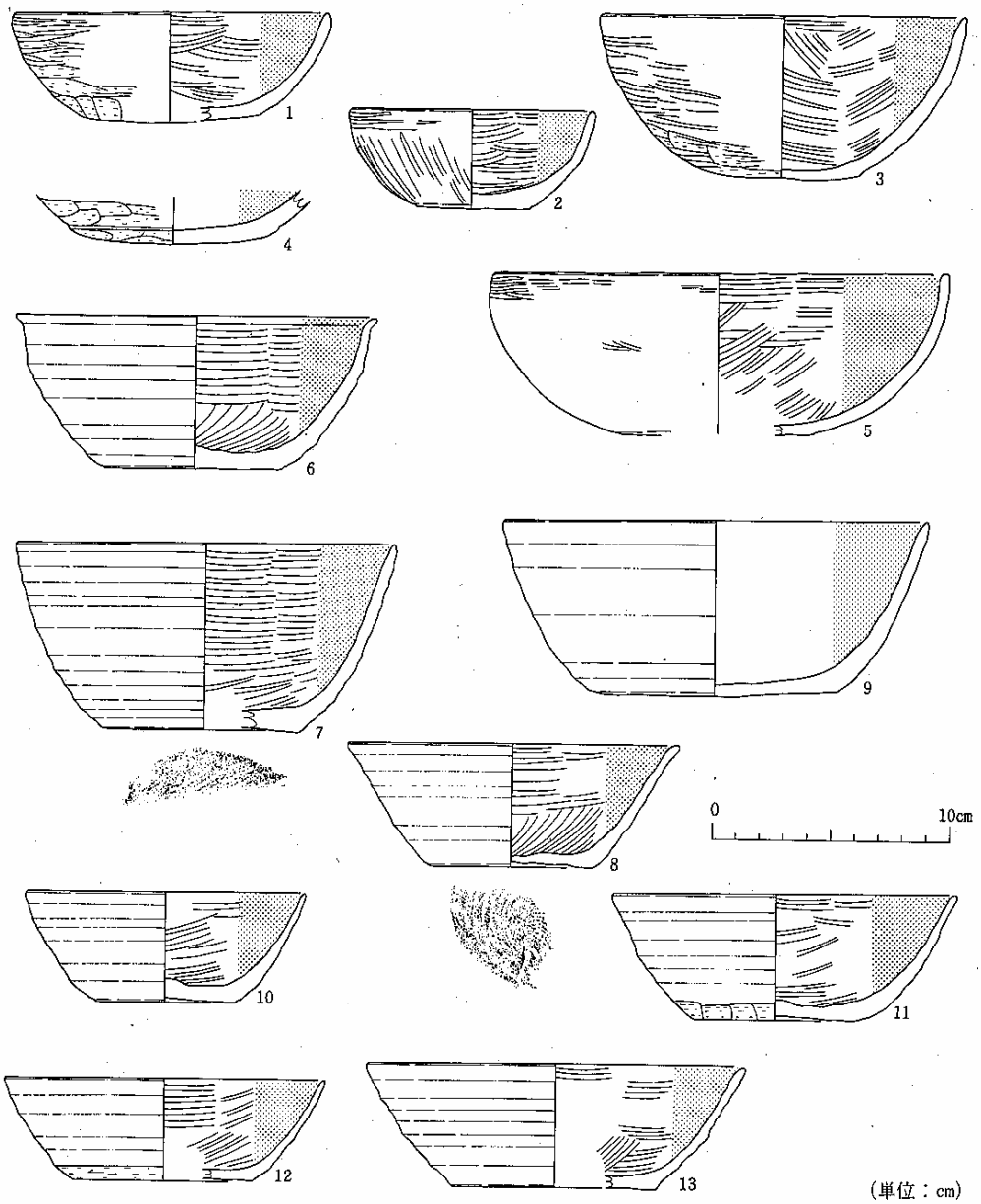
No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器 坏	C—11	II層	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	14.4	3.4	9.4	II—38	底部に「大」墨書あり
2	赤焼土器 〃	E—14	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.5	3.7	7.6	II—60	
3	須恵器 〃	C—13	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.6	4.0	7.5	II—37	
4	〃 〃	C—13	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転ケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	12.5	3.8	6.6	II—84	
5	〃 〃	C—11	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り.	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	12.6	3.8	6.5	II—42	
6	〃 〃	D—11	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	12.4	3.6	8.0	II—28	
7	〃 〃	O—7	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	13.4	3.7	6.9	II—25	
8	〃 〃	E—10	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	D	13.6	3.7	5.6	II—41	
9	〃 〃	D—14	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	D	12.3	3.4	5.6	II—83	
10	〃 〃	D—14	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	⅔	C	13.5	3.5	7.5	II—82	
11	〃 〃	D—10	〃	底部、ヘラ切り	ロクロナデ	一部					II—49	底部「×」のヘラ書き
12	〃 〃	C—11	〃	底部、ヘラ切り	ロクロナデ	〃					II—48	底部「福」の墨書
13	〃 高台付坏	C—11	〃	体部ロクロナデ、底部回転糸切り、ナデ	ロクロナデ	〃					II—55	

第40図　第II層出土土器5



第41図　第Ⅱ層出土土器6

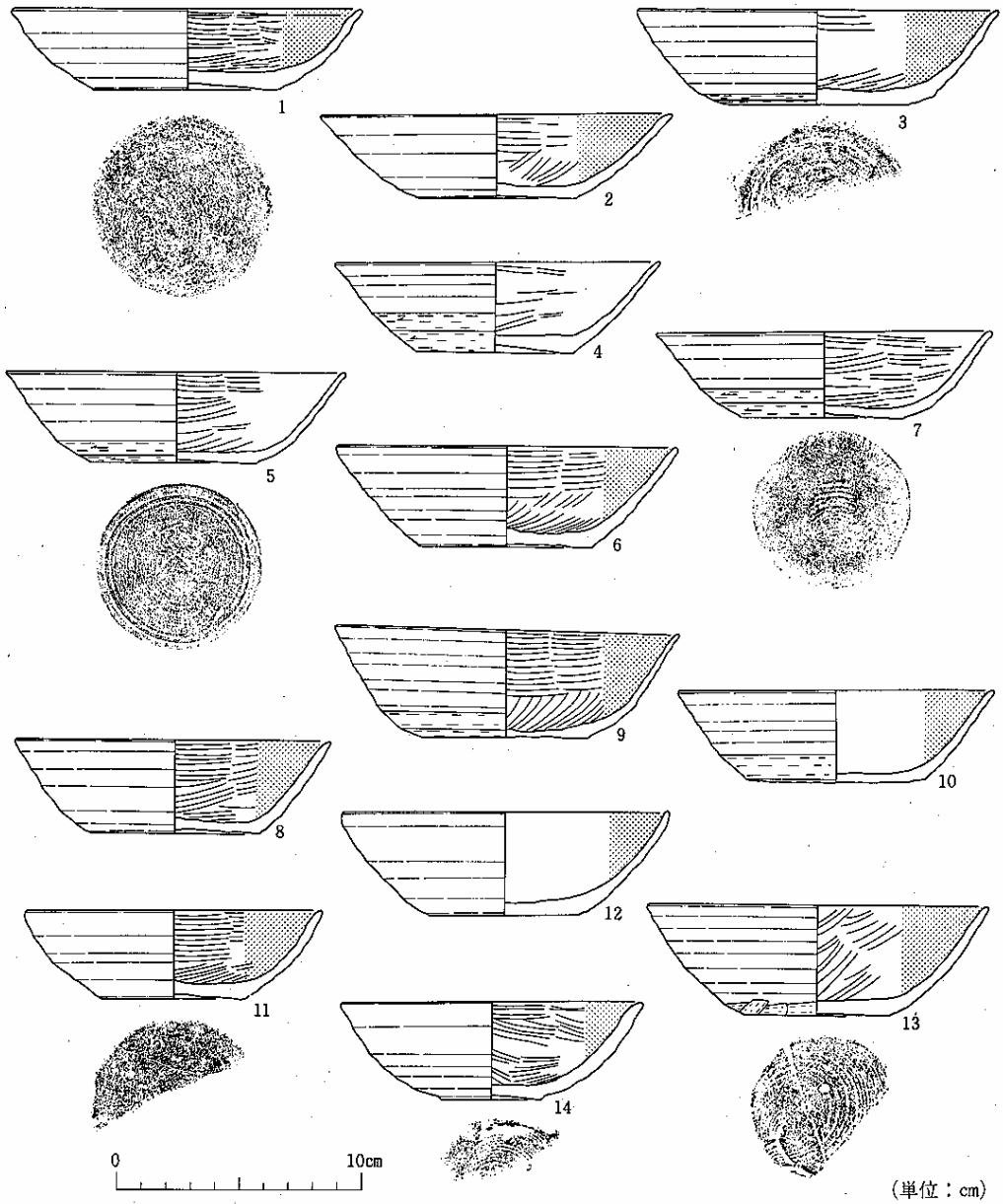
No	種　類	地区　層	外　面	内　面	残存	登録No
1	須恵器高台付坏	D−11Ⅱ層	口縁〜体部ロクロナデ、回転ケズリ	口縁〜底部ロクロナデ	⅔	Ⅱ−56
2	〃　蓋	C−11 〃	ツマミ部、ロクロナデ、天井部回転ケズリ	ロクロナデ	一部	Ⅱ−57
3	〃　〃	D−10 〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	Ⅱ−58
4	〃　〃	C−10 〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	Ⅱ−81
5	〃　〃	D−12 〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	Ⅱ−59
6	〃　壺	D−10 〃	体部、ロクロナデ、底部、不明	ロクロナデ 墨痕あり	一部	Ⅱ−73
7	〃　甕	E−12 〃	頸部〜体部平行タタキ目	ロクロナデ	〃	Ⅱ−72
8	〃　壺	C−9 〃	体部ロクロナデ、底部不明	ロクロナデ	〃	Ⅱ−70
9	〃　〃	D−10 〃	体部ロクロナデ、底部不明	ロクロナデ	〃	Ⅱ−75
10	〃　甕	E−12 〃	頸部波状文（1本単位）	ロクロナデ	〃	Ⅱ−79
11	〃　〃	不　明 〃	口縁〜体部ロクロナデ、下端ケズリ	口縁〜体部ロクロナデ、ナデ（横方向）	〃	Ⅱ−66



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器坏	H—12	3層	口縁・体部ヘラケズリ、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	AⅡ	13.4	4.7	7.8	Ⅲ- 16	
2	〃	〃	K—10	〃 口縁ヘラミガキ(横位)、体部ヘラミガキ（縦位）	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	⅔	AⅡ	10.4	4.2	4.8	Ⅲ- 1	
3	〃	〃	J—14	〃 口縁・体部ヘラケズリ、ヘラミガキ、底部ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	AⅡ	15.5	6.9	6.0	Ⅲ- 6	
4	〃	〃	I—13	〃 体部～底部ヘラケズリ、段有り	ヘラミガキ・黒色	一部	AⅠ				Ⅲ-246	
5	〃	〃	I—9	〃 口縁・ヘラミガキ(横位)体部～底部不明	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	AⅡ	19.0			Ⅲ- 8	
6	〃	〃	N—9	〃 口縁・体部ロクロナデ・底部手持ちヘラケズリ	口縁～体部ヘラミガキ(横)底部（放射状)黒色	⅔	BⅠ	15.2	6.4	7.4	Ⅲ- 7	
7	〃	〃	M—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部静止糸切り	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅠ	16.0	7.9	8.2	Ⅲ- 9	
8	〃	〃	E—9	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～体部ヘラミガキ（横）底部(放射状)黒色	¼	BⅠ	14.0	5.2	7.0	Ⅲ- 30	
9	〃	〃	M—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部不明	口縁～底部ヘラミガキ(方向不明）黒色	⅓	BⅠ	18.0	7.4	10.4	Ⅲ- 10	
10	〃	〃	I—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部不明	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	½	BⅠ	11.8	4.6	5.8	Ⅲ- 14	
11	〃	〃	D—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部手持ちヘラケズリ、回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	14.6	5.3	6.6	Ⅲ- 42	
12	〃	〃	D—8	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部、回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	13.5	4.3		Ⅲ-247	
13	〃	〃	O—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ	口縁～底部（横・斜位）黒色	¼	BⅠ	16.0	5.2		Ⅲ- 26	

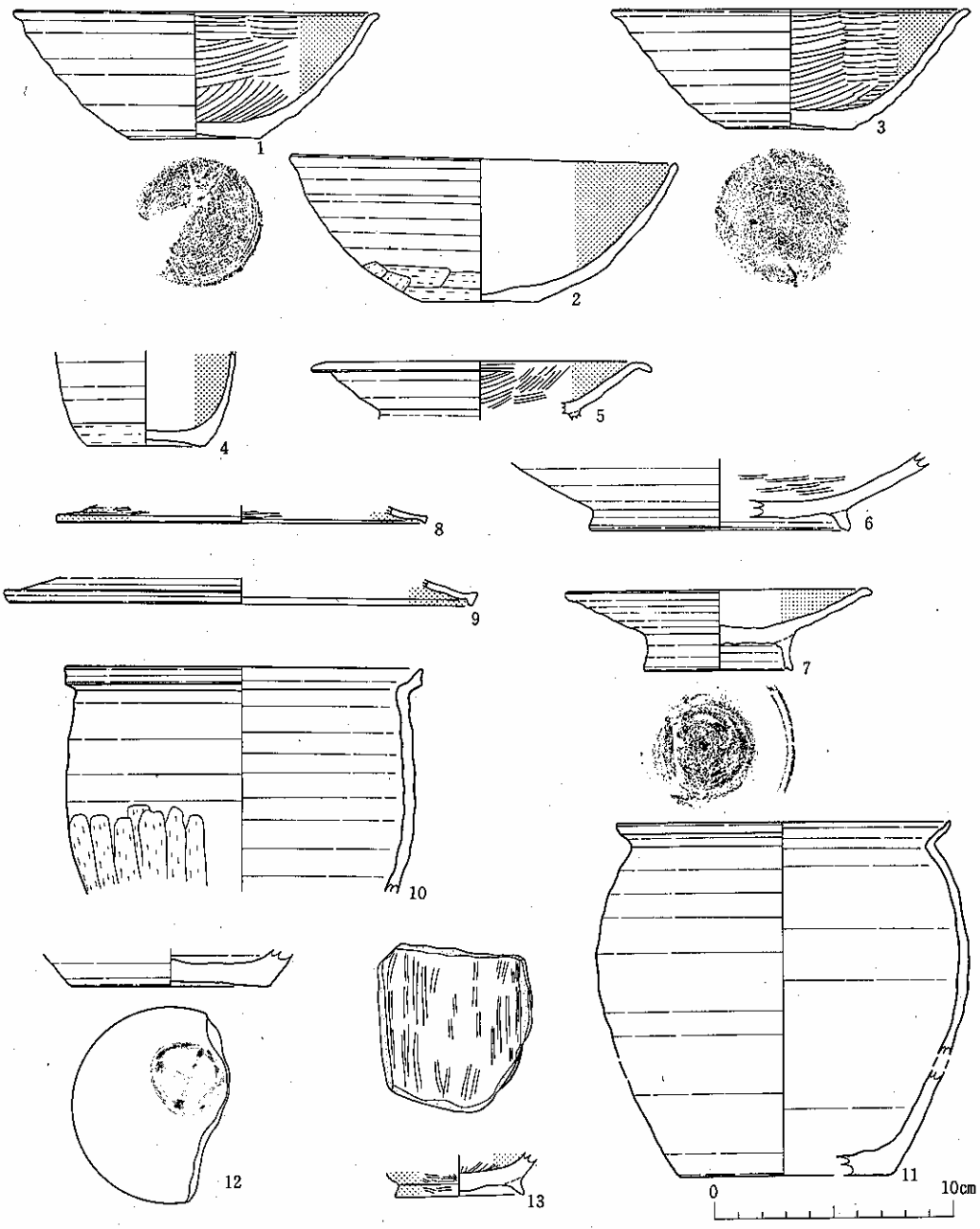
第42図　第Ⅲ層（遺物包含層）出土土器1



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器坏	F—11	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	¼	BⅡ	14.4	3.3	7.6	Ⅲ—20	
2	〃	〃	E—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部不明	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	¼	BⅡ	14.4	3.4	6.4	Ⅲ—27	
3	〃	〃	N—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	½	BⅡ	14.8	3.9	7.4	Ⅲ—8	
4	〃	〃	D—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)	¼	BⅡ	13.3	3.7	6.4	Ⅲ—40	墨色不明
5	〃	〃	D—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)	⅔	BⅡ	14.0	3.7	6.8	Ⅲ—38	〃
6	〃	〃	G—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ヘラケズリ	口縁・体部ヘラミガキ(横)底部ヘラミガキ（放射状）黒色	¼	BⅡ	14.0	4.1	7.0	Ⅲ—29	
7	〃	〃	D—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)	¼	BⅡ	13.8	3.5	6.5	Ⅲ—39	
8	〃	〃	D—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)	⅔	BⅡ	13.0	3.8	6.8	Ⅲ—41	
9	〃	〃	I—8	〃 口縁・体部ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部回転糸切り	口縁～体部ヘラミガキ(横)底部ヘラミガキ（放射状）黒色	¼	BⅡ	14.1	4.4	6.8	Ⅲ—2	
10	〃	〃	F—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、回転ヘラケズリ、底部不明	口縁～底部ヘラミガキ(方向不明)黒色	½	BⅡ	13.0	3.3	7.4	Ⅲ—13	
11	〃	〃	J—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	½	BⅢ	12.2	3.6	5.9	Ⅲ—15	
12	〃	〃	K—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部不明	不明、黒色	½	BⅡ	13.4	4.2	6.1	Ⅲ—12	器面の摩滅激しい
13	〃	〃	C—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ(斜位)黒色	¼	BⅢ	14.0	4.5	6.0	Ⅲ—11	
14	〃	〃	E—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	¼	BⅢ	12.4	4.0	4.2	Ⅲ—28	

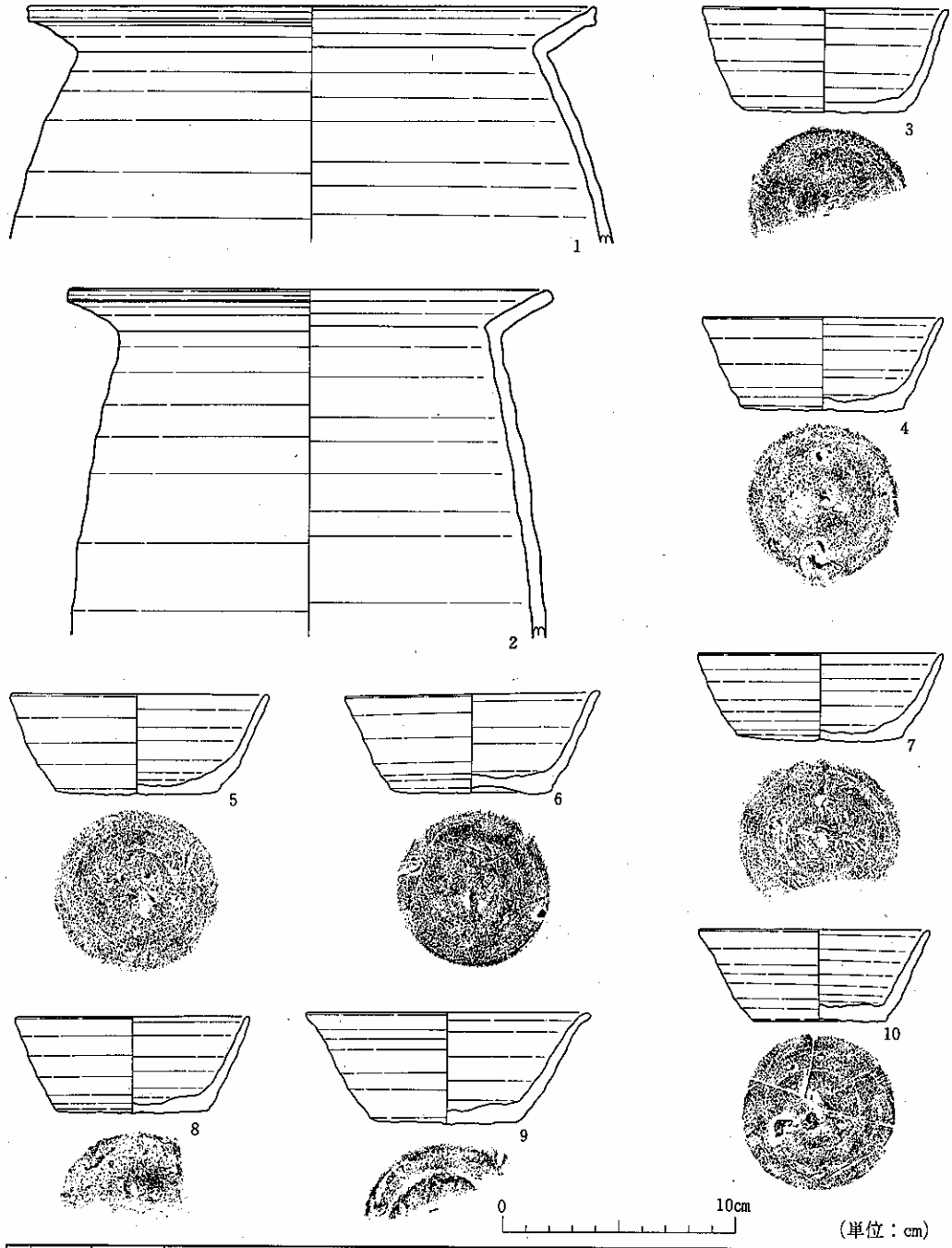
第43図　第Ⅲ層出土土器2



(単位：cm)

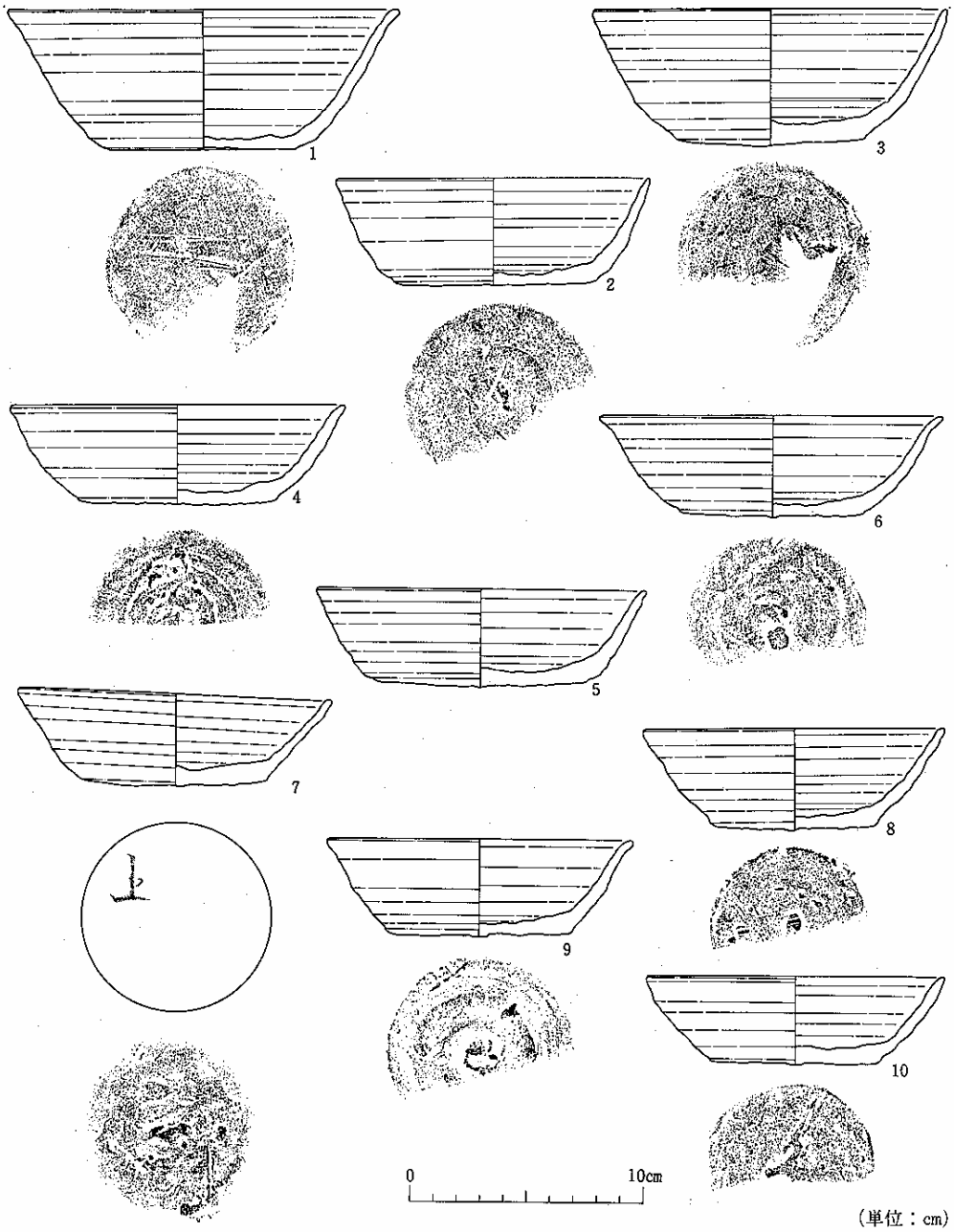
No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器 坏	L—14	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁・体部ヘラミガキ(横・斜位)底部(放射状)黒色	¼	BⅢ	15.3	5.3	5.6	Ⅲ- 3	
2	〃 〃	E—7	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ (方向不明)、黒色	¼	BⅢ	16.3	6.0	5.0	Ⅲ- 4	
3	〃 〃	L—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁~底部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	⅔	BⅢ	15.0	5.0	5.4	Ⅲ- 5	
4	〃 〃	H—11	〃	体部ログロナデ、底部回転ヘラケズリ	ヘラミガキ (方向不明)、黒色	一部					Ⅲ-245	
5	〃 高台付坏	G—13	〃	口縁・体部ロクロナデ	口縁・体部ヘラミガキ(横・斜位)黒色	¼		14.3			Ⅲ- 35	
6	〃 盤	D—9	〃	体部ロクロナデ、底部不明	ヘラミガキ	一部					Ⅲ-255	
7	〃 高台付坏	J—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁~底部ヘラミガキ(方向不明)黒色	⅔		13.0	3.4	6.3	Ⅲ- 32	
8	〃 蓋	F—8	〃	ロクロナデ、ヘラミガキ・黒色	ヘラミガキ・黒色	一部					Ⅲ-181	
9	〃 〃	E—9	〃	ロクロナデ	ヘラミガキ・黒色	一部					Ⅲ-182	
10	〃 甕	G—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	口縁・体部ロクロナデ	½	B	15.0			Ⅲ-213	
11	〃 〃	J—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部不明	口縁・体部ロクロナデ	⅔	B	14.0	15.0	9.0	Ⅲ-218	
12	〃 〃	J—8	〃	体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	一部					Ⅲ-216	底部に「⊗」の墨書
13	〃 耳皿	F—7	〃	ヘラミガキ (黒色)	ヘラミガキ (黒色)	一部						

第44図　第Ⅲ層出土土器3



No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器甕	G—103	層	ロクロナデ	ロクロナデ	一部	B				Ⅲ-215	
2	〃	〃 N—11	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ-214	
3	須恵器坏	N—12	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	A	10.6	4.5	7.0	Ⅲ—61	
4	〃	〃 N—12	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	A	10.4	3.5	7.0	Ⅲ—64	
5	〃	〃 N—12	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	A	11.2	4.3	7.0	Ⅲ—54	
6	〃	〃 O—9	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅓	A	11.0	4.2	7.0	Ⅲ—55	
7	〃	〃 O—12	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	A	10.6	3.7	7.2	Ⅲ—56	
8	〃	〃 L—8	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	A	10.2	4.1	6.6	Ⅲ-148	
9	〃	〃 N—12	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	A	12.2	4.8	6.5	Ⅲ-106	
10	〃	〃 L—8	〃	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	A	10.0	4.0	5.8	Ⅲ- 53	

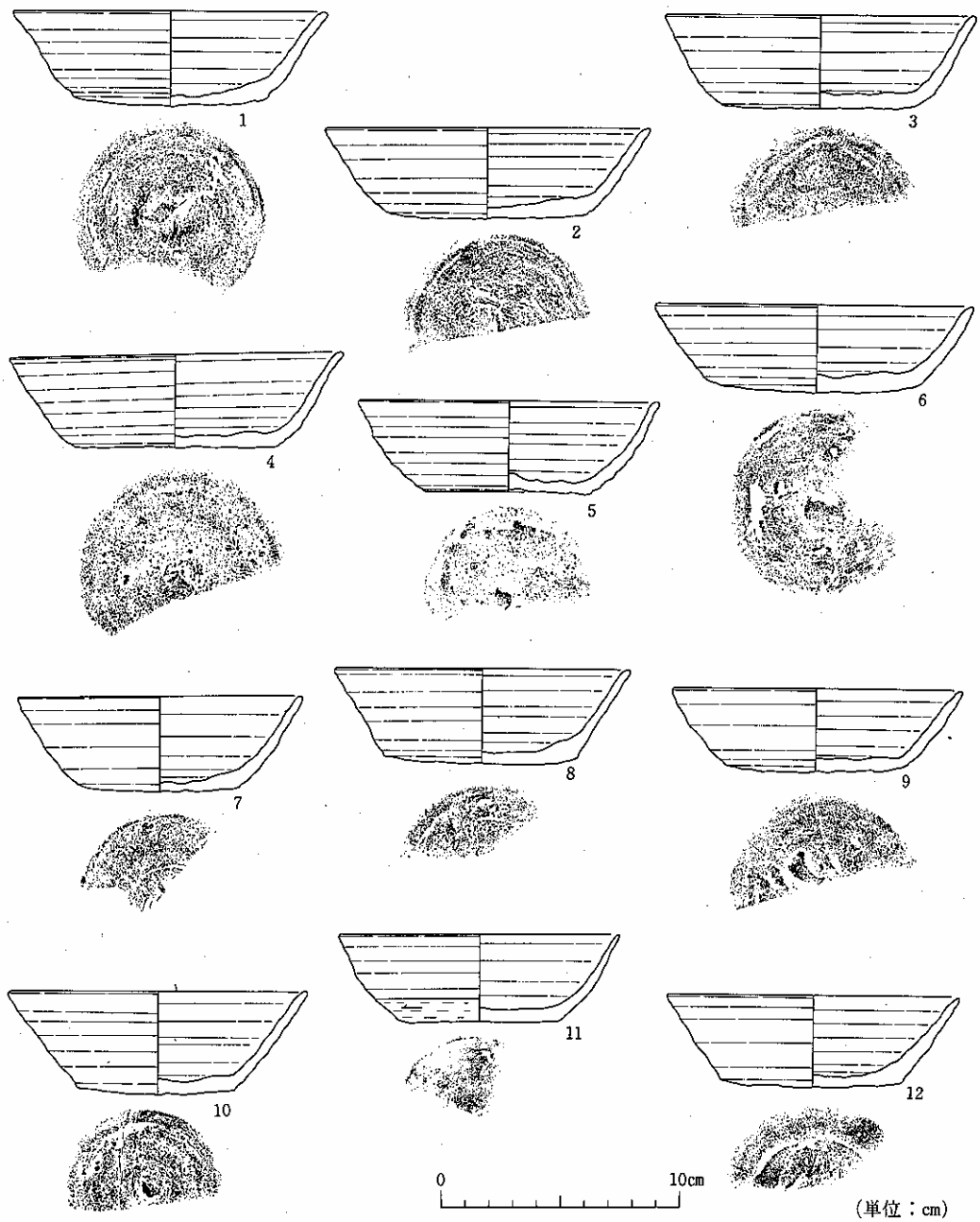
第45図　第Ⅲ層出土土器 4



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	H—12	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¾	B	16.8	6.0	8.0	Ⅲ- 58	
2	〃 〃	I—10	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	13.5	4.6	8.6	Ⅲ- 66	
3	〃 〃	G—13	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	½	B	15.2	5.9	8.0	Ⅲ- 59	
4	〃 〃	J—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	14.4	4.2	8.4	Ⅲ-113	
5	〃 〃	G—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	B	14.2	4.2	9.2	Ⅲ-123	
6	〃 〃	J—14	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	14.8	4.4	7.8	Ⅲ- 86	
7	〃 〃	O—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	13.5	4.0	8.0	Ⅲ- 45	底部に「k」の墨書
8	〃 〃	H—11	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	13.2	4.2	8.0	Ⅲ- 88	
9	〃 〃	I—11	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	13.0	4.4	7.0	Ⅲ-160	
10	〃 〃	H—12	〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	12.8	3.8	7.2	Ⅲ-125	

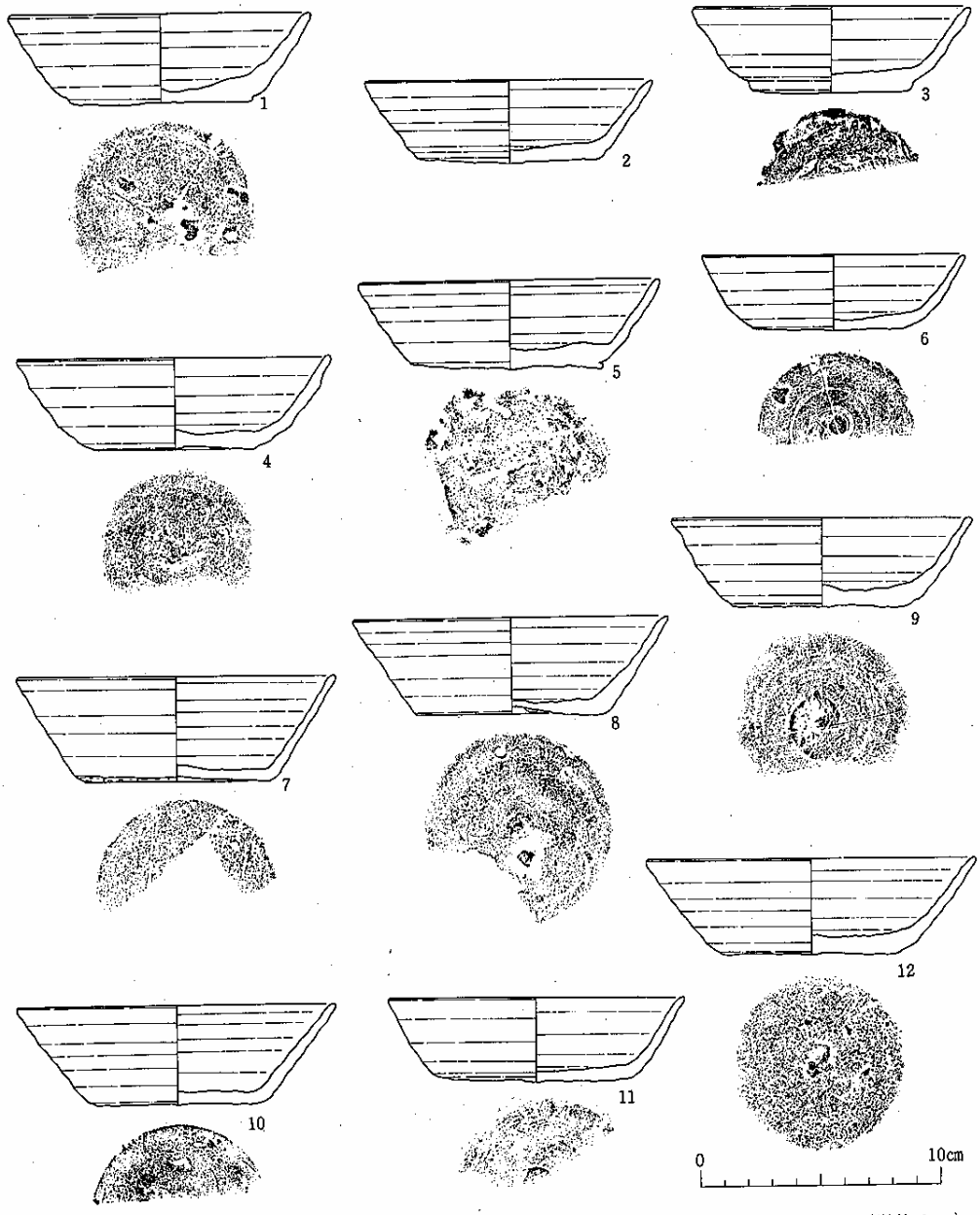
第46図　第Ⅲ層出土土器 5



(単位：cm)

No	種類	地区 層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	M—12 3層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	13.2	4.0	8.2	Ⅲ- 77	
2	〃 〃	I—10 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	13.6	3.8	8.0	Ⅲ-101	
3	〃 〃	N—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	13.0	3.9	8.0	Ⅲ-136	
4	〃 〃	I—14 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	14.0	3.9	8.6	Ⅲ- 63	
5	〃 〃	N—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	12.6	3.4	7.0	Ⅲ- 68	
6	〃 〃	M—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	B	13.3	3.7	8.6	Ⅲ- 73	
7	〃 〃	K—14 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.0	4.0	7.0	Ⅲ-142	
8	〃 〃	N—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.4	4.0	8.0	Ⅲ-150	
9	〃 〃	N—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	12.3	3.5	7.6	Ⅲ- 78	
10	〃 〃	D—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.6	4.4	6.6	Ⅲ-127	
11	〃 〃	K—11 〃	口縁・体部ロクロナデ、体部下方～底部、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	¼	B	11.8	3.6	6.8	Ⅲ-128	
12	〃 〃	O—13 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.3	3.8	7.5	Ⅲ-133	

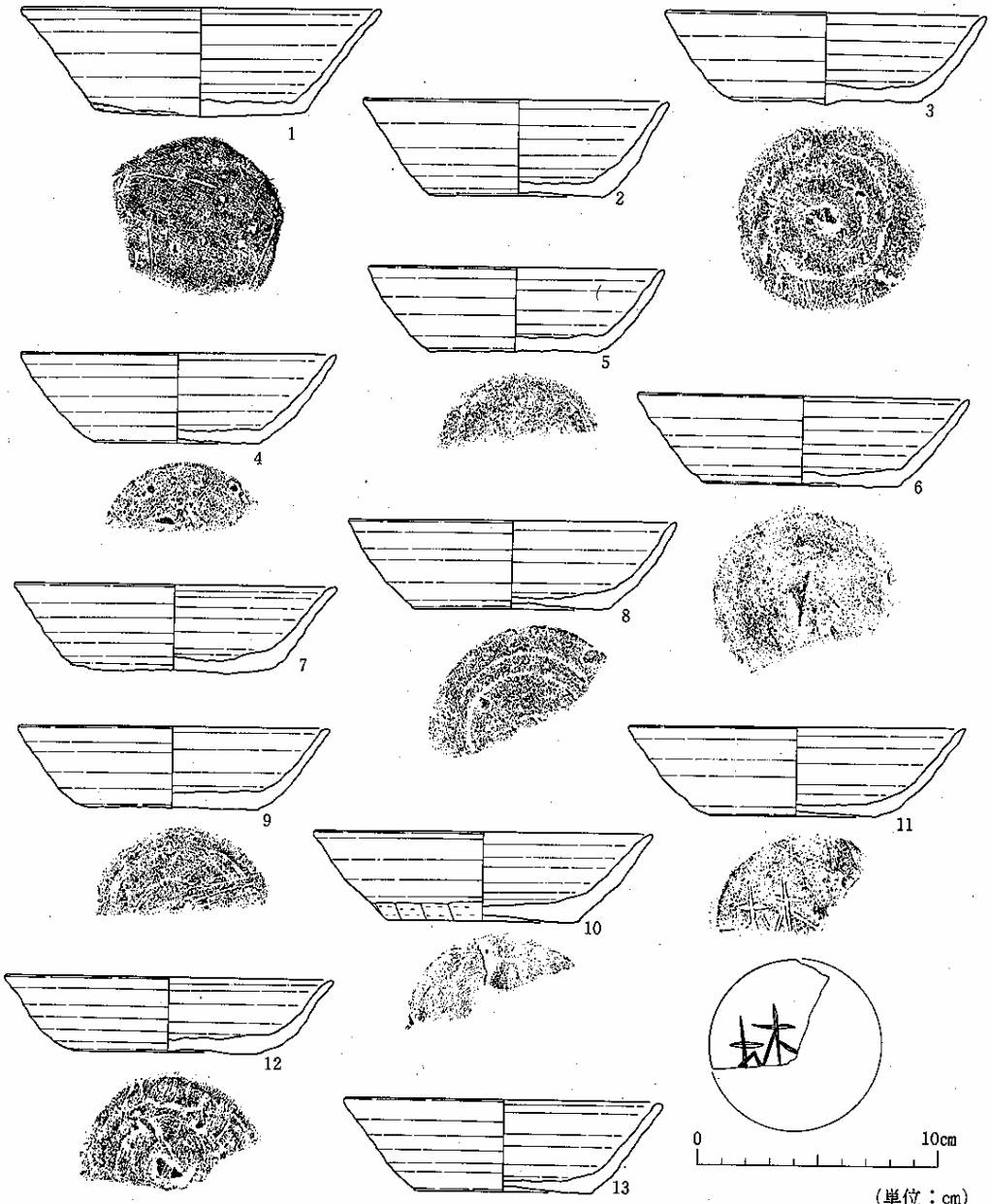
第47図　第Ⅲ層出土土器6



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器杯	D—12	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.6	3.5	7.6	Ⅲ- 71	
2	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.0	3.5	7.8	Ⅲ-139	
3	〃	〃	J—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	11.6	3.6	6.6	Ⅲ- 92	
4	〃	〃	I—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	13.2	3.8	6.6	Ⅲ- 96	
5	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	12.6	3.7	8.0	Ⅲ-141	
6	〃	〃	K—14	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	11.0	3.2	6.4	Ⅲ-248	
7	〃	〃	I—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	½	B	13.4	4.4	7.6	Ⅲ- 97	
8	〃	〃	J—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	B	13.2	4.0	8.0	Ⅲ- 52	
9	〃	〃	J—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	B	12.6	3.7	7.5	Ⅲ- 75	底部「メ」のヘラ書き
10	〃	〃	K—9	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B	13.4	4.1	7.4	Ⅲ-134	
11	〃	〃	K—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	12.4	3.5	8.3	Ⅲ- 98	
12	〃	〃	O—8	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	B	13.8	4.0	7.4	Ⅲ-108	

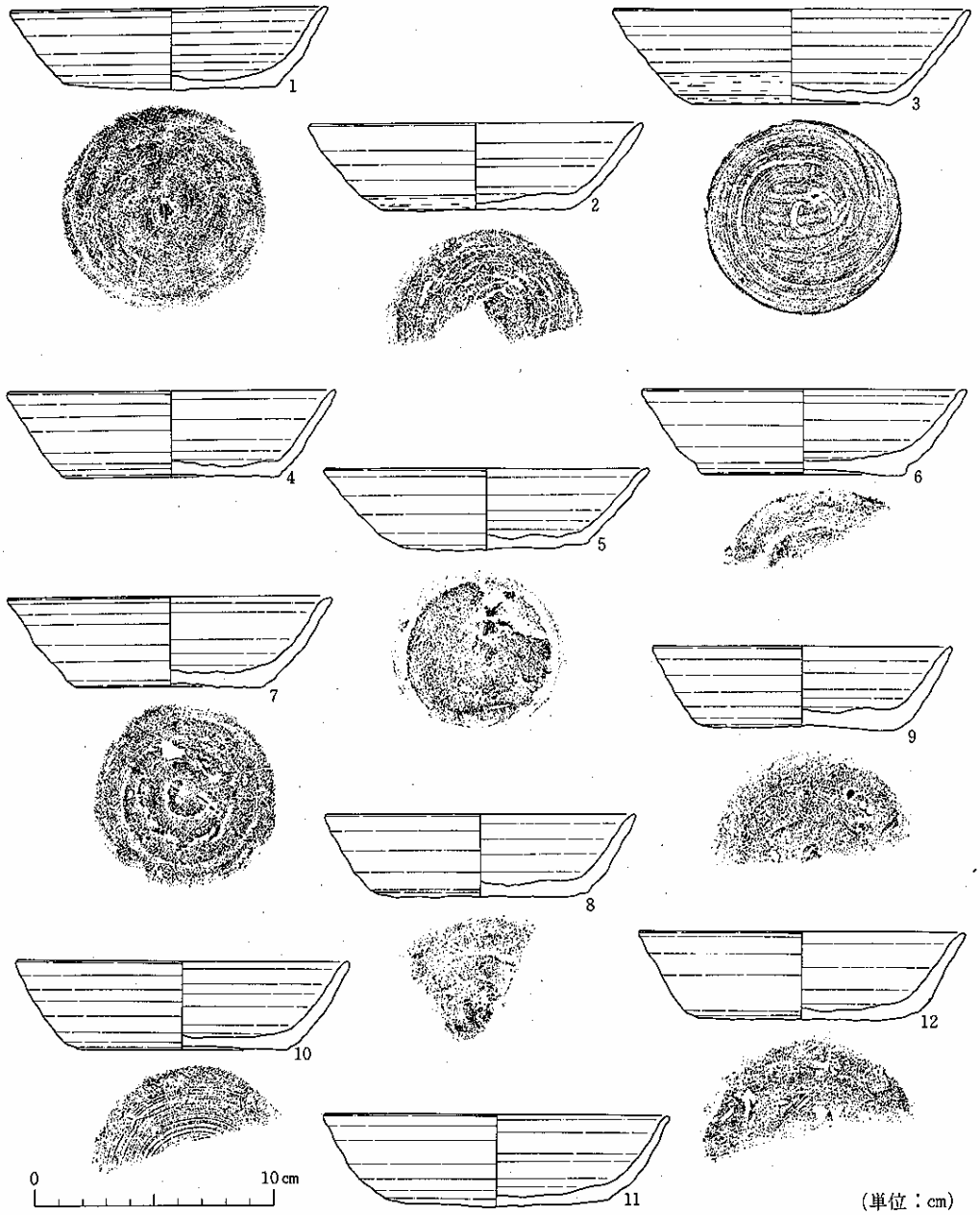
第48図　第Ⅲ層出土土器７



(単位：cm)

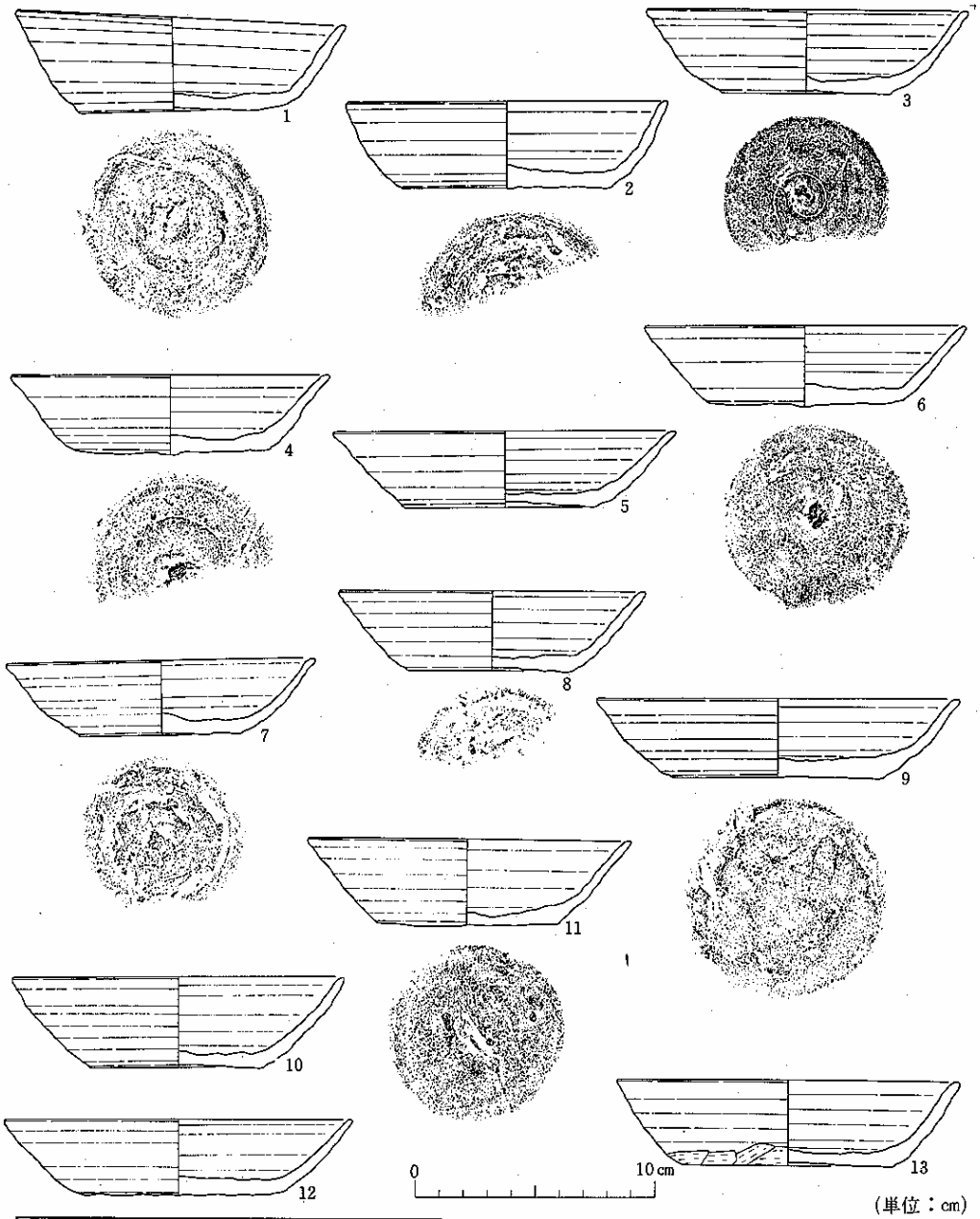
No	種類	地区 層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	E—8 3層	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¼	B	15.0	4.5	8.8	Ⅲ-122	
2	〃 〃	G—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	B	12.8	4.0	7.3	Ⅲ- 50	
3	〃 〃	M—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	13.4	3.8	8.0	Ⅲ-149	
4	〃 〃	F—10 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.0	4.0	6.8	Ⅲ-143	底部「メ」のヘラ書き
5	〃 〃	D—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	12.3	3.5	7.2	Ⅲ-251	
6	〃 〃	E—14 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	3.7	8.0	Ⅲ-121	
7	〃 〃	N—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.4	3.5	8.6	Ⅲ-100	
8	〃 〃	F—11 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.7	8.2	Ⅲ-120	
9	〃 〃	I—11 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.0	3.4	7.5	Ⅲ-129	
10	〃 〃	E—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、手持ちヘラケズリ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	C	14.2	3.7	8.0	Ⅲ-119	
11	〃 〃	C—10 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¼	C	14.0	3.7	7.0	Ⅲ-110	底部「林」のヘラ書き
12	〃 〃	J—13 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	3.1	7.8	Ⅲ-109	
13	〃 〃	O—9 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	¼	C	13.3	3.8	7.4	Ⅲ-130	

第49図　第Ⅲ層出土土器8



No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	N—12	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.3	3.4	9.0	Ⅲ- 46	
2	〃	〃	G—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.6	8.0	Ⅲ- 85	
3	〃	〃	J—14	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部回転ヘラケズリ、底部静止糸切り	ロクロナデ	½	C	15.6	4.0	8.3	Ⅲ-107	底部ヘラ書
4	〃	〃	K—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.8	3.6	9.0	Ⅲ-153	
5	〃	〃	H—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.4	7.4	Ⅲ-144	
6	〃	〃	F—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.6	3.6	8.6	Ⅲ-105	
7	〃	〃	J—14	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	13.6	3.8	7.8	Ⅲ- 48	
8	〃	〃	F—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	13.0	3.5	9.0	Ⅲ-104	
9	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	12.6	3.4	8.6	Ⅲ-103	
10	〃	〃	J—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.8	8.8	Ⅲ- 76	
11	〃	〃	O—7	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	14.6	3.9	9.6	Ⅲ-158	
12	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	3.7	8.8	Ⅲ-241	

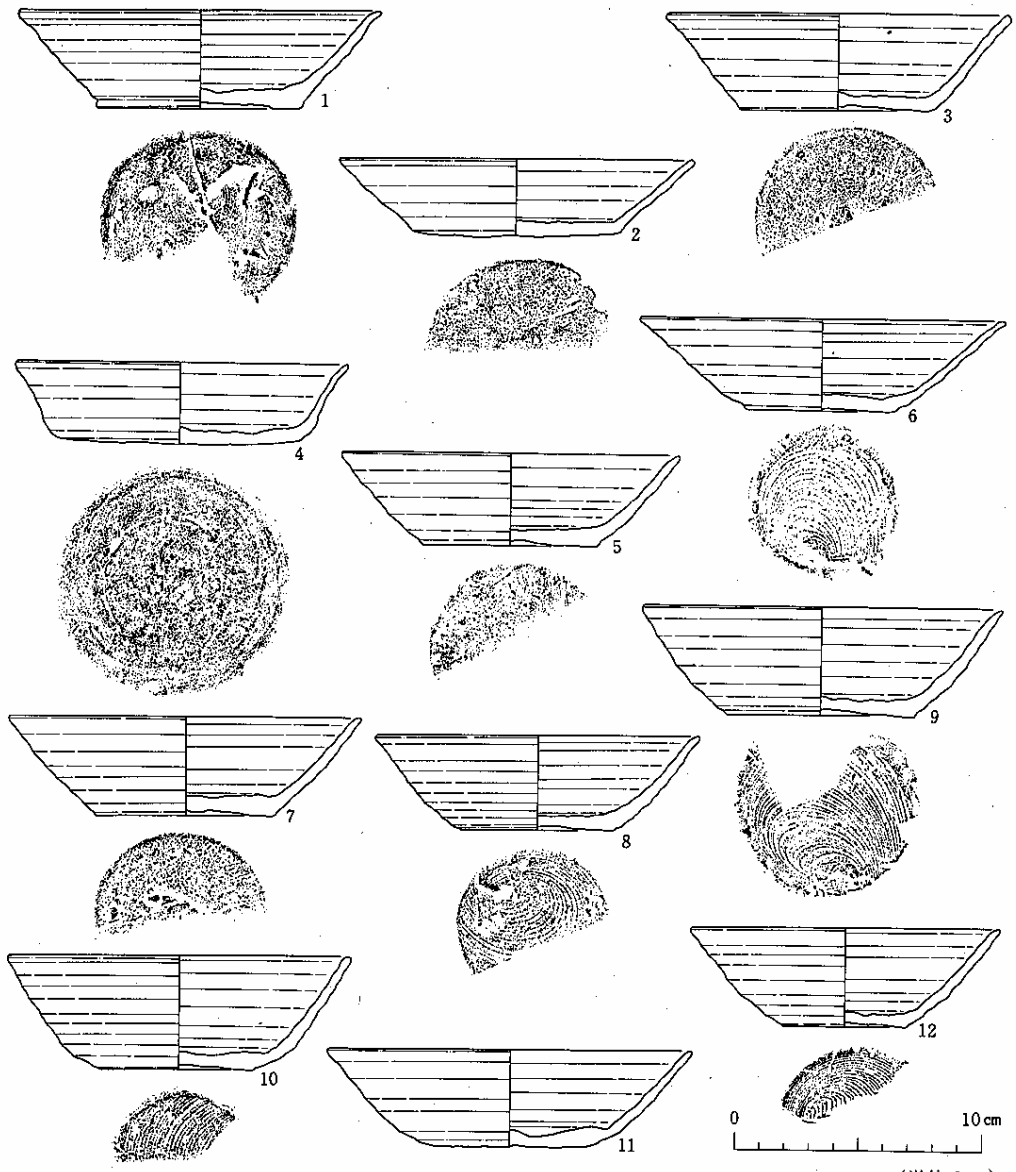
第50図　第Ⅲ層出土土器 9



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器坏	M—8	3層	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	13.8	3.9	8.0	Ⅲ- 47	
2	〃	〃	M—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.4	3.6	8.8	Ⅲ- 74	
3	〃	〃	J—8	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.4	3.5	7.0	Ⅲ- 80	
4	〃	〃	I—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.4	3.3	8.2	Ⅲ- 93	
5	〃	〃	J—13	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.4	3.2	8.4	Ⅲ- 67	
6	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.4	3.4	8.0	Ⅲ- 81	
7	〃	〃	N—12	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔	C	13.0	3.1	6.8	Ⅲ- 62	
8	〃	〃	不一明	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	12.8	3.3	7.0	Ⅲ-137	
9	〃	〃	L—8	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	⅔	C	15.2	3.3	8.8	Ⅲ- 51	
10	〃	〃	H—14	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.3	3.3	7.2	Ⅲ- 70	
11	〃	〃	M—11	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、ヘラ切り	ロクロナデ	¾	C	13.6	3.6	7.7	Ⅲ- 57	
12	〃	〃	D—9	〃 口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.5	3.2	8.2	Ⅲ-249	
13	〃	〃	O—10	〃 口縁・体部ロクロナデ、体部～底部手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	⅔	C	14.4	3.6	8.8	Ⅲ- 82	

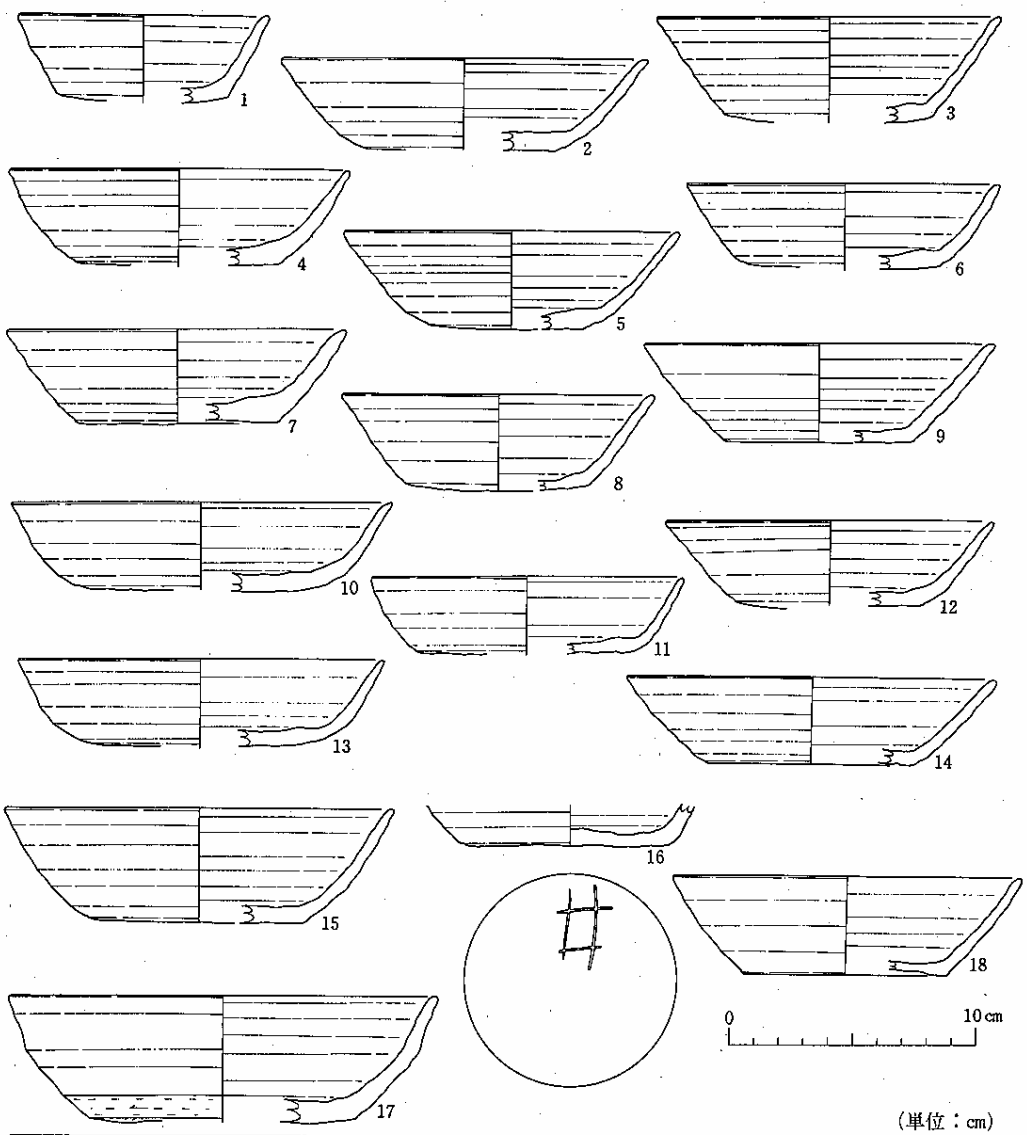
第51図　第Ⅲ層出土土器10



(単位：cm)

No	種　類	地区　層	外　面	内　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　考
1	須恵器　坏	H—11 3層	口縁・体部、ロクロナデ、底部回転ヘラケズリ、回転糸切り	ロクロナデ	½	C	14.8	4.0	8.2	Ⅲ— 69	
2	〃　〃	K—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C	14.4	3.1	8.4	Ⅲ— 163	
3	〃　〃	O—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	14.0	3.9	7.6	Ⅲ— 124	
4	赤焼土器坏	I—14 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	⅔		13.4	3.1	9.8	Ⅲ— 43	積み上げ痕あり
5	須恵器　坏	H—7 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	C	13.8	3.8	7.2	Ⅲ— 118	
6	〃　〃	N—8 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼	C	14.8	3.7	6.0	Ⅲ— 131	
7	〃　〃	I—14 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	½	D	14.3	4.0	7.2	Ⅲ— 79	
8	〃　〃	G—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	½	D	13.2	3.8	6.2	Ⅲ— 112	
9	〃　〃	E—12 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	⅔	D	14.6	4.4	7.6	Ⅲ— 65	
10	〃　〃	I—11 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼	D	14.0	4.6	6.0	Ⅲ— 135	
11	〃　〃	H—7 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部手持ちヘラケズリ、ヘラ切り	ロクロナデ	½	D	14.8	3.9	7.3	Ⅲ— 95	
12	〃　〃	O—9 〃	口縁・体部ロクロナデ、底部回転糸切り	ロクロナデ	¼	D	12.6	4.0	5.0	Ⅲ— 111	

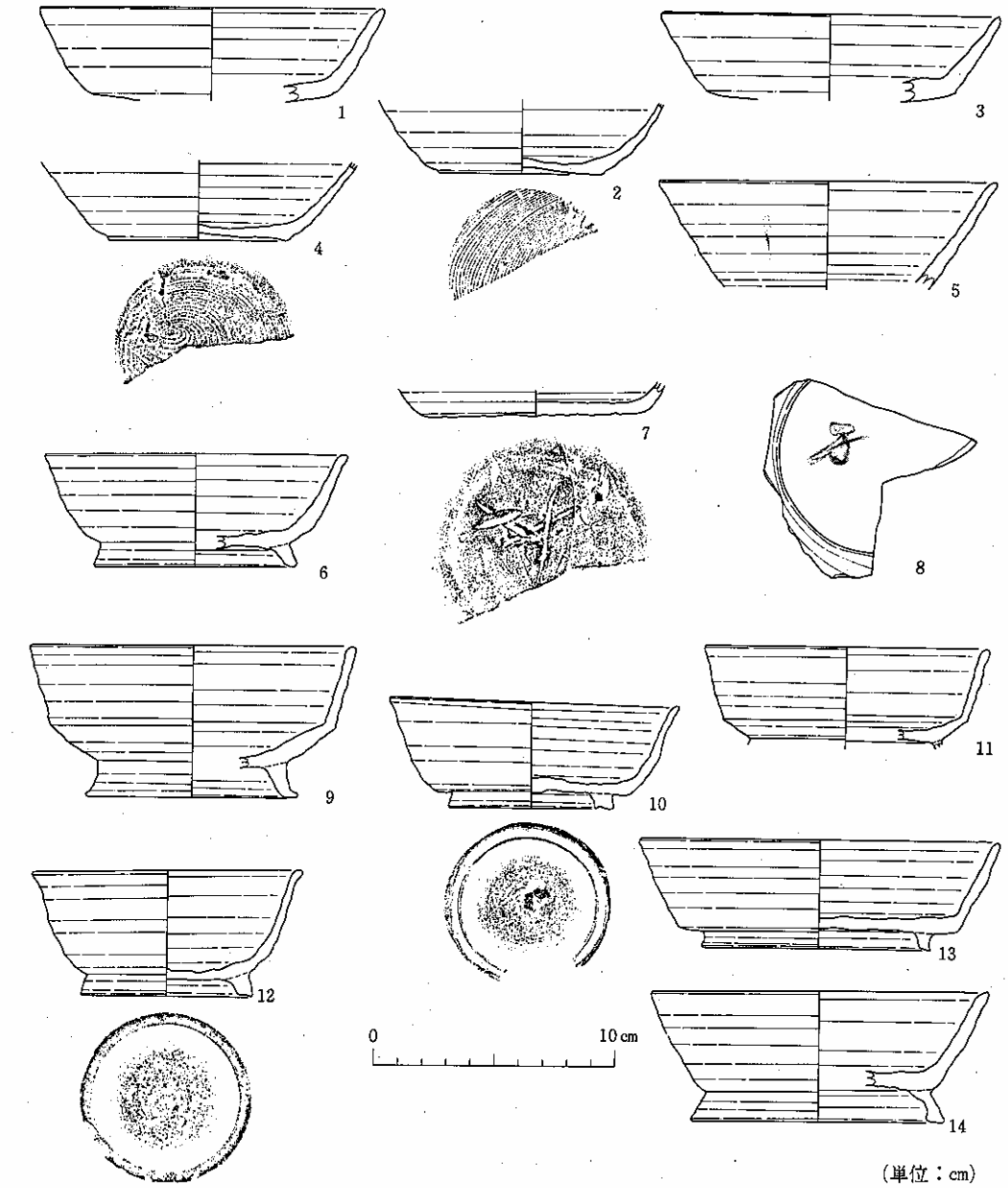
第52図　第Ⅲ層出土土器11



（単位：cm）

No	種　類	地区	層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備　　考
1	須恵器坏	N—12	Ⅲ層	口縁～体部ロクロナデ	口縁～底部ロクロナデ	¼		10.2			Ⅲ-140	
2	〃	〃	L—9	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り？	口縁～底部ロクロナデ	¼		14.8			Ⅲ- 83	
3	〃	〃	H—14	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り？	口縁～底部ロクロナデ	¼		14.0			Ⅲ-132	
4	〃	〃	J—14	〃 口縁～体部ロクロナデ、	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.8			Ⅲ-156	
5	〃	〃	J—13	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.6			Ⅲ- 91	
6	〃	〃	L—8	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		12.7			Ⅲ-117	
7	〃	〃	H—7	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.8	3.9	8.2	Ⅲ-114	
8	〃	〃	不　明	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		12.8			Ⅲ-116	
9	〃	〃	I—11	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部手持ちケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼		14.2			Ⅲ- 44	
10	〃	〃	D—8	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		15.2			Ⅲ-250	
11	〃	〃	O—11	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		12.1			Ⅲ-154	
12	〃	〃	H—12	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		13.3			Ⅲ- 49	
13	〃	〃	N—12	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		14.8			Ⅲ-159	
14	〃	〃	H—12	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		15.0			Ⅲ-152	
15	〃	〃	I—12	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部不明		¼		15.8			Ⅲ- 89	
16	〃	〃	F—11	〃 底部ヘラ切り	ロクロナデ	一部					Ⅲ-256	底部に「井」のヘラ書き
17	〃	〃	J—13	〃 口縁～体部ロクロナデ、回転ケズリ、底部手持ちケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼		17.4			Ⅲ- 60	
18	〃	〃	G—14	〃 口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼		14.2			Ⅲ-102	

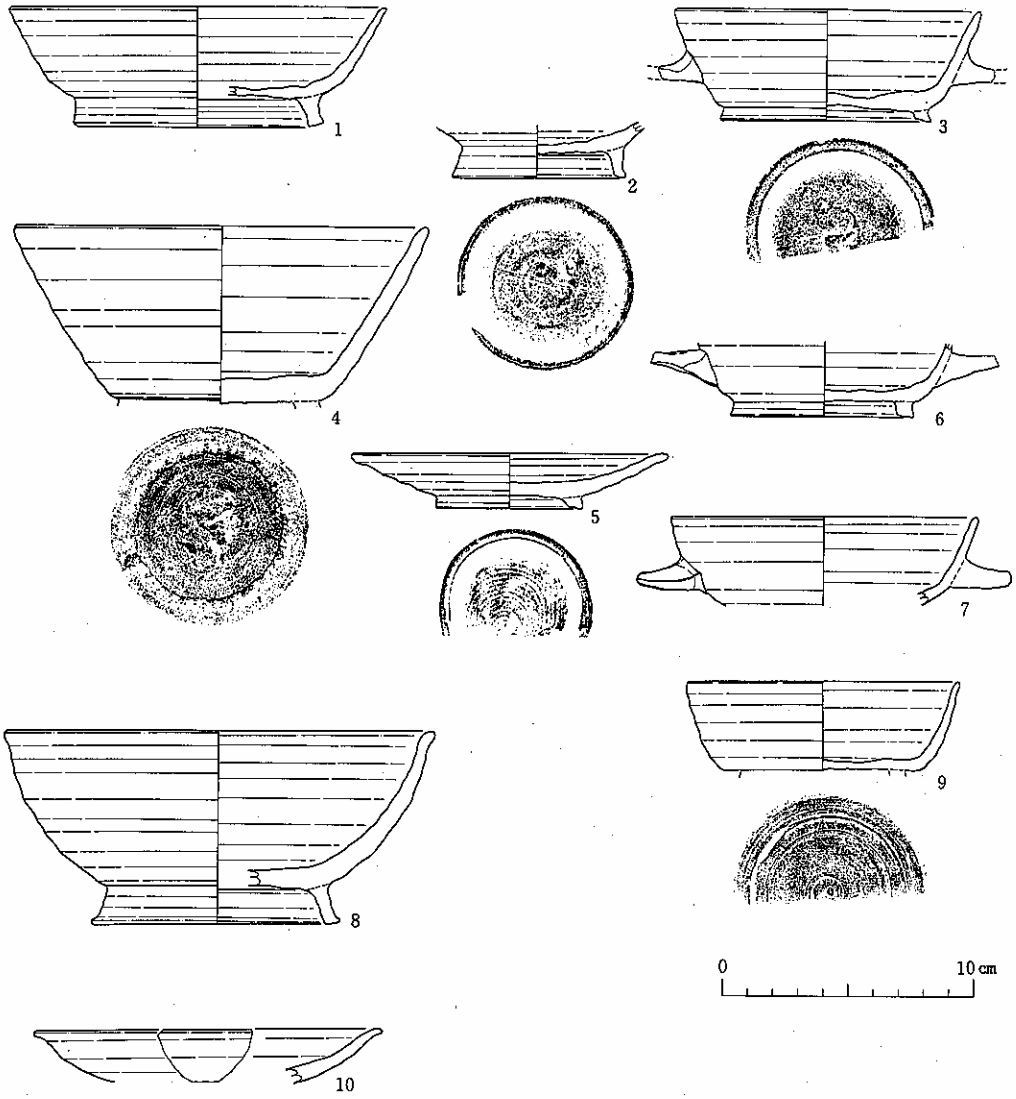
第53図　第Ⅲ層出土土器12



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器 坏	F—11	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	¼		14.2			Ⅲ— 145	
2	〃 〃	O—10	〃	ロクロナデ、底部、静止糸切り	ロクロナデ	¼				6.7	Ⅲ— 94	
3	〃 〃	O—12	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	¼		14.0			Ⅲ— 126	
4	〃 〃	H—8	〃	ロクロナデ、底部、回転糸切り	ロクロナデ	一部				7.5	Ⅲ— 155	
5	〃 〃	H—11	〃	ロクロナデ、体部、体部「十」の墨書	ロクロナデ	一部		14.0			Ⅲ— 90	
6	〃 高台付坏	不明	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	¼	C				Ⅲ— 168	
7	〃 坏	D—12	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り「メ」のヘラ書2つあり	ロクロナデ	一部					Ⅲ— 146	
8	〃 〃	D—8	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り、「子」の墨書あり	ロクロナデ	一部					Ⅲ— 253	
9	〃 高台付坏	I—12	〃	ロクロナデ、底部、ロクロナデ、切り離し不明	ロクロナデ	½	A				Ⅲ— 166	
10	〃 〃	O—12	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り、ロクロナデ	ロクロナデ	⅔	C				Ⅲ— 164	
11	〃 〃	I—9	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	¼	A				Ⅲ— 252	
12	〃 〃	I—11	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り、手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	⅔	C				Ⅲ— 165	
13	〃 〃	D—11	〃	ロクロナデ、底部、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	½	B				Ⅲ— 172	
14	〃 〃	H—12	〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	¼	B				Ⅲ— 171	

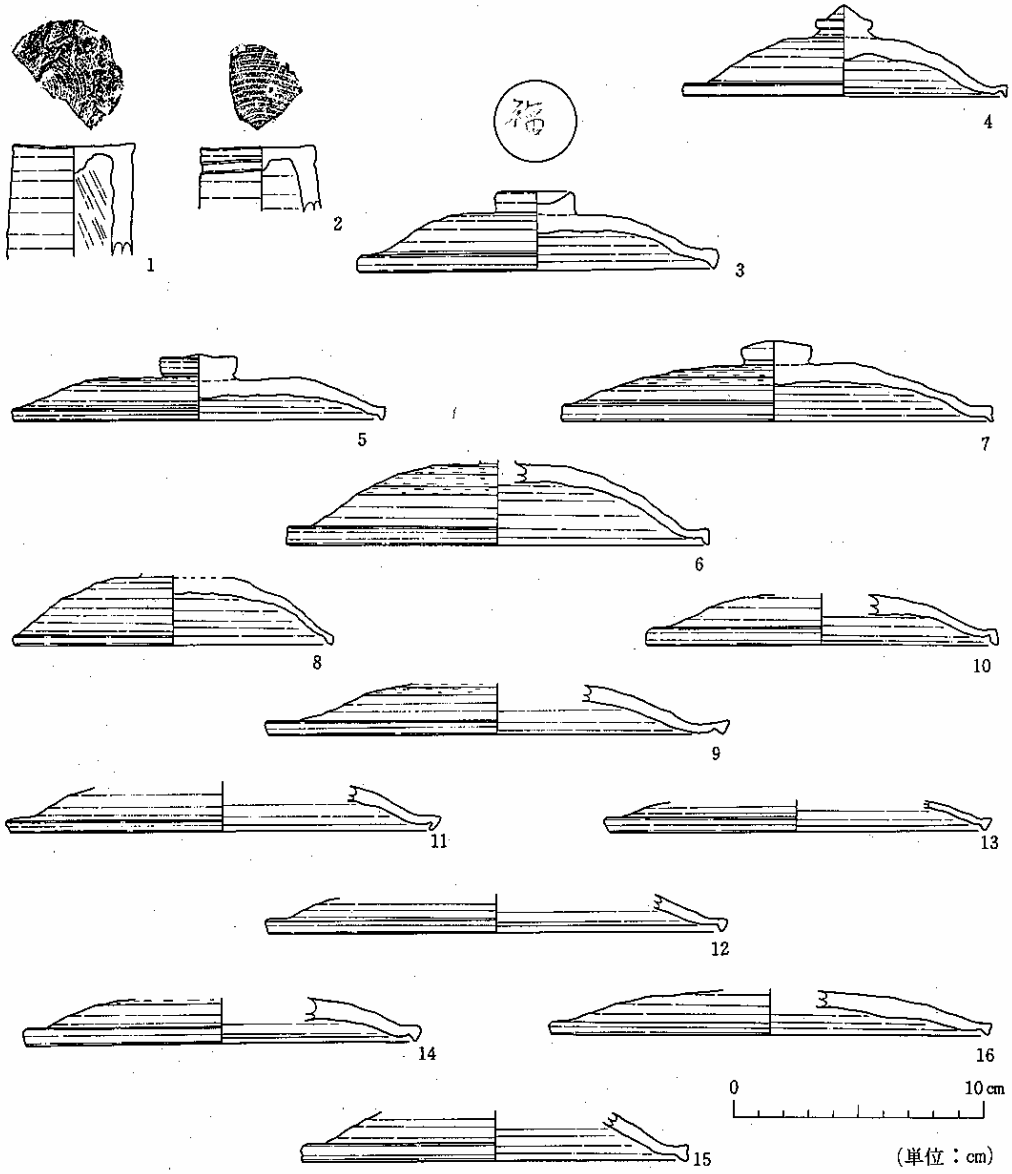
第54図　第Ⅲ層出土土器13



（単位：cm）

No.	種　類	地区　層	外　面	内　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No.	備　考
1	須恵器高台付坏	E—11 3層	ロクロナデ、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	½	B				Ⅲ— 169	
2	〃　〃	I—14 〃	ロクロナデ、底部ヘラ切りナデ、「メ」のヘラ書き	ロクロナデ	一部					Ⅲ— 175	
3	〃　双耳坏	N—12 〃	ロクロナデ、体部外面に耳付、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	½	E				Ⅲ— 177	
4	〃　高台付坏	I—9 〃	ロクロナデ、底部、ヘラ切り	ロクロナデ	½	C				Ⅲ— 72	
5	〃　〃	O—13 〃	ロクロナデ、底部、回転糸切り	ロクロナデ	½	D				Ⅲ— 179	
6	〃　双耳坏	K—8 〃	ロクロナデ、体部外面耳付底部、ナデ	ロクロナデ	¼	E				Ⅲ— 178	
7	〃　〃	G—8 〃	ロクロナデ、体部外面に耳付	ロクロナデ	一部	E				Ⅲ— 237	
8	〃　高台付坏	J—13 〃	ロクロナデ、底部、ナデ、ヘラ切り（？）	ロクロナデ	½	C				Ⅲ— 167	
9	〃　〃	I—14 〃	ロクロナデ、底部　ヘラ切り、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	¼	B				Ⅲ— 115	
10	緑釉陶器皿	E—8 〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部						

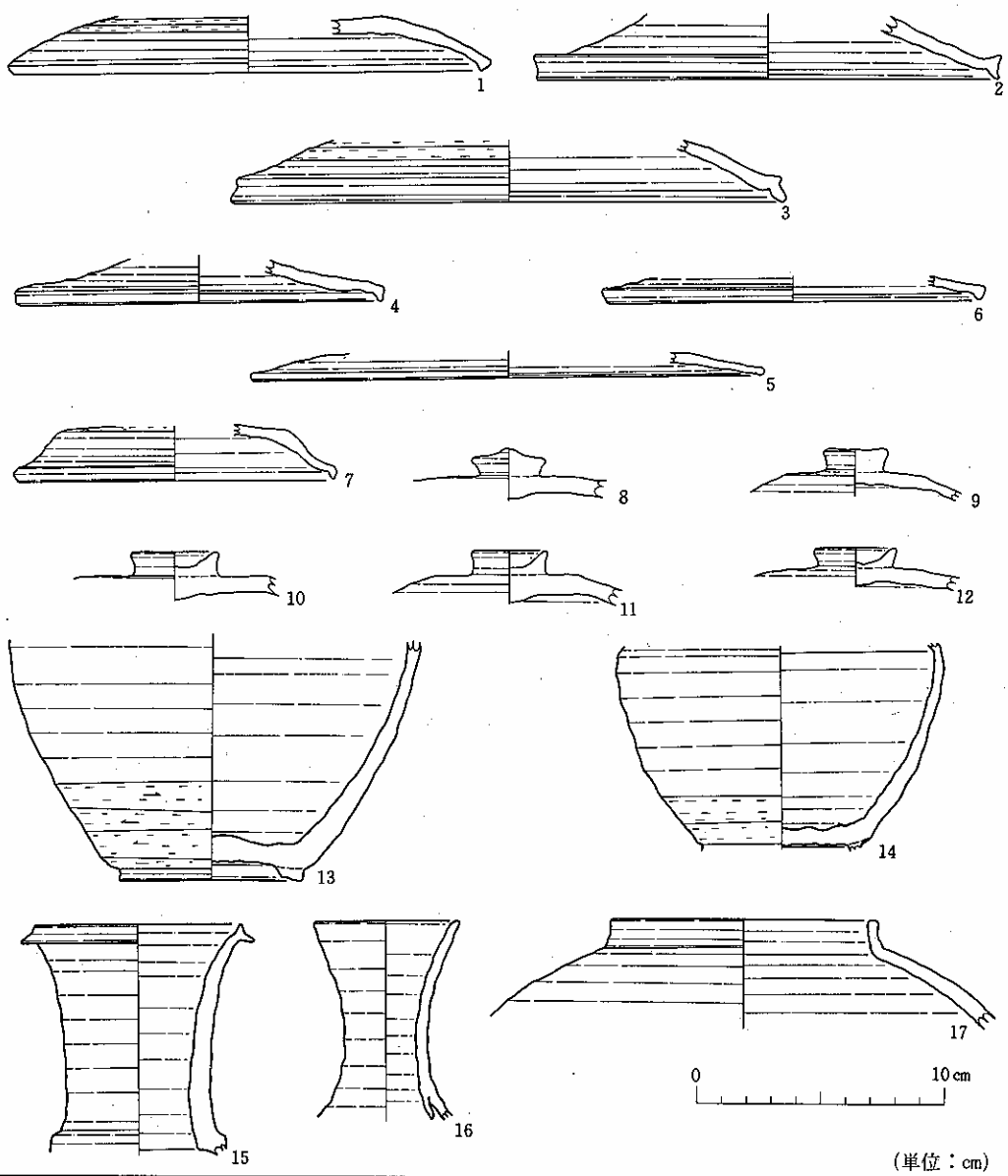
第55図　第Ⅲ層出土土器14



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器高坏	O—16	3層	ロクロナデ、接合部回転糸切り	シボリ痕	一部					Ⅲ-211	
2	〃 〃	M—11	〃	ロクロナデ、浅い沈線、接合部回転糸切り	ロクロナデ	〃					Ⅲ-212	
3	〃 蓋	I—14	〃	口縁、天井部ロクロナデ、天井部ツマミ付	ロクロナデ	⅔	B				Ⅲ-183	ツマミ上に「福」の墨書
4	〃 〃	F—8	〃	口縁・天井部ロクロナデ、天井部ツマミ付	ロクロナデ	½	B				Ⅲ-186	
5	〃 〃	E—11	〃	口縁・天井部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、ツマミ付	ロクロナデ	½	B				Ⅲ-187	
6	〃 〃	I—11	〃	口縁・天井部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	¼	B				Ⅲ-190	
7	〃 〃	G—8	〃	口縁・天井部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ、ツマミ付	ロクロナデ	⅔	B				Ⅲ-184	
8	〃 〃	H—11	〃	口縁・天井部ロクロナデ	ロクロナデ	½	B				Ⅲ-185	
9	〃 〃	I—8	〃	口縁・天井部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	¼	A				Ⅲ-192	
10	〃 〃	I—4	〃	口縁・天井部ロクロナデ	ロクロナデ	一部	B				Ⅲ-194	
11	〃 〃	J—14	〃	口縁・天井部ロクロナデ	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ-200	
12	〃 〃	N—12	〃	口縁・天井部ロクロナデ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ-204	
13	〃 〃	E—9	〃	口縁・ロクロナデ	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ-180	
14	〃 〃	E—9	〃	口縁・ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ-197	
15	〃 〃	E—10	〃	口縁ロクロナデ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ-195	
16	〃 〃	E—7	〃	口縁ロクロナデ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ-191	

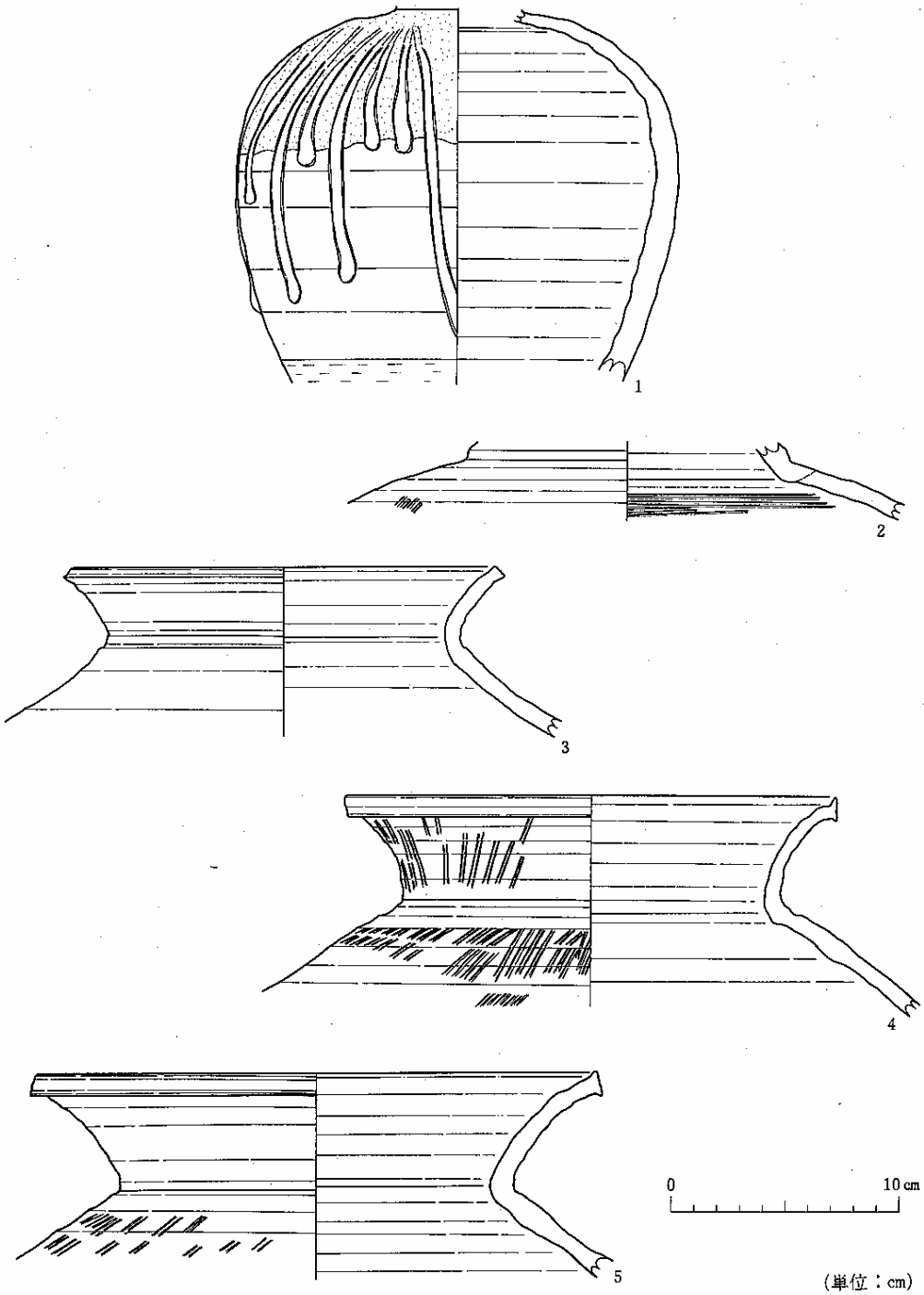
第56図　第Ⅲ層出土土器15



(単位：cm)

No.	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No.	備考
1	須恵器 壺	J—14	3層	口縁部、ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	一部	A				Ⅲ— 188	
2	〃 〃	C—10	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ— 189	
3	〃 〃	E—10	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	C				Ⅲ— 193	
4	〃 〃	第2トレンチ2・3層		ロクロナデ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 198	
5	〃 〃	C—13	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	D				Ⅲ— 254	
6	〃 〃	K—13	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ— 203	
7	〃 〃	O—11	〃	口縁部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ	ロクロナデ	〃	B				Ⅲ— 196	
8	〃 〃	N—12	〃	ロクロナデ、天井部ツマミ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 209	
9	〃 〃	H—8	〃	ロクロナデ、天井部ツマミ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 205	
10	〃 〃	C—12	〃	ロクロナデ、天井部ツマミ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 207	
11	〃 〃	第2トレンチ2・3層		ロクロナデ、天井部ツマミ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 208	
12	〃 〃	J—12	〃	ロクロナデ、天井部ツマミ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 206	
13	須恵器 壺	C—9	〃	ロクロナデ、底部付近回転ヘラケズリ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 224	
14	〃 〃	F—11	〃	ロクロナデ、底部付近回転ヘラケズリ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 222	
15	〃 長頸壺	I—11		ロクロナデ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 226	
16	〃 〃	J—13		ロクロナデ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 225	
17	〃 短頸壺	G—14		ロクロナデ	ロクロナデ	〃					Ⅲ— 223	

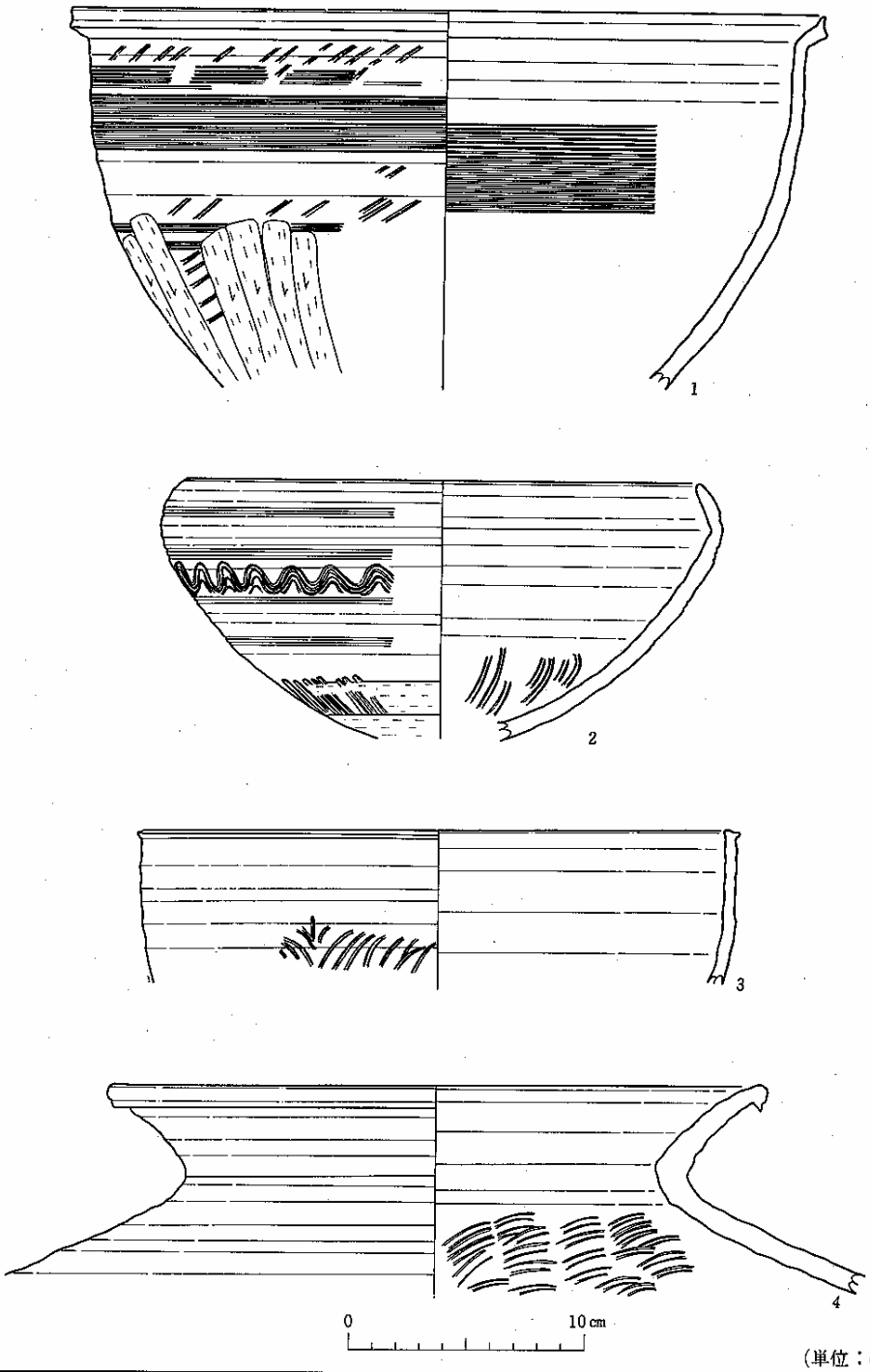
第57図　第Ⅲ層出土土器16



(単位：cm)

No.	種　類	地区　層	外　　面	内　　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No.	備　考
1	須恵器壺	C—13Ⅲ層	体部ロクロナデ、回転ケズリ	ロクロナデ	一部					Ⅲ— 220	自然釉あり
2	〃　〃	O—7　〃	頸部ロクロナデ、体部、平行タタキ目	ロクロナデ、回転刷毛目	〃					Ⅲ— 228	
3	〃　甕	I—13　〃	口縁～体部ロクロナデ	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ— 234	
4	〃　〃	O—10　〃	口縁～体部ロクロナデ、平行タタキ目	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ— 231	
5	〃　〃	O—7　〃	口縁～頸部ロクロナデ、体部ロクロナデ、平行タタキ目	ロクロナデ	A	A				Ⅲ— 227	

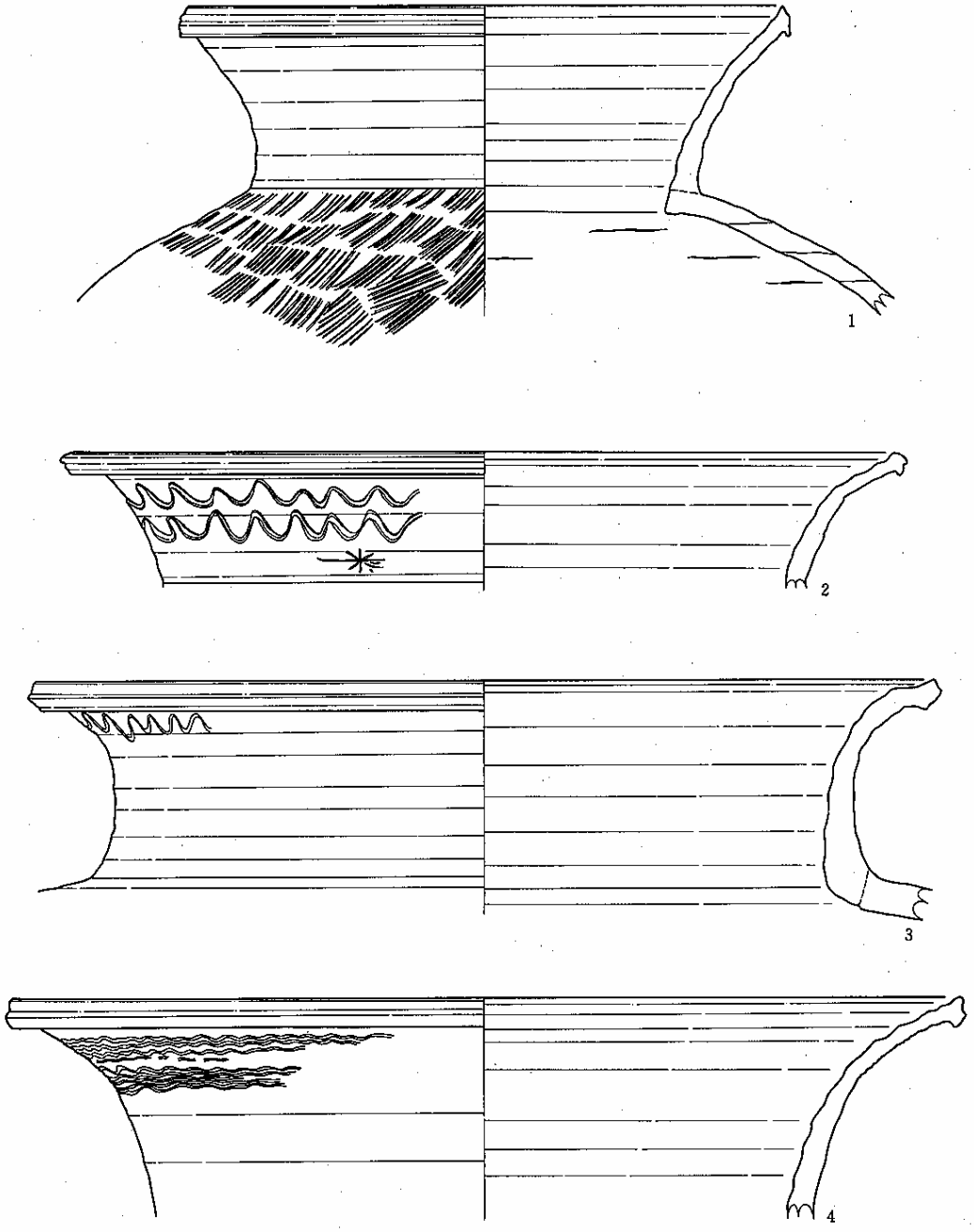
第58図　第Ⅲ層出土土器17



(単位：cm)

No.	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No.	備考
1	須恵器甕	D—11	3層	口縁、体部、平行タタキ、ロクロナデ、回転刷毛目、ヘラケズリ	ロクロナデ、回転刷毛目		B	32.0			Ⅲ— 233	
2	〃 〃	J—13	〃	口縁、体部ロクロナデ、平行タタキ、回転ヘラケズリ、沈線波状	ロクロナデ、青海波状文		B	21.9			Ⅲ— 219	
3	〃 〃	O—6	〃	口縁・体部ロクロナデ、沈刻線文	ロクロナデ		B				Ⅲ— 242	
4	〃 〃	G—12	〃	口縁〜体部ロクロナデ	ロクロナデ、体部、青海波状文		A				Ⅲ— 229	

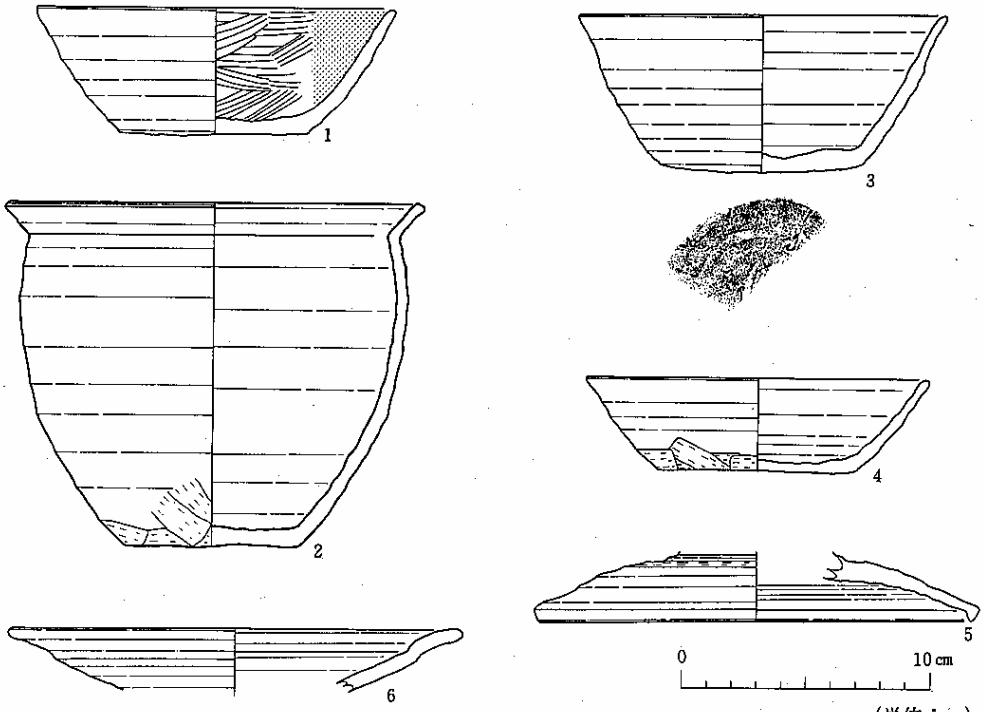
第59図　第Ⅲ層出土土器18



(単位：cm)

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	須恵器甕	D—8	Ⅲ層	口縁～頸部ロクロナデ、体部平行タタキ	ロクロナデ	一部	A				Ⅲ— 240	
2	〃 〃	不明	〃	頸部、波状文（2本単位）	ロクロナデ	〃	A					線刻文あり
3	〃 〃	K—7	〃	頸部、波状文（1本）	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ— 238	
4	〃 〃	J—13	〃	頸部、波状文（4本、5本単位）	ロクロナデ	〃	A				Ⅲ— 243	

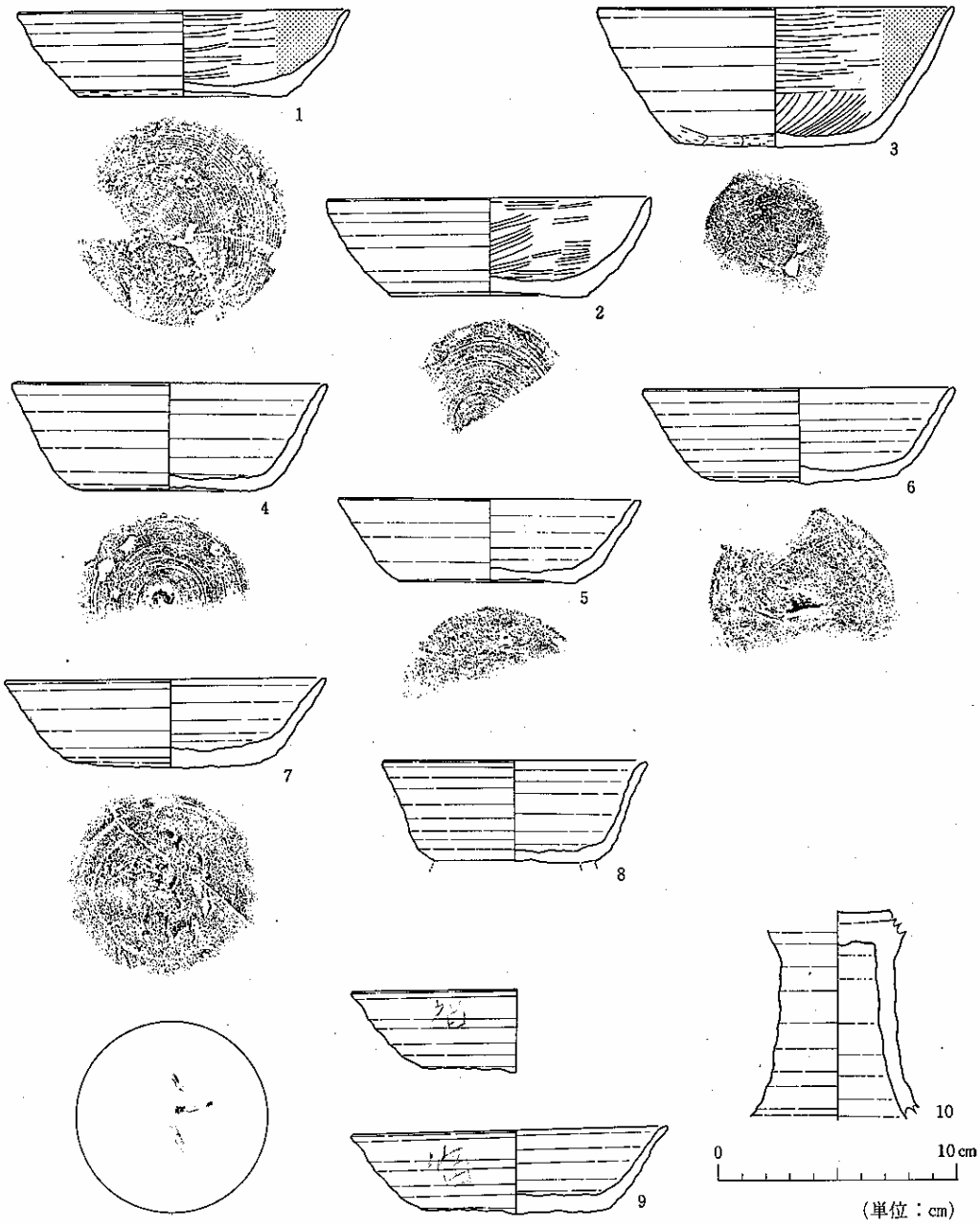
第60図　第Ⅲ層出土土器19



(単位：cm)

No.	種　類	地区　層	外　面	内　面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No.	備　考
1	土師器・坏	O－7 Ⅳ層	口縁～体部ロクロナデ 底部手持ちケズリ	口縁～底部、ヘラミガキ（横・斜）黒色	⅔	B Ⅰ	14.6	5.1	7.7	Ⅳ－1	
2	〃　甕	O－7 〃	口縁～体部ロクロナデ 底部手持ちケズリ	口縁～底部ロクロナデ	½	B				Ⅳ－5	
3	須恵器　坏	O－7 〃	口縁～体部ロクロナデ 底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	B	14.8	6.4	8.3	Ⅳ－2	
4	〃　〃	O－6 〃	口縁～体部、体部～底部、手持ちケズリ	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	14.0	3.7	8.0	Ⅳ－3	
5	〃　盤	C－13 〃	天井部、回転ケズリ、口縁、ロクロナデ	ロクロナデ	⅔	A				Ⅳ－4	
6	灰釉陶器皿	O－6 〃	口縁～体部ロクロナデ	ロクロナデ	一部					Ⅳ－8	段皿

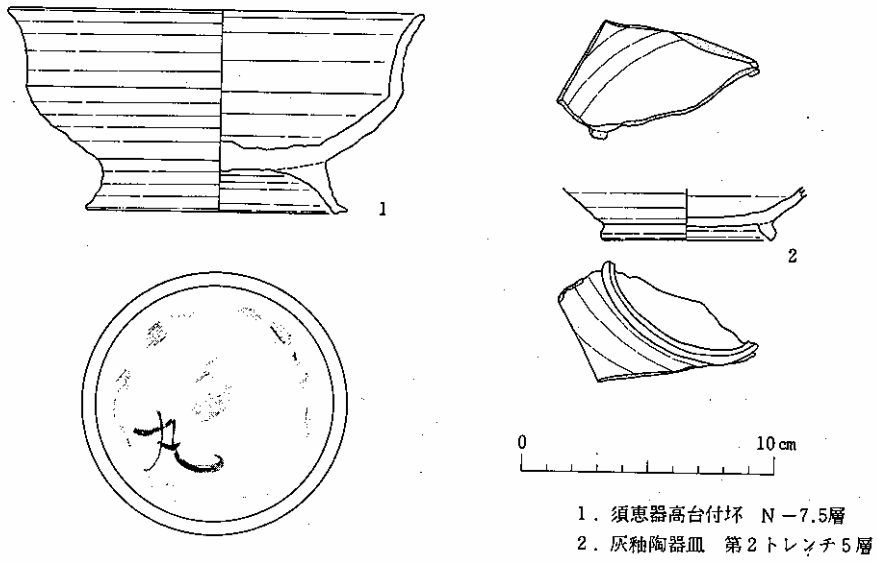
第61図　第Ⅳ層（整地層）出土土器



（単位：cm）

No	種類	地区	層	外面	内面	残存	分類	口径	器高	底径	登録No	備考
1	土師器 坏	H—7	V層	口縁～体部ロクロナデ、回転ヘラケズり、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ・黒色	⅔	BⅡ	14.0	3.6	8.8	V—1	
2	〃 〃	N—8	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部回転糸切り	口縁～底部ヘラミガキ(横・斜)黒色	¼	BⅡ	13.8	4.1	8.4	V—2	
3	〃 〃	K—5	〃	口縁～体部ロクロナデ、体部～底部、手持ちケズリ	口縁～体部ヘラミガキ（横）、底部（放射）、黒色	¼	BⅠ	15.0	5.9	8.4	V—3	
4	須恵器 坏	N—3	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り回転ケズリ	口縁～底部ロクロナデ	½	B	13.4	4.5	7.3	V—5	
5	〃 〃	G—7	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	C	12.8	3.5	7.4	V—7	
6	〃 〃	不明	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	13.2	4.0	8.2	V—8	
7	〃 〃	N—8	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.6	3.7	8.0	V—4	底部に墨書あり
8	〃高台付坏	不明	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	½	B	11.2	4.2	6.8	V—6	高台側落
9	〃 坏	B—7	〃	口縁～体部ロクロナデ、底部ヘラ切り	口縁～底部ロクロナデ	¼	C	13.4	3.5	8.0	V—11	体部2ヶ所に「福」の墨書あり
10	〃 高坏	〃	〃	ロクロナデ	ロクロナデ	一部					V—12	

第62図　第Ⅴ層出土土器1



第63図　第Ⅴ層出土土器２

Ⅶ. その他の出土遺物

１．硯

硯には円面硯・風字硯・転用硯がある。転用硯には須恵器蓋の内面、高台付坏底部外面を硯面に再利用したもので出土土器の項で各々述べている。ここで前二者について説明する。

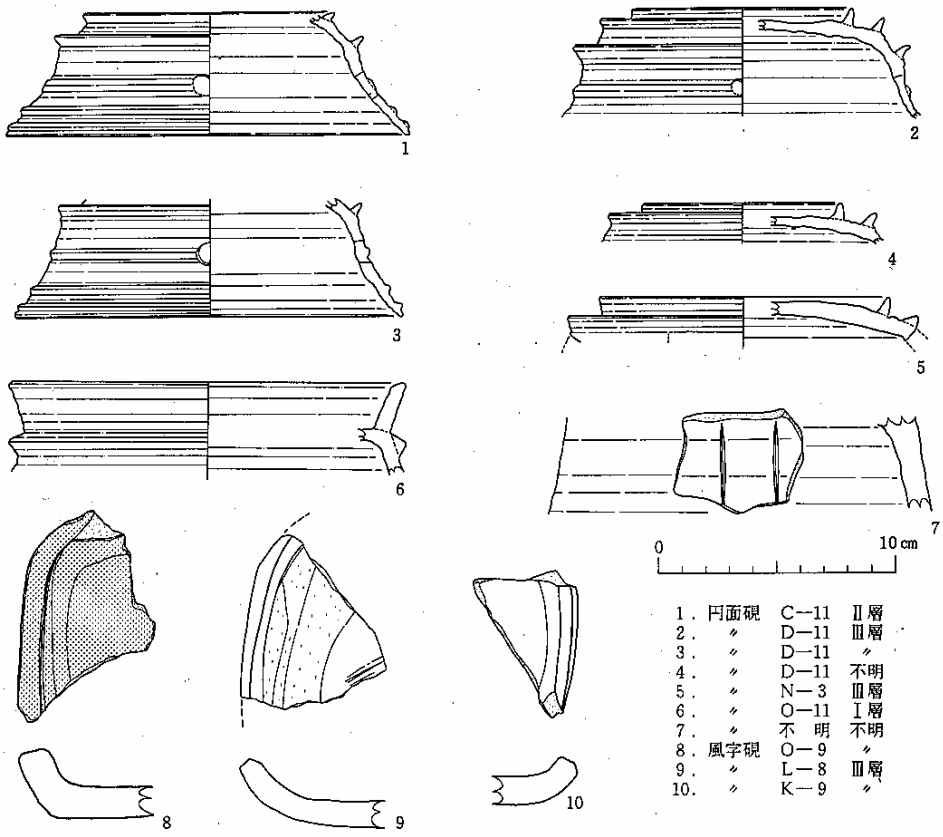
円面硯（第64図１～７）７点あり、全て欠損品である。硯部と台部とから成り、両部連続的に成形されたものである。１～３は硯部と台部の一部が残存している。４～６は硯部の一部が残存している。７は台部の一部のみが残存している。

硯部が残存しているものには硯面がほぼ平坦で陸・海の区別が不明瞭なもの（２）、と硯面が外端にいくにしたがって傾斜していき、陸・海の区別が比較的明らかなもの（３、４、５）とがある。各硯面にはわずかに墨痕が認められ、よく磨滅しており、磨滑の度合が激しい。硯面の外端には突帯が硯部・台部の成形後、貼り付け巡らされている。各突帯は外側にやや傾いている。６の突帯は２㎝と大きいが、他は0.5㎝前後とほぼ同様な傾向を示す。突帯の数が明らか

なのは、２で３本巡る。１は２本である。その他は１本残存しているもの（３、６）、２本残存しているもの（４、５）である。

台部が残存しているものは少なく、１・３は裾部まで残存しているもので、裾部が外側に緩やかに開く。台部外面には3本の隆帯が巡らせられ、円形の透し孔がわずかにみられる。２にも一本の隆帯と円形の透し孔がみられる。また、５にも方形の透し孔と思われる痕跡がわずかに認められる。７は台部の一部のみであるが、外面に２本の縦方向の沈線文が施されている。

風字硯（第64図８～10）３点ある。いずれも欠損部分が多く、全体の形状を知ることはできない。須恵質のもの（９、10）と土師質のもの（８）とがある。前者には成形後、内・外面ともヘラケズリの調整が施されている。８は外堤と硯部の一部、９は外堤の一部のみが残存している。８の硯面はよく磨滅しているが、陸と海との境は不明瞭である。いずれも外堤の上端には稜が形成され、断面が三角形を呈する。立ち上がりは急で内弯気味である。



第64図　円面硯・風字硯

後者の土師質のものは、外堤と硯部の一部のみが残存している。成形後、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。硯面には非常に細い擦痕がみられ、よく磨滅している。陸と海との境は不明瞭である。外堤の立ち上がりは内弯気味に角度をもって立ち上がり、上端は平坦で側縁は角ばる。

次にこれらの硯の年代について考えてみたい。表土から１点、遺物包含層第Ⅱ層から１点、第Ⅲ層から５点、その他層位不明なものである。

遺物包含層出土土器は表杉ノ入式期の土器でほぼ平安時代頃のものと推定される。

２．瓦・塼

瓦は土器に欠ぎ出土量が多い。堆積土及び各遺構から多数出土している。その内、軒丸瓦が３点、軒平瓦が６点、刻印文字瓦が１点出土しており、その他丸瓦・平瓦が平箱にして約５箱分が出土している。ここでは軒平瓦瓦・刻印瓦について説明し、その年代等について述べたい。

軒丸瓦（第65図１～３）いずれも欠損部分が多く瓦当面の大きさは不明である。

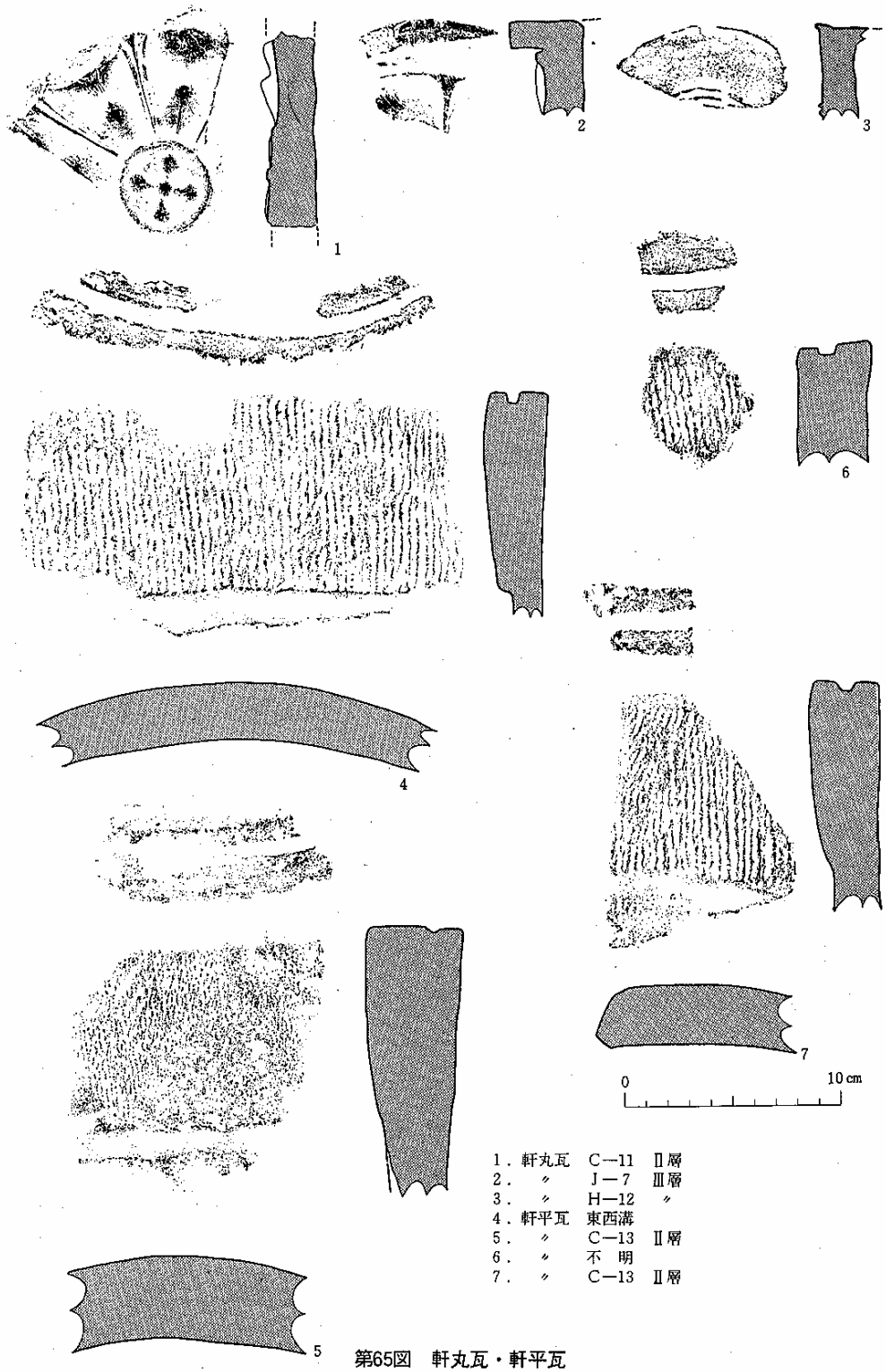
１は重弁蓮華文軒丸瓦で瓦当面の文様は３葉分のみ残存しているが、８葉の重弁と中房とからなると思われる。中房を巡る重弁連蓮の弁は浮彫的で弁の先端は鋭くなっている。中房は径約4.2㎝で１＋４の蓮子が配され、周囲の蓮子は縦長で弁状になっている。２は小破片で詳細は不明であるが、１と同様重弁蓮華文軒丸瓦の１葉分のみか残存しているものと考える。３は重圏文軒丸瓦の小破片である。

軒平瓦（第65図４～５、第66図１、２）４～７、１、は瓦当面に一本の深い沈線が引かれている単孤文軒平瓦である。２は２重の深い沈線が引かれている重孤文軒平瓦である。これらの顎には縄叩き目が残っている。

刻印文字瓦（第66図３）凸面が縄叩き目、凹面が布目の平瓦の凹面の右側縁近くに１辺1.5㎝の角印を押印して「丸」の陽出文字がみられる。

次にこれらの瓦の年代について考える。重弁蓮華文軒丸瓦・重孤文軒平瓦は多賀城第Ⅰ期のと特徴を同じにしており、重圏文軒丸瓦・単孤文軒平瓦は多賀城第Ⅱ期のものと特徴を同ものと特徴を同じにしている。また、「丸」の刻印文字瓦は多賀城第Ⅱ期の刻印瓦６文字、14種類の一つである刻印瓦（高野・熊谷：1978）に印の形態・押印場所等が近似しており、同じものと思われる。したがってこれらの瓦は奈良時代８Ｃ前半～後半頃のものと思われる。

ところで、これらの瓦は遺物包含層第Ⅱ・第Ⅲ層からの出土であり、この層からは平安時代（表杉ノ入式期）の土器が多く出土している。このことはこれらの土器の中に奈良時代の瓦が

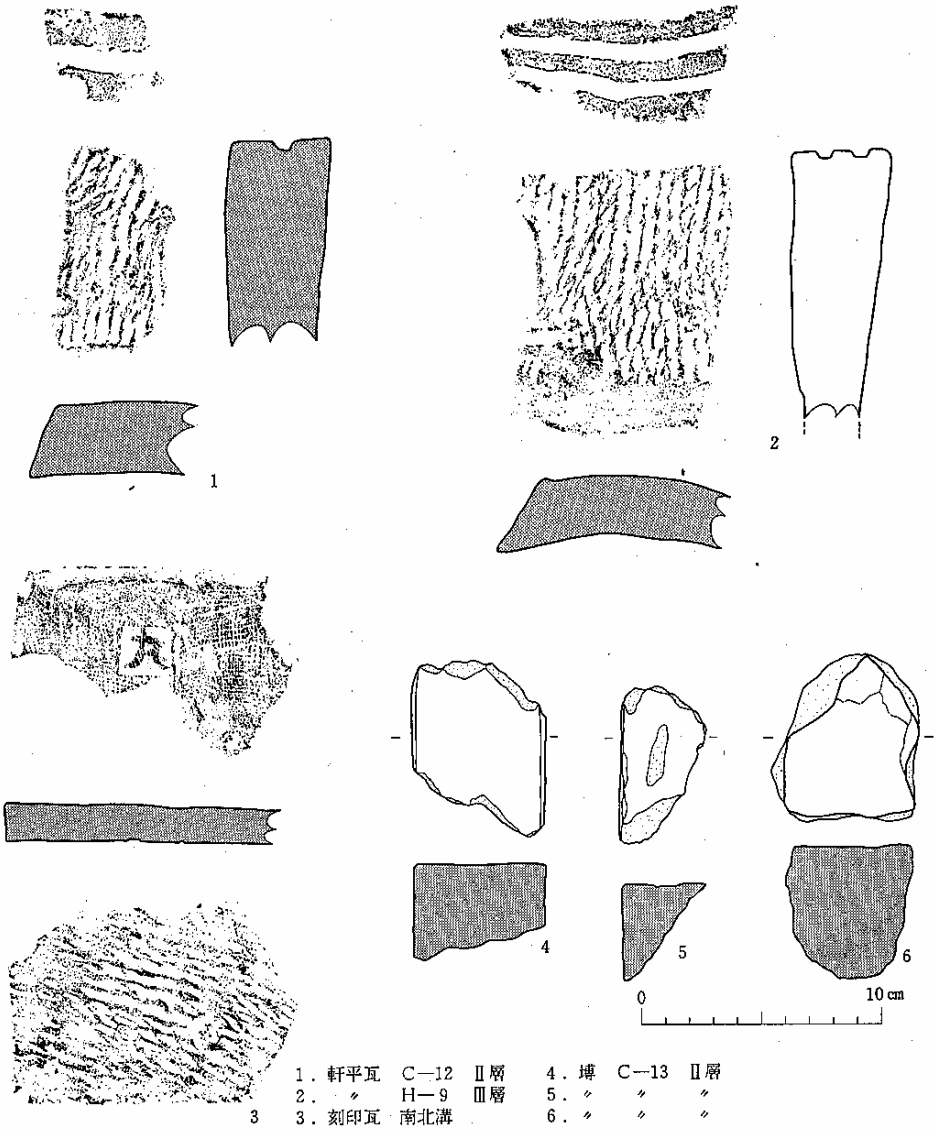


1．軒丸瓦　C—11　Ⅱ層
2．　〃　　J—7　Ⅲ層
3．　〃　　H—12　〃
4．軒平瓦　東西溝
5．　〃　　C—13　Ⅱ層
6．　〃　　不　明
7．　〃　　C—13　Ⅱ層

第65図　軒丸瓦・軒平瓦

混入したものと考えられ、平安時代になって多賀城内から何らかの理由で運び込まれた可能性がある。

塼（第66図４～６）いずれも破損している。瓦質のもので厚さは5.5cmと比較的厚いものである。



第66図　軒平瓦、塼

３．土製品

今回出土した土製品には土錘・紡錘車がある。

土錘（第67図１～７）１は大形で両端が丸味をもつ円筒状を呈する。欠損品であるため径は不明であるが、長さは７㎝、貫通孔の径は１㎝である。外面の器面調整は、オサエの後軽いヘラミガキが施されている。重量は17gある。
２～７は小形で中央部がふくらむ紡錘状を呈するもの（２～４）と、管状を呈するもの（５～７）とがある。７以外はほぼ完形品に近い。２は長さが5.5㎝、径が中央部で２㎝、貫通孔の径は0.5㎝と比較的大きく、その他は長さ４㎝、径1.5㎝、貫通孔の径が0.5㎝とほぼ共通する。外面の器面調整はヘラミガキのものとオサエの後ヘラミガキのものの両者がある。重量は５g～12gである。
これら土錘は遺物包含層第III層で平安時代（表杉ノ入）の土器とともに出土しているのがほとんどである（Ｐ.16から１点出土している）。したがって、平安時代のものと思われる。

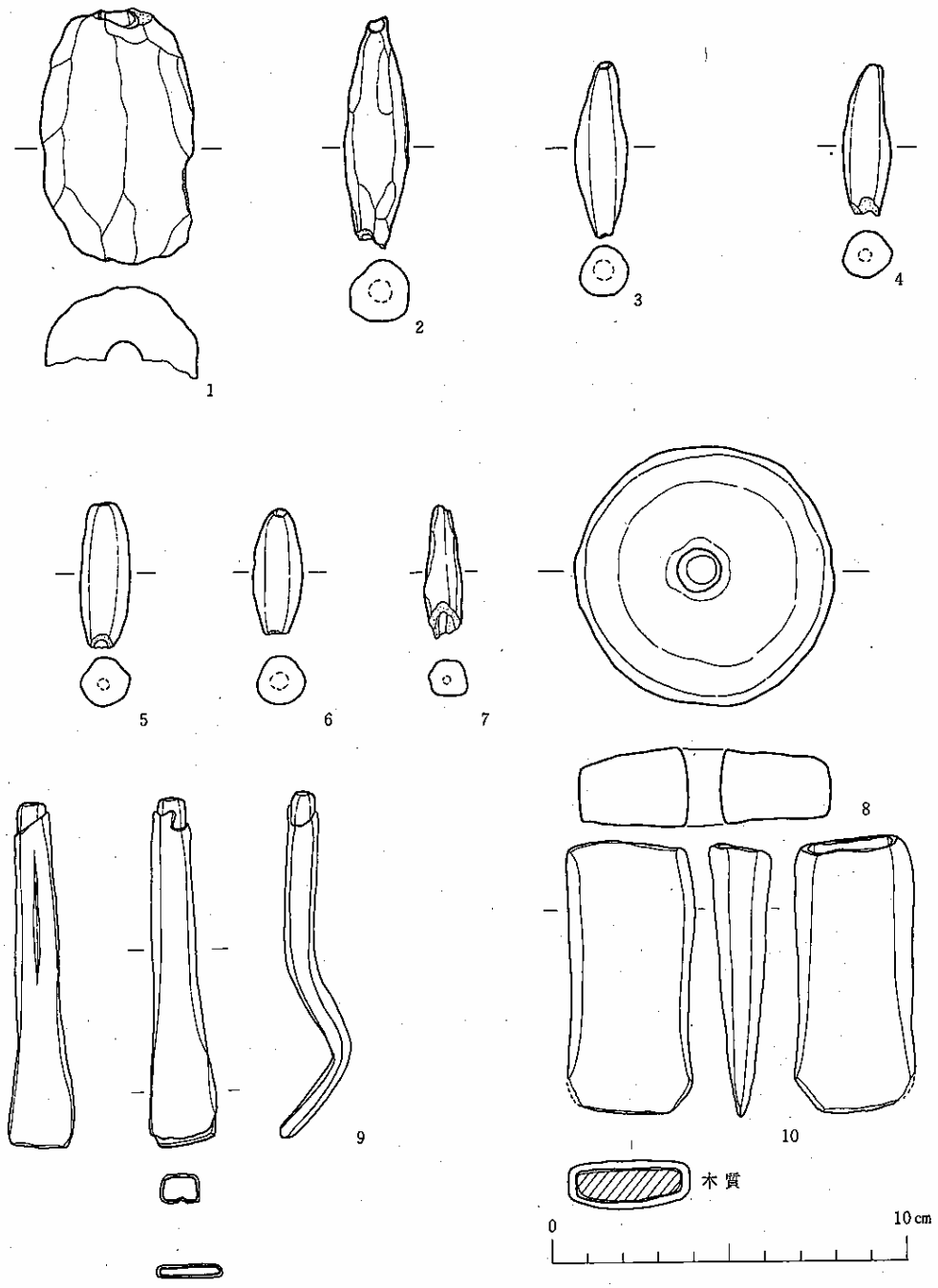
紡錘車（67図８）１点のみ出土している。軸の部分はなく輪だけが残存している。径7.2㎝厚さ２㎝の円盤のほぼ中央部に径１㎝の貫通孔が穿たれている。外面の器面調整は磨滅が激しく不明な点があるが、オサエの痕跡が一部に認められる。出土地層が不明なため年代は不明である。

４．砥　石

砥石は24点出土している。素材が小さい小形品、素材が大きい大形品、両者の中間的な中形品がある。これらは欠損しているものが多いので横幅の長さを目安として小形品をＡ類、中形品をＢ類、大形品をＣ類とする（第68～70図）。

A類：横幅が３㎝～４㎝の小形品である。石材の粒子が均質なシルト状・砂質シルト状できめ細い。自然面を残さず加工され、各面が砥面として使用されている。砥面の状況には、平坦な面のもの（８）と皿状にくぼんでいるもの（２・７・12）とがあり、全体的に使用の度合が激しい。各砥面には擦痕が認められる。

B類：横幅が５㎝～７㎝の中形品である。石材の粒子が均質なシルト状・砂質シルト状できめ



1．土錘O－7Ⅲ層　　5．土錘D－7Ⅲ層　　8．紡錘車D－11不明
2．〃 H－10 〃　　6．〃 F－7 〃　　9．不明鉄製品C－2Ⅱ層
3．〃 H－14 〃　　7．〃 P.16　　10．鉄斧　不明　　不明
4．〃 J－10 〃

第67図　土製品・鉄製品

細いもの（11・16）と均質な砂質状で粗いもの（４・９・10・14・15・17）とがある。砥面がきめ細いものは自然面を残さず各面が砥面として使用されている。砥面は皿状にくぼんでおり、使用の度合が激しい。各砥面には擦痕が認められ、11の砥面には研磨溝が観察される。

砥面が粗いものは自然面を残し、素材の整形、加工は雑である。10、11の砥面は皿状にくぼんでいるが、他は平坦な面である。砥面として使用された面は上・下両面の２面（９）上面と片側面の２面（18）のもの、上・下両面と片側面の３面（４・10・14・17）、上面と両側面の３面（15）とがある。各砥面には擦痕が認められ、（10・15）には敲打痕が観察される。

C類：横幅９㎝～11㎝の大形品である。全て石材の粒子が均質な砂質状で粗いものである。自然面を残し、素材の整形・加工は粗雑である。砥面は平坦な面である。砥面として使用されている面は上・下両面と片側面の３面（20・23）と、上面と片側面の２面（５）、上下両面の２面（21）と、上面の１面（22・24）とがある。各砥面には擦痕が認められる。23には、研磨溝、21には敲打が観察される。

各類の石質は、石英安山岩質凝灰岩である。

以上、砥石の大きさによって３つに分類した。大きさの違いは利用の仕方の相違につながるものと考えられる。小形品は携帯用で、大形品は固定させ利用したもの、中形品は両方に利用されたものと思われる。

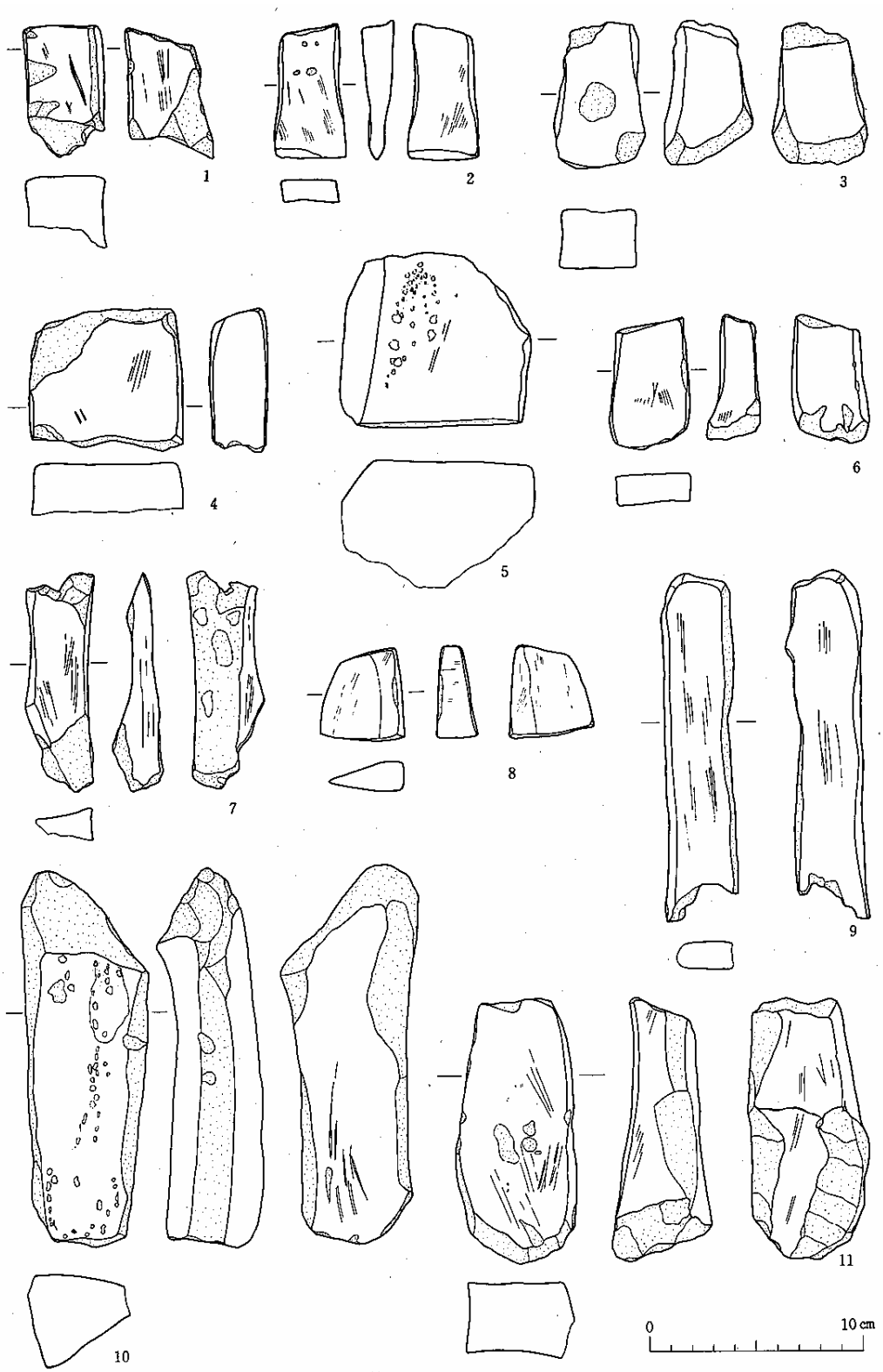
さらに、石材の粒子の状況から大きく２つに分けられる。一つは石材の粒子がシルト状、砂質シルト状で、砥面がきめ細い仕上げ砥・中砥的なものと、粒子が砂質状で砥面が粗い粗砥的なものとがある。小形品のA類は全て仕上げ砥・中砥であり、砥面が皿状にくぼんで使用の度合が激しいことが窺われる。また、皿状にくぼむということは、石材質が軟弱なためとも考えられる。鋭利なものを砥いだと考えられる研磨溝はA類には認められない。

中形品のB類には仕上げ砥・中砥的なものと粗砥的なものとがある。やはり、仕上げ砥・中砥的なものの破面は皿状にくぼんで利用の度合が激しいと思われる。また、研磨溝が認められるものもある。

大形品のC類は、全て粗砥のもので、破面は全て平坦な面である。

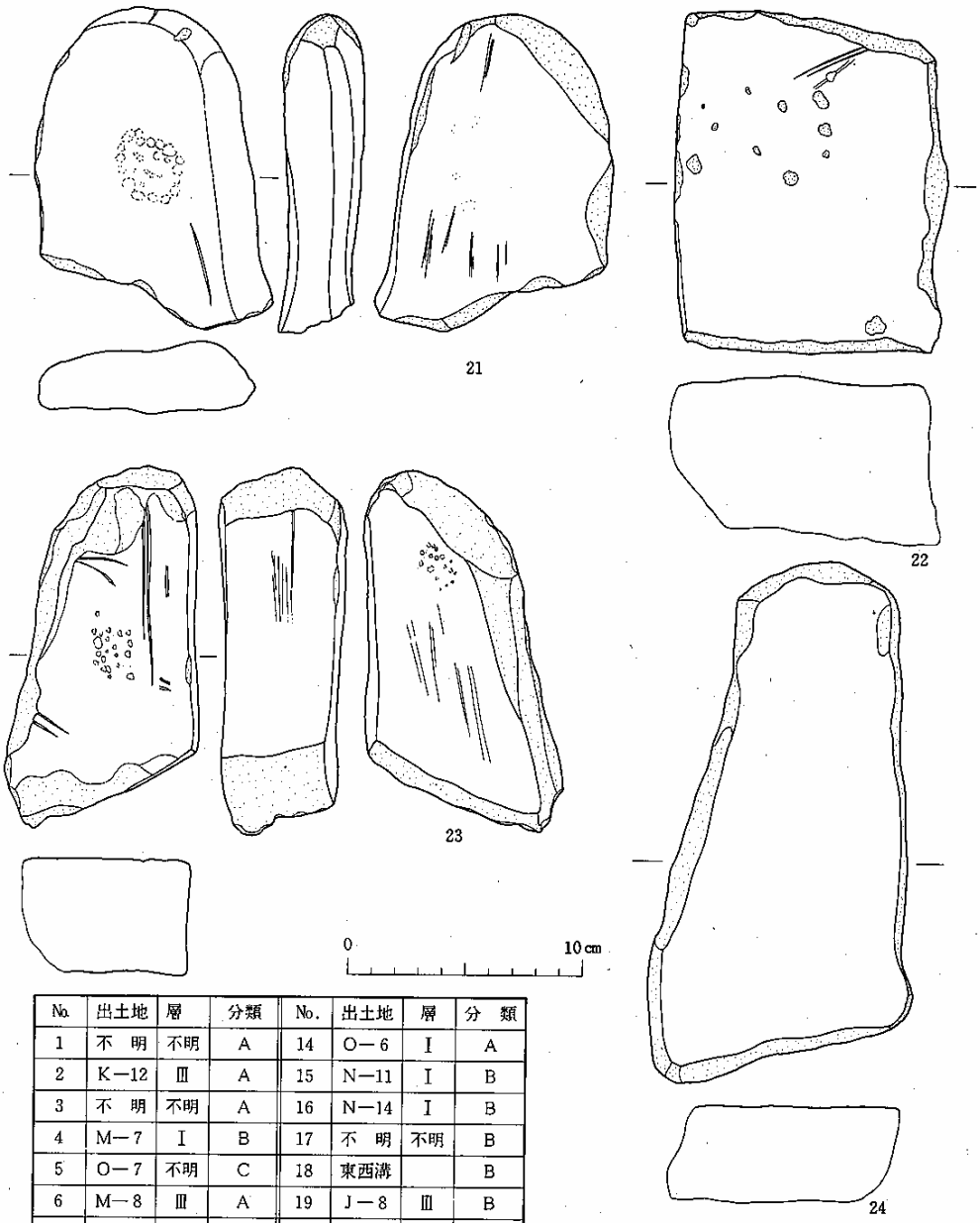
また、B類の粗砥的なもの、C類の中には敲打痕が観察され、砥石以外にも利用された可能性もある。

これらの砥石は堆積土第Ⅰ層（表土）・遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層・東西溝で平安時代（表杉ノ入式）の土器と伴って出土していることから、平安時代のものと考えられる。



第68図　砥石Ⅰ

第69図　砥石Ⅱ



No.	出土地	層	分類	No.	出土地	層	分類
1	不明	不明	A	14	O—6	Ⅰ	A
2	K—12	Ⅲ	A	15	N—11	Ⅰ	B
3	不明	不明	A	16	N—14	Ⅰ	B
4	M—7	Ⅰ	B	17	不明	不明	B
5	O—7	不明	C	18	東西溝		B
6	M—8	Ⅲ	A	19	J—8	Ⅲ	B
7	O—7	Ⅲ	A	10	E—9	Ⅱ・Ⅲ	B
8	H—10	不明	A	21	E—9	Ⅲ	C
9	M—11	Ⅲ	B	22	東西溝		C
10	C—13	Ⅱ	B	23	E—8	Ⅲ	C
11	F—12	Ⅲ	B	23	M—8	Ⅲ	C
12	K—9	Ⅲ	A	24	F—9	Ⅲ	C

第70図　砥石Ⅲ

５．鉄製品

鉄斧と不明鉄製品が各々１点づつ出土している。

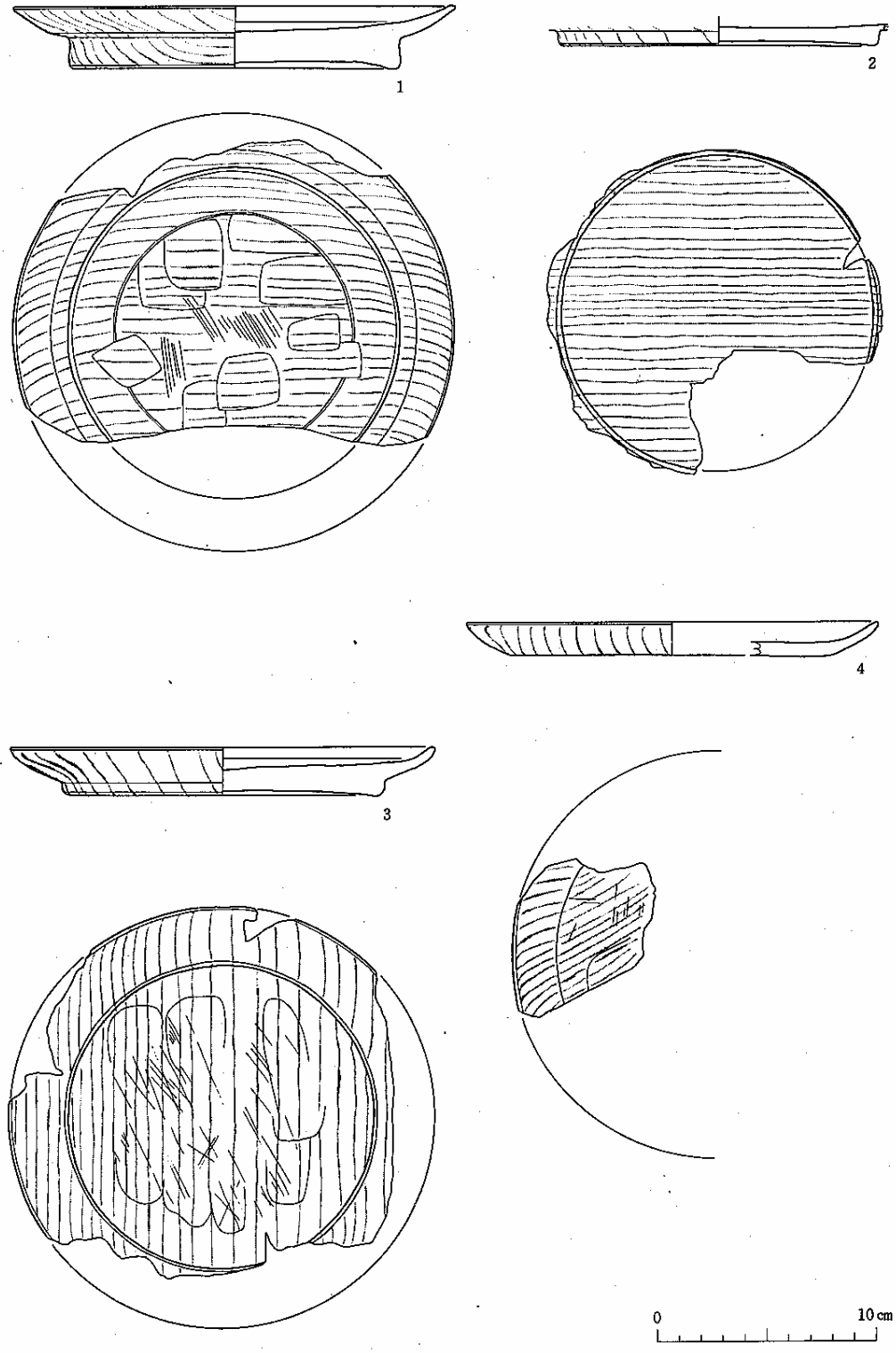
鉄斧（67図10）刃部と装着部とから成る。装着部は袋状になり、中に木質が残存している。
不明鉄製品：（第67図９）完形品である。全長約10㎝である。断面が方形を呈し、先端部近くで折れ曲がり、平たくなる。表面には銅メッキ（？がされている。

６．木製品

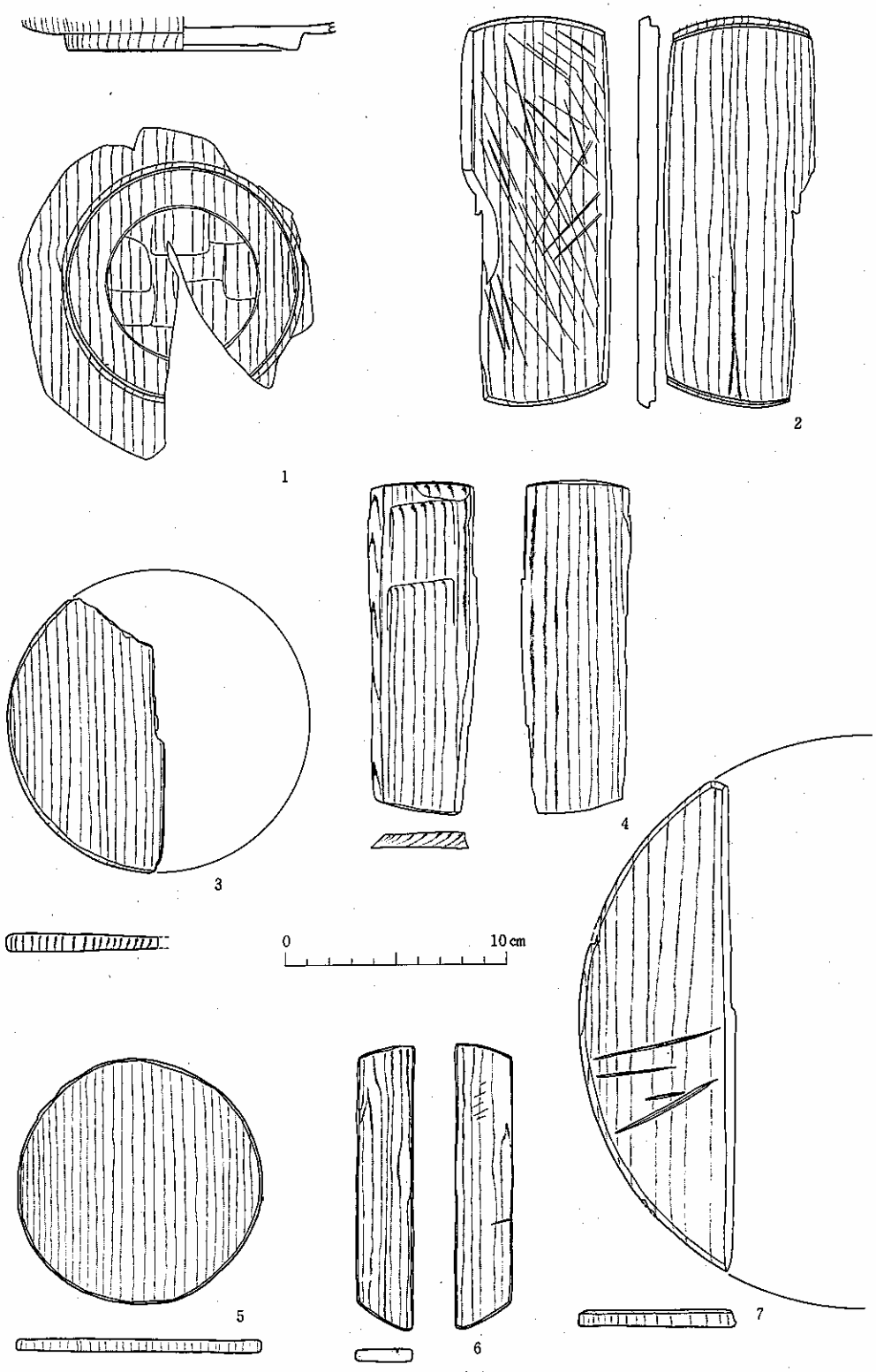
盤・曲物容器・不明木製品がある。これらは東西溝出土のものである。

盤（第71図１～４・72図１）５点出土している。征目板をロクロ挽きで成形した円形の盤である。器の内・外面をロクロで挽き、短い口縁部を外側に開くようにしている。その後、内・外面にはケズリの整形が施されている。
１・３は保存状態が良く、１の口径は20㎝、３は19.5㎝で器高は１が2.9㎝、３が2.2㎝とほぼ同じ大きさである。２は口縁部が欠損し、４は残存部分が少なく口径は不明であるが、器高は1.5㎝と低い。底部の厚さは１が1.5㎝、３が1㎝、２が0.6㎝、４が0.1㎝、72図１が0.8㎝である。
４以外の底部は中央部がやや凹状になり低い高台が挽き出されている。底部の縁辺のみロクロ挽きで削り出され、中央部は削り取られ整形されている。１の底部外面には「〇」の焼印がみられる。高台の径は１が15㎝、３が14.5㎝、２が14.5㎝、72図１が10.5㎝である。
いずれも底部外面にはロクロの爪痕は認められない。

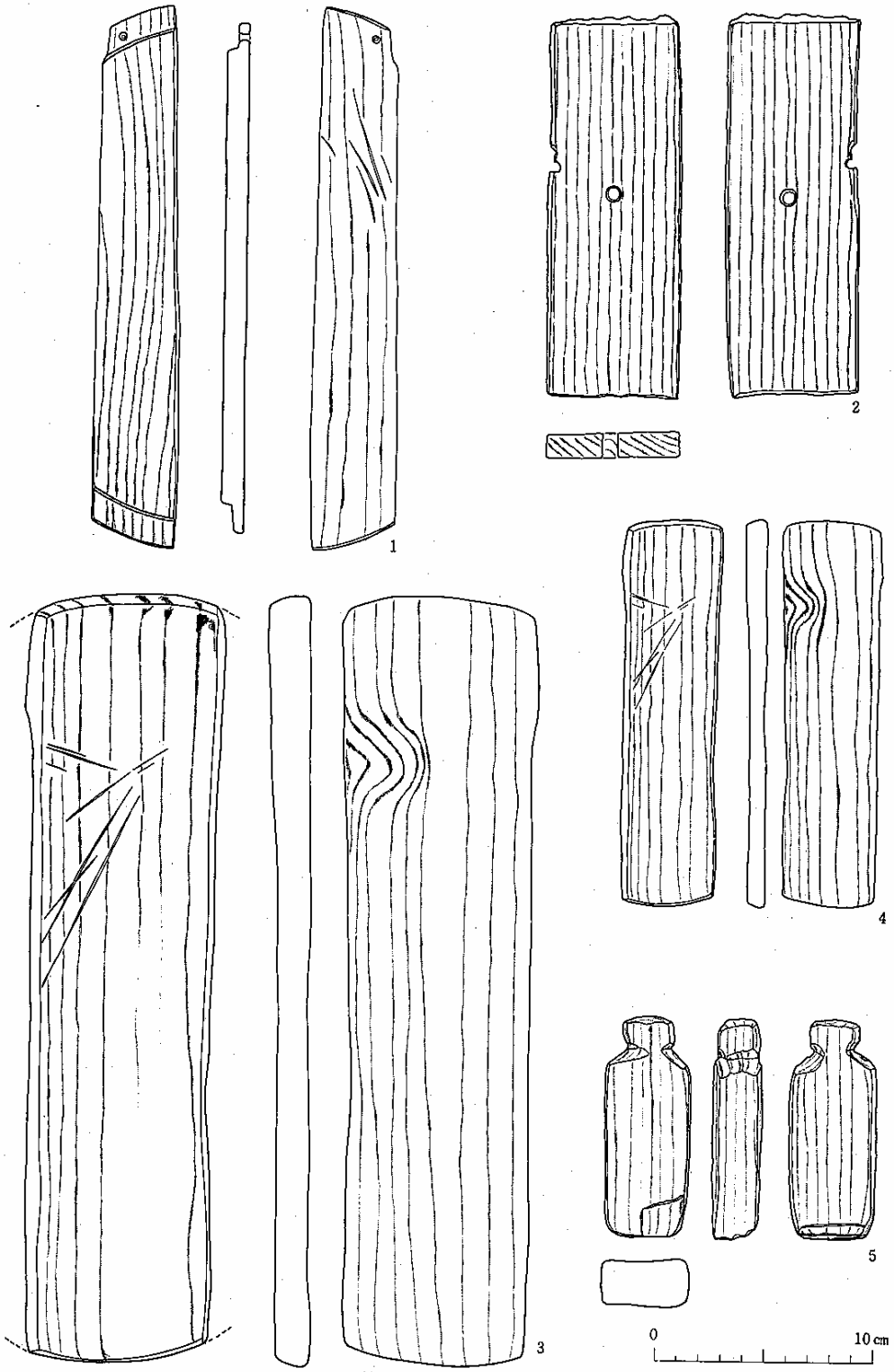
曲物容器（第72図２～７・第73図１～４）曲物容器全体を窺えるものはなく、そのほとんどが底板のみで、一部分ではあるが曲物側板が出土している。
底板は８点出土している。薄い板状の征目材・板目材を利用し、円形に切断して成形したものである。２には成形した後、削りの整形が施された痕跡がみられ、また、７には擦痕がみられる。征目材を利用したものは２～５、７、73図２の６点でその他は板目材を利用したものである。５はほぼ完形品で直径が11.2㎝ある。また、３は半分が欠損しているが５とほぼ同じ大きさのものである。その他は欠損部分が多く、径の大きさを知り得るものはない。



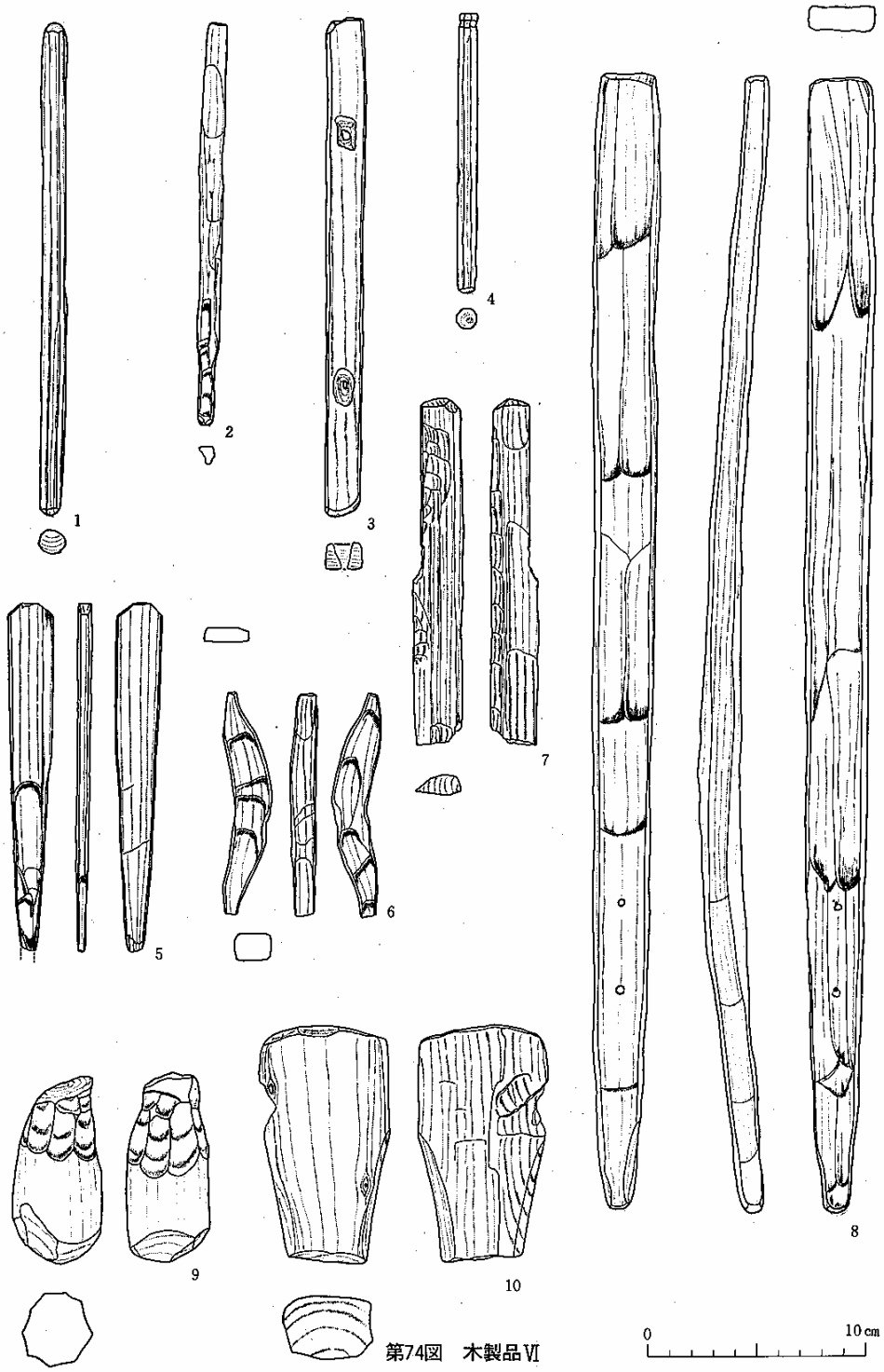
第71図　木製品Ⅰ



第72図　木製品Ⅱ



第73図　木製品Ⅲ



第74図　木製品Ⅵ

73図１の縁辺には段がつくようう に削られており、さらに曲物側板を取り付けるための木釘孔が２か所にみられる。５の側線には側板をとめる木釘が１本残存している。
また、曲物の側板の一部がある。征目板を利用したもので、反り曲がっている（小破片のため図示できなかった）。

不明木製品（第73図５・第74図）全部で12点出土している。木材を木理方向に割り裂いて板状にして利用したものと棒状に削りあげて利用したものとがある。
　これらの木製品には加工・整形の痕跡が認められるがその使用目的等については不明な点が多い。

板状のもの（第73図２、５、第74図）第74図５・７は割り裂かれた板材の両端を切断して加工しているものである。５は完形品で一方の端部に向かって序口に細くするように削り出し、先端を突がられている。
もう一方の端部は３方向からさらに切断され山形を呈するようにしている。先端部に近い所には切り込みが２か所みられる。表裏両面は削りの整形がされている。長さは16㎝、幅は２㎝、厚さ0.6㎝である。
　このような形態の木製品は「削掛け」と称され、祭祈具の一つと考えられている。
７は一部欠損している。表裏両面は削りで整形され、途中、片側の縁辺を薄くするよう削られている。用途は不明である。
第73図２は欠損品である。木理に沿って割られている。両端は切断されているが、切断の方法は両端では違い、ノコ挽きと打ち割による。表裏両面は粗い削りで整形されている。残存部のほぼ中央部には径0.8㎝の孔が穿たれており、また、欠損部の縁辺に孔の一部が認められる。
10は木の幹の両端をノコ挽きによって切断し、半載したものである。長さが11㎝である。割り裂かれた面はさらに削りの整形が施されているが、反対側の面は皮を削いだままである。両側辺の一部は削られ、幾分細くされている。用途は不明である。
第73図５は厚い板材を打ち割りによって切断し、片側の端部近くに玦りが入れられている。長さは、10㎝、幅は４㎝、厚さは２㎝である。用途は不明である。
３・８は角材を利用したものである。３は削りで整形されている。長さ23㎝、幅1.8㎝、厚さ1.2㎝である。２か所に径１㎝の孔が一方から穿たれている。紡織具の一つである糸巻の枠木の可能性がある。
８は長さ52㎝と長いものであるが一方の端は細くされ、突かるようにしている。各面は削りで整形されている。先端部はやや反りが入っている。反りの方何と逆の面には径0.3㎝の孔が一方

から穿たれ、反対側の面にわずかに貫通している。用途は不明である。

棒状のもの（第74図１．２．４）木片を小割にし、棒状に削ったものである。
径0.7㎝～１㎝に丸く削りとって成形したものである。長さは１が22.5㎝、２が18.5㎝、４が12.5㎝である。２の先端都は削られ細くなっている。４の端部に近いところに玦りが入れられている。これらの用途は不明であるが、２は箸の可能性があり、４は紡織具の一部の可能性がある。

７．動物遺存体

馬（図版23－13）Ｎ－12、Ｅ－５、４層上面から舌側を下面としてほぼ横位の形で左下顎骨が１点、単独で出土している。

遺存状態は不良で、下顎技はほとんど、下顎体も下顎歯周辺を除いては失なわれているため下顎骨全体の規模などは明らかでない。しかし、下顎歯は比較的良く残っており、第１～第３門歯、第２前臼歯～第３後臼歯が歯列に沿う形で残存している。第２前臼歯～第３後臼歯の歯列長は170.4㎜である。

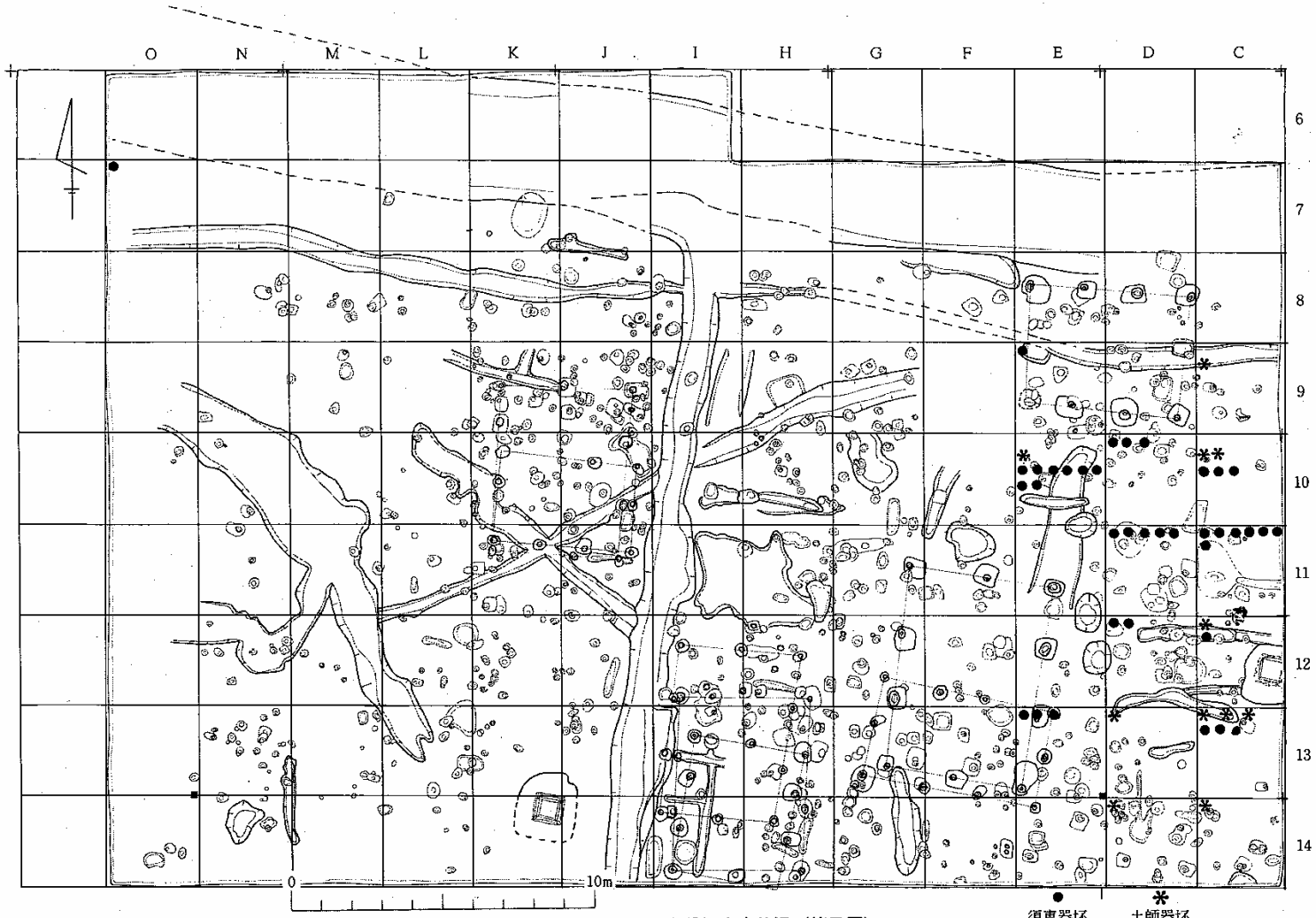
Ⅷ．出土土器の検討

１．出土土器の特徴と分類

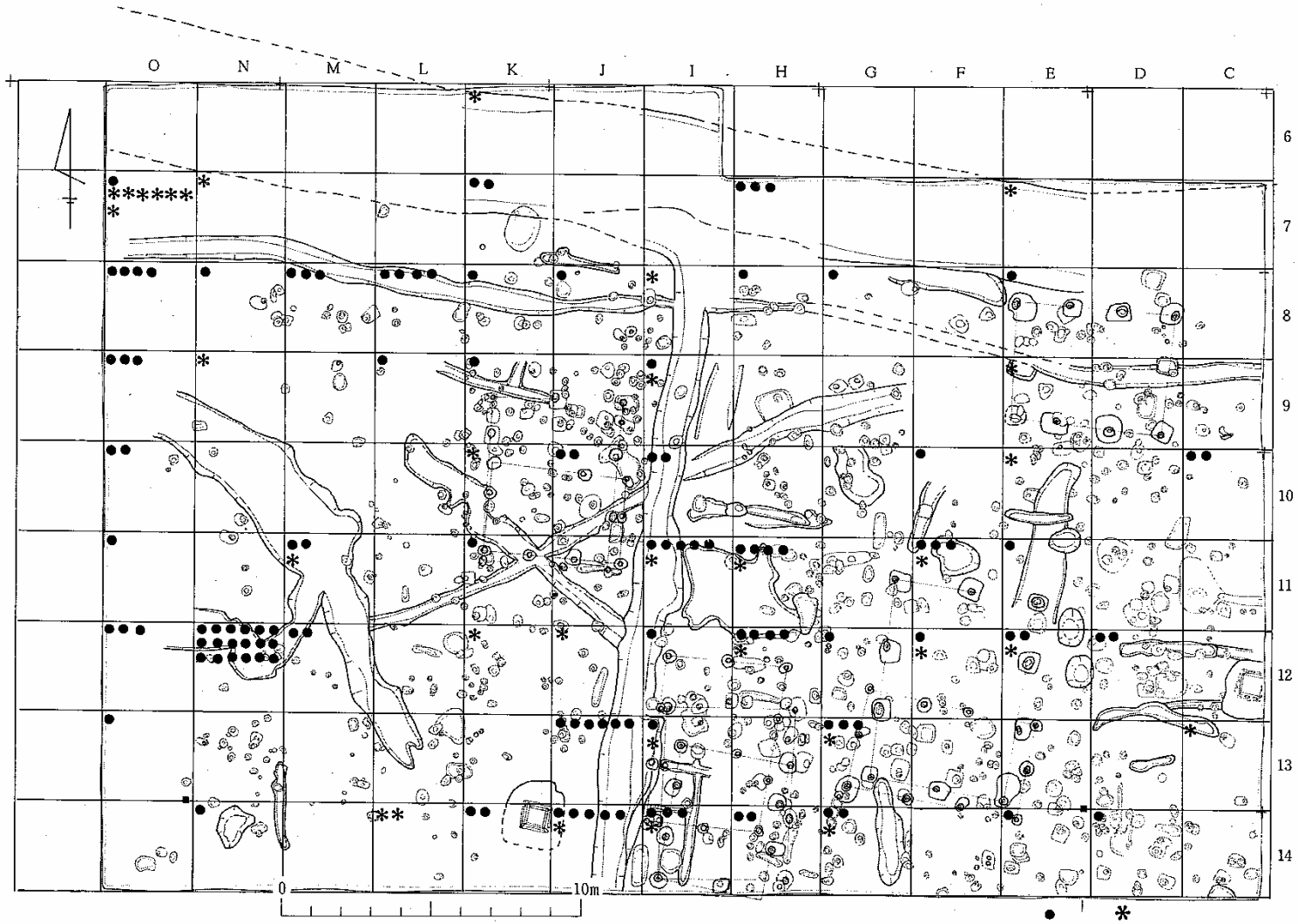
今回の調査で出土した土器には土師器（坏、高台付坏、高坏、盤、蓋、耳皿、甕）、須恵器（坏、高台付坏、高坏、蓋、壺、甕）、赤焼土器坏、小皿、灰釉陶器（壺、皿）、緑釉陶器皿がある。

この中で須恵器の出土量が最も多く、次いで土師器が多い。赤焼土器・灰釉陶器・緑釉陶器は僅少である。器種についてみると、土師器・須恵器とも坏が最も多く、出土した土器（図示したもの）の中で約70％を占めている。次いで甕が多いが、坏と比較すると圧到的に量は少ない。中でも土師器と須恵器とで比較すると１：２で須恵器甕が主体を占める。須恵器甕は破片数は多いが、直接的な接合ができないものが多く、個体数を抽出することはできないが、坏に比べてやはり少ない傾向にある。

これらの土器は、堆積土中、溝、土壙、井戸跡、ピット等の遺構内から出土している。特に堆積土中からの出土が多く、遺物包含層第Ⅱ層・第Ⅲ層からの出土量が最も多い。その中で、



第75図　土師器坏・須恵器坏出土状況（第Ⅱ層）



第76図　土師器坏・須恵器坏出土状況（第Ⅲ層）

● 須恵器坏　＊ 土師器坏

遺物包含層第III層出土の土器が図示したものだけでも全体の50%を占めるほどである。

遺物包含層第Ⅱ層、III層出土土器の出土状況については後述するが、出土状況は、第75、76図に示したとおりになり、これは層の拡がりと深く関係していることは言うまでもない。（坏に限った分布図だが、他の器種についても同様なことが言える。）

次に各土器自体の特徴について述べ、その特徴がいくつかのまとまりになり、しかも個体数が多いものについて分類していきたい。

土師器

土師器には坏・高台付坏・甕・高坏・蓋・耳皿・甕の器種がある。この中で坏が最も多く、図示したものの総数は234点ある。したがって坏が土師器の主体を占める。

〈坏〉

須恵器坏に比して出土個体数は圧倒的に少ない。図示したもの61点、底部の破片数（個体数がある程度算出できると考える）143点で計204個体が出土した。

遺物包含層第Ⅱ・III層出土のものが主体を占める。口縁部から底部内面にはヘラミガキ・黒色処理が施されている（中にヘラミガキのみ観察され、黒色が不明なものもある）。

製作技法の相違により、大きく２つに分類される。つまり、製作に際し、ロクロが導入されていないものとロクロが導入されているものである。前者をA類、後者をB類とする。各類はさらに器形の差異により細分することができる。以下、各類の特徴を記していく。

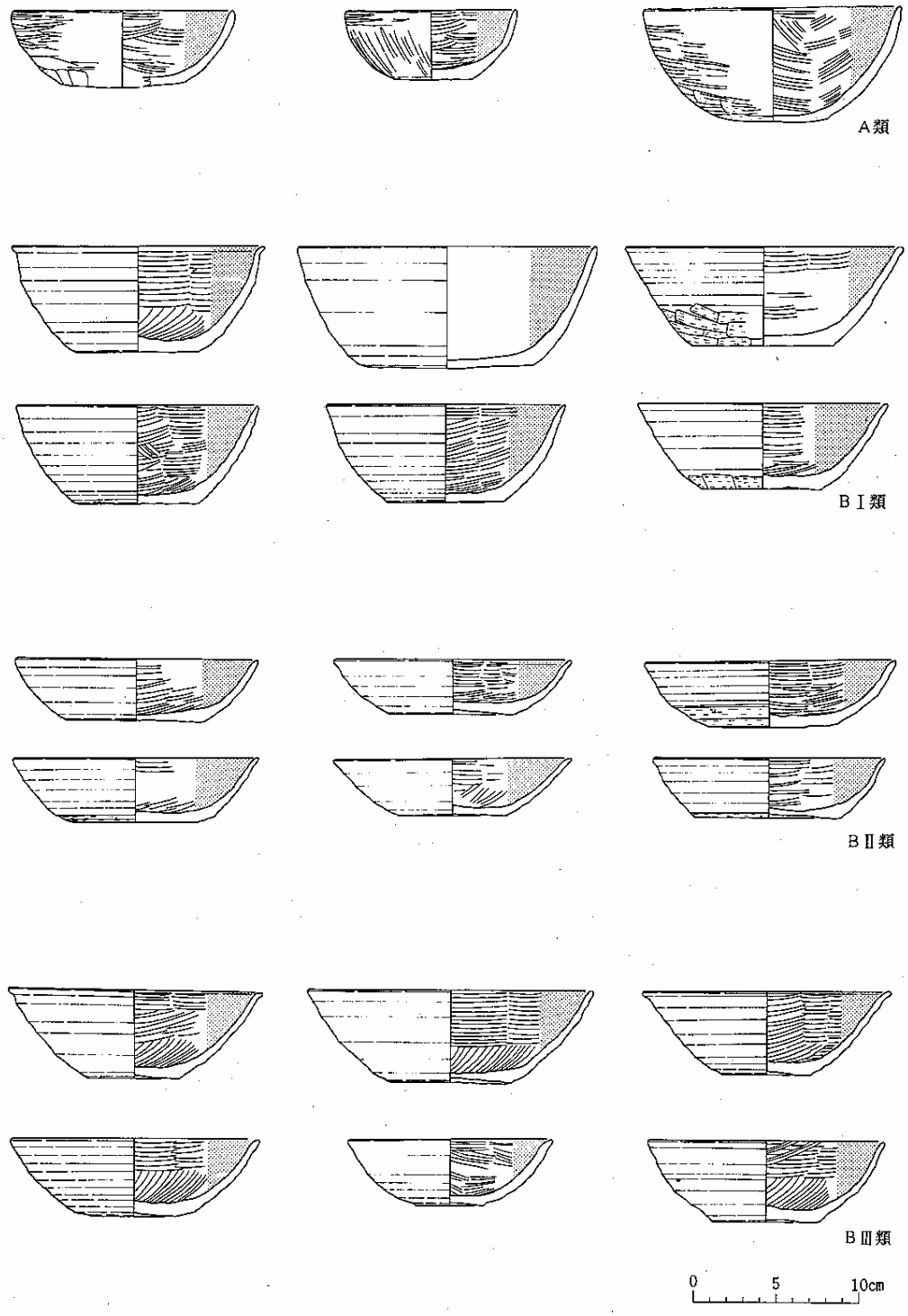
A類：製作にロクロを使用していないグループである。表土から１点、遺物包含層から５点出土し、６個体と少なく、個体数では土師器坏の主体を占めるものではない。

主に体部の形態の特徴により２つに細分できる。内面のヘラミガキの方向は各々一定しない。

ＡⅠ類―底部が丸底状を呈し、体部外面に段を形成する。遺物包含層第III層から１点のみ出土している。欠損している部分が多く、全体の器形は知り得ない。体部から底部外面にヘラケズリが施されている。

ＡⅡ類―底部は平底のものと第42図３のような丸底気味なものがあり、口縁、体部が内弯して立ち上がる。中には口縁部がやや直立気味のもの（第32図１・第42図２）もある。第32図１以外は器高が大きい。器の厚さは全体的に厚い傾向である。

器面の保存状態が良いものは口縁部から底部外面はヘラケズリの後ヘラミガキが施されてい



第77図　土師器坏 分類図

る。

B類：製作にロクロを使用しているグループである。口縁部から体部内・外面にはロクロ目、ロクロナデの痕跡が観察される。特に内面ではヘラミガキの調整が加えられ、外面ほど顕著でない。底部外面にはロクロから切り離した痕跡がみられる場合とヘラケズリの調整で痕跡がみられなくなる場合がある。

これらはロクロを使用し、内面にはヘラミガキ・黒色処理の調整が施されている点で共通しているが、法量・器形の差異により３つに細分できる。

ＢⅠ類―器高（6㎝～8㎝）、底径（7㎝～8㎝）が大で、口径に対して器高・底径の占める割合が各々40%、50%前後のものである。この中には比較的大形のものもある。口縁、体部がやや丸味をもって立ち上がり、体部の傾き度合が小さい。器の厚さは全体的に厚い。口縁部形態によりさらに２つに分かれる。口縁部がそのまま立ち上がるもの（1）と外反するもの（2）である。これらの土器の外面の調整、底部に残る切り離し痕をみると次のようになる。

ａ：製作の最終段階の器面調整として手持ちヘラケズリが施されるもので、底部に回転糸切りの痕跡か残るもの（ａｉ）と調整が底部全域に及んで切り離し痕跡が残らないもの（ａii）とがある。

ｂ：回転ヘラケズリの調整が底部全域に及んで切り離し痕跡が残らないもの。

ｃ：調整が全く施されないもので、底部に静止糸切りの痕跡が残るもの（ｃｉ）と回転糸切りの痕跡が残るもの（ｃii）とがある。内面のヘラミガキの方向は、口縁部～体部が横方向で、底部が放射状のものと不定のものとがあり、後者が多い。

本類においてａiiとｂが主体を占める。

ＢⅡ類―器高が他の類に比較して３㎝～４㎝と小さく、底径が７㎝～９㎝と大きいもので、口径に対して器高の占める割合が30%以下で底径が占める割合が50%以上であり、底径が比較的大きく、扁平なものである。大きさは各々ほぼ同じ位である。

口縁、体部はやや丸味をもって立ち上がり、体部の傾き度合が大きいものである。

口縁部の形態により２つに分けられる。口縁部がそのまま立ち上がるもの（1）とやや外反するもの（2）である。

これらの土器の外面の調整、底部に残る切り離し痕跡は次のようになる。

ａ：手持ちヘラケズリの調整が施されているもので、底部に回転糸切りの痕跡が残るもの（ａｉ）と調整が底部全域に及び、切り離しの痕跡が残らないもの（ａii）とがある。

ｂ：回転ヘラケズリの調整が施されているもので、底部に回転糸切りの痕跡が残るもの（ｂｉ）と調整が底部全域に及び、切り離しの痕跡が残らないもの（ｂii）とがある。

ｃ：調整が全く施されないもので、底部にヘラ切りの痕跡が残るもの（ｃｉ）と回転糸切りの痕跡が残るもの（ｃii）とがある。

内面のヘラミガキの方向は口縁部が横方向、底部が放射状のものと方向が不定なものとがあり、後者が多い。

本類においてはｂiiが主体を占める。

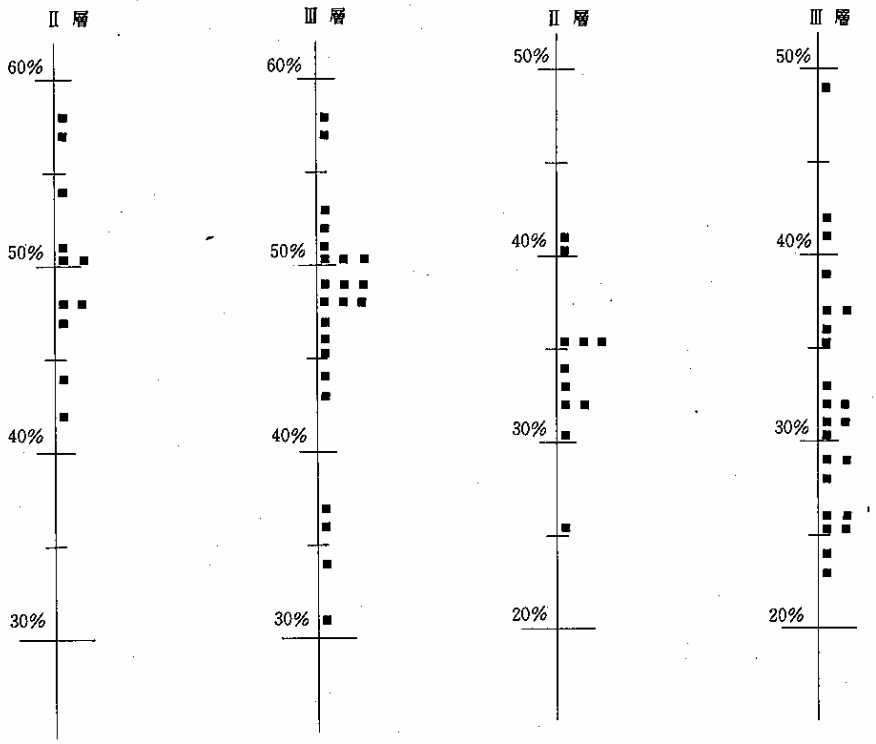
BⅢ類―器高が５㎝～６㎝とＢⅡ類に比して大きく、底径が４㎝～６㎝と小さいもので、口径に対して底径の占める割合が40%以下のものである。口縁・体部が丸味をもって立ち上がるが、中には直線的に外傾するものもある。体部の傾き度合は大きい。器の厚さは全体的に薄い。

口縁部の形態により２つに分けられる。口縁部がそのまま立ち上がるもの（1）と口縁部が外反するもの（2）である。

これらの土器の外面調整、底部に残る切り離しの痕跡は次のようになる。

ａ：手持ちヘラケズリが底部全域に及んで切り離しの痕跡が残らないもの。

ｂ：調整が全く施されず、底部に回転糸切りの痕跡が残るもの。



第78図　土師器坏口径と底径の比〈口径：100〉　第79図　土師器坏口径と器高の比

内面のヘラミガキの方向が口縁部は横、斜方向で底部が放射状のものと方向が不定なものがあるが前者が多い。

本類ではbが主体を占める。

〈高台付坏〉

製作にロクロを使用している。底部に高台を貼り付けたものである。坏に比して数は少なく図示したものは４点である。

図示した４点の内、全体の器形が窺えるのは第44図７の１点のみで、他は坏部のみ残存しているもの、体部の一部と高台のみが残存しているものである。坏部口径が13㎝前後で小形品である。第44図７の器高は3.3㎝と低く、坏の口縁・体部は直線的に外傾する。その他、坏部が残存しているものは体部が直線的に外傾し、口縁部が外反する。体部の傾き度合はいずれも大きい。高台はあまり外にふんばらない。

坏部内面はヘラミガキ・黒色処理されているが、ヘラミガキの方向がわかるものではその方向は不定である。

〈鉢〉

遺物包含層第Ⅱ層・第Ⅲ層から各一個体ずつ出土しているのみである。製作にロクロを使用している。底部には低い高台が貼り付けられている。

全体の器形が窺えるのは第37図１で器高は4.4㎝と低く、口径は18.4㎝と大きい。坏部は、底部から体部にかけてやや丸味を帯びながら緩やかに立ち上がり、途中、屈曲して口縁部に至る。口縁部はそのまま外傾する。内・外面にはヘラミガキの痕跡がみられる。

〈高坏〉

脚部の一部が１点遺物包含層第Ⅱ層から出土している。裾部がややひろがる。側面は６つに面取りされている。中は径２㎝の空洞になっている。

〈壺〉

遺物包含層第Ⅲ層からわずかに２点出土しているにすぎない。

口縁部の一部のみが残存していたので全体の形状は不明であるが、口縁端部はわずかに下方へ折れ曲がる。内、外面ヘラミガキ、黒色処理と内面のみヘラミガキ、黒色処理のものとがある。

〈耳皿〉

遺物包含層第Ⅱ層から２点出土している。高台を付けて、坏部を両方から内側に折り曲げ耳にしている。内、外面ともヘラミガキ、黒色処理している。

〈甕〉

図示できたのは13点のみで少ない。

製作にロクロを使用していないものと使用しているものとがある。前者をA類、後者をB類とする。

甕A類：図示したものは土壙10から２点、第１井戸跡掘り方埋土から２点、遺物包含層第Ⅱ層から１点出土している。

口縁部から底部まで残存しているものはない。第31図２以外は口縁部から体部の一部が残存している。口縁部は外反し、長胴形を呈する。第31図2は底部付近まで残存しているもので、体部は底部に近くなるにつれすぼまり、砲弾形を呈するようになる。

内外面の器面調整は口縁部の内、外面は横ナデ、体部外面は刷毛目のものと縦方向のヘラケズリのものとがある。内面は刷毛目のもの、ヘラナデのものとがある。第37図5の底部にはむしろ状の圧痕跡が残っている。

甕B類：図示できたものは、遺物包含層第Ⅲ層から５点、整地層の第Ⅳ層から１点、南北に走る溝から１点、ピット105から１点出土している。口縁部から底部まで残存しているものは少ない。器高が15㎝前後の小形のものと大形のもの（残存部分が少なく器高は計り得ない）。

小形品の口縁部は外反し、第44図10のように端部が上方に突き出ているものもある。体部が大きく張り最大径が体部にあるものとあまり張らず、最大径の位置が口縁部にあるものとがある。ロクロから切り離した後、体部下半に縦方向のヘラケズリを施す場合もある。中には底部に回転糸切りの痕跡が残存している。

大形品は口縁部が外反し、第45図１のように端部が上・下に突き出されているものもある。体部は膨らむものとあまり膨らまないものとがある。体部外面には縦方向のヘラケズリが施され、内面にはナデが施されている場合もある。器の厚さはA類に比して薄い。

須恵器

須恵器には坏、高台付坏、高坏、蓋、壺、甕の器種がある。ここで甕としたものの中には口

径と器高がほぼ同一のものがあり、鉢形を呈するものが含まれている。

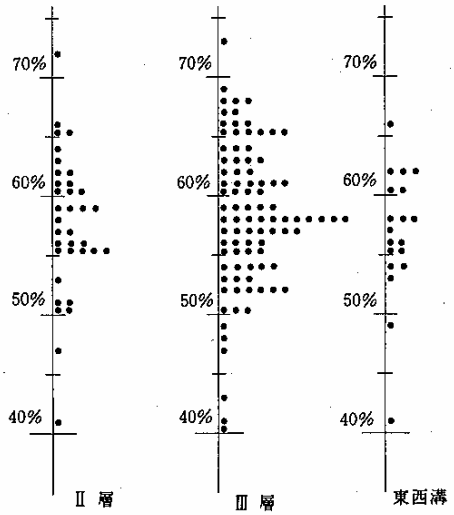
この中で坏が最も多い。

〈坏〉

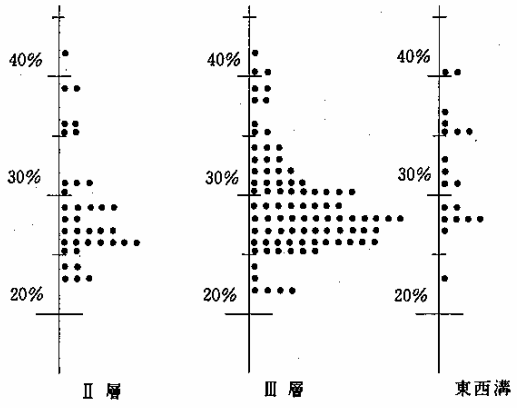
土師器等各種の土器、また各器種の中で最も出土個体数が多い。図示したもの234点、底部の破片数503点、計737個体分が出土した。各堆積土中、遺構から必らずと言ってよいほど出土しているが、遺物包含層第Ⅱ層・第Ⅲ層出土のものが圧倒的に多い。これらの坏は法量の大、小、器形の差異、外面調整と底部に残る切り離し痕跡等の特徴により大きく４類に分かれる。以下、各類の特徴を記していく。

A類―口径が10cm前後の小形品である。器高・底径は大きく、口径に対して器高の占める割合が40%前後、底径の占める割合が60%以上のものである。底部形態には、丸底状を呈するもの（Ⅰ）が多いが、平底（一部上げ底）のもの（Ⅱ）もある。底部から体部にかけてやや丸味をもって移行し、体部は外傾する傾き度合は小さい。

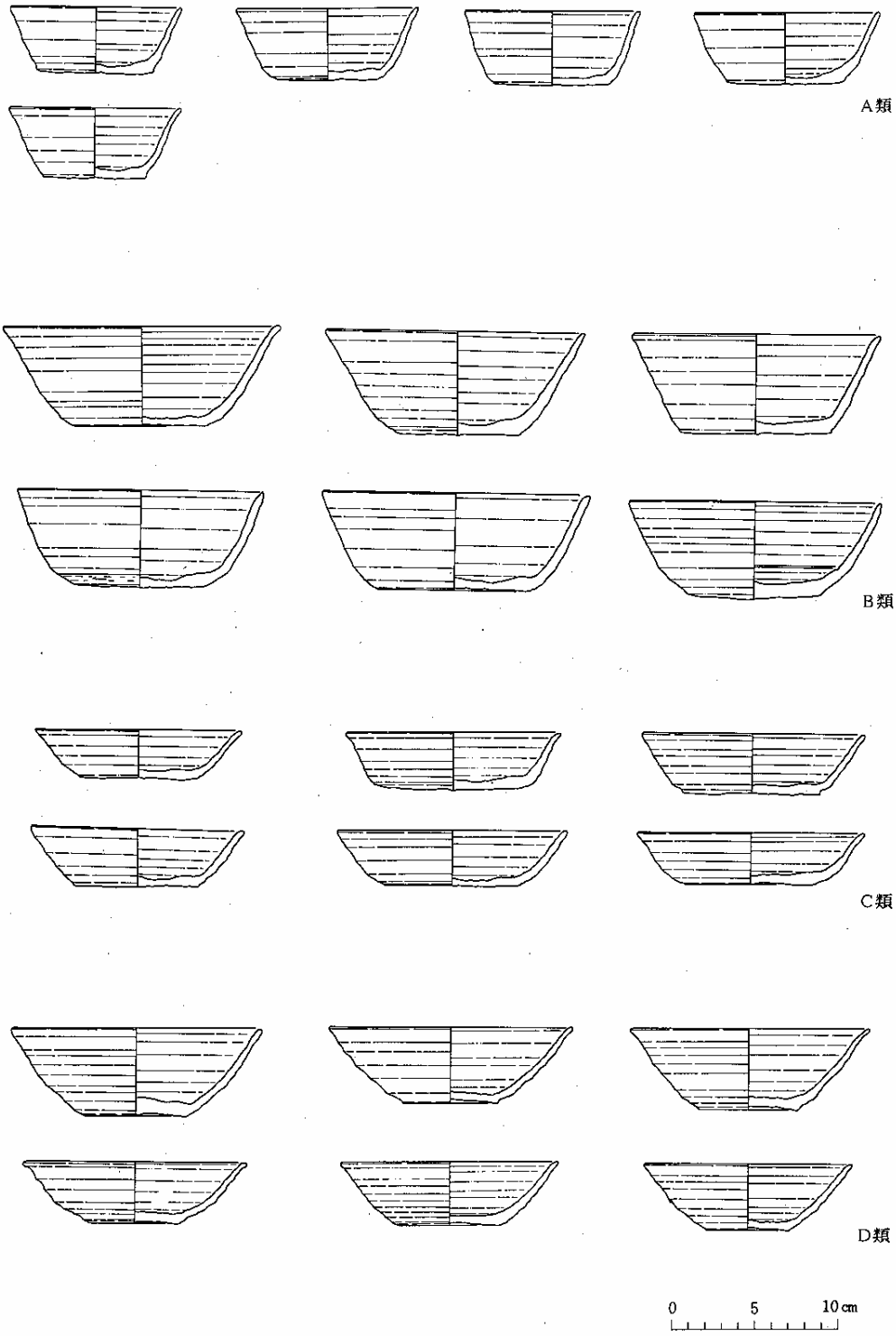
口縁部形態には２つのタイプがある。ひとつは口縁部がそのまま直線的に外傾するもの（１）であり、もうひとつは口縁部が外反するもの（２）である。



第81図　須恵器坏口径と底径の比〈口径：100〉



第82図　須恵器口径と器高の比



第80図　須恵器坏分類

これらの土器の口縁・体部内・外面にはロクロによる凹凸、あるいはロクロナデが観察され、ロクロによる器体の凹凸は全体的に激しくない。器体を成形した後の外面調整はいずれの土器にもみられず、底部には回転ヘラ切りで切り離した痕跡が全ての土器に残っている。

B類―口径が14㎝～17㎝でA類に比して大きいものである。口径・底径が大きく、口径に対して器高が占める割合が40%前後、底径の占める割合が55%以上である。底部形態は丸底（Ⅰ）、丸底状平底（Ⅱ）、平底（Ⅲ）と様々である。底部から体部にかけてやや丸味をもって移行するのがほとんどであるが、角度をもって移行するのもある。口縁、体部は直線的にまたやや丸味をもって外傾するが、その傾き度合は全体的に小さいがやや大きいのもある。

口縁部形態には口縁部がそのまま立ち上がるもの（1）と、口縁部がやや外反するもの（2）とがある。

これらの土器の口縁・体部内・外面には、ロクロによる凹凸・ナデが観察され、A類と同様凹凸が激しくないのが多い。

器体を成形した後、外面の調整・底部に残る切り離し痕跡には次のような種類がある。

ａ：調整が全く施されず、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの（ａｉ）と回転糸切りの痕跡が残るもの（ａii）とがある。

ｂ：手持ちヘラケズリの調整が底部全域に及んで切り離しの痕跡の残らないもの

ｃ：回転ヘラケズリの調整が施され、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの

本類の中では（ａｉ）が主体を占める。

C類―器高が３㎝～４㎝と低いのに対して底径が大きいものである。口径に対して器高の占める割合が30%以下、底径の占める割合が50%以上の扁平な感のあるものである。

底部形態には丸底状平底のもの（Ⅰ）と平底のもの（Ⅱ）とがあり、後者の方が多い。

底部から体部にかけてやや丸味をもって移行するものと角度をもって移行するものとがある。

口縁・体部は直線的、あるいはやや丸味をもって外傾するがその傾き度合は大きい傾向である。

口縁部形態には口縁部がそのまま立ち上がるもの（1）と外反するもの（2）とがある。

これらの土器の器体の内、外面にはロクロによる凹凸・ナデがみられ、凹凸は全体的に激しくないが、中に顕著なものもある。

器体成形後、外面調整・底部に残る切り離し痕跡の種類には次のようなものがある。

ａ：調整が全く施されず、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの（ａｉ）と回転糸切りの痕跡が残るもの（ａii）とがある。

ｂ：手持ちヘラケズリの調整が施され、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの（ｂii）、回転糸切

りの痕跡が残るもの（ｂii）と調整が底部全域に及び、切り離し痕跡が残らないもの（ｂiii）とがある。
ｃ：回転ヘラケズリの調整が施され、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの（ｃｉ）、回転糸切りの痕跡が残るもの（ｃii）、静止糸切りの痕跡が残るもの（ｃiii）とがある。
本類においてａｉが主体を占める。

D類―底部が5.5㎝～７㎝と小さく、口径に対して底径の占める割合が50％以下のものである。底部形態は全て平底（上げ底のもある）である。
底部から体部へは角度をもって移行する。口縁・体部はやや丸味をもって立ち上がるものと直線的に外傾するものとがあり、傾き度合は大きい。
口縁部形態には口縁部がそのまま立ち上がるもの（１）と口縁部が外反するもの（２）とがある。これらの器体の内、外面にはロクロによる凹凸、ナデがみられ、凹凸は他の類と比較して顕著である。
器体成形後の外面調整、底部に残る切り離し痕跡には次の種類がある。
ａ：調整が全く施されず、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残るもの（ａｉ）、回転糸切りの痕跡か残るもの（ａii）とがある。
ｂ：手持ちヘラケズリの調整が施されており、底部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。
本類における主体はａiiである。

〈高台付坏〉
坏に比して非常に少ない。図示できたものは、表土から１点、遺物包含層第Ⅱ層から２点、第Ⅲ層から16点、低湿地層の第Ⅴ層から２点、東西溝から３点計24個体分である。
坏部と高台部とから構成され、高台部は底部に貼り付けられている。中には高台が剥落して接合部分の痕跡のみとどめているのもある。
坏部器形（法量も含め）の差異、高台部の形態・傾き具合等の差異により分類できる。以下、各類の特徴を述べる。

A類：坏部―体部下方、もしくは中央部で屈曲し、体部外面に稜を形成する稜埦である。
体部が著しく屈曲し、鋭い稜を形成して稜の上方が直線的に外傾するもの（Ⅰ）とあまり屈折せず、不明瞭な稜を形成して稜の上方が外反するもの（Ⅱ）とがある。
高台部―残存しているものは外にふん張り、端部は外反する。
器体成形後、外面の調整は施されず、底部には高台貼り付け時におけるナデ調整のため切り

離し痕跡が観察されるのはない。

B類：坏部―器高が小さく、それに対して底径が大きく、扁平な感のものである。
底部から体部にかけて角度をもって移行し、口縁、体部は直線的に外傾するもの、丸味をもって立ち上がるものがあり、傾き度合は大きい。
高台部―高台は短かくあまり外にふん張らない。
器体成形後、外面の調整には底部に回転ヘラケズリが施されるものと全く調整が施されないものがあり、これらには底部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。

C類：坏部―器高が大きく、口径に対して器高の占める割合が大きい。
底部から体部にかけて丸味をもって移行し、口縁・体部が丸味をもって立ち上がる。中には口径17㎝と大形のものもある。口縁部がそのまま立ち上がるもの（１）とやや外反するもの（２）とがある。
高台部―高台部は高いものと低いものとがあり、外にふん張る。
器体成形後、外面調整には高台を貼り付ける時のロクロナデの痕跡がみられる。いずれの土器にも底部に回転ヘラ切りの痕跡が残る。

D類：器高が低く、体部の傾き度合が極めて大きく皿状を呈するものである。口径が12㎝と小形である。高台部は低く、あまり外にふん張らない。底部には回転糸切りの痕跡が残るが、高台周辺に貼り付け時におけるナデがみられる。

E類：欠損している部分が多く、全体の器形を知り得ない。口縁、体部は丸味をもって立ち上がる。体部外面には双耳が貼り付けられている双耳坏である。

〈高坏〉
遺物包含層第Ⅲ層から２点、低湿地層第Ⅴ層から１点のみ出土している。いずれも欠損部分が多く、脚部の一部のみが残存しているにすぎない。第62図10は坏部と脚部の接合部がわずかに残っており、脚部の裾は開く。また第56図１・２の脚部の頂端には回転糸切りの痕跡が残り坏部が剥落した状態を示している。

〈壺〉
図示したものは表土から１点、遺物包含層第Ⅱ層から４点、第Ⅲ層から26点、第Ⅳ層から１

土壙１から２点計34点である。ほとんどが破損であり、特にツマミ部が剥落して残存していないのが多い。ツマミ部が残存しているものには、その形態が宝珠状を呈するもの、ツマミ頂部がなだらかな凸状を呈するもの、ツマミ頂部の中心部がやや凸状を呈しているもの、ツマミ頂部が凹状を呈するものと大きく４種類あるが、中でも頂部が凹状を呈するものが多い。これらの蓋で、口縁部内面にはかえりが付くものはない。口縁端部形態により、いくつかに分類ができる。

A類：口縁部は外反し、端部はやや内側に折れ曲がるものである。破損部分が多く全体の形状は不明である。天井部外面に回転ヘラケズリの調整が施されているものもある。

B類：口縁端部がほぼ垂直に折れ曲がるもので、口縁部が外反するもの（Ⅰ）とほとんど外反しないもの（Ⅱ）とがある。破損部分が多いものがほとんどであるが、第55図３、４、８、第57図７のように口縁端部から天井部までの高さが高いものと１、６のように低く扁平なものとがある。

C類：口縁端部が外側に折れ曲がるもので、２点のみである。しかも破損部分が多く、全体の形状には不明な点が多い。第57図3の端部の内、外面には段が形成されている。いずれも天井部には回転ヘラケズリの調整が施されている。

D類：口縁端部が折れ曲がらず、そのままおさまるものである。破片で全体の形状は不明である。B類が多い。

《壺》

図示できたものは表土から２点、遺物包含層第Ⅱ層から３点、遺物包含層第Ⅲ層から７点、東西溝から２点、溝１から１点と少なく、しかも全体の形状を知り得るものはほとんどない。頸部が短かい短頸壺と長い長頸壺とがある。短頸壺には小形のもの（第27図８、第41図６）と比較的大形のものとがあり、第34図12のように把手が貼り付けられているのもある。口縁・頸部のみが残存しているのはほぼ直立している。

長頸壺は口縁・頸部のみが残存しているものと体部から底部のみ残存しているものとがあり全体の形状は不明である。頸部は外反し、口縁端部は上・下につまみ出されている。中にはそのまま丸くおさまるものもある。底部には高台が貼り付けられている。体部が残存しているものの体都下半には回転ヘラケズリが施されている。また、口縁部、頸部、体部は別個に製作さ

れ接合されている。接合部分付近の肩部には段が形成されているのもある。

《甕》

破片数は多いが図示できるものは少ない。図示したものは表土から４点、遺物包含層第Ⅱ層から３点、遺物包含層第Ⅲ層から11点、東西溝から１点、溝１から２点である。欠損品が多く全体の形状はあまり知り得ない。肩部から口縁、頸部のみが残存しているものが多い。
口縁、頸部の形態から大きく２つに分類することができる。

A類：口縁・頸部が長く、大きく外反するものである。最大径の位置が肩部、あるいは体部中央部にあるものと考えられる。大形のものと小形のものがあり、前者の方が多い。口縁端部が上・下につまみ出されているものと丸くおさまるものとがあるが、前者が多い。
口縁・頸部が肩部に接する所には接合された痕跡がみられるものもある。
頸部外面には波状文、肩部から体部には平行タタキ目、回転による刷毛目の痕跡がみられるものがあり、内面には青海波状文のタタキ目の痕跡がみられるのもある。小形のものは、体部外面下方にヘラケズリ、内面にはナデの痕跡がみられる。

B類：口縁・頸部が短かく外反するものと内傾するもの、直立するものとがあり、最大径の位置が口縁部にあるものである。体部から肩部にかけて丸味をもって外傾し、鉢形を呈するかのようである。外面には平行タタキ目、回転による刷毛目、ヘラケズリ、波状文等の痕跡がみられ、内面には回転による刷毛目がみられるもの、青海波状文のタタキ目がみられるもの等がある。

赤焼土器

ここで「赤焼土器」としたものは酸化炎焼成で焼かれ、器内面にヘラミガキ・黒色処理が施されていない土器のことで、焼成施設・焼成方法の違いから須恵器と区別し、また、内面の調整の有無により土師器と区別している。焼成方法から考えると須恵器よりむしろ土師器の範疇に入るものと思われる。「赤焼土器」の中には従来、提示されてきた「あかやき土器」、「須恵系土器」、「赤褐色を呈する土器」等といった規定内容をもつ土器を包括するものである。

表土・遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層から４点、第１井戸枠内から５点出土している。内外面の色調が赤褐色、橙色系統のものと橙色系統に灰色気味のものもある。焼き具合は堅緻なものともろいものとがある。底部内面に黒色部分が円形の範囲にみられるものもある（第33図９第39図２）いずれも口径に対して器高が低く底径が大きいもので、口縁・体部はやや丸味をもって立ち上がり、口縁部が外反するのもある（第52図４）。底部にはヘラ切りの切り離し痕がみられる。

第39図２は切り離した後、手持ちヘラケズリの調整がわずかにみられる。また、第52図４の底部はやや丸底状を呈し、底部内、外面、体部外面の一部に積み上げ痕がみられる。

また、第１井戸枠内から出土した赤焼土器は皿状を呈するもので器厚が厚く、赤褐色を呈するものと薄手で緑灰色を呈するものとがある。底部にはいずれも回転糸切りの痕跡が残る。

陶器

灰釉陶器６点と緑釉陶器２点があり、全て欠損品で残存部分が少なく全体の形状がわかるのはない。

《灰釉陶器》

図示したものは４点で皿の破片が３点、長頸壺の頸部破片が１点である。胎土は細く、硬質である。その他は壺の肩部の一部破片１点と底部の一部１点である。これらの破片の外面のみに灰緑色の灰釉がかけられている。

皿…第61図６と第63図２は底部と体部の一部のみが残存しているもので、底部には高台が貼り付けられている。灰緑色の灰釉が内面のみに薄くかけられている。第63図２には墨痕がみられる。第61図６は口縁、体部の一部が残存しているもので、体部のやや上方は屈曲し、内面に段を形成する。体部は直線的に外傾し、傾き度合は大きい。段から上の口縁部は外反する。内、外面には灰釉がかけられているが、内面では厚くかけられ、灰緑色を呈している。

壺…頸部と肩部の一部が残存している。頸部は外反する。外面全体と頸部の口縁部に近い内面には灰緑色の灰釉がかけられており、頸部外面の一部から肩にかけて厚くかけられている。

《緑釉陶器》

全て皿の破片である。胎土は白橙色で軟質なものと灰色で硬質のものとがある。内、外面には緑色、灰緑色の緑釉が厚くかけられている。中には、焼きひずみのため、黄橙色の部分が斑点状に入るのもある。

第55図10は口縁、体部の一部の破片であり、体部は丸味をもって立ち上がり、傾き度合は大きい。口縁部はやや外反する。第35図5は底部と体部の一部が残存しているもので、円盤状の粘土を貼り付け、中央部をロクロで削り、薄くして輪高台にしている。

その他、底部の小破片が１点出土している。

２．出土土器の年代と問題点

前項で各土器は様々な特徴を示し、分類された。ここでは各々分類された土器についてその製作技法・器形の差異等に着目し、年代について検討したい。

「年代」とした意味は土器の製作・使用・破棄までの時間的推移全体を含めて考えるものであるが、特に製作・使用されてから廃棄されるまでの時間的幅は厳密に知ることはできない。したがって、ここでの年代は最低限度「使用年代」を意識しているが、結果的には本遺跡出土土器の大半は堆積土中（遺物包含層）からであるため「廃棄年代」に終止してしまうということをあらかじめ確認しておく。

調査区内の遺物包含層、遺構等から出土した土器（図示したもののみ）の種類・器種毎の個体数については第３表に示したとおりである。この中で遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層では灰釉陶器を除いた全ての種類・器種の土器が共存していることからこれらの土器は「共伴関係」にある可能性がある。しかも、出土土器の器種の中で坏が最も多く主体を占める。坏には土師器・須恵器・赤焼土器とがあり、前二者が多く、中でも須恵器坏の個体数は最も多い。したがって、個体数が多く、従来の研究成果によりある程度の編年が確立されている坏を中心に年代を検討していきたい。土師器坏・須恵器坏・赤焼土器坏は食膳形態の一部を占める器種ということで共通の用途が想定される。しかし、各土器は製作技法の相違により区別されるもので各々独自の変遷過程を示している。中でも土師器坏は古墳時代から平安時代まで各時代によって器形の変化・技法の差異等が認められ、未だ細部での検討の余地はあるが、編年の大綱が確立しつつある。須恵器坏は各地の窯跡調査で特に瓦との共伴関係等から年代が推定されているが、生産地とその供給先（消費地）両者における土器相互の比較検討は未だ十分とはいえず、編年は確立されたとはいえない現状である。また、奈良・平安時代両時代（８世紀以降）の須恵器坏には土師器坏ほど顕著な差異があまり認められないという特性もある。例えば、底部切り離し技法･調整技法のみを問題にした場合､両時代に亘るのも存在してくるので区別するには困難である。このことは須恵器坏は製作開始時の当初から製作段階にロクロ技術が導入されたが、土師器坏は後の平安時代からであることにも起因しているかと思われる。赤焼土器は土器の概念を含む意味での名称等が定着せず、また土器認定についても諸々の意見があり、年代等は今後の課題である。以上のことから現段階では各時代の特徴を良く示しているのは土師器坏と言える。したがって、土師器坏を中心に年代を検討していく。

今回出土した土師器坏には先述したように製作に際しロクロ不使用のもの（土師器坏Ａ類）とロクロ使用のもの（土師器坏Ｂ類）とがある。そして、特に遺物包含層第Ⅲ層において両者は共に出土しており、「共伴関係」にあると考えられる。しかし、両者には製作技法上において

明らかな相違が認められる。つまり、製作段階にロクロ技術が導入されているか否かの違いである。このような製作技法の全く異なった両者は同一遺構内から一括して出土したわけでなく遺物包含層出土であり、また、出土個体数で土師器坏A類と土師器坏B類との比率は１：８で「共伴」か「混入」かの区別には困難な点が多く、両者一括して取り扱うことはできない。したがって土師器坏には大きく２群の組み合わせが成立すると考えられる。各群に共伴する須恵器坏・赤焼土器坏・またその他の種類の器種は出土状況から両群に共伴するものと考えられるが、その厳密な区分は不可能に近い。しかし、出土個体数の比率からロクロ使用の土器群に大半は共伴するものと思われる。以上のことから特に須恵器坏・赤焼土器坏はロクロ使用の土器群の中に含めて検討していく。

第Ⅰ群土器

第Ⅰ群土器は製作にロクロが使用されない土師器坏A類で構成され、須恵器坏A～D類の一

第３表　図示土器個体数

種類器種 / 出土地 / 分類	土師器坏						高台付坏	高坏	盤	蓋	耳皿	甕	須恵器坏					高台付坏	高坏	蓋	壺	甕	赤焼土器	灰釉陶器	緑釉陶器	計
	AⅠ	AⅡ	BⅠ	BⅡ	BⅢ	分類不能							A	B	C	D	分類不能									
第Ⅰ層		1	1		2	3	1					1	3		3	3	2	1		1	2	4	1		1	30
第Ⅱ層			5	2	5	1	1	1	1		1	1	3	10	22	4	4	1		4	3	3	2			74
第Ⅲ層	1	4	8	11	6	1	2		1	2	1	5	7	38	37	8	24	16	2	26	7	11	1		1	220
第Ⅳ層			1											1	1					1				1		5
第Ⅴ層			1	2														2	2					1		8
第1井戸跡												2		1	2		1						5			11
第2井戸跡															2											2
第1土壙													1							2						3
第5土壙												2														2
東西溝			2	1		2							3	7	7	2	4	3			2	1		1		35
南北溝				1								1			4		4									10
溝1															1							2				3
溝4															1											1
溝5													1	1	7											9
溝6													1													1
ピット												1		4	5	2	3							1		16
計	1	5	18	17	13	7	4	1	2	2	2	13	19	62	92	19	42	23	4	34	14	21	9	4	2	431

部が共伴すると考えられるが、確証はない。底部が丸底を呈し、体部外面に段が形成されているＡⅠ類と底部が平底あるいはやや丸底状を呈し、口縁・体部は内弯して立ち上がり、外面にヘラミガキが施されているＡⅡ類とがあり、両類とも内面はヘラミガキ・黒色処理されている。後者が主体を占める。このような特徴を示す土師器坏は従来理解されている国分寺下層式期のものと考えられる。類似する土器の組み合わせは陸奥国分寺僧坊西建物基壇南側内溝出土の土師器坏の組み合わせ（宮城県教育委員会：1961）にみられる。しかし、陸奥国分寺の場合は底部が丸底を呈し、体部外面中央に段を形成し、器高が大きいもの、底部はやはり丸底を呈し、体部外面下方に段を形成し、器高が小さいもの、底部が平底で段を形成しないものの三者で構成されており、丸底・有段のものと平底・無段のものとの比率はほぼ同じであり、土師器坏Ａ類の組み合わせとは若干様相を異にしている。むしろ、平底・無段ので構成される対島遺跡出土の土師器坏の組み合わせ（小井川・高橋：1977）、清水遺跡第Ⅶ群土器（丹羽・小野寺・阿部：1981）に近い。したがって、国分寺下層式期でも後半頃のものと思われる。この土師器坏Ａ類に共伴する須恵器坏は先述したように確実に抽出し、提示することはできないが陸奥国分寺の創建時に伴う須恵器坏は底部に回転ヘラケズリの調整が加えられ、ヘラ切りの痕跡が残るものである（岡田・桑原：1974）。また、清水遺跡第Ⅶ群土器には底部に手持ちヘラケズリの調整が加えられ、ヘラ切りの痕跡が残るものが伴っている。したがって、これらと同様な特徴をもつ須恵器坏が共伴する可能性はある。このことについては後の第Ⅱ群土器の中でも検討する。

次に土師器坏においてロクロ不使用のものとロクロ使用のものとの「共伴」問題について検討する。本遺跡出土土師器坏の場合は前に述べたように出土地・個体数等から両者が「共伴」関係にあるのか「混入」したのか不明である。しかし、「共伴」する例は宮城・福島・岩手県といった東北地方南部から北部において確認されているが、本遺跡とは土器の組み合わせ等に違いがみられ、また「共伴」している例の中でも内容について各々遠いが認められ、諸々の問題はある。以下、各遺跡での内容についてみていく。

県内で現段階において確実な例として**築館町伊治城ＳＩ04住居跡内出土土師器坏**（多賀城跡調査研究所：1978）があげられる。ロクロ不使用の土師器坏は底部が丸底のものと平底のものとがあり、前者は体部外面下方に段が形成され、後者には段はない。両者ほぼ同じ個体数である。ロクロ使用の土師器坏は口縁・体部がやや内弯気味に立ち上がり、器高が高いものでロクロ不使用無段のものと器形的に近似している。底部には回転糸切り痕が残る。ロクロ不使用土師器坏が主体を占める。

東北南部の福島県では西白河郡矢吹町下原遺跡第７号ピット内出土土器（鈴木他：1975、木本：1978）、西白河郡東村佐平林遺跡Ⅷ区第５号住居跡、36号土坑内出土土器（日高他：1977）谷地前Ｃ遺跡第25・27号住居跡内出土土器（玉川他：1977）等で知られる。

下原遺跡第７号ピット内出土土器：ロクロ不使用の土師器坏は底部が平底、丸底状を呈し、器高が小さく、体部外面に段が形成されないものでロクロ使用の土師器坏は器高が小さく、ロクロ不使用の土師器坏の器形に近似している。ロクロ不使用土師器坏が主体を占める。

佐平林遺跡Ⅷ区第５号住居跡内、第36号土坑内出土土器：第５号住居跡内出土のロクロ不使用土師器坏には底部が丸底状を呈し、体部外面に段が形成されず、口縁・体部が内弯するもの、底部が平底で体部外面に段を形成しているものと段を形成せず、器高が大きく、椀的なもの、器高が小さく扁平なものとがあり、段を形成しているものは少ない。ロクロ使用の土師器坏には器高が小さく扁平なもので底部に手持ちヘラケズリの調整が加えられ、回転糸切りの痕跡が残るものと前者より器高は大きく、底部に回転ヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものとがある。ロクロ不使用土師器坏が主体を占める。第36土坑内出土のロクロ不使用土師器坏には底部が丸底状を呈するものと平底のものとがあり、前者が主体を占める。丸底状のものは口縁、体部が内弯気味に立ち上がる。中には体部外面にわずかな稜を形成するのもある。平底のものは口縁・体部が外傾し器高が小さい。ロクロ使用土師器坏は底部と体部の一部のみ残存しているもので全体の器形は不明である。底部には回転ヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らない。ロクロ不使用土師器坏が主体を占める。

谷地前Ｃ遺跡第25・27住居跡内出土土器：第25住居跡内出土のロクロ不使用土師器坏は底部が丸底状を呈し、口縁・体部が内弯して立ち上がる。中には体部外面にわずかな段を形成するのもある。ロクロ使用土師器坏は口径に対して底径が小さく、口縁・体部は丸味をもって外傾し、底部に手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものである。主体はロクロ不使用土師器坏である。第27住居跡内の床面、周溝内出土のロクロ不使用土師器坏は底部が丸底状を呈し、口縁・体部は丸味をもって外傾する。ロクロ使用土師器坏は器高が大きく、口縁部がやや外反するもので、底部に回転ヘラケズリの調整が加えられている。

東北北部の岩手県では**江刺市宮地遺跡第９・12号住居跡**（佐々木：1980）等で知られている。両住居跡内出土のロクロ不使用土師器坏は底部が平底で器高が小さく扁平なものが主体を占める。中には器高が大きく椀的なものもある。ロクロ使用土師器坏は器形的にロクロ不使用のものと近似し、底部に手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものである。

以上、各地におけるロクロ不使用・ロクロ使用土師器坏の共伴例をあげた。これらの例は住居跡内、あるいは土壙といった同一の遺構内出土でほぼ同時期に使用・廃棄された可能性はあり、おおよそ「共伴」するものと考えられる。こういった共伴例は東北地方南部から北部にまでみられ、例は少ないが土師器へのロクロ技術導入期における一様相として広い範囲にわたっていることが知られる(日本海側の状況は不明である)。そして、土器の組み合わせはロクロ不使用土師器坏が個体数で主体を占め、国分寺下層式期の終末の段階の特徴を示しているのが大

半である。また、共伴関係にある両者の器形は相互に酷似している点注視しなければならない。このような組み合わせの土器群はその特性・年代について検討されている。例えば前にも例示した伊治城ＳＩ04住居内出土土器群を検討する中で「伊治城型組成の土器群」として国分寺下層式と表杉ノ入式の間に位置するものであると提示されている（多賀城跡調査研究所：1979）その後、白鳥氏は「伊治城型組成の土器群」について多賀城内でもロクロ不使用とロクロ使用の共伴ということで同様な類例が認められることから「一定の時期における土師器の一般的なあり方（傍点筆者）」として８世紀末頃のものと考えている（白鳥：1980）。しかし、年代的には相違がないが、意義付けについて若干問題があると考えられる。この問題はロクロ不使用土器の最終段階である国分寺下層式土器の終末期とロクロ使用土器（表杉ノ入式土器）初現期の諸問題とも深く関連してくるので一概に「伊治城型組成の土器群」をもって「一般的なあり方」として処理するにはなお検討が必要である。しかも、多賀城内での例として氏が提示しているＢ群土器における土師器の組み合わせと「伊治城型組成の土器群」の組み合わせ、あるいは器形の構成とでは様相を異にしている。つまり、Ｂ群土器におけるロクロ不使用土師器坏は体部内･外面にわずかな稜を形成しているものと段･稜等が形成されないものであり、両者とも内・外黒色処理されているものである。ロクロ使用土師器坏は口径に対して器高・底径が大きく、底部にはヘラ切りの痕跡か残るもの、回転ヘラケズリ、手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものとがある。明らかに「伊治城型組成の土器群」におけるロクロ不使用土師器坏とは異なっており、しかもロクロ不使用、ロクロ使用土師器坏の出土地が同一遺構内でないことも問題である。

次に前述した遺跡での共伴例について検討する。

主にロクロ不使用土師器坏の組み合わせ等をみるといくつかのグループにわかれる。

Ａグループ：「伊治城型組成の土器群」である。底部が丸底で体部外面下方に明瞭な段が形成されているものが存在する。

Ｂグループ：底部が平底で体部には段等は形成されないもので構成される。中には一部丸底、あるいは体部外面に若干の段・稜が形成されるのがあるがＡグループのような顕著なものではない。さらに組み合わせの違いによりわかれる。

（Ｂ１）　器高が大きく椀的なものと器高が小さく扁平をものとで構成される。〈佐平林Ⅷ区第５住居跡、宮地遺跡第９・12住居跡内出土土器〉

（Ｂ２）　器高が小さく扁平なもののみで構成され、口縁・体部が内弯するもの、外傾するものとがある。〈佐平林Ⅷ区第36土坑、谷地前と遺跡第25・27住居跡内出土土器〉

（Ｂ３）　器高が小さく扁平なもので口縁・体部が内弯するもののみで構成される。〈下原遺跡第７号ピット内出土土器〉

このようなグループに共伴するロクロ使用土師器坏は各グループの器形に極めて類似したもので主体的に存在しているわけでない。このことからロクロ技術が土師器にも序々に導入されていったことが窺われ、８世紀後半頃を中心として東北地方南部から北部においてみられる事象であると考えられる。そして、ロクロ不使用からロクロ使用への移行期には前述した各グループと対馬遺跡・清水遺跡Ⅶ群土器においてみられる土器組成が存在する。つまり、ロクロ不使用で底部が平底で体部内外面に変化のない土師器坏のみで構成されるもの（Ⅰタイプ）、前述のＢグループでⅠタイプに一部ロクロ使用土師器坏が加わるもの（Ⅱタイプ）、「伊治城型組成の土器群」（Ⅲタイプ）である。その内、Ⅰ・Ⅱタイプではロクロ不使用土師器坏において器形・土器の組み合わせ等で共通する面はあるが、Ⅲタイプは前二者に比して異なった様相を呈しており、「一般的なあり方」を示しているものでなく、むしろ特異な土器群であると考えられる。そして、各タイプ間の差は地域差、時間差、あるいは遺跡の性格の違いなのか判然としないが、少なくとも各タイプの差は今まで検討してきた結果、地域・時間的な差異でないと考えられ、Ⅰ・ⅡタイプとⅢタイプとの差は遺跡の性格の違いに起因しているものと思われる。しかし、こういった土師器へのロクロ技術導入期における諸様相にはなお多くの検討課題が残されている。

本遺跡の場合、「共伴」と考えるとロクロ使用の土師器坏が圧倒的に主体を占め、今まで述べてきた例とは異なった様相になる。しかも堆積土中出土のもので遺構内出土と比較して流動的な面もある。また、次に述べる第Ⅱ群土器における土師器坏Ｂ類の組み合わせ等からも考えると無理があるものと思われる。したがって、「共伴」の可能性はなく、「混入」と考えられるが、確証を得ることはできず、不明である。

第Ⅱ群土器

第Ⅱ群土器は土師器坏Ｂ類を中心として須恵器坏Ａ～Ｄ類、赤焼土器が主体的に共伴し、これらで構成される。

土師器坏Ｂ類は製作過程にロクロ技術が導入され、器内面はヘラミガキ・黒色処理されているグループである。これらの土器群はロクロ使用という製作技法の特徴から東北地方南部における土師器編年で表杉ノ入式期の土器（氏家：1957）と考えられる。表杉ノ入式期の土器は平安時代全般にわたって使用されたものである。土師器坏を中心に主に製作技法、土器の組み合わせや須恵器・赤焼土器等との共伴関係、土器の構成から検討が加えられ、平安時代の中でも上記の諸要素が変化し、いくつかの段階が存在するものと考えられている（阿部：1968、桑原：1969、岡田、桑原：1974、小笠原：1976、白鳥：1980等）。

阿部義平氏は砂押川採集の土器を検討する中でロクロ使用の土師器坏について述べ製作技法における手数の省略化によって変遷するものとしている。桑原滋郎氏も同様な考え方で変遷

の可能性を提示している。その後、岡田・桑原両氏は多賀城周辺の須恵器坏の編年を行なう中で須恵器坏・須恵系土器との共伴関係から表杉ノ入式期の土師器坏の細分の可能性を考えている。また、小笠原好彦氏は製作技法の変化、須恵器坏・あかやき土器との共伴関係により細分を試みている。白鳥良一氏は多賀城内における奈良・平安時代の土器を検討する中で製作技法・土器の組み合わせ、須恵器・須恵系土器との共伴関係等からＡ～Ｆ群の土器群を設定し、これらの時間的推移を考えている。

このように表杉ノ入式期の土師器坏は主に製作技法（製作の最終段階である底部切り離し技法、その後の調整技法）の変化に観察の主眼が置かれ、細分されてきた傾向がある。つまり、製作過程全体でなく、最終段階としての技法のみ検討され、土器の器形・法量等の特徴・変化についてはそれほど問題にされなかった面はある。また、須恵器坏、須恵系土器、あかやき土器との共伴関係から細分が試行されてきたわけであるが、須恵器等の編年は未だ十分とはいえない状況であるため、なお流動的である。

以上のような表杉ノ入式期の土師器坏の研究成果をふまえ、土師器坏Ｂ類の土器群は表杉ノ入期の中でもとの段階に位置するか、さらに年代についても検討したい。

土師器坏Ｂ類は前項で述べたように器形・法量の特徴により大きく３つに分けれさらに細分された各類にはいくつかの調整技法・底部切り離し技法の組み合わせがみられる。

ここで再度、各類の特徴について整理する。

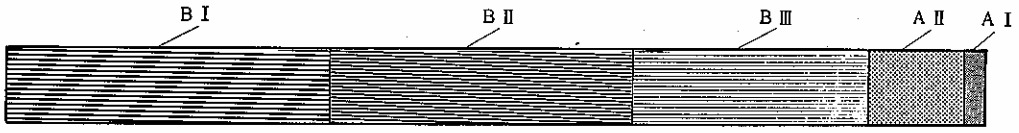
ＢⅠ類：口径に対して器高・底径が大きく、丈が高いもので、埦的なものも中にある。体部の傾き具合はあまり大きくない。手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕跡が残らないのが大半であり、中には回転糸切り、静止糸切りの痕跡が残るのも一部存在する。

ＢⅡ類：口径に対して器高が小さくて底径が大きく、扁平なものである。体部は大きく外傾するもの、内弯して立ち上がるものとがある。手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕跡が残らないのが多いが、回転糸切り、ヘラ切りの痕跡が残るのもある。

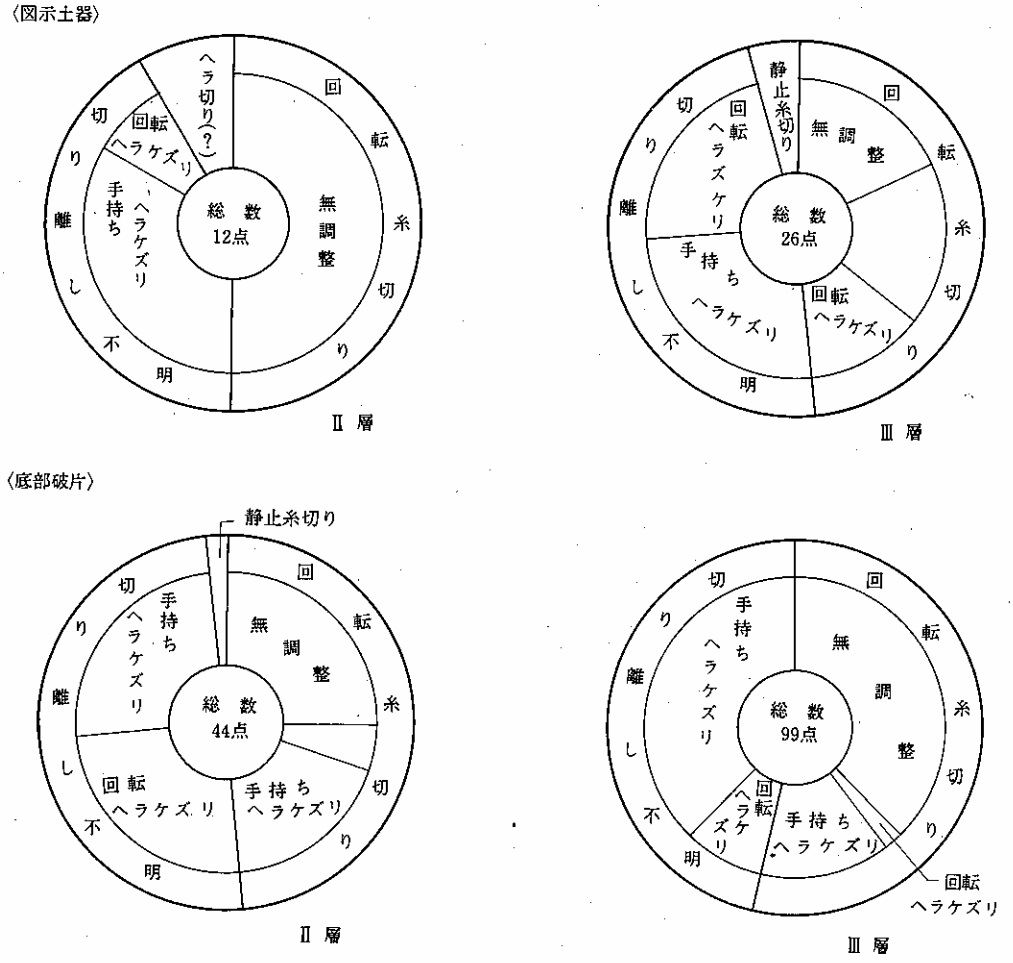
BⅢ類：口径に対して底径が小さいものである。体部の傾き具合は概して大きい。底部には調整が加られず、回転糸切りの痕跡か残るものが多い。中には手持ちヘラケズリの調整が加えられ切り離し痕跡が残らないのも存在する。

以上、細分した各類の特徴について記した。次に土師器坏Ｂ類の中でこれら各類のあり方について遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層、東西溝出土の土師器坏Ｂ類で検討する。ＢⅠ類は第Ⅱ層５点、第Ⅲ層８点、東西溝２点の計15点、ＢⅡ類は第Ⅱ層２点、第Ⅲ層11点、東西溝１点の計13点、BⅢ類は第Ⅱ層５点、第Ⅲ層６点、東西溝からの出土はなく計11点で各々出土している。このように遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層、東西溝出土の土師器坏Ｂ類の中でＢⅠ～BⅢ類の出土個体数は

ほぼ同数であり、ロクロ使用土師器坏はＢＩ・ＢII・BIII類と各特徴の坏の組み合わせで構成されている。また調整技法・底部切り離し技法のみの割合については第84図のとおりである。これによると、図示したものの場合、第II層ではヘラケズリ調整が加えられているのは全体の50%を占め、さらに第III層では約83%を占め、第II・第III層全体を合わせても約71%を占めている。底部破片でも同様な割合を占め、第II・第III層全体で約67%を占めており、坏全体の中でヘラケズリ調整が加えられているものが主体を占めていることがわかる。この中で前述したよ



第83図　土師器坏割合グラフ



第84図　土師器坏底部の状況グラフ

うにＢＩ・ＢⅡ類の土師器坏はヘラケズリの再調整が加えられているのが主体を占めている。BⅢ類では逆に無調整で底部に回転糸切りの痕跡が残るのが主体を占める。しかも、遺物包含層第Ⅱ層、第Ⅲ層両者出土の土師器坏B類では顕著な差異は認められない。したがって、層位的に土師器坏B類間の新旧について検討することは困難である。

以上のようなことをふまえてＢＩ、ＢⅡ、BⅢ類間における器形・調整技法等上からの新旧関係について検討してみたい。ＢＩ・ＢⅡ類の土師器坏とBⅢ類の土師器坏とではロクロ技術上の差、また前型式（ロクロ不使用の国分寺下層式期土師器坏の終末期のもの）の土器の器形の影響度合の差があるものと考えられる。つまり、ＢＩ類の器形は体部の傾き具合は大きくなく、口縁部があまり開かないものであり、ＢⅡ類は底径が大きく扁平で口縁・体部が短かいものである。両者とも器厚は厚手である。これらに較べBⅢ類は底径が小さく、体部の傾き具合は大きく、口縁部が開くもので器厚は薄手である。このことは成形の段階での技術の差と考えられ、しかもヘラケズリ調整がBⅢ類と比してＢＩ・ＢⅡ類に多用されていることからＢＩ・ＢⅡ類では入念に製作され、BⅢ類に至ってロクロ技術が進行し、量産され、ヘラケズリ調整は次第に必要なくなったものと考えられる。また、ＢＩ・ＢⅡ・BⅢ類の器形とロクロ不使用の国分寺下層式期の終末期の土師器坏（例えば対馬遺跡出土土器のタイプ）の器形を較べるとＢＩ・ＢⅡ類は近似するが、BⅢ類はロクロ不使用土師器坏の器形には存在しない。むしろ、BⅢ類の器形は土師器坏にロクロ技術が導入された独特の器形であると考えられる。

したがって、ＢＩ・ＢⅡ類は器形の特徴、製作技法からBⅢ類に先行するものと考えられる。さらに東西溝出土の土師器坏にはBⅢ類はなく、ＢＩ・ＢⅡ類のみで構成されている。東西溝は前章で検討したようにBⅢ類を含む遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層より古い段階の遺構であることからもＢＩ・ＢⅡ・BⅢ類の前後関係は明らかである。

ここで再度、各類の出土個体数をみるとＢＩ・ＢⅡ類合わせて28点でＢＩ類＋ＢⅡ類：BⅢ類＝2.5：１になり、遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層、東西溝出土の土師器坏B類はＢＩ・ＢⅡ・BⅢ類の組み合わせで構成されるが、前二者が主体を占め、表杉ノ入式期の中でも古い段階に位置することが想定される。

次にこういった土師器坏B類に類似し、しかも平安時代でも古い段階に位置すると考えられる土師器坏が出土している遺跡についてみていく。特にＢＩ・ＢⅡ類と類似している土師器坏は色麻町上新田遺跡第８号住居跡（小井川：1981）、志波姫町宇南遺跡第３号住居跡（斎藤：1979）大衡村亀岡遺跡第１号住居跡（東北学院大学考古学研究部：1979）、名取市清水遺跡第ⅧA・B群土器（丹羽、小野寺、阿部：1981）、大河原町台ノ山遺跡第１・３・４・８・10号住居跡（阿部・千葉：1980）、村田町西原遺跡第１・２号住居跡（熊谷：1980）、蔵王町東山遺跡土器溜（真山：1981）、白石市御所内遺跡第１・２号住号跡（太田：1980）、同青木遺跡第13・21号住居跡（小

川：1980）等でみられる。

この中で上新田遺跡、宇南遺跡、亀岡遺跡、清水遺跡第ⅧA群土器、西原遺跡、御所内遺跡出土の土師器坏はＢⅠ・ＢⅡ類類に類似したもののみで構成されている。特に上新田遺跡第８号住居跡内出土土師器坏は器厚が厚く、器高が大きく椀的な器形のものが主体を占め、中に器高が小さく扁平なものも組み合って構成されている。底部には手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないもの、底部に切り離し痕跡が残るものは全てヘラ切りで底部が丸底状を呈するのもある。このような器形・底部の状況等から平安時代の初期のものと考えられている。その他の遺跡出土土師器坏の底部にはほとんどヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものが主体を占めている。東山遺跡土器溜出土の土師器坏は器形的にＢⅠ・ＢⅡ類と類似したものの個体数がほぼ同じで中にBⅢ類に類似したものを若干含んで構成されている。底部にはヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものが主体を占めるが、回転糸切りの痕跡が残るのも中にはある。これらの土師器坏は共伴した灰釉陶器坏の年代により９世紀中葉頃の所産と考えられている。

したがって、ＢⅠ・ＢⅡ類の特徴を示す土師器坏のみで構成される土器群と前者の組み合わせにＢⅢ類の特徴を示す土師器坏が加わった土器群とでは年代差があると理解できる。そして、上記の遺跡における土師器坏は組み合わせ等から平安時代でも古い段階、９世紀初頭～中葉頃にかけての土師器坏のあり方としてとらえることができる（清水遺跡第ⅧB群土器の組み合わせは若干新しいものと考えられる）。９世紀初頭という年代は国分寺下層式期土器の下限年代と表杉ノ入式期土器の上限年代の問題とも関係してくる。平安時代の初期の段階に属し、年代が考えられている土器群として岩手県水沢市胆沢城ＳＤ114溝跡出土の土師器坏がある[註1]。ＳＤ114溝跡は延暦二十一（802）年に造営された推定される胆沢城の創建期に近いと考えられている遺構である。堆積土から出土した土師器坏は器形的にＢⅠ・ＢⅡ類と類似しており、底部に回転ヘラケズリの調整が加えられ、回転糸切りの痕跡が残るものと切り離し痕跡が残らないもの、体部下半のみに手持ちヘラケズリの調整が加えられ、底部に回転糸切りの痕跡が残るものとがある（伊藤・新田：1977）。ＳＤ114溝跡は南外線造営期のＡ期に入り、９世紀初～中葉の年代が与えられている（伊藤・新田：1979）。以上のことからＳＤ114溝跡出土土師器坏の年代は９世紀初頭頃に求められている（白鳥：1980）。つまり、表杉ノ入式期土器の上限年代は９世紀初頭でそれに先行する国分寺下層式期の下限年代は８世紀後半と考えられ、主要な変換点は９世紀前後頃に求められている（小井川・小川：1982）。

次にこのような９世紀代と考えられる土師器坏のあり方と本遺跡土師器坏Ｂ類とを比較してみる。再三述べるようにＢ類はＢⅠ・ＢⅡ類が主体を占め、それにBⅢ類が加わる組み合わせを示しており、ＢⅠ・ＢⅡ類の特徴を示す土師器坏のみで構成される９世紀初頭の土師器坏のあり

方とは様相を異にしており、９世紀中葉の年代が与えられている東山遺跡の例に近似している。したがって、同様な年代が想定される。しかも、土師器坏B類の構成はＢＩ・ＢⅡ類が主体を占めていることから表杉ノ入式期の初期の段階の土師器坏にロクロ技術が一段と進行し、前型式（国分寺下層式の終末期の土師器坏）の影響から脱却した新しい器形の一群の土器が出現し始めた段階ともいえる。以上のようなことを考慮して多賀城内における土器群の変遷と比較してみる。白鳥氏は多賀城内出土の奈良・平安時代の土器の組み合わせ、主に土師器・須恵器・須恵系土器との共伴関係からＡ～Ｆ群といった土器群を設定し、各土器群の年代・変遷を検討している。本遺跡第Ⅱ群土器の土師器坏B類と後述する須恵器坏の組み合わせはC群土器、D群土器の内容に類似する。C群土器の土師器坏は器形的にＢＩ・ＢⅡ類の土師器坏に類似するもののみで構成され、底部には回転糸切り、静止糸切りの痕跡が残るが体部下方等に手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリの調整が加えられたもの、手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリの調整が底部全域に及び、切り離し痕跡が残らないものである。須恵器坏はＡ～C類に類似したもののみで構成され、底部にはヘラ切りの痕跡が残るものが主体を占める。D群土器の土師器坏はＢⅡ・BⅢ類の土師器坏と類似するもので構成され、底部には調整が加えられず、回転糸切りの痕跡か残るものが主体を占める。須恵器坏はC・D類に類似したもので構成され、底部に残る切り離し痕跡は回転糸切りのものが多くなる傾向にある。以上のようにC群・D群土器を構成する土師器坏・須恵器坏の特徴・組み合わせについてみてきた。そして、各群を構成する土器の出土は同一遺構内ではないという不安はあるが、C群土器の年代は胆沢城ＳD114溝跡出土土器に類似していることから９世紀初頭、D群土器は須恵器坏の底部切り離し技法の変化、つまり、ヘラ切り技法から糸切り技法といった変換期の年代から９世紀後半頃としている。

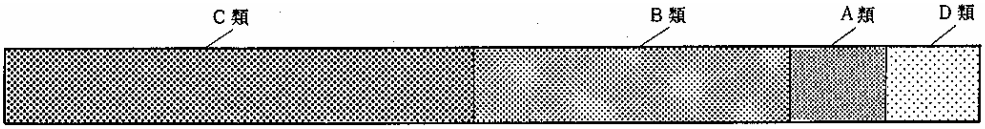
このようなC・D群土器の内容と年代的な流れは妥当なものと思われる。しかし、本遺跡の第Ⅱ群土器には両群の範疇に入り切れない面がある。つまり、ＢＩ・ＢⅡ類の土師器坏が主体を占めており、底部にヘラ切り痕の残る須恵器坏が主体的に共伴としていることからC群土器の年代に近いが、土師器坏BⅢ類の存在、須恵器坏D類の存在からC群土器の年代より新しく、D群土器の年代より古い段階に位置するものであり、先述した東山遺跡出土の土師器坏の組み合わせに近似していることから第Ⅱ群土器の土師器坏B類のあり方は９世紀中葉頃のものと考えられる。

次に**須恵器坏・赤焼土器**について検討する。

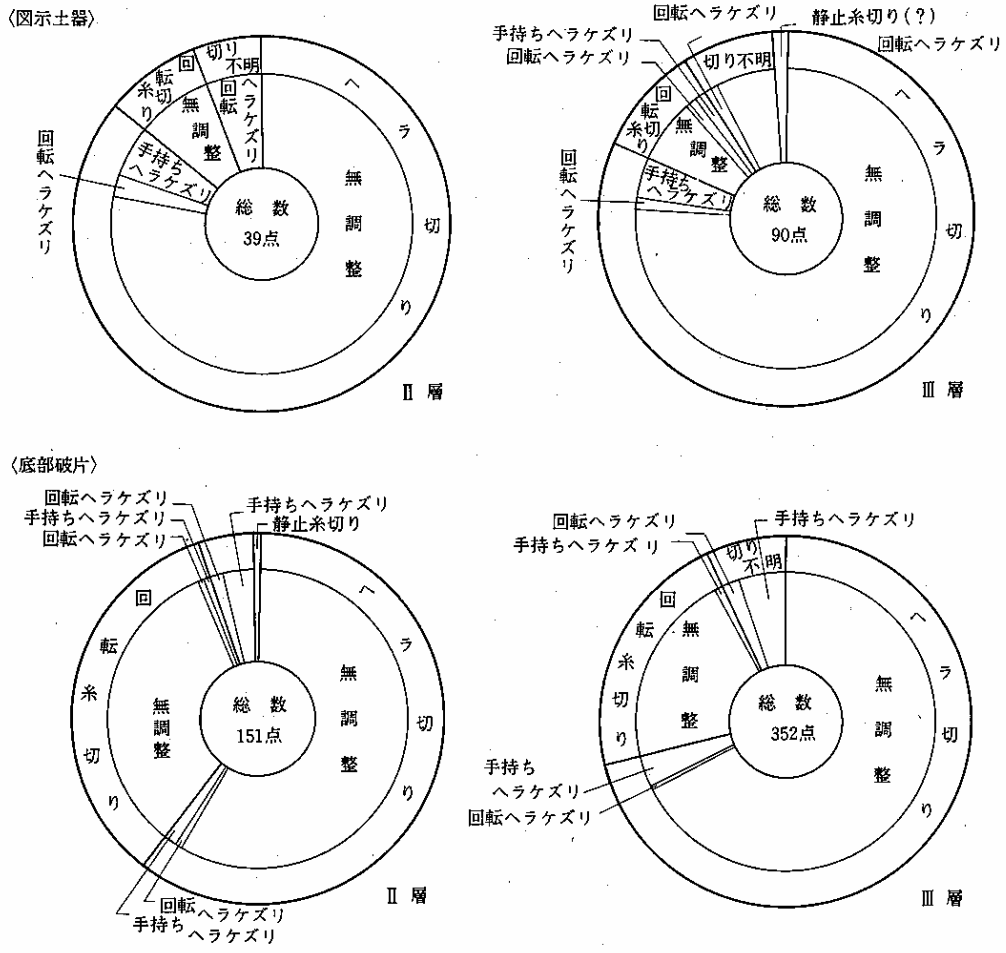
須恵器坏は器形・法量の違いによりＡ～D類まで分類した。遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層、東西溝出土の須恵器坏で各類の占める割合はA類が約９％、B類は約37％、C類は44％、D類は10％でB類・C類が主体を占める（第85図）。これらは前項で述べたように出土状況から「共伴」関係にあると考えられる。また、底部に残る切り離し痕跡、調整技法についての割合は第86図のと

おりである（遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層出土の須恵器坏のみを対象とした）。それによると、図示した須恵器坏の場合、遺物包含層第Ⅱ層では底部にヘラ切りの痕跡が残り、無調整のものが約78%、同じくヘラ切り痕が残るが手持ち・回転ヘラケズリの調整が加えられているのが約８%であり、回転糸切りの痕跡が残り、無調整のものが約８%、回転ヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕跡が残らないものが６%であり、ヘラ切り無調整のものが主体を占める。

第Ⅲ層では底部にヘラ切り痕が残り、無調整のものが約77%、ヘラ切り痕が残り、手持ち、回



第85図　須恵器坏各類割合グラフ



第86図　須恵器坏底部の状況グラフ

転ヘラケズリの調整が加えられているのが約5.6%、回転糸切りの痕跡が残り、無調整のものが約6.7%、同じく回転糸切り痕が残り、手持ち、回転ヘラケズリの調整が加えられているのが約２%、回転・手持ちヘラケズリの調整が加えられて切り離し痕跡が残らないものは約7.8%、その他、静止糸切りで無調整のものが１点あり、ヘラ切り無調整のものが主体を占める。第Ⅱ・Ⅲ層合わせるとヘラ切り無調整のものは約77%と須恵器坏の大半を占めることになる。底部破片の状況でも同様な割合になるが若干の変動はあるものの図示したものの割合と比較すると大勢は変化しない。しかも、A類は全てヘラ切り無調整でB・C類でもヘラ切り無調整のものが主体を占め、逆にD類では回転糸切り無調整のものが主体を占める。このように須恵器坏はB・C類の器形で底部にヘラ切りの痕跡が残るものが主体を占め、その中に個体数は少ないが、A類・D類の須恵器坏が組み合う構成を示している。

次にA～D類須恵器坏の特徴を再度整理し、その器形的特徴の変化について検討してみたい。

A類：小形品で口径に対して器高の占める割合が大きいもので口縁・体部は外傾するが傾き具合はあまり大きくない。全て底部にヘラ切りの痕跡が残るものである。底部は丸底状を呈し、体部と底部の区別が明瞭でないのもある。

B類：A類と同様な器形のものでA類より法量が大きい。底部にはヘラ切り痕が残るのが主体を占める。

C類：口径に対して器高の占める割合が小さく扁平なものである。

D類：口径に対して底径の占める割合が小さく口縁・体部の傾き具合は大きい。

以上が須恵器坏の主な器形的特徴である。A類・B類は器形的に類似するが、法量の面で相違がある。C類は器高が小さく扁平なものであるが、B類に近い器形を示すのも中にはある。D類は底径が小さく、しかも体部の傾き具合が大きいものである。このようにA類・B類・C類・D類は器形の面で異なった特徴を示しており、製作過程、主に成形の段階での技術等の差を反映しているものと考えられる。特にA～C類とD類とでは器形、つまり、口径に対して底径の占める割合等、また底部切り離し技法、調整技法上異なった様相を呈している。すなわち、D類は器形的にロクロ技術がある程度進行した段階のもので、器厚は全体的に薄手でロクロ目はシャープなものが多い。A～C類は底径が大きく、底部が丸底状を呈するのもあり、器形的にD類より古い段階のもので、器厚は全体的に厚手でロクロ目はあまりシャープでない。

まとめるとA・B・C類の須恵器坏からD類の須恵器坏へという流れが想定される。ここでA～C類、D類の年代について検討してみる。東北地方南半に活ける須恵器の編年は岡田・桑原両氏により多賀城周辺の須恵器坏の変遷を窯跡での瓦との共伴から年代的な推移が提示されている（岡田・桑原：1974）。その中で主要な基準は底部切り離し技法、調整技法といった技法であり、技法の相違から10類まで分類し、各類の年代的な位置付けがされている。本遺跡のA

～C類の須恵器坏は底部の状況のみに注目すると６－ａ類、６－ｂ類を主体として１－ｂ類、２－ｂ類が若干存在し、D類は９－ａ類、９－ｂ類が主体で６－ｂ類が若干存在することになり、２－ｂ類の年代は８世紀初頭から前半、１－ｂ類は８世紀前半から中葉、６－ａ類、６－ｂ類は８世紀後半から末頃、９－ａ類は９世紀後半に上限を求め、９－ｂ類の終末を11世紀前後頃と古くは８世紀初頭から前半、新しくは11世紀前後頃と年代的に大分隔った須恵器坏が共存していたことになってしまう。そして、底部切り離し技法・調整技法のみから年代を決定すること、また、生産地である窯跡出土の須恵器坏のみ問題視し、編年を組み立てること等にはある程度の限界・矛盾が生じるものと考えられる。例えば、矛盾は本遺跡の前述したような事象のみばかりでなく、清水遺跡第Ⅶ群土器の中で底部切り離しがヘラ切りで手持ちヘラケズリの調整が加えられているものが国分寺下層式の終末段階の土師器坏と共伴している。このことは８世紀初頭から前半の所産とされている２－ｂ類の存続年代はさらに下降し、８世紀後半まで存在していることが確認されている。また、近年、松山町次橋窯跡では回転糸切り無調整の須恵器坏と静止糸切り無調整の形恵器坏とが共伴していることが確認されている（古窯跡研究会：1981）。両者は底径が大きく、口径に対して器高は小さく扁平なもので底部切り離し技法では異なるが、器形的に類似している。このことは回転・静止糸切り両技法の存続年代に関係する問題でもある。さらに本遺跡のD類は前述したように底部切り離し技法は回転糸切りのものが主体を占めているが、中にヘラ切りのものも含まれており、B類はヘラ切りのものが主体を占めているが、回転糸切りのものも含まれており、器形的に同じグループの中でも底部切り離し技法が異なる場合もある。このことは前述したようにB類は切り離し技法から８世紀後半が主体となるわけで、回転糸切り技法のものも存在していたことになり、また、９世紀後半から11世紀前後のD類の中にもヘラ切りのものが存在していたことになる。つまり、器形的に古いと考えられるものの中に技法的に新しいとされる回転糸切り技法が存在しており、逆に器形的に新しいと考えられるものの中に古い技法とされるヘラ切り技法が存在している。したがって、底部切り離し技法のみから年代を判断することはできず、器形の特徴を十分考慮して検討しなければならないと考える。いわゆる技法の状況と器形の変化とを総合的に検討し、また消費地である集落遺跡等における須恵器坏の組み合わせ、あるいは他の種類の土器、主に土師器坏との共伴関係を十分吟味・検討することにより確実性のある年代観が生じるはずである。

次に土師器坏との共伴関係についてみていきたい。特に国分寺下層式、表杉ノ入式期の土師器坏との共伴関係を志波姫町糠塚遺跡第16号住居跡（小井川・手塚：1978）、清水遺跡第Ⅶ群第ⅧA・C群土器、上新田遺跡第８号住居跡、東山遺跡土器溜、宇南遺跡第３号住居跡、安久東遺跡第１～３号住居跡（土岐山：1980）、胆沢城ＳD114溝跡出土の土器をとおして須恵器坏と土師器坏とのあり方についてみていきたい。

糠塚遺跡第16号住居跡：器形的にはB類と類似し、底部にヘラ切りの痕跡が残り、無調整のもの、手持ちヘラケズリの調整が加えられているものとD類と類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものとが組み合っている。前者が主体である。共伴する土師器坏はロクロ不使用の国分寺下層式期の後半のものである。

清水遺跡：前述したように第Ⅶ群土器の中で器形的にB類と類似し、底部にヘラ切りの痕跡が残り、手持ちヘラケズリの調整が加えられているものが国分寺下層式期の終末段階の土師器と共伴している。また、第ⅧA群土器の中で器形的にC類と類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものと土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ類と類似したものと共伴している。さらに第ⅧC群土器ではD類と類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものと土師器坏BⅢ類に類したものが共伴している。

上新田遺跡第８号住居跡：器形的にB類と類似し、底部にヘラ切りの痕跡が残るものと土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ類と類似したものが共伴している。

東山遺跡土器溜：器形的にB類に類似し、底部にヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残るもの、手持ち、回転ヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものと器形的にD類と類似し、底部に回転糸切りの痕跡か残るもので構成され、底部に回転糸切りの痕跡が残るものが主体を占める。これらと共伴する土師器坏は土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ・BⅢ類と類似したもので、前二者が主体を占めている。

宇南遺跡第３号住居跡：器形的にＢ・Ｃ類と類似し、底部にヘラ切りの痕跡が残り、手持ちヘラケズリの調整が加えられているもので構成される・土師器坏ＢⅠ類と類似したものと共伴している。

安久東遺跡第１～３号住居跡：器形的にはD類と類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものと土師器坏BⅢ類と類似したものが共伴している。

胆沢城ＳＤ114溝跡：器形的にＢ・Ｃ類に類似し、底部にヘラ切りの痕跡が残るもの、手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものとがある。土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ類と類似したものと共伴している。

以上のように８世紀後半を中心とした国分寺下層式期では器形的にはB類と類似したもので底部にヘラ切り痕が残り、無調整のものが主体を占め、手持ちヘラケズリの調整が加えられるもの、あるいは糠塚遺跡でのように器形的にD類に類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るのが存在する。つまり、回転糸切り技法は須恵器坏において少なくとも８世紀後半でも存在していたことが知られる。平安時代の初期、９世紀初頭と考えられている胆沢城ＳD114溝内出土土須恵器坏は器形的にＢ・Ｃ類と類似し、ヘラ切り無調整と切り離し不明なもので構成されている。上新田遺跡では全てヘラ切り無調整のもので構成される。９世紀初頭の段階では器形的にＢ・Ｃ類と類似しているもので底部にヘラ切りの痕跡が残るものが主体を占め、宇南遺跡のよ

うにヘラ切りの痕跡が残り、手持ちヘラケズリの調整が加えられるもの、胆沢城のように手持ちヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕が残らないものも存在する。

このように８世紀後半から９世紀初頭、特に９世紀初頭の須恵器坏の主体は器形的にＢ・Ｃ類に類似したもので底部にヘラ切りの痕跡が残り、無調整のものが主体を占め、その中に手持ちヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕が残るもの、あるいはヘラ切りの痕跡は残るが手持ちヘラケズリの調整が加えられているものが存在する。しかも、ヘラ切りで手持ちヘラケズリの調整が加えられているものは前述したように８世紀後半まで存続年代が下降するとしたが、宇南遺跡の例をみるかぎり、さらに下降して９世紀初頭まで存続する可能性はある。９世紀中葉の段階は東山遺跡のように器形的にはＢ・Ｃ・Ｄ類と類似するがＤ類に類似するのが主体を占め、底部に回転糸切りの痕跡が残り、無調整のものが主体で、その中にヘラ切りの痕跡が残るもの、回転・手持ちヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕が残らないものが存在する。また、平安時代の前半とされている清水遺跡第ⅧＡ群土器の須恵器坏は器形的にＣ類と類似するもので底部に回転糸切りの痕跡を残し、無調整のものである。以上、９世紀中葉を中心とした段階ではＣ・Ｄ類と器形的に類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものが主体を占め、ヘラ切りの痕跡の残るものは減少する傾向にある。しかも、同じ回転糸切りのものでもＣ類・Ｄ類両者の器形的特徴を示すものが共存している。最後に年代的に超逸するが、11世紀前後の段階では安久東遺跡のように器形的にはＤ類に類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残り、無調整のもののみで構成される。清水遺跡第ⅧＣ群土器の須恵器坏も同様な状況になっている。

以上のことをまとめると、８世紀後半から９世紀初頭の段階、９世紀中葉を中心とした段階11世紀前後の段階では須恵器坏の各段階での器形・技法、それらの組み合わせにおいて異なった様相を呈していることがわかり、各段階での器形的特徴の変化、底部切り離し技法等の特徴の変化により、組み合わせ、構成のあり方がある程度明らかになった。器形的には８世紀後半、９世紀初頭の段階のものと11世紀前後の段階とでは明らかに違う。また、底部切り離し技法であるヘラ切り技法と回転糸切り技法の両者の消長過程における主要な変化点はかつて９世紀後半と考えられていた（岡田・桑原：1974）が、今までの検討により、９世紀中葉にまで遡る可能性が出てきた。しかし、なお流動的であり、今後さらに検討されなければならない。

本遺跡の須恵器坏Ａ～Ｄ類の組み合わせは先に検討した土師器坏Ｂ類と主体的に共伴しており、その年代は９世紀中葉のものと考えられる。しかし、同じ９世紀中葉とされている東山遺跡での須恵器坏とでは組み合わせにおいて様相を異にしている。このことは本遺跡の場合、坏の中で須恵器が圧倒的に多く、逆に東山遺跡の場合は土師器が主体を占めており、土器の消費の仕方の差、あるいは遺跡の性格の差なのか、時間差なのか種々考えられるが、判然としない。

また、前にも検討したが、A～D類の中で第Ⅰ群土器の土師器坏A類と組み合う須恵器坏が存在するものと思われるが、不明な点が多い。土師器坏A類は先に検討したように土師器坏B類との関係について不可解な面が多く、「混入」の色彩が濃いものとして考えた。そして、土師器坏A類の年代は国分寺下層式の終末段階のもので８世紀後半のものと考えた。このような土師器坏と共伴する須恵器坏の主体は前に検討したように須恵器坏B・C類の中でヘラ切り無調整のもの、ヘラ切りでヘラケズリ調整のあるもの等が考えられるが、出土状況から厳密に区別することはできない。したがって、須恵器坏の主にA～C類の中に第Ⅰ群土器に含まれるものがあることは十分可能性のあることである。

赤焼土器は前述したように製作にロクロが使用され、器内面にヘラミガキ・黒色処理が施されず、器内外の色調、焼き具合等から焼成方法が酸化炎焼成のものである。この中には各地で呼ばれている「赤褐色を呈する土器」、「須恵系土器」、「あかやき土器」、「土師質土器」「赤褐色土器」等の内容をもつ土器群も含まれるものと考えられる。なお、該種土器の規定内容は色麻町上新田遺跡の報文に詳述されている（小井川：1981）。基本的にはそれに従う。

本遺跡出土の赤焼土器は小形品（坏、皿）に限っている。出土個体数も少なく、各土器群の坏の中で占める割合は僅少で、坏形のものが４点、皿形を呈するものが５点あるにすぎない。このような小形品の中での出土のあり方、つまり個体数の問題は赤焼土器の出現、消長過程の問題とも関連すると思われる。

坏の器形は須恵器坏C類と類似し、底部にはいずれもヘラ切りの痕跡が残り、中には手持ちヘラケズリの調整が加えられているのもある。皿は第１井戸枠内から一括して出土したもので５個体とも共伴関係にある。薄手のものと厚手のものとがあり、前者には積み上げ痕のみられるのもある。また、色調は薄手のものが緑灰色を呈するのに対して厚手のものは赤褐色を呈する。底部にはいずれも回転糸切りの痕跡が残り、ヘラケズリの調整は加えられていない。

以上が本遺跡の赤焼土器の特徴である。

これらの赤焼土器の内、坏は遺物包含層第Ⅱ・第Ⅲ層で土師器坏B類、須恵器坏A～D類と主体的に共存しており、土師器坏B類の年代と同様な９世紀中葉のものと考えられる。

第１井戸枠内出土の皿は井戸廃棄の年代を示す資料で井戸構築の年代とも深く関係する。井戸の年代については後述するように掘立柱建物跡の配置関係とも関連し、掘立柱建物跡・井戸といった集落の構成の中で考えるべきである。したがって、掘立柱建物跡は出土土器、特に土師器坏の年代に近いものであり、井戸の構築年代も同様な年代が想定される。しかし、“井戸”という特異な遺構内出土であり、また皿は、５個体共に廃棄されたという特殊な出土状況から皿そのものの製作背景は他の坏等の器種と比べ異質であると考えられる。ゆえに年代については流動的な面は多分にある。

このように本遺跡出土の赤焼土器の年代について主に土師器坏、出土遺構の状況から述べた。従来、赤焼土器は坏に限ってみれば土師器と同様、酸化炎焼成で焼かれ、内黒土師器坏と区別する意味で問題にされ、特に底部は回転糸切り技法で切り離され、その後調整が加えられないグループのものを「赤焼土器」と呼称していた。しかも、器形的に口径に対して底径の占める割合が小さく、口縁、体部が大きく外傾するもの（土師器坏BⅢ類、須恵器坏D類の器形に類似）に限られていたようであり、年代的に比較的新しい段階のものとされていた傾向があった。

しかし、色麻町上新田遺跡（小井川：1981）での例により、上記の「赤焼土器」の規定内容に矛盾が生じできたわけである。つまり、上新田遺跡で出土した赤焼土器（報告では「赤褐色を呈する土器」としている）の坏は器形的には底径が大きいもので、中には口径に対して器高が大きいものもあり、底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残るもの、手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものとがあり、各種類の個体数はほぼ同じである。このように赤焼土器坏の中には器形的に底部が大きく、器高が大きいものも含まれ、また底部切り離し状況にも回転糸切り痕が残るものだけでなく、ヘラ切り、調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものも含まれることになり、今までの「赤焼土器」の規定内容では当然通用しなくなった。つまり、技法・器形のみからの規定ではなく、酸化炎焼成であるが、内黒土師器とは一線を画することが主要な規定内容になると考えられ、その中で器形、技法は変化していくものと解される。しかも第８号住居跡内で先に検討したように平安時代の初期、９世紀初頭と考えられる土師器坏・須恵器坏と確実に共伴しており、これらの赤焼土器は９世紀初頭、ロクロ技術（須恵器製作技術）が土師器に導入される段階にはすでに存在していたことが確認されている。本遺跡の場合も、共伴した土師器坏から９世紀中葉という年代を与えたが、上新田遺跡出土の赤焼土器坏とは酸化炎焼成で非内黒坏という基準はあるものの器内外面の色調（上新田遺跡の場合は赤褐色を呈するが、本遺跡の例はそうとは限らない）、焼き具合等が、また焼成施設内出土のものもあり、若干異なった面はあるが、器形的・底部の状況（ヘラ切りの痕跡が残るものの存在）に共通する点はあり、平安時代に存在する赤焼土器の中では比較的古い段階のものと考えられる。

以上のような古い段階の赤焼土器は各地において確認されており、現段階では特に東北地方北部岩手県に於いて多くの例が知られている。その中で、水沢市石田遺跡（八重樫他：1981）江刺市宮地遺跡、盛岡市太田方八丁遺跡（志波城）（岩手県教育委員会：1977）[註2]
での赤焼土器のあり方についてみていきたい。

石田遺跡：旧期Ｄａ56竪穴住居跡内の赤焼土器坏は口径に対して底径が大きく、器高が小さい扁平なもので底部にはヘラ切り・回転糸切りの痕跡が残るもので、調整は加えられていないもの

である。確実なものは２個体と少ない。共伴する土師器坏は器高が大きく椀的なもので底部にヘラ切りの痕跡が残り、調整の加えられていないものである。１個体と少ない。須恵器坏は器形的に本遺跡須恵器坏のA、B、C類に類似するもので底部にヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられないものと手持ちヘラケズリの調整が加えられ、切り離し痕跡が残らないものとがあり、主体はヘラ切り無調整のものである。個体数は最も多く、坏全体の主体を占めている。共伴する土師器坏の特徴、須恵器坏の組み合わせから９世紀初頭のものと考えられ赤焼土器坏も同様な年代が想定される。

宮地遺跡：第８号住居跡内の赤焼土器坏は口径に対して器高が大きいものと口径に対して底径が小さいものとがあり、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられていないものである。共伴する土師器坏は器形的に本遺跡土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ類に類似したもので、底部には回転糸切りの痕跡が残り、手持ちヘラケズリの調整が加えられているものである。共伴する須恵器坏は破片のみで図示されたものはない。

第10号住居跡内の赤焼土器坏は器高が小さく扁平なものである。底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられないものである。共伴する土師器坏は器形的には本遺跡土師器坏ＢⅠ・ＢⅡ類に類似し、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられないもの、手持ちヘラケズリの調整が加えられるもの、また調整が底部全域に及んで切り離し痕跡が残らないものとがある。

須恵器坏は器形的に本遺跡須恵器坏C類に類似し、底部に回転糸切りの痕跡が残るものである。これら各住居跡出土の土師器坏から９世紀前半から中葉にかけての年代が与えられ、赤焼土器坏も同様な年代と考えられる。

太田方八丁（志波城）：個々の住居跡内の個体数については知り得ないが、全体的にみた場合赤焼土器坏は土師器坏とほぼ同数の出土がある。器形的には口径に対して底径が大きく、器高が小さい扁平なもの、器高が大きいものがある。中には器高が大きく、体部があまり傾かず、コップ形を呈するものもある。底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残り、手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリの調整が加えられているもの、調整が底部全域に及び、切り離し痕跡が残らないものとがあり、ヘラ切り無調整が主体を占める。

共伴する土師器坏は器形的には本遺跡ＢⅠ、ＢⅡ類に類似するもので、底部には回転糸切りの痕跡が残り、手持ち、回転ヘラケズリの調整が加えられるもの、調整が底部全域に及び、切り離し痕跡が残らないものとがあり後者が主体を占める。須恵器坏は器形的に本遺跡須恵器坏A・B・C類と類似するもので底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残るもの、調整が加えられ切り離しの痕跡が残らないものとがある。ヘラ切りの場合は無調整のもの、手持ちヘラケズリ、回転ヘラケズリの調整が加えられているものとがあり、回転糸切りの場合は同様である。

この中でヘラ切りの痕跡が残るものが主体を占める。

共伴する土師器坏の特徴、須恵器坏の組み合わせから９世紀初頭から前半にかけての年代が考えられる。

このように赤焼土器は平安時代の初期の段階から確実に存在することは明らかになったわけであり、器形、底部の状況等は共伴する須恵器坏の器形等に類似してあり、須恵器製作技術（焼成方法以外）の影響が大であることがわかる。

次に平安時代後半の段階における赤焼土器について安久東遺跡の例でみていきたい。

安久東遺跡では第１～３号住居跡内から土師器坏、須恵器坏と共伴して赤焼土器坏が出土している。特に第２号住居跡内の赤焼土器は器形的には口径に対して底径が小さく、口縁・体部の傾き具合が大のもので、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整は加えられないもので構成されている。共伴している土師器坏から11世紀頃と考えられる。清水遺跡第ⅧC群土器でも同様なあり方を示している。その他、**五輪C遺跡第４号住居跡**（小野寺：1979）内では器形的、底部の状況で安久東遺跡と類似した赤焼土器が坏の中で主体的に出土しており、共伴する須恵器坏の出土はなく、土師器坏は底径が小さく、口縁・体部が大きく傾くもので、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整は加えられていないものである。土師器坏の特徴から安久東遺跡に近い年代と考えられる。また、この第４号住居跡より切り合い関係から古い第11号住居跡内からも赤焼土器が出土しており、器形的、底部の状況は第４号住居跡出土の赤焼土器坏に類似しているが、坏の中では主体を占めていない。共伴する須恵器坏はなく、土師器坏は器形的に本遺跡土師器坏ＢⅠ類に類似し、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられないもの、手持ちヘラケズリの調整が加えられ底部に切り離しの痕跡が残らないものとがあり、後者が主体を占める。土師器坏の特徴から平安時代前半頃のものと考えられ、両住居跡出土の赤焼土器では器形的、底部の状況では共通しているが、出土個体数では異なっている。

以上、平安時代の初期から前半の段階、後半の段階の赤焼土器坏についてみてきたわけであるが、両段階における赤焼土器坏では若干様相が異なっていると考えられる。つまり、初期から前半の段階では器形、底部切り離し技法にバラエティーのある組み合わせで、後半の段階になると、器形、底部切り離し技法は斉一化の傾向になっていくことが知られる。しかも、個体数は、多くなる傾向になる。

つまり、前半の段階では本遺跡須恵器坏A～D類に類似したもので底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残るもの、調整が加えられた切り離し痕跡が残らないもので構成されている。後半の段階になると器形的には本遺跡須恵器坏D類に類似したもので、底部には回転糸切りの痕跡が残り、調整が加えられないもののみで構成され、赤焼土器坏自体の消長過程が大筋であるが存在していることは明らかである。しかし、現段階ではあくまで大筋であり赤焼土器坏自

体からの年代決定には困難な要素が十分あり、土師器坏、須恵器坏との共伴関係、赤焼土器の組み合わせ等から検討しなければならないと考える。

まとめると、現段階では赤焼土器の初現期はロクロ技術が土師器に導入される段階で、本格的にロクロ使用土師器坏が製作される段階に求められ、内黒土師器坏、須恵器坏とともに、平安時代における坏を構成しており、しかも初期から前半の段階と後半段階とでは若干様相を異にしていたことが考えられる。そして、その分布は東北地方南部から北部にかけてみられるが分布の主体は北部にあると考えられる。

以上のようなことをふまえて、最後に多賀城内出土の須恵系土器との関係を検討してみたい。須恵系土器は多賀城跡内城から出土した坏、皿に付けられた名称でその特徴は製作にロクロが使用され、（色調が赤褐色を呈し）、内、外面に再調整が加えられず、土師器とは異なり、須恵器が酸化炎焼成の土器に転化した結果生じたものとされており（多賀城跡調査研究所：1971）、上限が11世紀、下限は12世紀末頃と考えられている（桑原：1976）。

また、須恵系土器の出現年代について多賀城跡、多賀城廃寺跡、陸奥国分寺跡で検出される灰白色火山灰から10世紀前半から後半頃とする考えもある（白鳥：1980）。

このような須恵系土器の規定内容について諸々の見解がある。その名称については「一般的な土器の名称から言えば土器群の系統を示す語が名称として用いられることは異例に属し、「須恵系土器」はその名称故に混乱をひきおこしているように思われる。」（辻：1980）と名称の不適当さを指適されており、その内容について小井川氏は焼成施設の問題、須恵系土器のもつ意味等に疑問があるとし、特に焼成施設の問題から「現段階においては、結論的には須恵系土器は「赤焼土器」の範囲としてとらえられるものであり、その意味においては土師器の範ちゅうに含まれるものであると考えている。」と述べ、須恵系土器は赤焼土器の中に含まれるものであるとしている（小井川：1981）。筆者もこの見解に従い、多賀城内における須恵系土器を今まで問題にしてきた赤焼土器の内容と同じものと考え、その年代について、特に白鳥氏が提示した多賀城内における該種土器の出現年代について検討する。

氏は土師器、須恵器、須恵系土器等の組み合わせ、共伴関係からA～F群まで分け、各群の年代について述べている（白鳥：1980）。この中で須恵系土器が出現するのはE群土器の段階であるとし、それ以前の段階とされているC、D群土器には全く須恵系土器は含まれないとしE群土器については多賀城内に存在する灰白色火山灰の年代[註3]から10世紀前半に上限の年代を求めC、D群土器の年代決定とは全く異なった要素を利用して年代を与えている。しかも、C群土器は各土器の組み合わせ等から、D群土器は須恵器坏の底部切り離し技法からと年代決定のための要素は一定せず、各群を通しての土器編年上の基準設定が瞬味であり、一貫した分析方法ではないといえる。そして、E群土器は須恵系土器の出現をもってそれ以前のD群土器と区別

され、各々異なった年代が与えられており、年代決定上のひとつのメルクマールとして考えられている。

しかし、前に検討したように須恵系土器を含む赤焼土器は平安時代でも初期の段階には存在していることは明確になったわけであるので９世紀初頭という年代が与えられているＣ群土器以降、赤焼土器は他の土器と共存していた可能性は十分考えられる。また、現段階では赤焼土器自体の消長過程が未だ明確でないため赤焼土器の存在、あるいは出現でもって即年代を決めること自体、非常に危険性を含んでおり、共伴する他の土器の年代に依存しなければならず、赤焼土器の存在から他の土器の年代を決することはできないはずである。また第33次ＳＫ1076土壙跡第３ａ亜層には須恵系土器坏が含まれている（多賀城跡調査研究所：1979）。共存する土師器坏は口径に対して器高が小さく扁平なもので器形的には本遺跡土師器坏ＢⅡ類と類似しているもので手持ちヘラケズリの調整が加えられ、底部に切り離し痕が残らないものである。また、須恵器坏は本遺跡須恵器坏Ａ・Ｃ類と器形的に類似しているもので底部にはヘラ切り、回転糸切りの痕跡が残るものである。このような特徴をもつ土師器坏・須恵器坏と須恵系土器坏は共伴すると思われ、特に、土師器坏の特徴からＣ群土器～Ｄ群土器の年代の中に含まれるものと考えられ、９世紀代の年代が想定される[註4]。

このように多賀城内でも赤焼土器（須恵系土器も含む）は平安時代の初期の段階から存在していたことが十分考えられる。したがって、本遺跡も含めて平安時代でも比較的古い段階に赤焼土器が存在する類例が増えつつある現在、平安時代の初期にはすでに土師器、須恵器、赤焼土器の三種類の土器で坏は構成されていたとするのが妥当であると考えられ、一般的な土器のあり方と思われる。

以上、本遺跡出土土器について土師器坏、須恵器坏、赤焼土器坏の特徴から年代を考えてきたわけである。その他の土器も出土状況等から上記の土器とほぼ同じ年代が与えられる。特に灰釉陶器の段がつく皿は９世紀前半頃と考えられている平城宮跡ＳＤ650Ａ様式土器（奈文研：1975）のものと類似しており、ほぼこれに近い年代のものと考えられ、多少前後するが前述した土器の年代の中に入るものと思われる。

このように今回出土した土器の年代は一部奈良時代のもの（第Ⅰ群土器）があるが主体は平安時代前半の段階、９世紀中葉頃のものである。土器の構成の中で須恵器の出土量、特に須恵器坏の個体数が多いこと、灰釉、緑釉陶器が少ないが存在すること等を考慮すると一般集落遺跡出土の土器のあり方とは若干異なった様相を呈しているといえる。

註１　ＳＤ114溝跡内堆積土は４層にわかれ、最下層の４層からの出土土器はなく、１～３層中からの出土である。したがって厳密に言えば、溝構築時に伴う土器群ではなく、溝が廃棄されてからのもので胆沢城創建の年代、802年以降のものと考えられ、その下降年代の幅は知り得な

いが、９世紀初頭という年代には慎重に対処しなければならないと思う。

註２　現在、報告書の作成中であり、正式な成果は知り得ないが、岩手県教育委員会の相原・斎藤両氏の御配慮により出土土器の一部を実見することができた。ここでは現地説明会資料と土器観察時のメモを基に特徴を述べている。

註３　このような灰白色の火山灰は宮城県各地においてみられ、同質のものでその降下年代は約800年Ａ・Ｄより新しいとされている（山田・庄子：1980）。

註４　第33次ＳＫ1076土壙跡第３ａ亜層出土土器の組み合わせについては報告書の図面から判断したわけで、実際に資料を見ていないので詳細については知り得ない。したがって、「共伴」関係については不明な点が多いが、ここでは可能性のみ提示したい。

第４表　墨書土器一覧表

墨書(記号)	種　別	器種	部　位	地　点	層	登録No.	墨書(記号)	種　別	器種	部　位	地　点	層	登録No.
福	土師器	坏	体部外面	東西溝		EM-5	卑	須恵器	坏	底部外面	東西溝		EM-30
福	須恵器	坏	体部外面	東西溝		EM-8	上	須恵器	坏	底部外面	O－12	3層	Ⅲ-45
福	須恵器	坏	体部外面	東西溝		EM-10	石	須恵器	坏	体部外面	東西溝		EM-27
福	須恵器	坏	体部外面2ヶ所	B－7	5層	V-11	丸	須恵器	高台付坏	底部外面	N－7	6層	Ⅵ-1
福	須恵器	蓋	ツ マ ミ	I－14	3層	Ⅲ-183	子	須恵器	坏	底部外面	D－8	3層	Ⅲ-253
福	須恵器	坏	体部外面	P 1		P-1	木	須恵器	坏	底部外面	東西溝		EM-29
福	須恵器	坏	底部外面			M-20	□林	須恵器	坏	底部外面	P 16		P-19
福	須恵器	坏	底部外面	P 86		P-2	礼	土師器	坏	体部外面	東西溝		EM-6
福	須恵器	坏	底部外面	C－11	2層	Ⅱ-48	了?	土師器	坏	底部外面	×	×	
福ヵ禧	須恵器	坏	底部外面	溝 7		M-19	⌣	須恵器	坏	体部外面	O－12	1層	I-28
福ヵ	須恵器	坏	体部外面	東西溝		EM-31	⌣	須恵器	坏	底部外面	N－8	5層	V-4
臨「福」	須恵器	坏	底部外面	P 41		P-22	キ	須恵器	坏	体部外面	溝 4		M-4
大	須恵器	坏	底部外面	C－11	2層	Ⅱ-38	十	須恵器	坏	底部外面	O－7	1層	I-20
大	須恵器	坏	体部外面	O－10	1層	I-29	十	須恵器	坏	体部外面	H－11	3層	Ⅲ-90
大	須恵器	坏	体部外面	東西溝		EM-28	⌣	須恵器	坏	底部外面	南北溝		M-11
田ヵ	須恵器	坏	体部外面	P 58		P-5	墨痕のみ	須恵器	坏	底部外面	P 216		P-20
田	須恵器	坏	体部外面	第2井戸内		2井-2	了	土師器	坏	底部外面	第1井戸	掘り方	
⊕	土師器	甕	底部外面	J－8	3層	Ⅲ-216	兀	土師器	坏	体部外面	P 186		P-21
⊕	須恵器	坏	底部外面	東西溝		EM-14							

Ⅸ. 遺構の検討

今回の調査区からは掘立柱建物跡８棟、井戸跡２基、溝７本、土壙５基が検出された。これら各遺構の年代・配置状況について検討する。

１．遺構の年代

①掘立柱建物跡

金部で８棟分検出された。建物跡の検出地区はピットの集中する４地区にわかれる。これらの地区において建物跡の周囲になお多くの柱痕跡等のあるピットが存在するため棟数が増加する可能性はある。しかし、ピットの配置状況、組み合わせ等に規則性はなく、さらに建てることは困難である。各建物跡の規模等は第５表に示したとおりである。

これをみると全て桁行３間×梁間２間の建物である。棟方向は南北棟のもの（第２・４・５・６・７建物跡）と東西棟のもの（第１・３・８建物跡）とがあり、前者が多い。各建物跡の桁行・梁間の各寸法はほとんどが不揃いであるが、両者の寸法は近似しており、全体の規模はほぼ同じものと考えられる。しかし、掘り方の形状、規模に違いが認められる。つまり、掘り方が方形を呈し、規模の大きい建物跡のグループ（第１・２建物跡）と掘り方が円形を呈し、規模の小さい建物跡のグループ（第３～８建物跡）とがある。これらのグループ間では後述するように時期差があるものと考えられる。次に各建物跡間の重複関係についてみる。

重複は次の３地区においてて認められる。すなわち、第２・３建物跡のグループ、第４・５・６建物跡のグループ、第７・８建物跡のグループが検出された地区である。これらの地区において確認された重複関係から各建物跡間の先後関係について整理すると以下のようになる。

第２建物跡 → 第３建物跡、第５建物跡 → 第４建物跡、第８建物跡 → 第７建物跡
｜
第６建物跡

しかし、各グループ間の先後関係については確証はなく不明な点が多い。このようなことから建物跡の構築にはいくつかの時期差・段階があると考えられる。特に第２建物跡と第３建物跡の先後関係から掘り方の形状・規模の違いには時期差があるものと考えられる。つまり、掘り方が方形で規模の大きい建物跡は円形で規模の小さい建物跡よりも古く、今回検出された建物跡は少なくとも２時期に亘っていると考えられる。したがって、第Ⅰ期に属するものは第１・２建物跡であり、次の段階の第Ⅱ期には第３～８建物跡が属するものと考えられる。しかし、

第Ⅱ期の中でも重複関係があり、さらに後続する段階がある可能性はある。そして、第Ⅰ期、第Ⅱ期、後続する段階の時間的幅は極めて短期間であったものと思われる。以上のようなことをふまえてこれら建物跡の構築年代について検討する。各建物跡の柱穴から土師器・須恵器等の土器が出土している。そのほとんどが細片であり、全体の特徴を示すものはないが、土師器坏はロクロ使用のもので平安時代である。しかし、平安時代のどの段階に位置する土器かは不明である。また、これらの土器は掘り方埋土中からと柱痕跡堆積土中からの出土であり、厳密には前者の場合はその土器以降、後者の場合はその土器以前の年代が想定される。したがって各建物跡の構築年代は柱穴出土土器だけでは確実に計り知り得ず、大きく平安時代ということに終止せざるをえない。

さらに細かな年代を検討するため、各建物跡の確認状況についてみていく。各建物跡は最終的に第Ⅳ層上面で確認された。第Ⅳ層の上には遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層が堆積している。そして、各層からは先述した第Ⅰ・Ⅱ群土器が出土しており、その内第Ⅱ群が主体を占める。しかも両群土器の年代より新しいと考えられる遺物の出土は皆無である。したがって、各建物跡の構築年代は第Ⅱ群土器の年代に近い。さらに厳密に言えば第Ⅱ群土器が廃棄された時期より若干古い段階のものと考えられる。しかし、第５建物跡のように第Ⅲ層上面から柱穴が掘り込まれ、第Ⅱ群土器（第Ⅲ層に含まれている第Ⅱ群土器）が廃棄されてから構築された可能性が考えられるのもあり、第Ⅱ群土器との先後関係について論じることは困難な状況である。

つまり、各建物跡は第Ⅱ群土器の年代（９世紀中葉頃）を中心として構築され、廃棄されたものと考えられる。しかも、各建物跡は先述した第Ⅰ期・第Ⅱ期・またそれに後続する可能性のある段階に属することからさらに構築年代は細分される可能性はある。しかし、第Ⅱ群土器には土器の検討により細分される要素が存しないので明らかではない。

第５表　掘立柱建物跡一覧表

棟No.	棟方向	桁行×梁間	桁行 柱間	桁行 総長	桁行 平均	梁間 柱間	梁間 総長	梁間 平均	掘り方 形状
1号棟	東西棟	3 × 2	南列 1.8 ＋(1.8) ＋(1.7) 北列 1.85＋1.8 ＋1.8	5.3 5.45	1.79	東列 1.7 ＋ 2.4 西列 1.7 ＋ 2.3	4.1 4.0	2.03	方形
2号棟	南北棟	3 × 2	東列 2.0 ＋ 2.3 ＋ 2.35 西列 2.25＋ 2.2 ＋ 2.3	6.65 6.75	2.23	南列 2.2 ＋ 2.35 北列 2.6 ＋ 2.2	4.55 4.8	2.34	円形
3号棟	東西棟	3 × 2	南列 2.1 ＋ 1.8 ＋ 1.9 北列 1.9 ＋(1.9) ＋(1.9)	5.8 5.7	1.92	東列 1.5 ＋ 1.7 西列 1.5 ＋ 1.8	3.2 3.3	1.63	円形
4号棟	南北棟	3 × 2	東列 1.7 ＋ 2.1 ＋ 1.8 西列 1.8 ＋ 1.8 ＋ 1.95	5.6 5.55	1.86	南列 2.0 ＋ 1.8 北列 2.05＋ 2.05	3.8 4.1	1.98	円形
5号棟	南北棟	3 × 2	東列 1.95＋ 1.8 ＋ 2.1 西列 2.0 ＋ 1.8 ＋ 1.9	5.85 5.7	1.93	南列 2.2 ＋ 2.0 北列 2.55＋ 1.7	4.2 4.25	2.11	円形
6号棟	南北棟	3 × 2	東列 1.3 ＋ 1.5 ＋(1.6) 西列 1.4 ＋ 1.8 ＋ 1.3	4.4 4.5	1.48	南列 2.1 ＋ 1.4 北列 2.0 ＋ 1.8	3.5 3.8	1.83	円形
7号棟	南北棟	3 × 2	東列 1.4 ＋ 2.3 ＋ 1.9 西列 1.3 ＋ 1.9 ＋ 2.3	5.6 5.5	1.85	南列 2.7 ＋ 1.5 北列 2.1 ＋ 2.3	4.2 4.4	2.15	円形
8号棟	東西棟	3 × 2	南列 1.5 ＋ 1.5 ＋ 1.6 北列 1.6 ＋(1.45)＋(1.45)	4.6 4.5	1.52	東列 1.3 ＋ 1.6 西列(1.5)＋(1.5)	2.9 3.0	1.48	円形

単位：m、(　)は推定

② 井戸跡

井戸跡は２基検出された。いずれも井戸掘り方と井戸枠から成るものである。その内、第２井戸跡は確認のみに留めている。以下、各井戸跡の年代について検討する。

第１井戸跡：井戸掘り方埋土、井戸枠内出土土器、確認状況は井戸構築、廃棄年代の手懸りとなる。すなわち、掘り方埋土出土土器は構築年代・井戸枠内出土土器は廃棄年代に近い年代をあらわしていると思われる。前者からは全体の特徴がわかる土器として須恵器坏３点が出土している。また後者からは赤焼土器小皿５点が出土している。このように両者出土の土器の個体数は少ない。しかも、年代の推定が可能な土師器坏（器形・製作技法等がわかるもの）の出土がないことから須恵器坏・赤焼土器小皿のみから年代を与えるのは極めて困難を要する。掘り方埋土出土の須恵器坏は器形的にＢ類、Ｃ類のものでＢ類の底部には手持ちヘラケズリの調整が加えられ、回転糸切りの痕跡が残るものであり、Ｃ類は全てヘラ切りの痕跡が残るものである。これらの須恵器坏は第Ⅱ群における須恵器坏を構成するもので第Ⅱ群土器の年代、９世紀中葉頃を中心とした時期以降に構築年代を求めることが可能である。また、井戸枠内出土の赤焼土器小皿であるが、これのみから年代を求めるに諸々の問題がある。赤焼土器小皿は井戸底面近くで５点伴に出土している。このことは井戸の使用・廃棄のいずれかの時期に意図的に投げ込まれた可能性を示している。したがって、厳密には廃棄の年代を示すとは限らない。そして、その廃棄の仕方にも意味があるものと思われ、しかも赤焼土器は「小皿」という特殊な器形でもあるため他の日常雑器と同レベルで考えることはできず、ここでは年代決定のための主体的な資料にはなりえない。このように井戸掘り方埋土、井戸枠内出土土器からは確実な年代を与えることはできない。

次に井戸の確認状況についてみる。井戸の最終確認面は第Ⅳ層上面である。しかし、さらに上層から掘り込まれた可能性もあるが、調査の段階で十分検証することはできず不明である。したがって、第Ⅳ層を覆っている遺物包含層第Ⅱ・Ⅲ層との関係には不明な点が多い。以上、出土土器、確認状況から井戸の年代について検討しできたわけであるが、いずれからも確実な年代を求めることはできない状況である。しかし、掘立柱建物跡群との関係において井戸のあり方からある程度の年代が推定される。つまり、本遺跡では井戸と掘立柱建物跡群とは切り離して考えることはできず、井戸単独で存在するわけでなく、共存していたものと考えられる。掘立柱建物跡は前項で検討したように９世紀中葉頃を中心とした年代と考えた。しかも、重複関係から大きく二時期の段階があるものと考えられた。したがって、第１井戸跡はこれに近い年代と推定されるが、どの段階に位置するかは明らかでない。

第２井戸跡：基本的に第１井戸跡と同様、井戸掘り方と井戸枠から成るものである。確認は遺物包含層第Ⅲ層中である。第Ⅲ層は第Ⅱ群土器を主体に出土しており、これらの土器が廃棄さ

れた段階に構築されたものと考え、第Ⅱ群土器の年代、９世紀中葉頃の所産と考える。

第１・２井戸跡は構築・廃棄年代に多少の差異はあるものと思われるが、掘立柱建物跡と伴に９世紀中葉頃を中心に共存し、そして機能していたものと考えられる。

③ 溝

東西溝の年代のみ検討する。

東西溝は調査区の北側部分において東西に走る溝である。一部のみの調査で全体的な様相は明らかでない。溝内堆積土中出土土器と遺物包含層・整地層との関係から溝の年代について検討する。堆積土中から出土した土師器坏･須恵器坏についてみると土師器坏は器形的にＢⅠ･ＢⅡ類のみで構成され、また須恵器坏はＢ・Ｃ類のみで構成されている。こういった組み合わせは遺物包含層第Ⅱ、Ⅲ層で主体的に出土している第Ⅱ群土器における土師器坏の組み合わせとは様相を異にしており、土師器坏ＢⅢ類が組み合わないということで第Ⅱ群土器の年代よりは若干古い段階のものと考えられる。また、溝と整地層、遺物包含層第Ⅲ層の重複関係は前章で述べたように溝は第Ⅲ層を除去した段階で確認され､溝の上面の一部に整地層が認められることにより溝が埋没した段階で整地がおこなわれ､その後、遺物包含層第Ⅲ層が堆積したものと思われ、第Ⅲ層が堆積した年代より古いことがわかる。したがって、第Ⅲ層で主体的に出土している第Ⅱ群土器の年代、９世紀中葉頃以前の段階に構築され、廃棄されたものと考えられる。

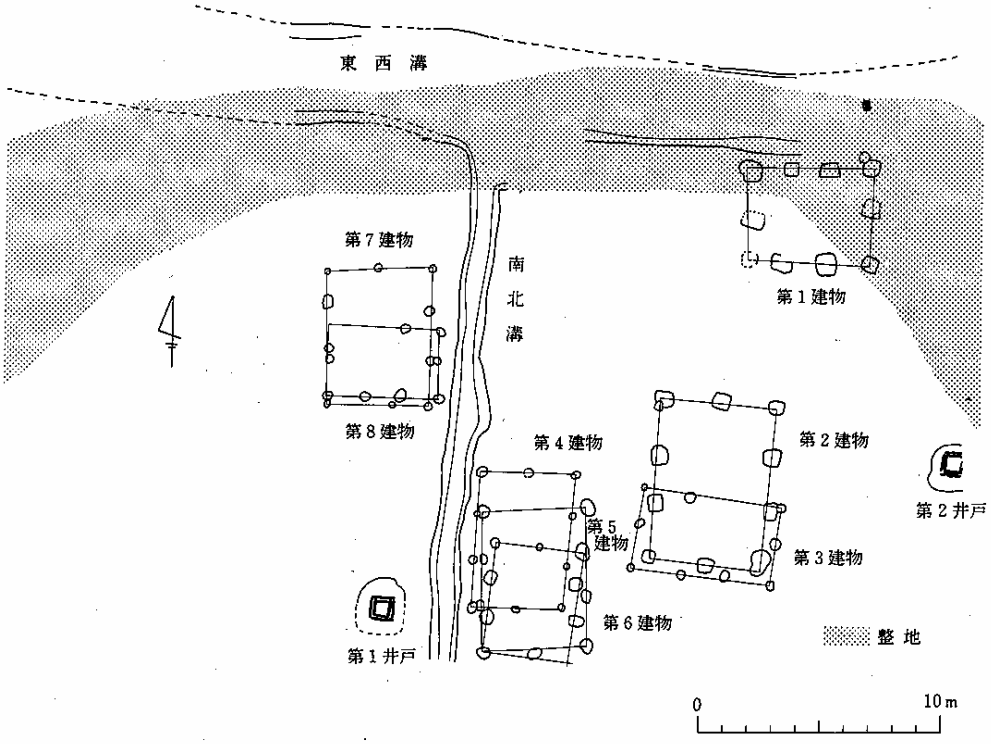
２．遺構の配置状況

今回の調査区からは掘立柱建物跡、井戸跡、溝等の遺構が検出された。そして、各々の年代について主に出土土器、確認状況等から検討した。ここでは調査範囲内といった制約はあるがこれら遺構の配置状況について記す。特に掘立柱建物跡、井戸跡、溝の占める場について検討してみたい。

先述したように各遺構は平安時代、９世紀中葉頃を中心として構築され、廃棄されたものである。その中で、掘立柱建物跡は少なくとも二時期にわたり、また、東西溝は９世紀中葉以前に構築され、廃棄されたことはすでに述べた。そして、２基の井戸跡の確実な年代は明らかではないが、二時期にわたる掘立柱建物跡のある段階に属するものと考えられる。したがって、各遺構の確実な年代は明白ではなく、しかも、若干の時期差も考えられ、ある一定の時期の遺構の配置状況、あるいは同時存在の遺構の状況等を正確に知ることはできない。以上のようなことを前提として、各遺構の占地について検討する。

調査区全域における遺構の配置状況は第87図のとおりである。これをみると、調査区北側に

は東西溝が走り、中央部には南北溝が走っており、調査区北側から東西方向にかけて、範囲については推定であるが、整地が行なわれている。掘立柱建物跡はピットが集中する４地区において構築されており、この４地区はいずれも東西溝の南側である。東西溝より北側地区には遺構は存在せず、第１掘立柱建物跡が最も東西溝に近く、遺構構築場の北端に位置している。また、このような掘立柱建物跡の中で南北棟の建物跡における棟方向は東西溝に直交するような方向を示している。さらに、２基の井戸跡の内、第１井戸は調査区南側中央部の南北溝に近くの所にあり、井戸枠の方向は先述した建物跡とほぼ同方向を示し、東西溝に直交するようになっている。このように東西溝、掘立柱建物跡、井戸跡の配置には時期差を若干、超えるが、何らかの規則性が窺われる。そして、東西溝の延び方向は多賀城の南外郭線にほぼ沿うようようになっている。このことは単なる偶然性なのか否か明らかでないが、溝の性格等とも関連してくると思われる。しかし、調査範囲の制約等から結論を提示することはできない。



第87図　掘立柱建物跡・井戸跡・溝配置図

Ｘ．ま　と　め－遺跡の性格－

ここでは調査で検出された遺構・遺物等から遺跡の持つ性格について若干考えてみたい。今回の調査区は砂押川左岸に形成された自然堤防の微高地上にある。この自然堤防の広がり方、規模等については十分明らかでないが、北側、東・西側では湿地と接するようになり、調査区は北方向に舌状に延びた自然堤防の突端部分にあたると考えられる。そして、湿地と接するところには場をさらに拡大するため整地が行なわれている。特に調査区北側ではやや北寄りで東西方向に走る東西溝が整地以前に構築されている。また、この東西溝に直交して南北溝が調査区中央部を南北方向に走っている。掘立柱建物跡、井戸跡等の各遺構は東西・南北溝によって区画された場に各々存在しており、このような各遺構の配置状況は極めて特徴的である。以上が巨視的にみた調査区内での遺構のあり方である。特に各遺構は重複関係等により時期差が考えられ、相互に機能し合いながら変遷していったことが想定されるが、調査の段階では明確にされなかった。東西溝は先述したように少なくとも整地以前のものでそれに直交する南北溝も東西溝とほぼ同時期に機能していたものと思われる。しかも両溝は遺跡の一部あるいは遺跡内での場の区割の機能を果しており、東西溝は北側で外部との区画、南北溝は遺跡内での小区割の一部を成しているものと考えられる。このような溝によって区画された微高地上に存在する掘立柱建物跡は前項で述べたように少なくとも二時期にわたり、各時期は出土土器の検討により平安時代前半９世紀中葉頃を中心とした時間幅の中で考えられる。しかも重要なことは第Ⅱ期に含まれる柱穴掘り方が小規模な建物跡も上述した時間幅の中に入ることである。従来、この種の柱穴を有する建物跡は平安時代以降のものと考えられ、問題視されなかった傾向があったが、今回の調査で十分建物跡として組み合うことが確認され、該期の建物跡を検討する場合無視することのできない事実である。このような二時期にわたる建物跡と区割の機能を果している溝、場の拡大の整地、そして井戸跡との関係についてさらに検討してみたい。

今回の調査区内でこれらの遺構が同時に出現したことは重複関係等により考えられない。むしろ、各遺構の出現・機能・存続にはいくつかの段階が存したものと思われる。つまり、第１段階として遺跡の大きな区割そして遺跡内での小区割を目指した東西溝、南北溝が構築された段階である。東西溝が走る方向は多賀城の南外郭線の方向と大略一致し、南北溝はそれに直交するように存在していることはある一種の計画性に基づいて両溝が構築された可能性がある。

次の第２段階は湿地と接する微高地の縁辺に整地が行なわれ、場の拡大がなされた段階である。第１段階の両溝はすでに縮少しており、特に東西溝はほぼ埋没している状況である。各段階毎に伴う建物跡は調査時において十分把握されなかったが、第１段階から第２段階にわたっ

て建物跡は存続しており、その中で南北棟の建物跡全てが東西溝に直交するように存在しているのは興味深いことである。また、第Ⅱ期に含まれている建物跡の一部が南北溝を切っており、該期の段階ではすでに南北溝の規模が縮少していたことが窺われる。したがって、第Ⅰ期の建物跡は溝による区割が出現し十分機能していた第１段階の時期に近く、そして第Ⅱ期の建物跡は整地が行なわれ、溝の規模を次第に縮少させていった改変が盛行した第２段階に近いことが考えられる。そして、第１段階の時期は９世紀中葉以前と考えられるが、一部国分寺下層式期の土器も存在することから８世紀後半の年代も考えられる。また、第２段階は９世紀中葉頃周辺の年代が考えられる。しかも、各建物跡の周囲に多数のピットが存していることから両段階の間には何度も建替えが行なわれたことがわかる。そして、これら建物跡は一角に井戸を保有するものであり、調査区のほぼ中央部、南北溝の西側近くの場所と調査区北側の場所に各々１基ずつ井戸跡が存在する。西井戸跡の方向は東西棟の建物跡と同様、東西溝に直交している。各井戸跡の年代については確実に提示する資料が欠如しているため不明であり、そのためどの段階に伴うものか明らかでない。したがって、井戸を中心とした建物跡の配置状況については多く語れない。

このように今回の調査区内では各遺構は互いに有機的な関係にあり、機能し合っていたことが理解される。溝による区画がされ、区画された場には井戸を一角に有する建物跡が存在している。そして、溝には機能の度合により規模が縮少されていく過程がある。特に前述したように建物跡の一部（南北棟）と井戸跡の方向は東西溝に直交している。このような配置は自然地形等の外的要因とは考え難く、むしろ社会的・政治的な要因が介在していたものと推定される。そして、前に述べたように調査の段階でこれらの遺構間の関係は十分把握されなかったが、上記のような遺構の構成、あり方に遺跡の特性の一端が窺われる。

出土遺物は土器の他、瓦・硯・木製品等がある。特に出土土器の中で須恵器の出土量が多いこと、灰釉・緑釉陶器が少量であるが出土していること、円面硯等の硯類が比較的多く出土していること等が注目される。

以上のように集落を構成する遺構の種類、さらに各遺構のあり方、出土遺物の種類・豊富さ等から他の一般集落（主に住居が竪穴住居跡のみで構成される集落跡）とは様相を異にしている。特に遺跡を構成する住居は全て掘立柱建物跡のみであり、本遺跡ではすでに平安時代前半９世紀中葉頃において住居は竪穴住居ではなく、掘立柱建物跡であることにもひとつの特性を見い出すことができる。しかも、官衙跡等で検出される建物跡とは規模・構造上で異なる面があり、一般的な居住の場としての色彩が濃い。したがって、本遺跡（今回の調査区）は位置的に多賀城跡に近接しており、多賀城外を取り囲む多賀城に関係（現段階では具体的内容について不明である）のある集団の居住区域の一部分を占めているものと思われる。このような多

賀城外でしかも近接している遺跡として他に高平遺跡（多賀城跡調査研究所：1974）が本遺跡の東方約200㎜の所にある。高平遺跡でも自然堤防の微高地上に遺構が存在し整地も行なわれている。

検出された遺構は掘立柱建物跡８棟、竪穴住居跡７軒である。建物跡は２間×３間で規模は本遺跡とほぼ同じである。棟方向は南北棟と東西棟とで同棟数である。しかも、建物跡と竪穴住居跡との重複関係から前者は後者に後続するものと理解されている[註]。このように高平遺跡の場合、住居は掘立柱建物跡と竪穴住居跡で構成されており、両者の間に年代的な差はあるものの本遺跡と様相を異にしている。つまり本遺跡の場合、調査区内では竪穴住居跡は存在せず、掘立柱建物跡のみで構成されている点である。以上のような遺構の構成の差の要因については現在多くを知ることができない。そして再三述べるように本遺跡、また高平遺跡のような多賀城外でしかも近接している遺跡は遺構等から多賀城と深い係わり合いをもっていたものと思われ、周辺の自然堤防の微高地上には城外（外郭線外）における居住区域等を構成する様々な遺構の存在が考えられる。今後この付近一帯の調査（特に砂押川によって形成された自然堤防の微高地の規模・範囲をおさえることは重要である。）が進めば、さらに多くの事実が判明するものと思われる。例えば、居住域の範囲、占地の状況、区割の仕方、あるいはその内部における遺構の配置状況、区割等が明らかとなり多賀城を含めた周辺地域の諸様相がさらに理解されるものと思われる。今後の調査に期待したい。

註：報告によると掘立柱建物跡は「須恵系土器」の出土から11世紀頃とし、竪穴住居跡は出土した須恵器坏から９世紀前半～10世紀頃の年代を与えており、建物跡群の性格は竪穴住居跡に後続する平安時代後半の集落跡と理解されている。しかし、年代決定の目安となっている「須恵系土器」の出土量が少なく、また特徴等がわかる内容かどうか不明な点があるため建物等の年代についてはなお検討が必要であろう。建物跡は竪穴住居跡に後続することは重複関係から明らかにされているが、年代的には上記のような時間的幅よりもさらに短かい可能性も十分考えられる。したがって建物跡群を平安時代後半の単一の集落跡とするには問題が残る。

〈引用参考文献〉

阿部義平（1968）：「東国の土師器と須恵器ー多賀城外出土土器をめぐってー」『帝塚山考古学』№1

阿部・千葉（1980）：「台ノ山遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱー『宮城県文化財調査報告書』第62集　宮城県教育委員会

伊藤・新田（1977）：『胆沢城跡ー昭和51年度発掘調査概報ー』岩手県水沢市教育委員会

伊藤・新田（1979）：『胆沢城跡ー昭和53年度発掘調査概報ー』岩手県教育委員会

岩手県教育委員会（1977）：『太田方八丁遺跡現地説明会資料』

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第８輯　東北史学会

岡田・桑原（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所

小笠原好彦（1976）：「東北地方における平安時代の土器についての二三の問題」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

太田昭夫（1980）：「御所内遺跡ー東北自動車遺跡調査報告書Ⅱー」『宮城県文化財調査報告書』第63集　宮城県教育委員会

小川淳一（1980）：「青木遺跡ー東北自動車遺跡調査報告書Ⅳー」『宮城県文化財調査報告書』第71集　宮城県教育委員会

小野寺祥一郎（1979）：「五輪Ｃ遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集　宮城県教育委員会

木本元治（1978）：「下原遺跡７号ピット出土の土器について」『しのぶ考古』７　しのぶ考古学会

桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会

桑原滋郎（1976）：「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会

熊谷幹男（1980）：「西原遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲー」『宮城県文化財調査報告書』第69集　宮城県教育委員会

小井川・高橋（1977）：「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第５号

小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡ー宮城県文化財調査略報」『宮城県文化財調査報告書』第53集　宮城県教育委会

小井川和夫（1981）：「上新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第78集　宮城県教育委員会

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵー」『宮城県文化財調査報告書』第83集　宮城県教育委員会

古窯跡研究会（1981）：『次橋窯跡ー第２次調査．現地説明会資料』

斉藤吉弘（1979）：「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集　宮城県教育委員会

佐々木勝他（1980）：「宮地遺跡ー東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳー」『岩手県文化財調査報告書』第48集　岩手県教育委員会

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

鈴木啓他（1975）：「下原遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告」『福島県文化財調査報告書』第47集　福島県教県教育委員会

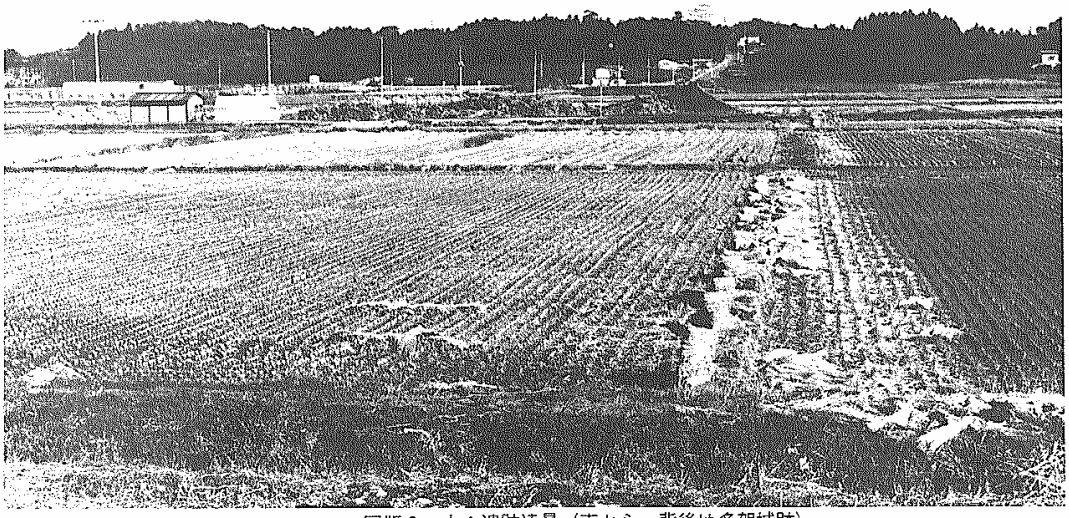
高野・熊谷（1978）：「多賀城第Ⅱ期の刻印文字瓦」『研究紀要』Ⅴ　宮城県多賀城跡調査研究所

多賀城市教育委員会（1980）：「館前遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第１集

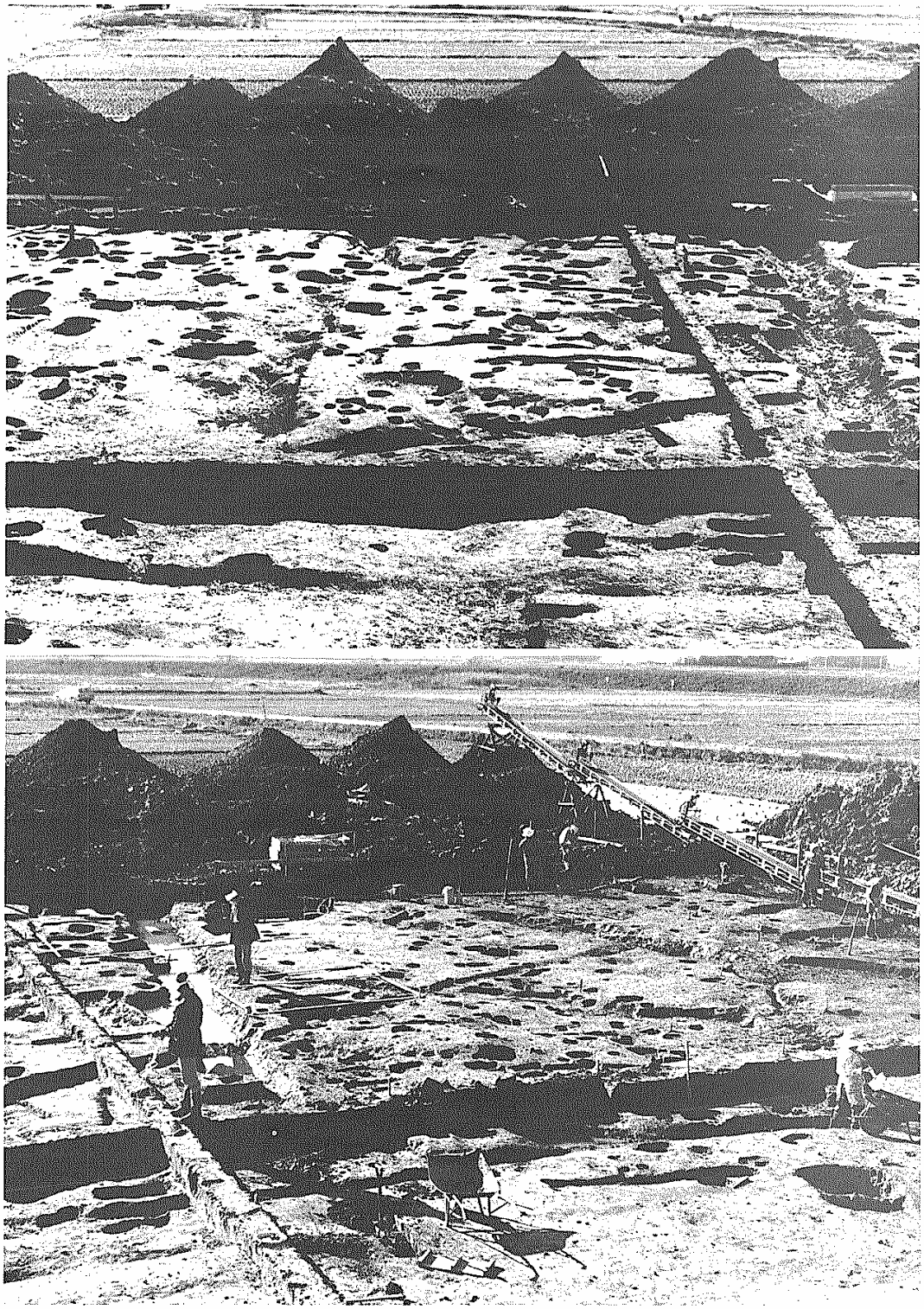
玉川一郎他（1978）：「谷地前C遺跡ー母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅱ」『福島県文化財調査報告書』第67集　福島県教育委員会　（財）福島文化センター
辻秀人（1980）：「第３章出土遺物ー郡山台Ⅳー」『二本松市文化財調査報告書』第６集　福島県二本松市教育委員会
東北学院大学考古学研究部（1979）：「亀岡遺跡発掘調査報告」『温故』第12号
土岐山武（1980）：「安久東遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳー」『宮城県文化財調査報告書』第72集　宮城県教育委員会
奈良国立文化財研究所（1975）：「平城宮発掘調査報告Ⅵ」『奈良国立文化財研究所学報』第23冊
丹羽・小野寺他（1981）：「清水遺跡ー東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集　宮城県教育委員会
日高努他（1980）：「佐平林遺跡Ⅷー母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅴ」『福島県文化財調査報告書第58集　福島県教育委員会　（財）福島県文化センター
真山悟（1981）：「東山遺跡ー東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴー」『宮城県文化財調査報告書』第81集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会（1961）：『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』
宮城県多賀城跡調査研究所（1971）：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1970
宮城県多賀城跡調査研究所（1974）：『宮城県多賀城跡調査研究所年報』1973
宮城県多賀城跡調査研究所（1978）：「伊治城跡Ⅰ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第３冊
宮城県多賀城跡調査研究所（1979）：「伊治城跡Ⅱ」『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』第４冊
八重樫良宏他（1981）：「石田遺跡ー東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅶー」『岩手県文化財調査報告書』第61集　岩手県教育委員会

写　真　図　版

図版１　遺跡周辺空中写真（建設省国土地理院空中写真）



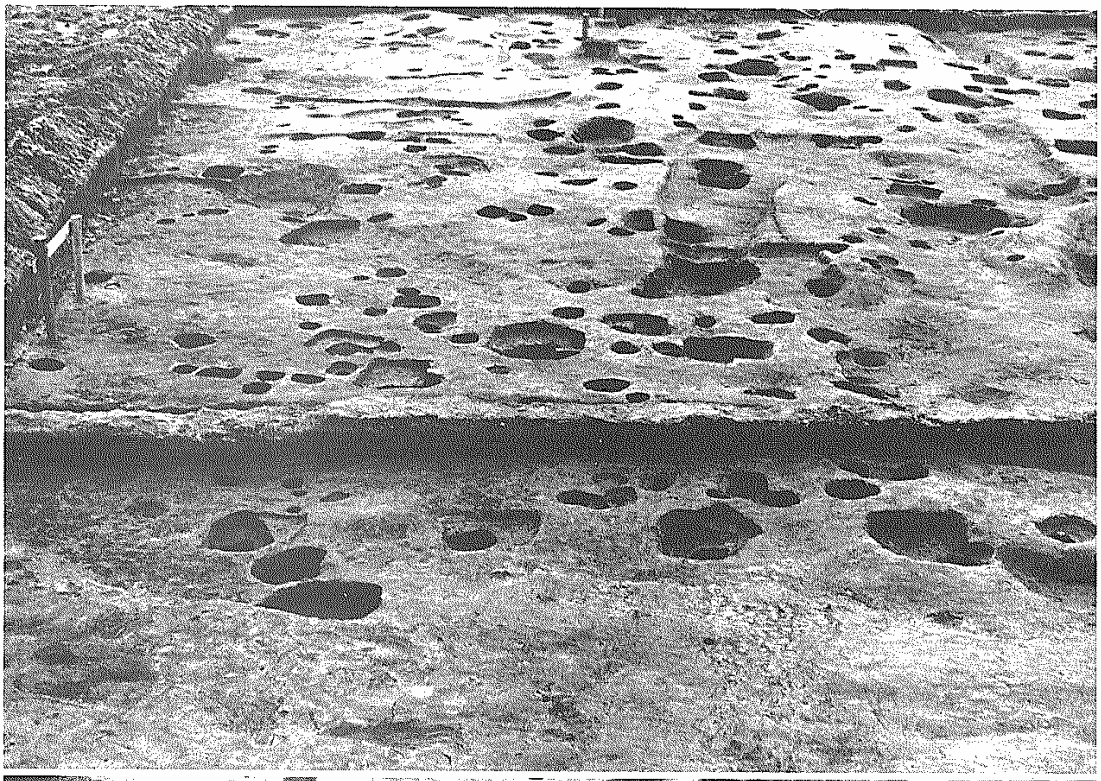
図版２　上：遺跡遠景（南から、背後は多賀城跡）
下：　〃　（西から、背後は高崎廃寺）

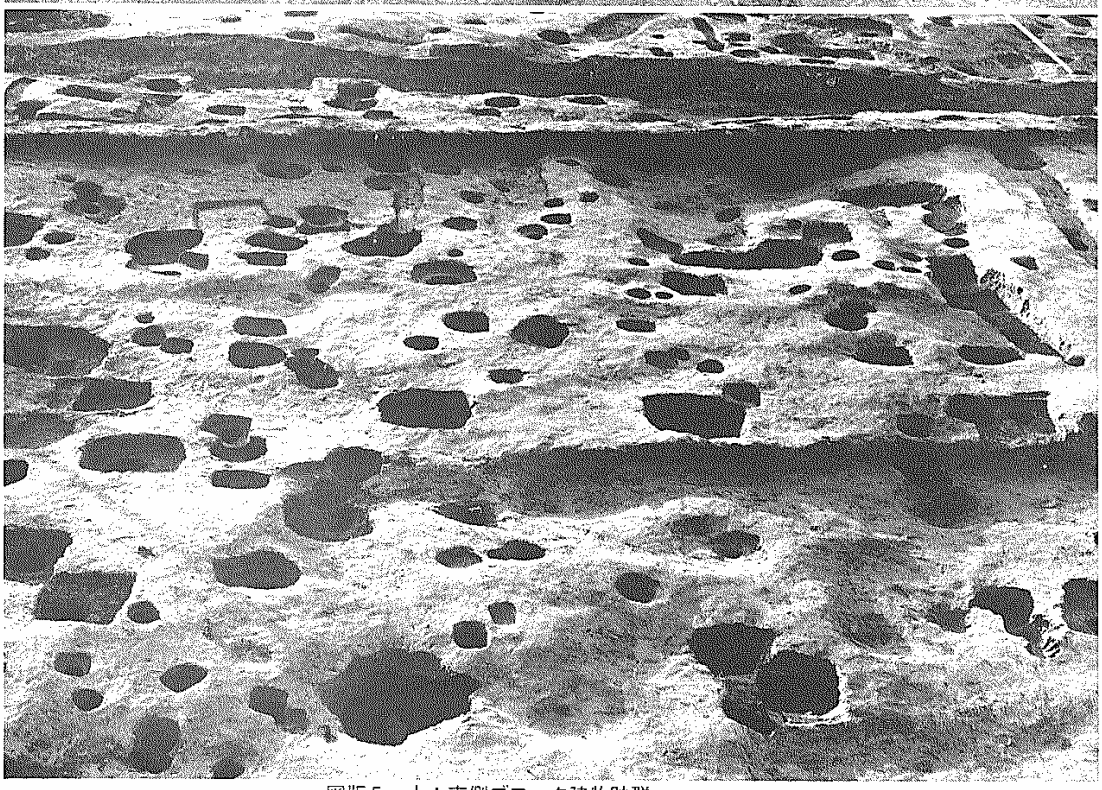


図版3　上：発掘区 中央部
下：　〃　西　側

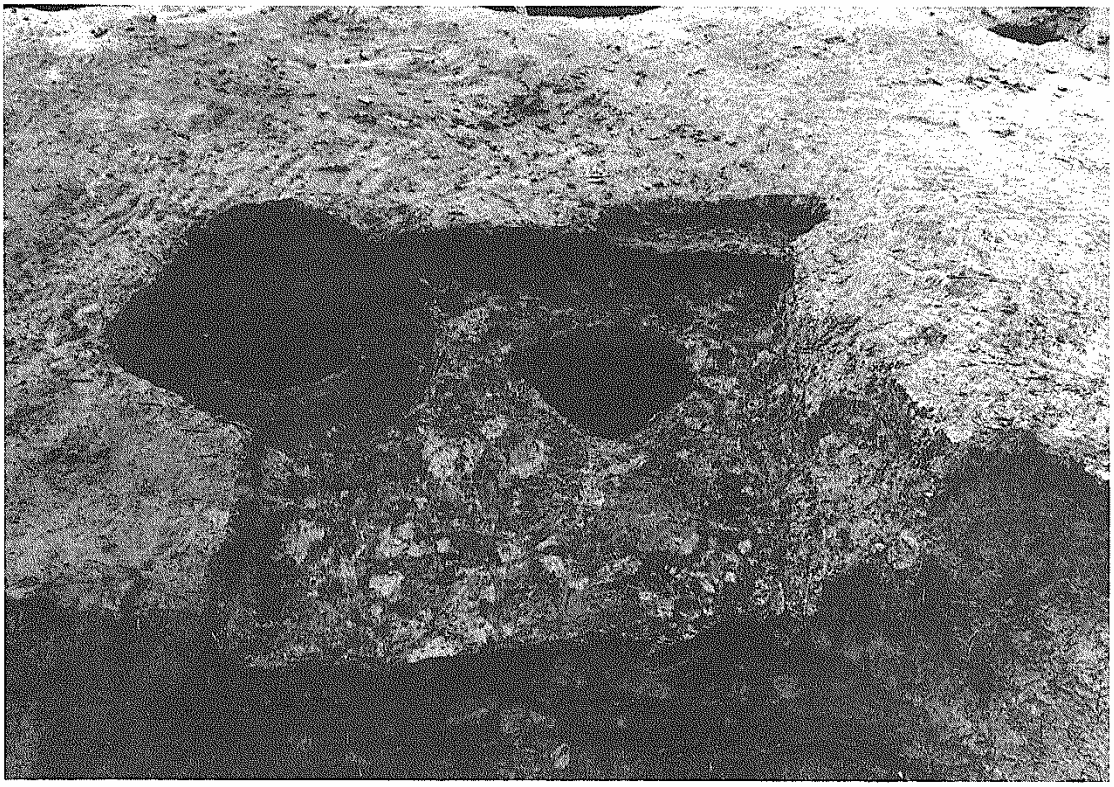
図版4　上：発掘区　東　側
下：南東ブロック建物跡群

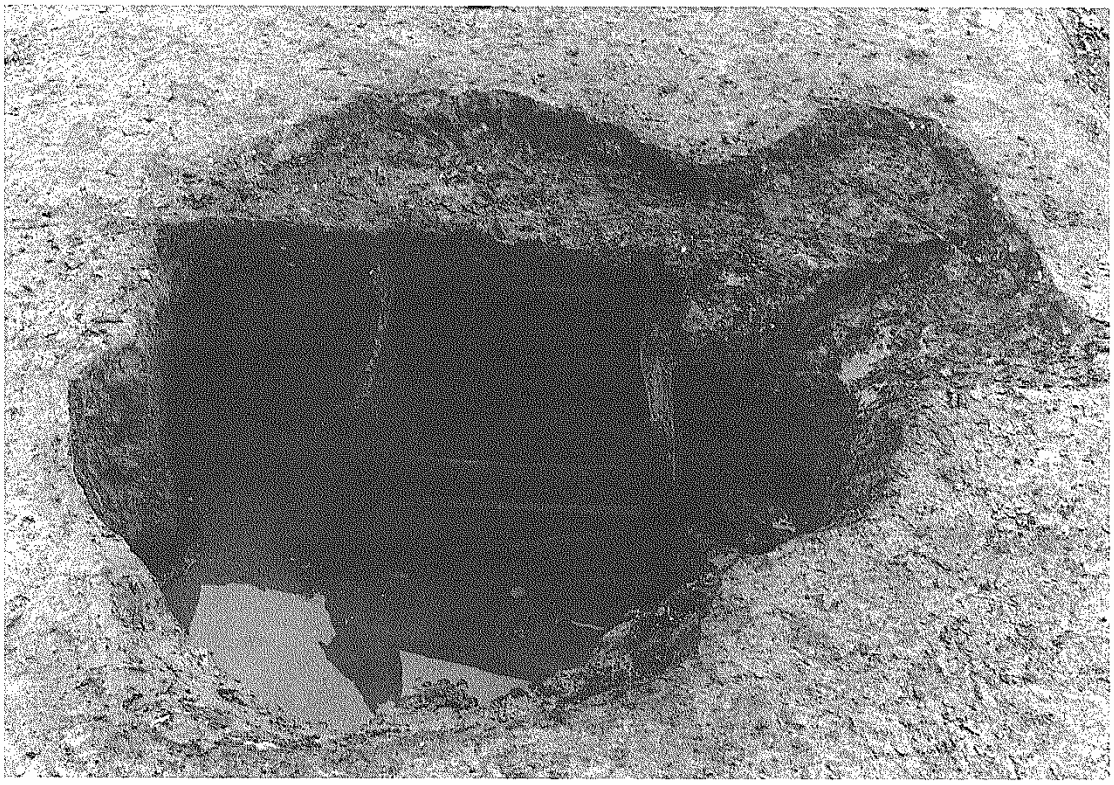
146



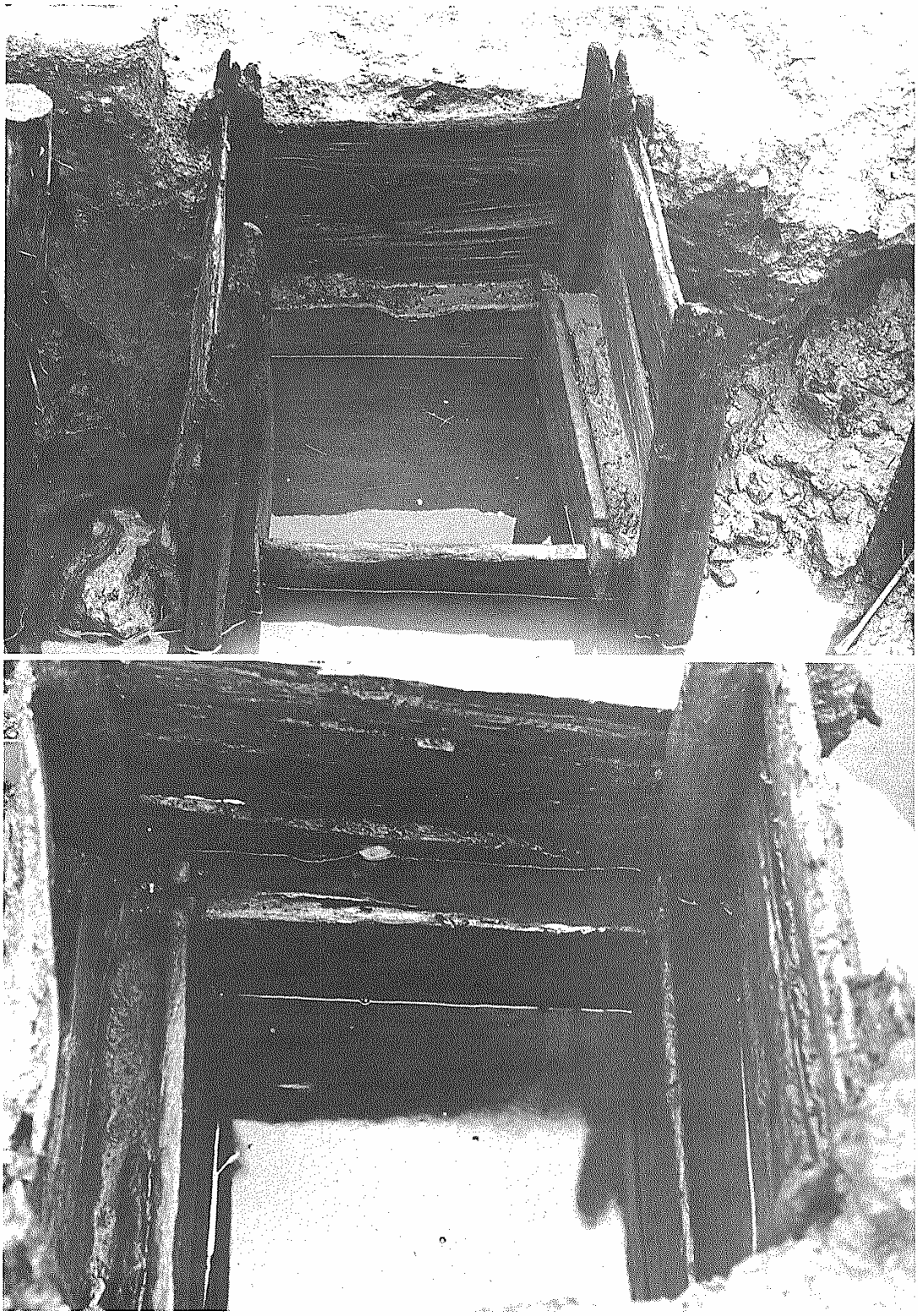


図版５　上：東側ブロック建物跡群
下：第１掘立柱建物跡

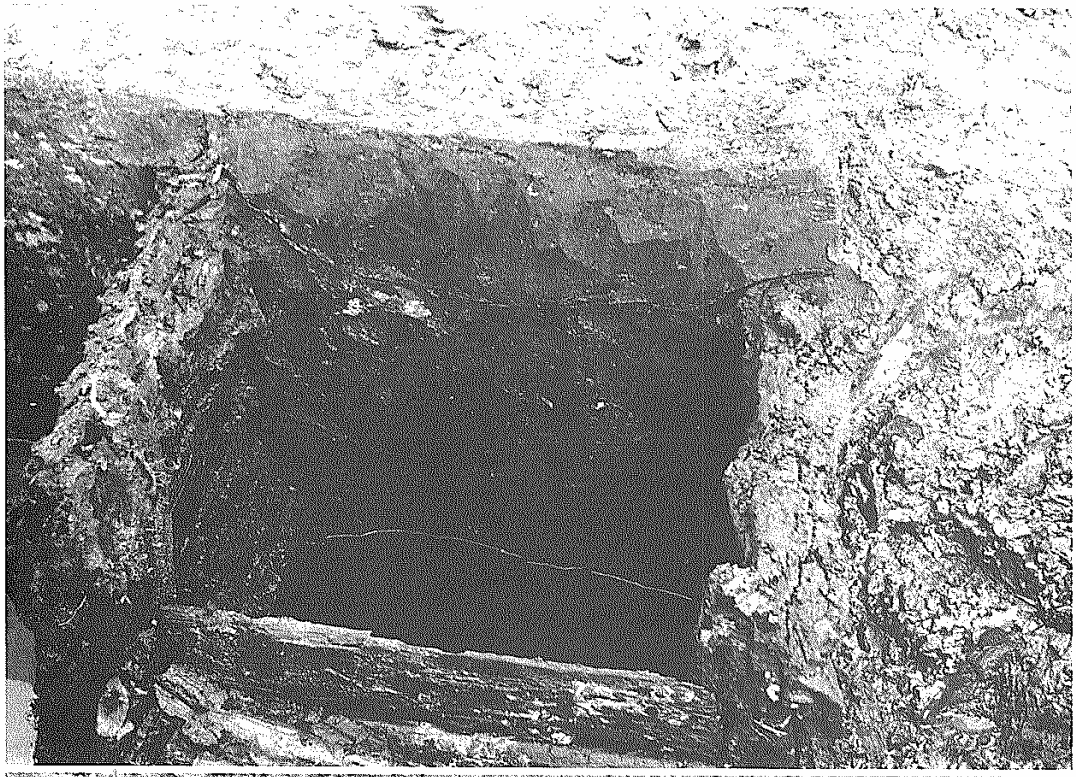


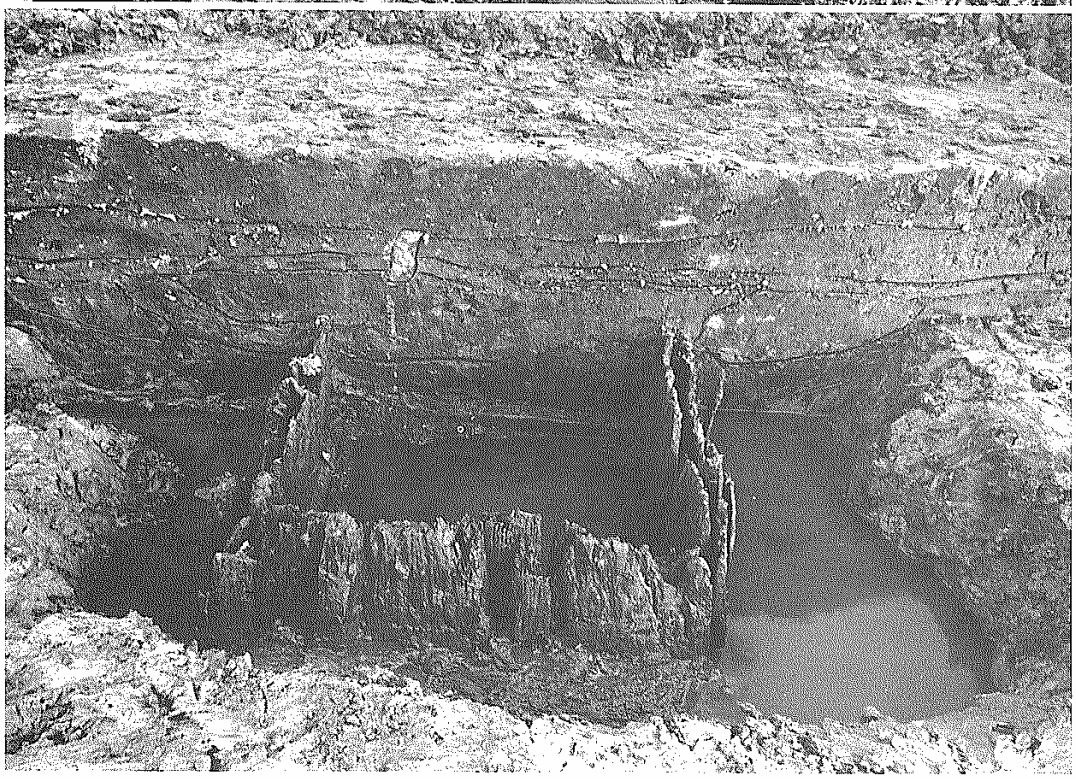


図版６　上：柱穴切り合い状況
下：第１井戸跡南から

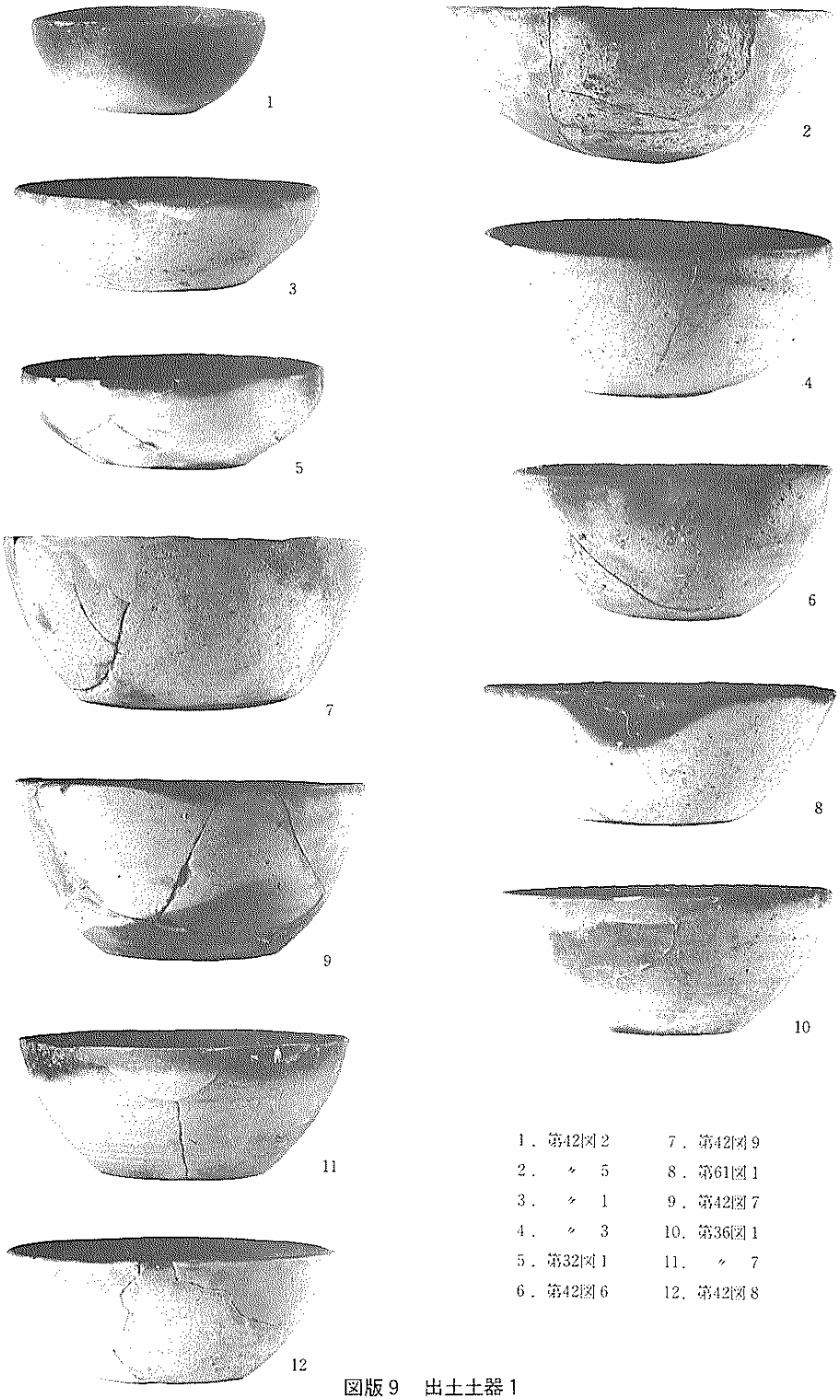


図版７　上：第１井戸跡井戸枠南から
　　下：　　〃　　枠内の状況



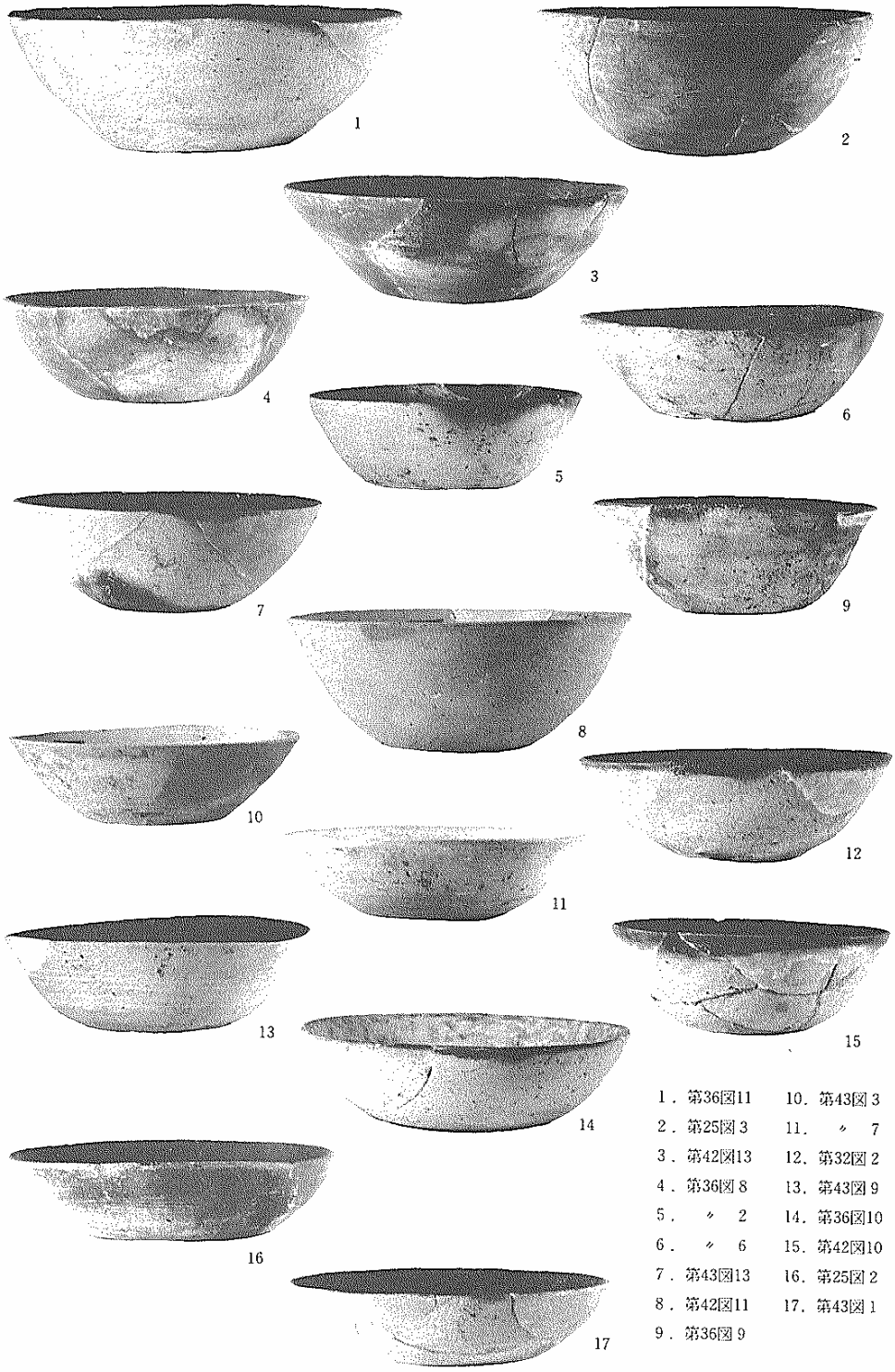


図版８　上：第１井戸跡枠間堆積土
下：第２井戸跡



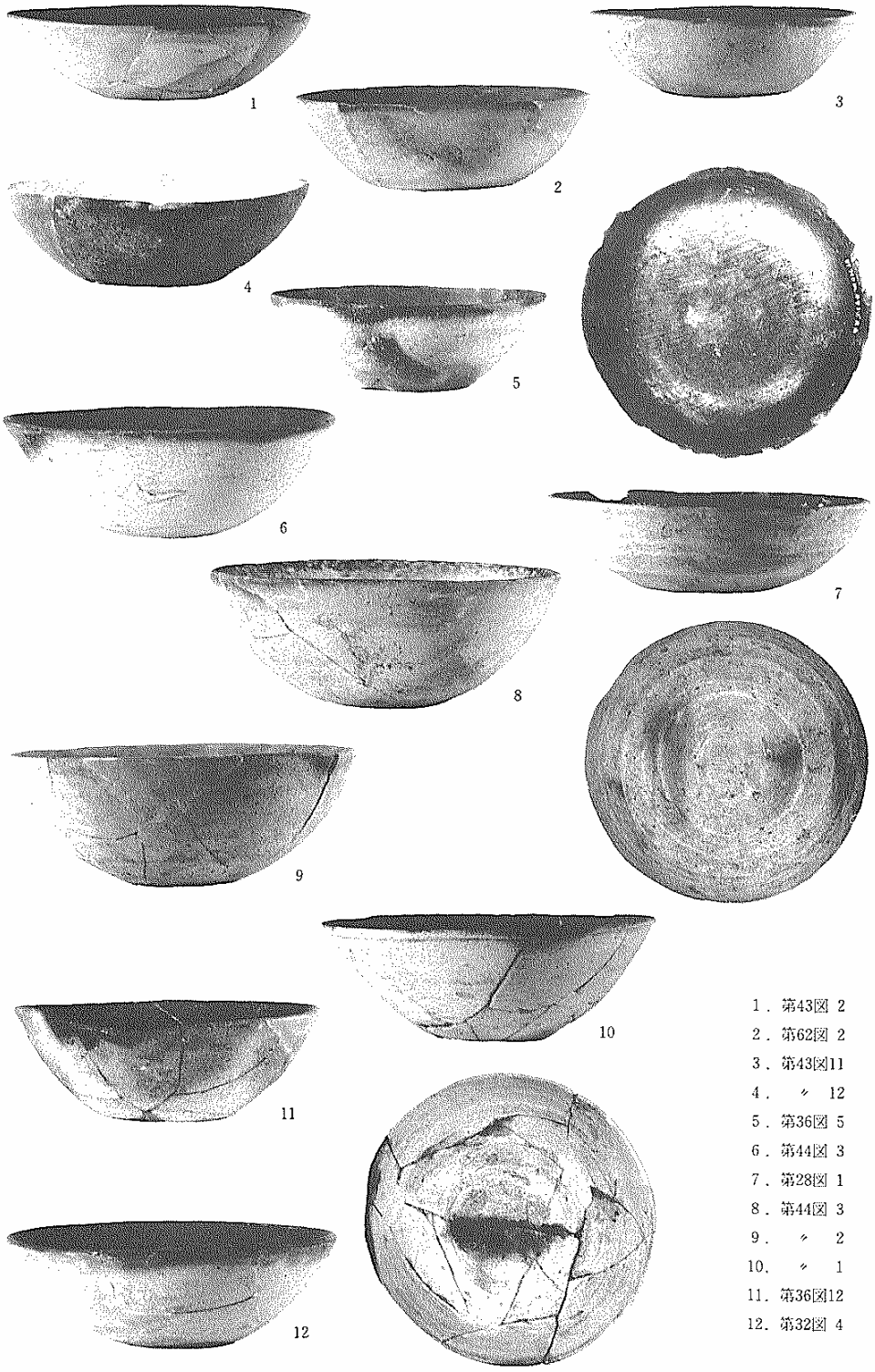
1．第42図2　　7．第42図9
2．〃　5　　8．第61図1
3．〃　1　　9．第42図7
4．〃　3　　10．第36図1
5．第32図1　　11．〃　7
6．第42図6　　12．第42図8

図版9　出土土器1



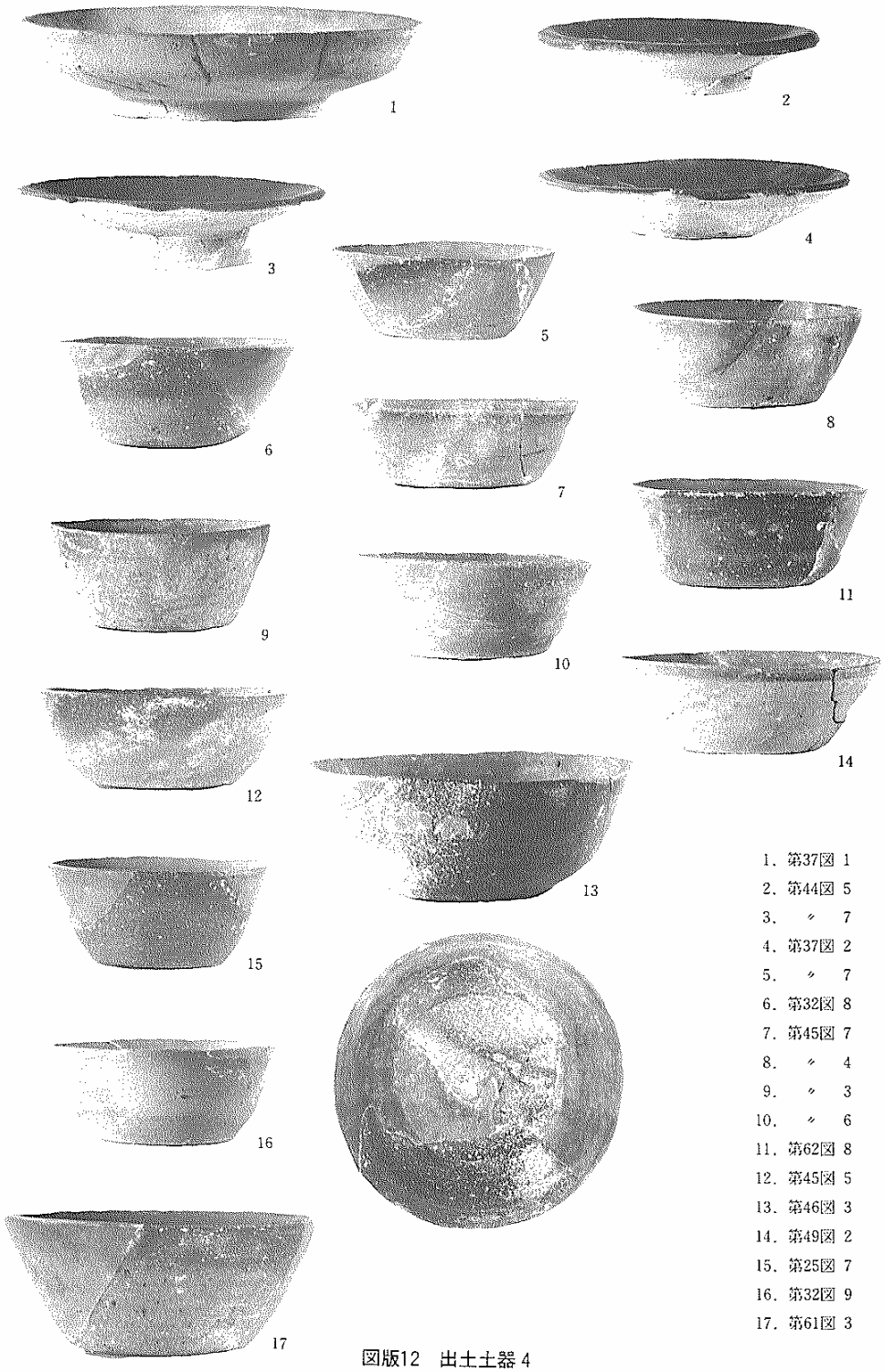
1．第36図11
2．第25図3
3．第42図13
4．第36図8
5．〃 2
6．〃 6
7．第43図13
8．第42図11
9．第36図9
10．第43図3
11．〃 7
12．第32図2
13．第43図9
14．第36図10
15．第42図10
16．第25図2
17．第43図1

図版10　出土土器2



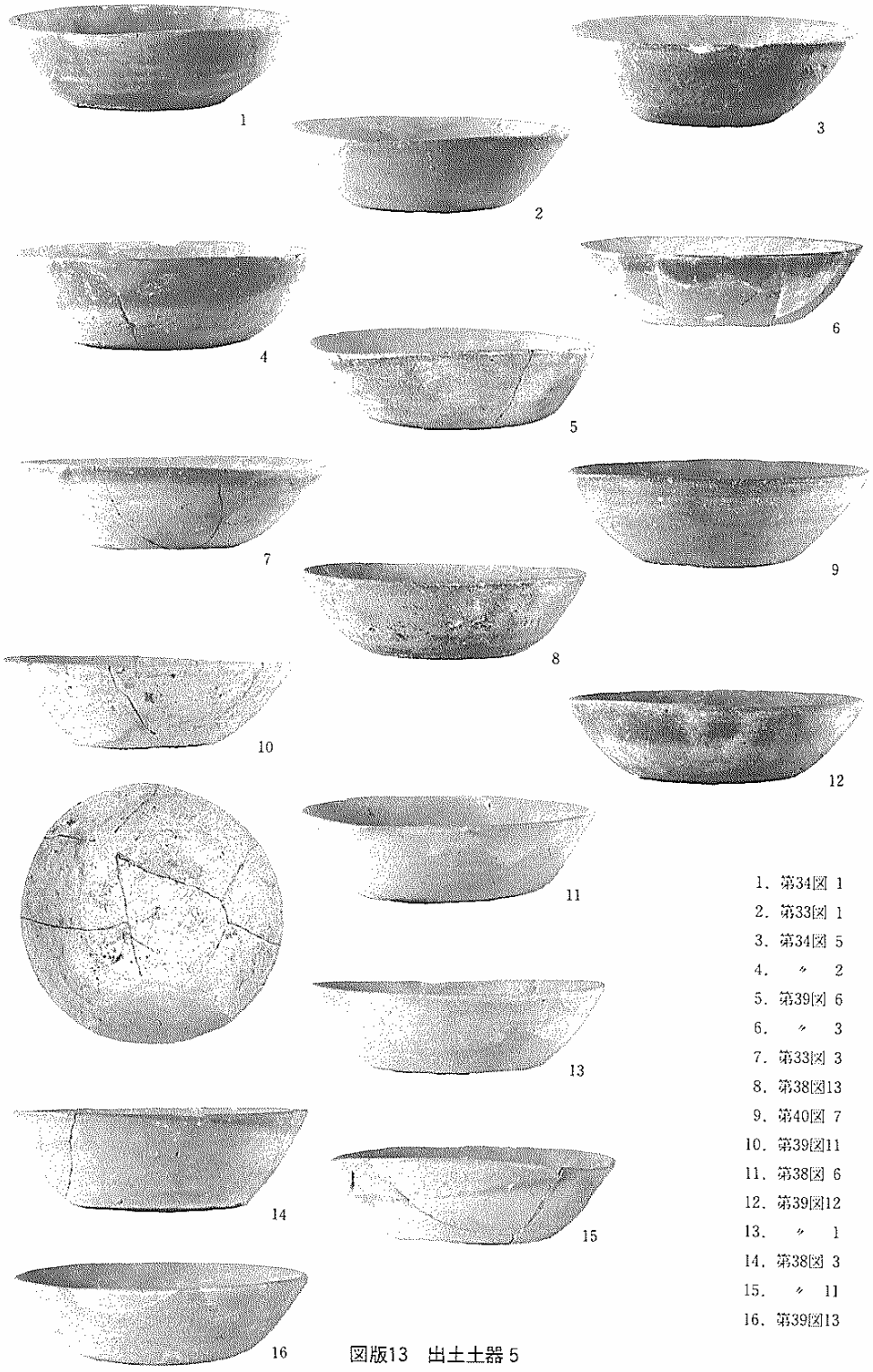
1．第43図 2
2．第62図 2
3．第43図11
4．〃 12
5．第36図 5
6．第44図 3
7．第28図 1
8．第44図 3
9．〃 2
10．〃 1
11．第36図12
12．第32図 4

図版11　出土土器 3



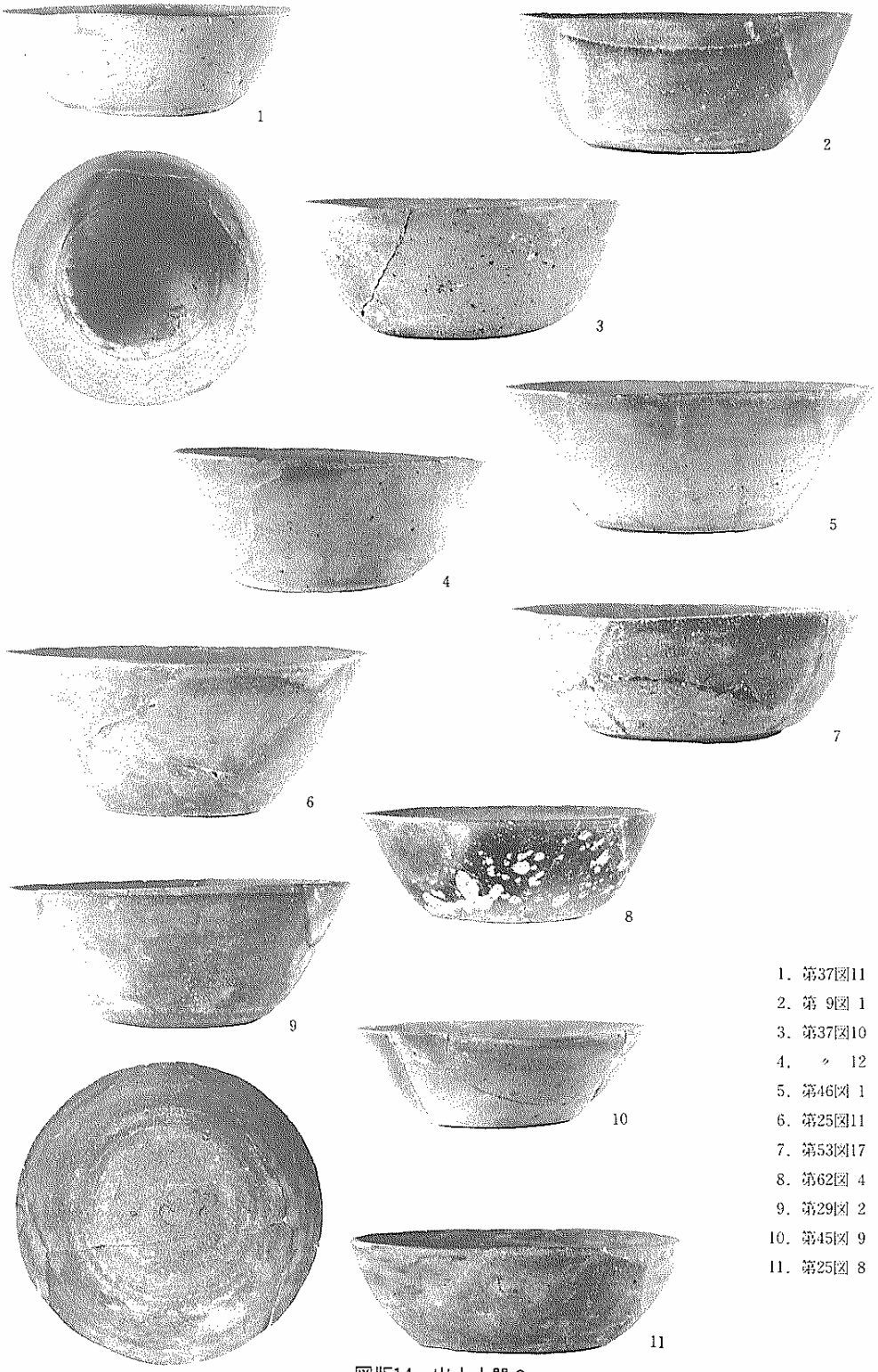
1．第37図 1
2．第44図 5
3．〃 7
4．第37図 2
5．〃 7
6．第32図 8
7．第45図 7
8．〃 4
9．〃 3
10．〃 6
11．第62図 8
12．第45図 5
13．第46図 3
14．第49図 2
15．第25図 7
16．第32図 9
17．第61図 3

図版12　出土土器 4



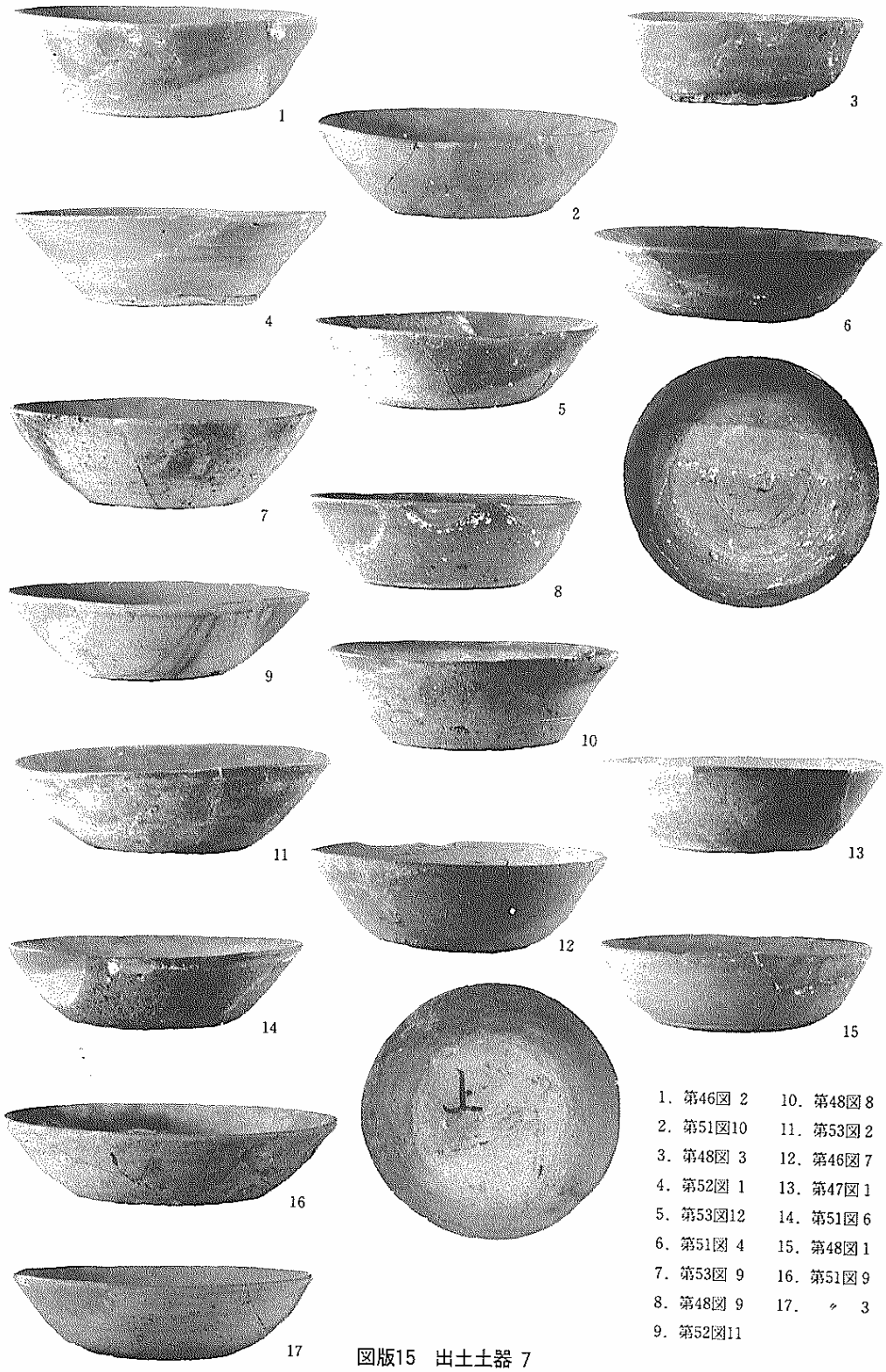
1．第34図 1
2．第33図 1
3．第34図 5
4．〃 2
5．第39図 6
6．〃 3
7．第33図 3
8．第38図13
9．第40図 7
10．第39図11
11．第38図 6
12．第39図12
13．〃 1
14．第38図 3
15．〃 11
16．第39図13

図版13　出土土器 5



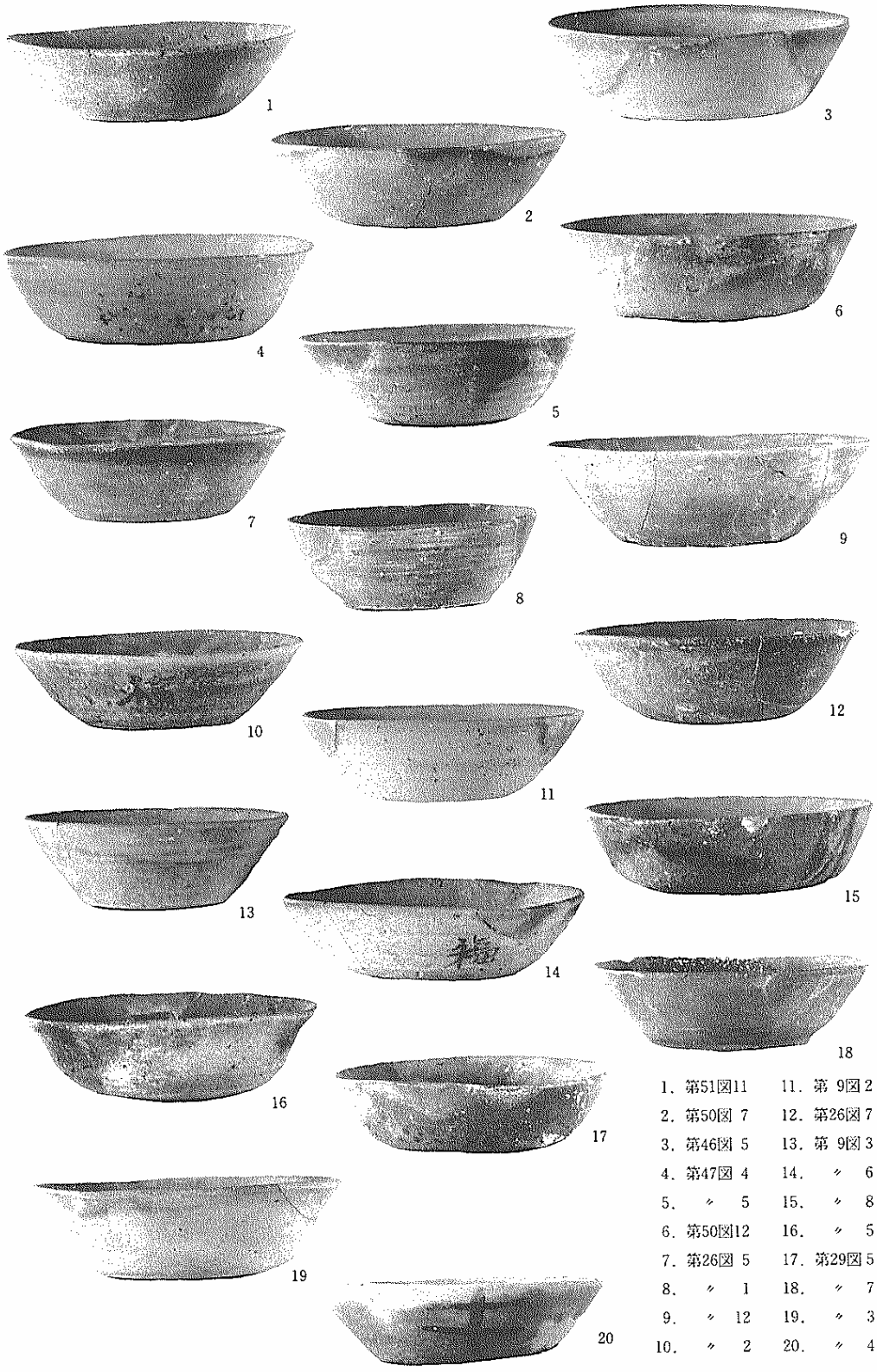
1．第37図11
2．第 9図 1
3．第37図10
4．　〃　12
5．第46図 1
6．第25図11
7．第53図17
8．第62図 4
9．第29図 2
10．第45図 9
11．第25図 8

図版14　出土土器 6



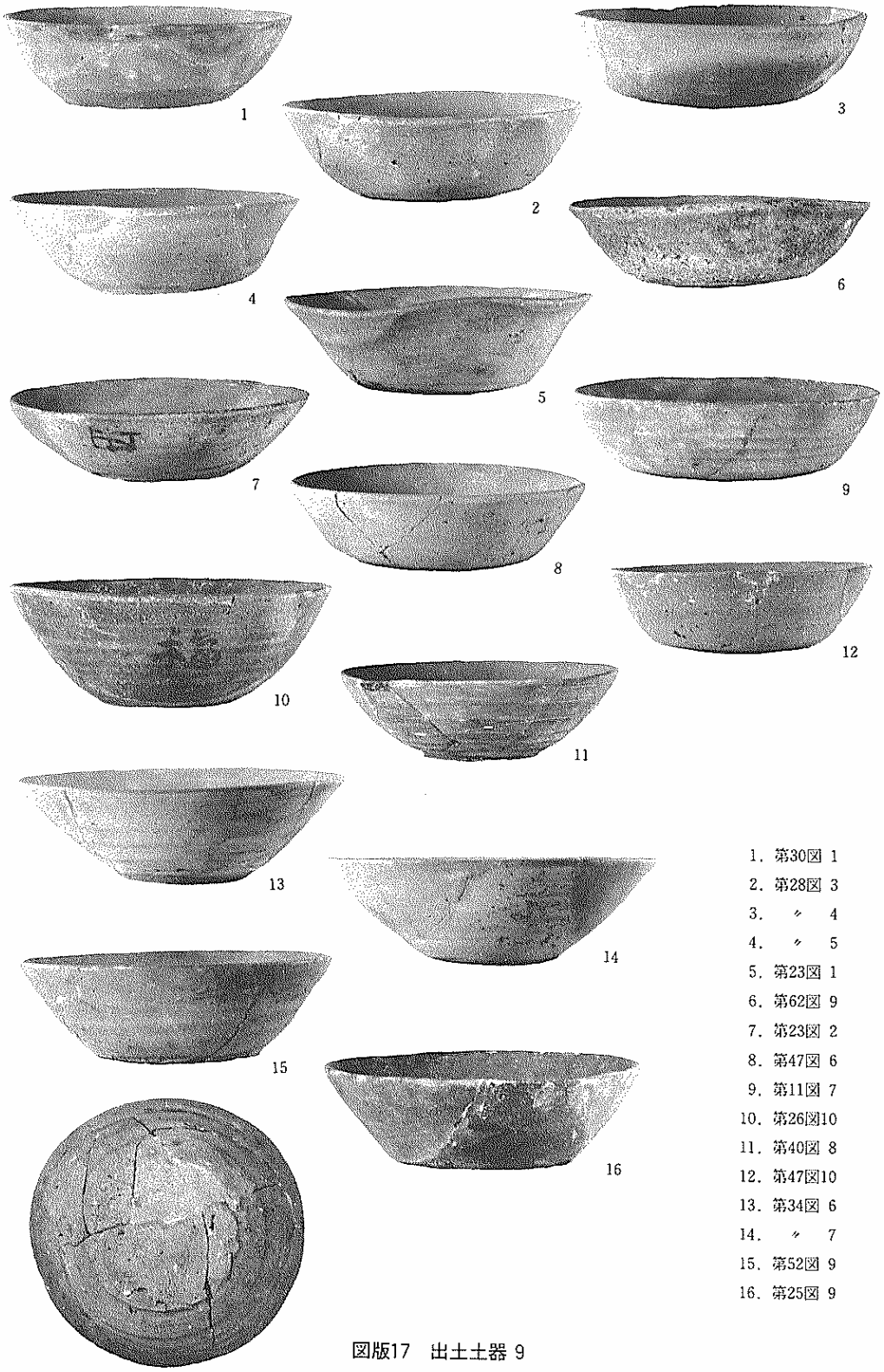
1. 第46図 2
2. 第51図10
3. 第48図 3
4. 第52図 1
5. 第53図12
6. 第51図 4
7. 第53図 9
8. 第48図 9
9. 第52図11
10. 第48図 8
11. 第53図 2
12. 第46図 7
13. 第47図 1
14. 第51図 6
15. 第48図 1
16. 第51図 9
17. 〃 3

図版15　出土土器 7



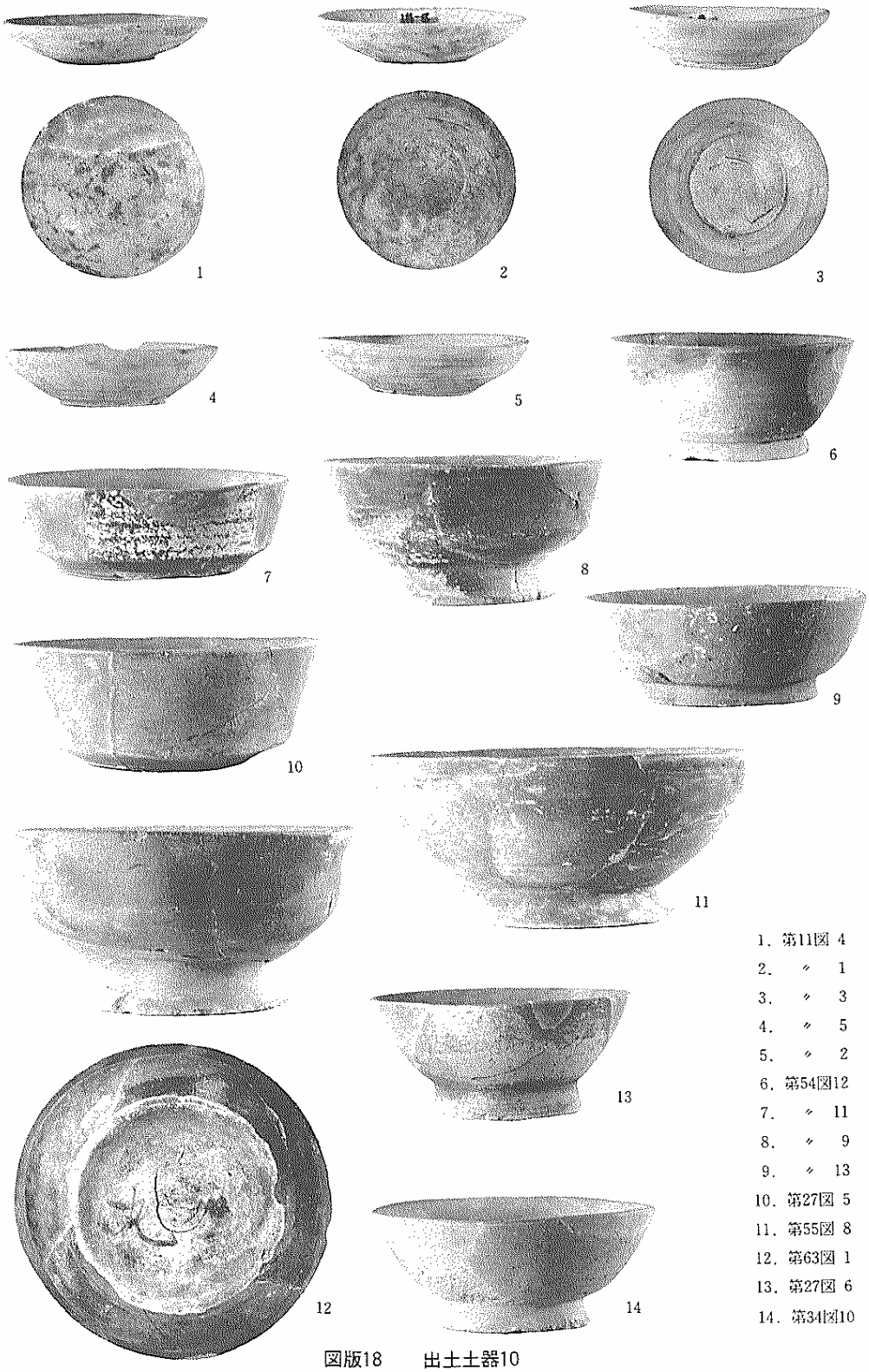
1. 第51図11
2. 第50図 7
3. 第46図 5
4. 第47図 4
5. 〃 5
6. 第50図12
7. 第26図 5
8. 〃 1
9. 〃 12
10. 〃 2
11. 第 9図 2
12. 第26図 7
13. 第 9図 3
14. 〃 6
15. 〃 8
16. 〃 5
17. 第29図 5
18. 〃 7
19. 〃 3
20. 〃 4

図版16　出土土器 8



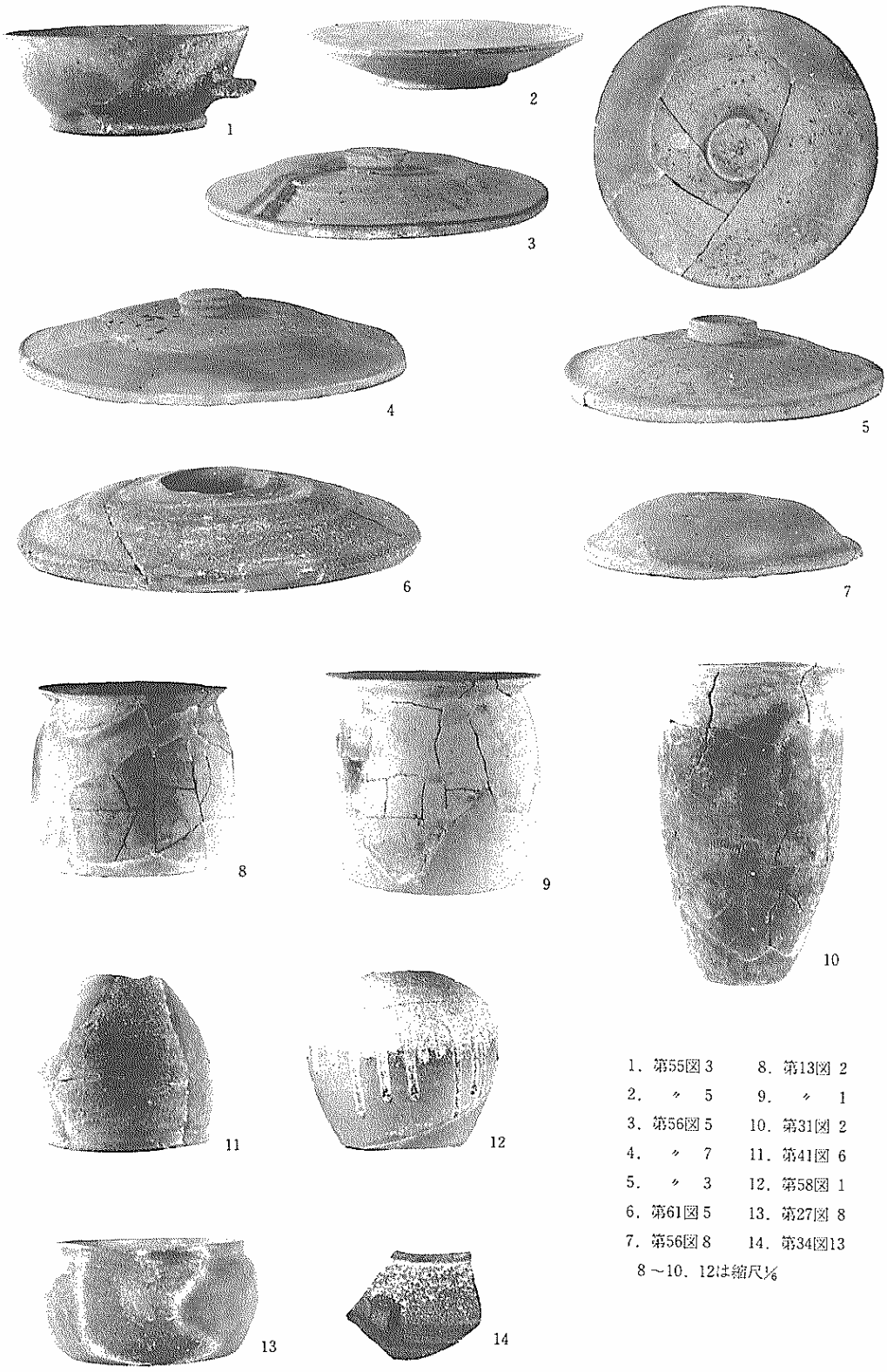
1. 第30図 1
2. 第28図 3
3. 〃 4
4. 〃 5
5. 第23図 1
6. 第62図 9
7. 第23図 2
8. 第47図 6
9. 第11図 7
10. 第26図10
11. 第40図 8
12. 第47図10
13. 第34図 6
14. 〃 7
15. 第52図 9
16. 第25図 9

図版17　出土土器 9



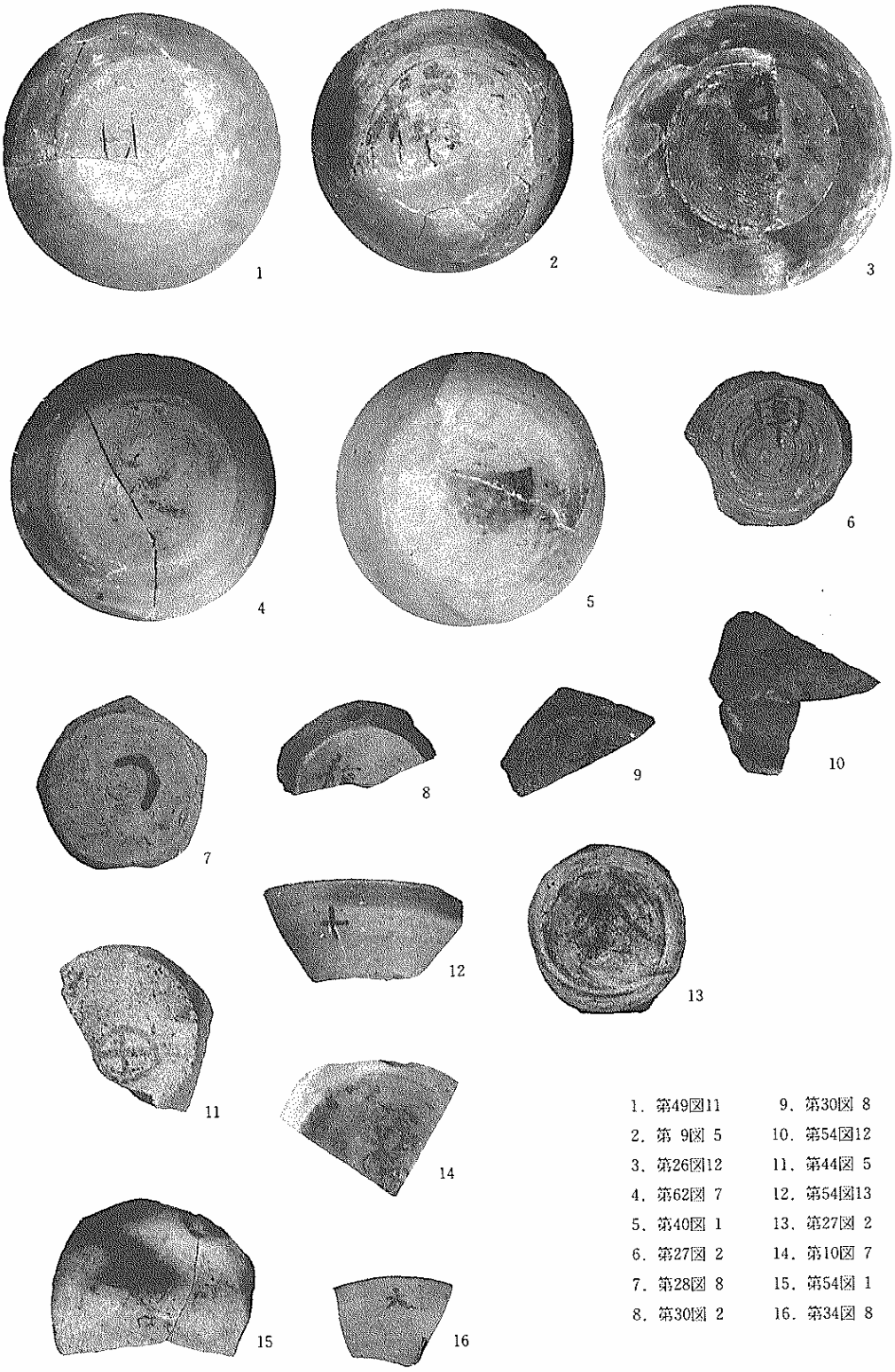
1. 第11図 4
2. 〃 1
3. 〃 3
4. 〃 5
5. 〃 2
6. 第54図12
7. 〃 11
8. 〃 9
9. 〃 13
10. 第27図 5
11. 第55図 8
12. 第63図 1
13. 第27図 6
14. 第34図10

図版18　出土土器10



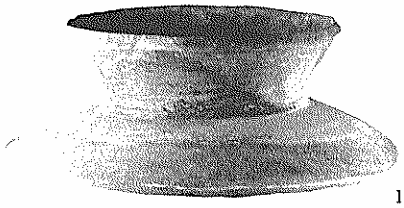
1．第55図 3　　8．第13図 2
2．〃 5　　9．〃 1
3．第56図 5　　10．第31図 2
4．〃 7　　11．第41図 6
5．〃 3　　12．第58図 1
6．第61図 5　　13．第27図 8
7．第56図 8　　14．第34図13
8～10、12は縮尺1/6

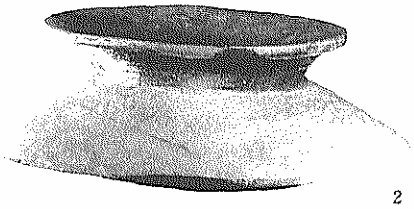
図版19　出土土器11

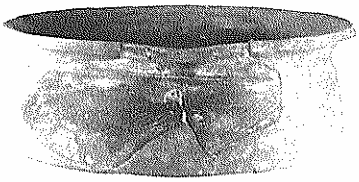


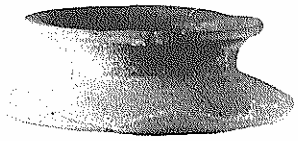
1．第49図11
2．第 9図 5
3．第26図12
4．第62図 7
5．第40図 1
6．第27図 2
7．第28図 8
8．第30図 2
9．第30図 8
10．第54図12
11．第44図 5
12．第54図13
13．第27図 2
14．第10図 7
15．第54図 1
16．第34図 8

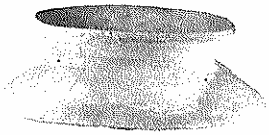
図版20　墨書、ヘラ書き土器

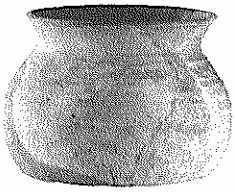

1


2


3


4

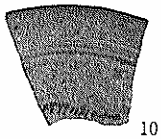

5


6

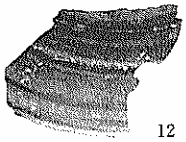
7

8

9


10

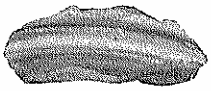
11

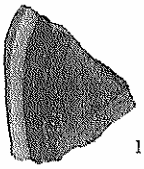

12

13

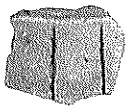
14

15


16


17

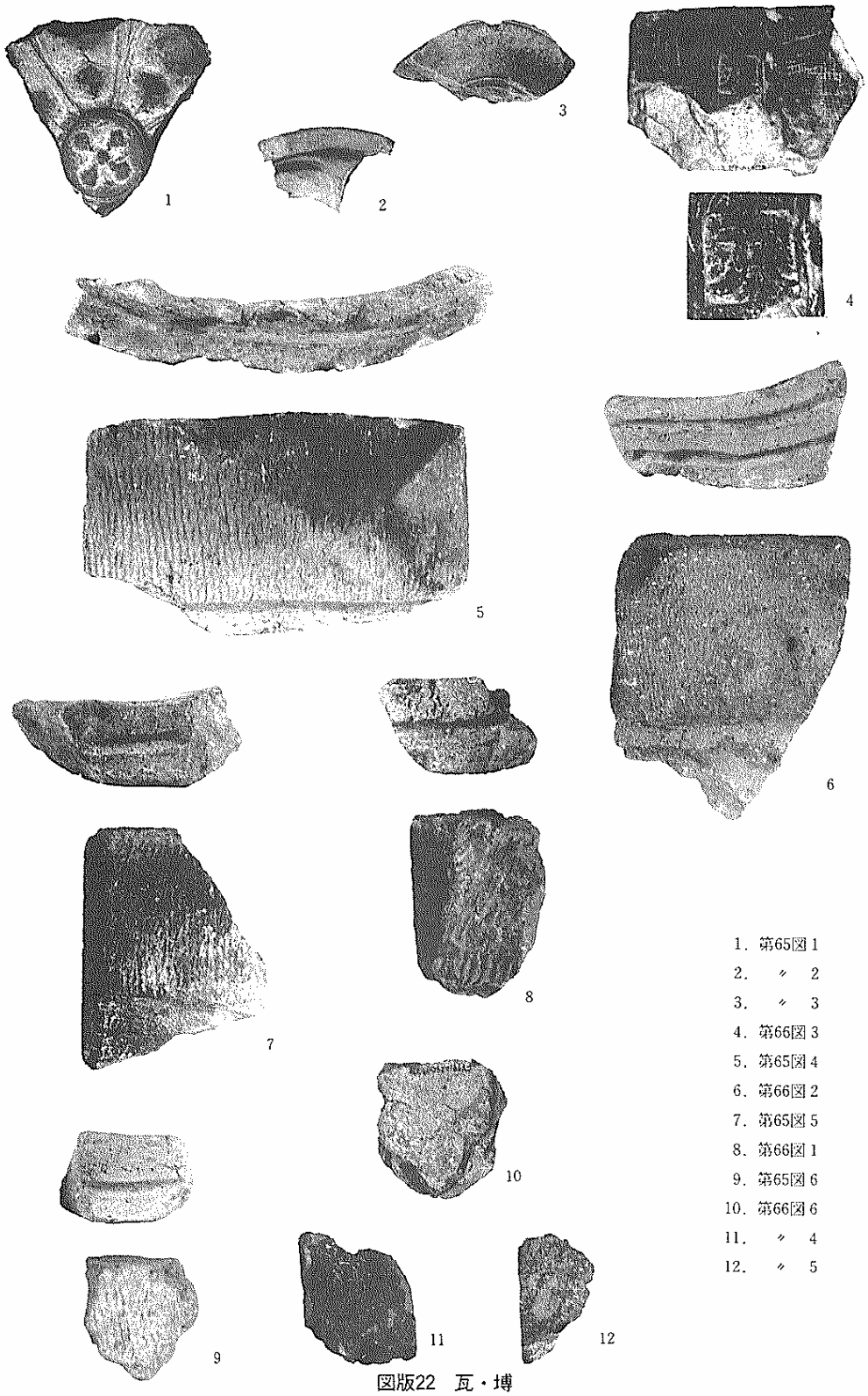
18


19

1．第60図 1　　7．第10図 5　　13．第64図 3　　19．第36図 7
2．第59図 4　　8．第63図 2　　14．〃 4
3．第35図 2　　9．第55図10　　15．〃 5
4．第30図 4　　10．第61図 6　　16．〃 6
5．第58図 3　　11．第64図 2　　17．〃 9
6．第41図11　　12．〃 1　　18．〃 8

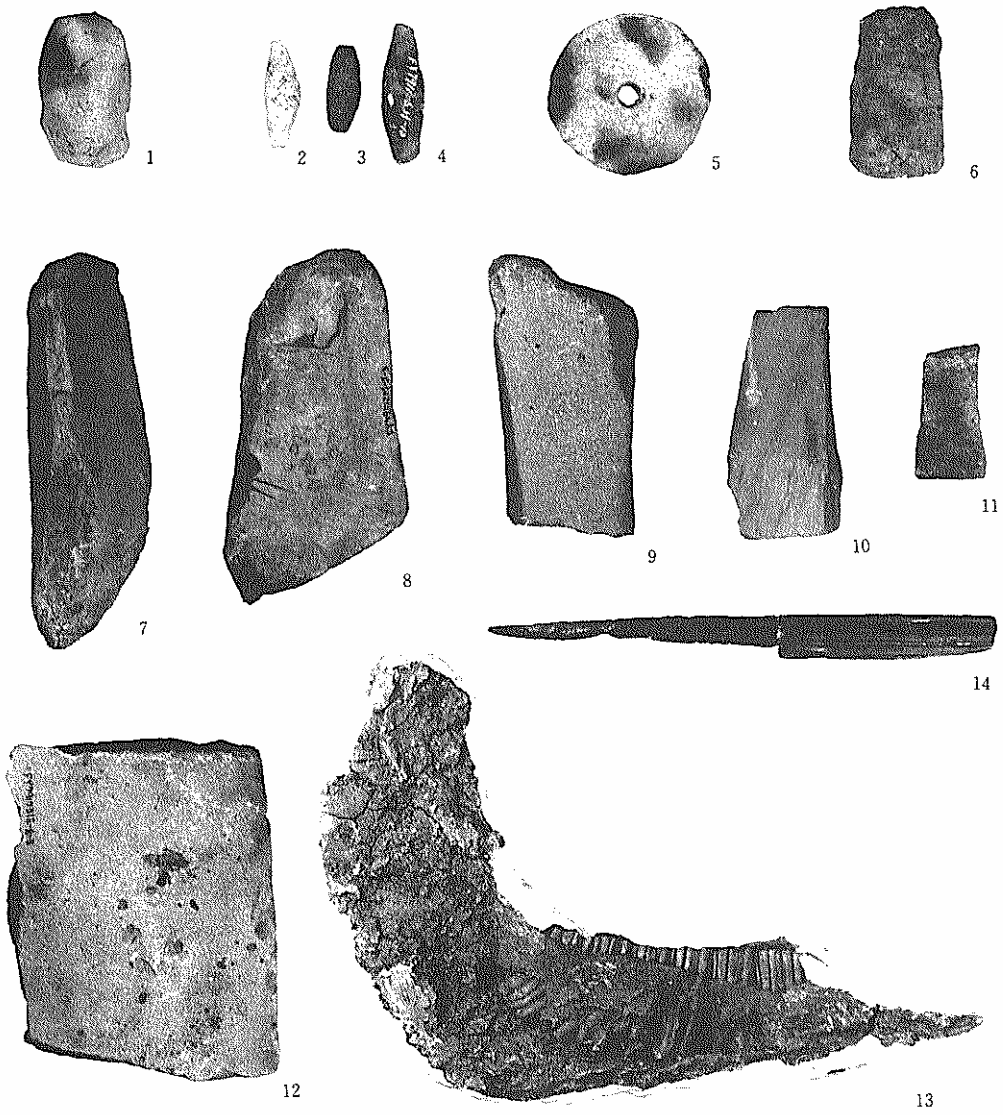
1～6は縮尺1/6

図版21　出土土器・硯



1．第65図 1
2．〃 2
3．〃 3
4．第66図 3
5．第65図 4
6．第66図 2
7．第65図 5
8．第66図 1
9．第65図 6
10．第66図 6
11．〃 4
12．〃 5

図版22　瓦・塼



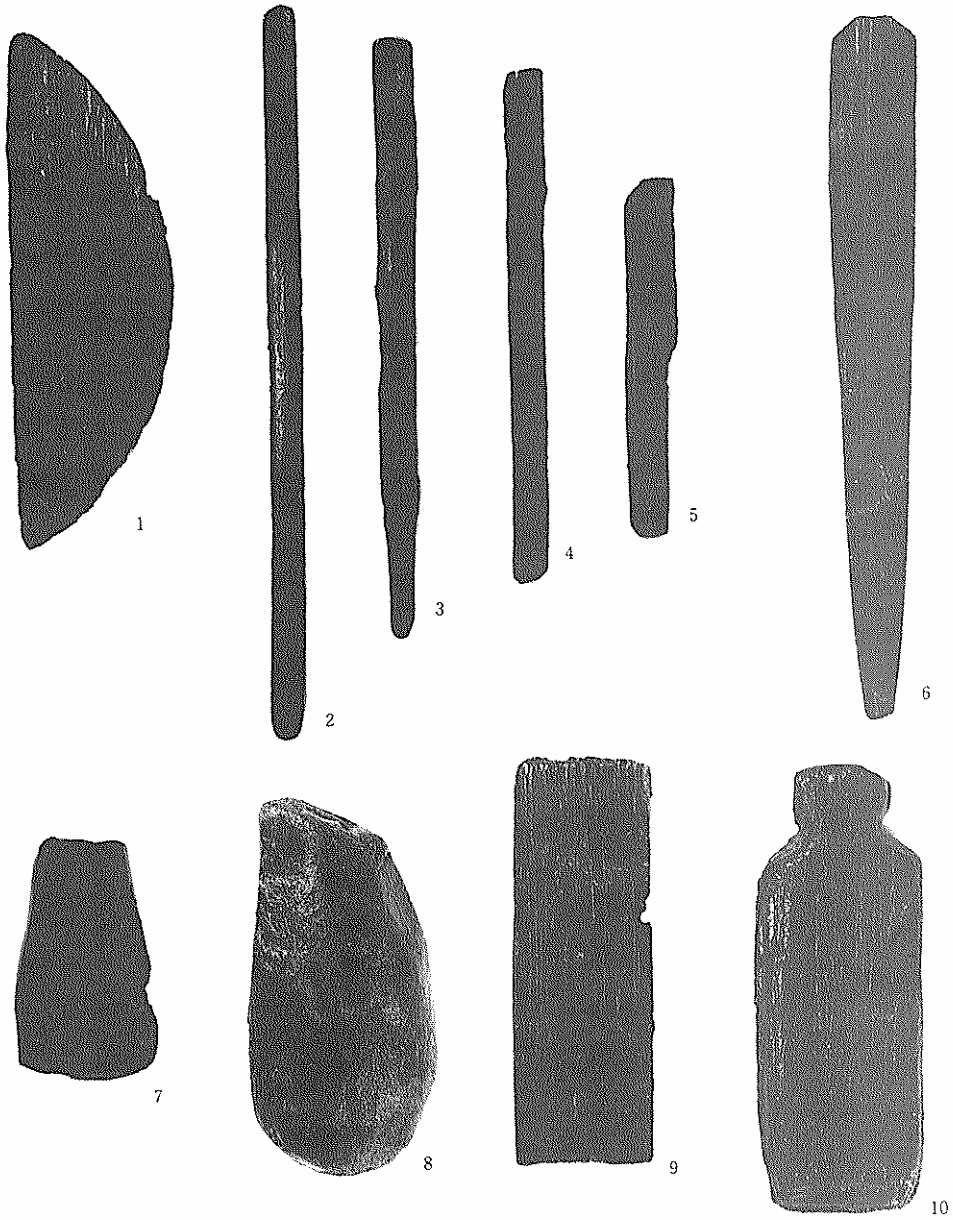
1．第67図 1　　6．第67図10　　11．第69図 2
2．　〃　4　　7．第68図10　　12．第70図22
3．　〃　5　　8．第70図23　　13．馬　歯
4．　〃　2　　9．第69図15　　14．第11図 6
5．　〃　8　　10．　〃　16

縮尺不同

図版23　土製品 砥石、鉄製品 馬歯

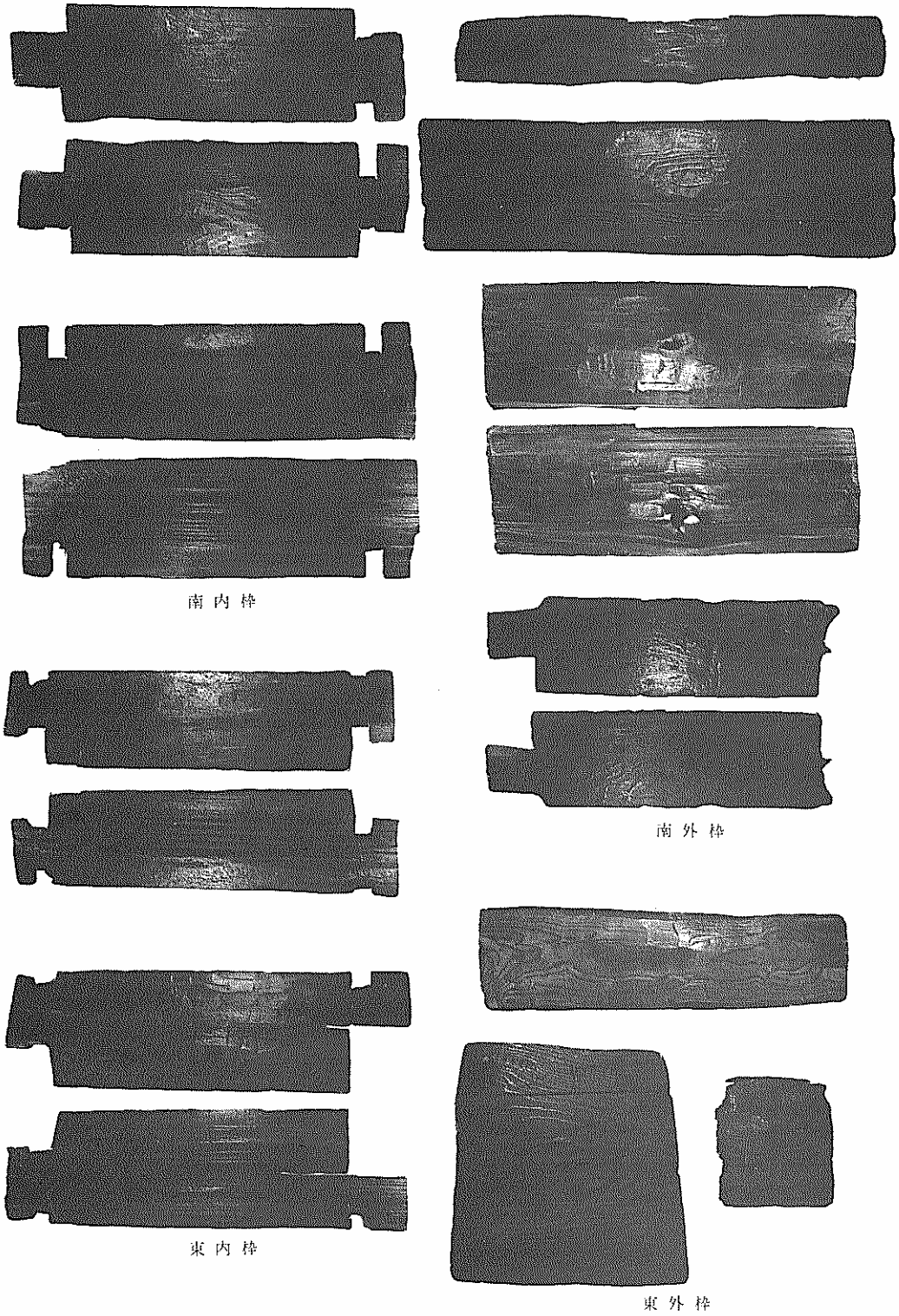
1．第71図2　　4．第73図1　　7．第72図2
2．第72図1　　5．第72図4
3．第71図4　　6．　〃　3

図版24　木 製 品 1

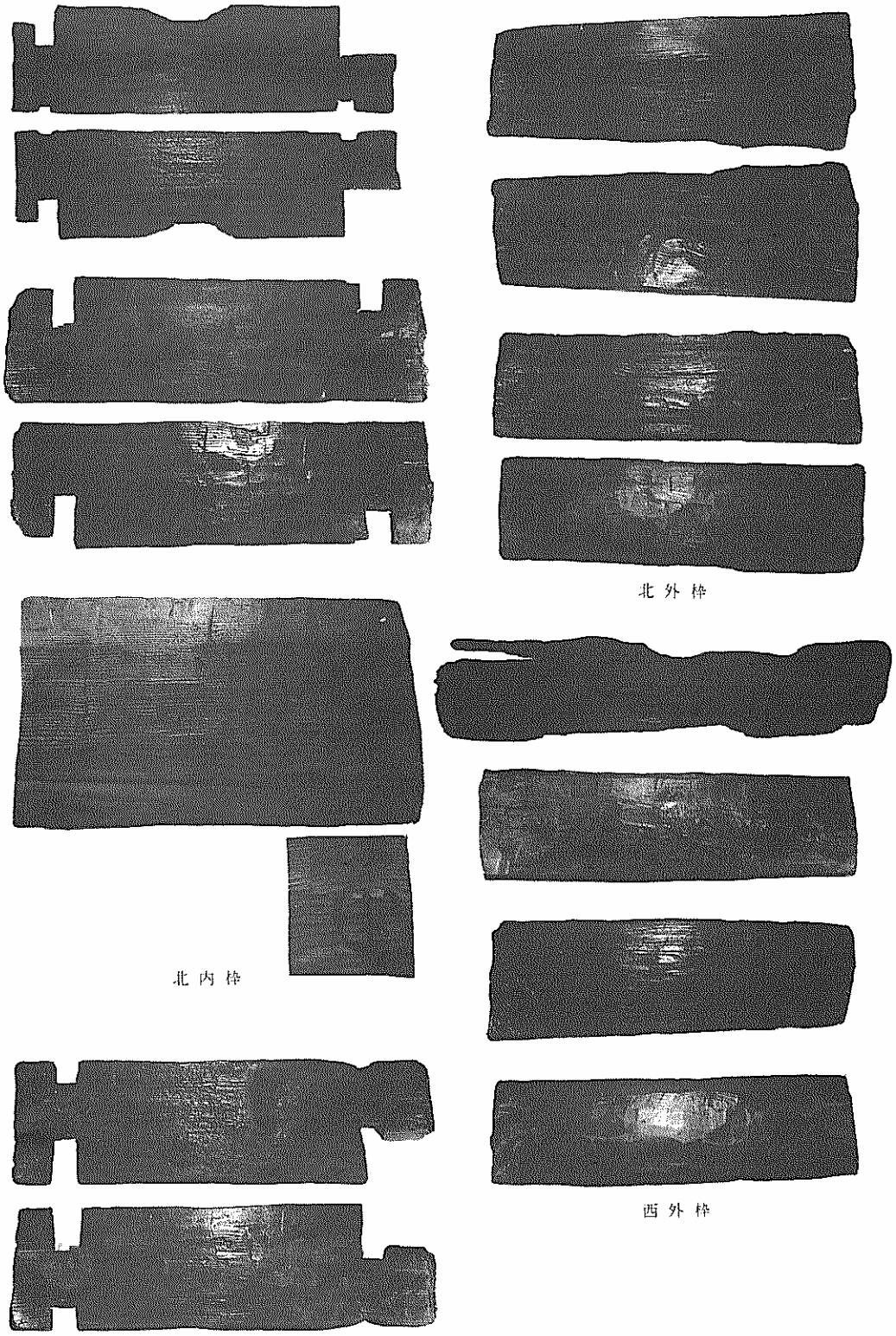


1．第72図 7　　6．第74図 5
2．第74図 1　　7．〃 10
3．〃 2　　8．〃 9
4．〃 3　　9．第73図 2　　縮尺不同
5．〃 7　　10．〃 5

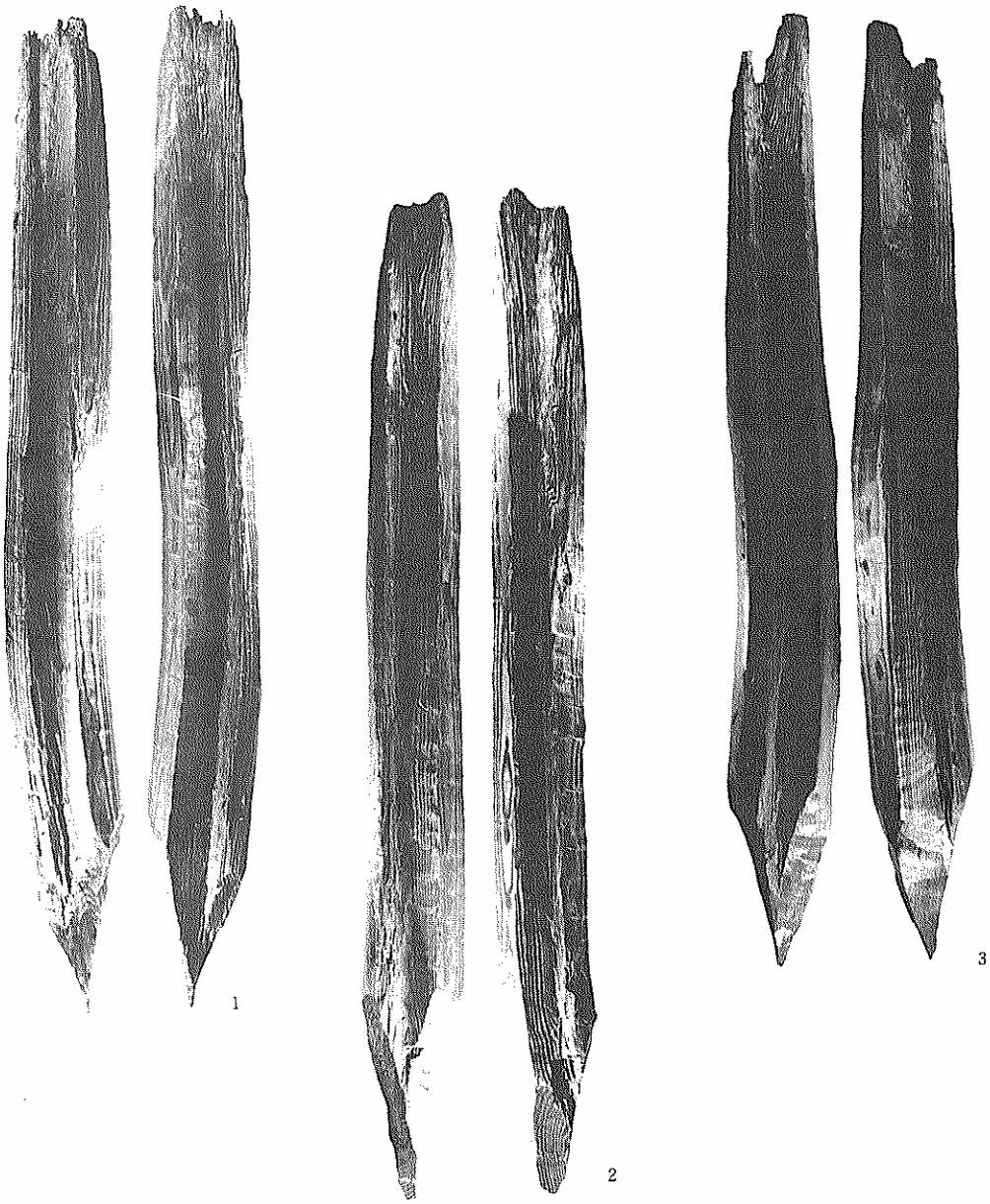
図版25　木 製 品 2



図版26　井戸枠材1



図版27　井戸枠材 2



1～3 第1井戸跡外枠杭

図版28　井戸枠材3